

南種子町民俗資料調査報告書（2）

# 南種子町の民具



平成7年3月

調査 鹿児島大学比較民俗学研究室  
発行 鹿児島県南種子町教育委員会

### 表紙写真（トクマルガノの石塔）の説明

写真是上立石の上の台地、トクマルガノ（徳丸ヶ野）にある。上立石から農道を登り、広大な畑地に出ると、そこを左側へ少しきだり、畑地の南側の林の一隅に、このような遺跡がある。拝んでいる人物は、すぐれた伝承者であった立石半一翁の息子に当る立石久義氏（明治45年生れ）。氏もまたすぐれた伝承者で、1990年3月17日のこと、突然訪れた私共（高重義好先生と同行）を快く現場に案内して下さり、いろいろ教えて下さったのであった。

石塔は右が高さ113cm、左は101cmである。このような石塔は、種子島では一般に先祖の靈をまつてあるが、この石塔はどうであろうか。

「徳丸ヶ野」の名称は、「徳永野」に通ずるのであるが、そのようにい人もいるので、下西目の徳永氏縁本家の徳永重行氏所蔵の「徳永家系図」を拝見させてもらった。

ところが、応安3年（1370年）生まれの徳永祐丕の条に「柳奉行」として、又、西之村の地頭となりて、立石の上に住す。その遺跡、今なほ存す」と記してあった。

立石の上とはトクマルガノである。この徳永祐丕は満56歳の時に、真所八幡宮にりっぱな籠口を奉納した。それは、県文化財に指定され、今も真所にある。

下西目神社の境内の左脇に古石塔一基があるが、これは祐丕の子孫の徳永祐就（嘉永5年、1852年生まれ）が、その石塔が荒れたままなのを歎いて整地し、さらに御崎神社の神靈を招いて祠堂を立ててまつった。そして毎年、9月25日に祭礼をした。その祠堂が今の下西目神社である。

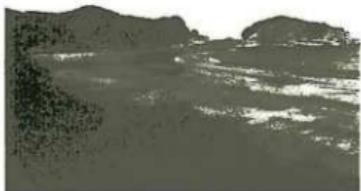
徳永氏は14世紀初め頃から15世紀後半までトクマルガノに住んでいたが、その後、下西目に移住した。

もっとも、トクマルガノの地には、昭和14年頃まで貝塚があった。又、附近的畠からは石器や土器片も出土し、この地が縄文時代以来ずっと人が住みつづけてきた所であることを示している。トクマルガノは学術的に貴重な地である。報告書（1）「徳丸ヶ野の謎」を参照して下さい。（下野）





南種子町の景・信仰・芸能から (1) —— 各地の風景 (1~8共、撮影、T.S.)



広田遺跡（左）の前の美しい海岸（平山、広田）



ひろびろとつづく田んぼ（西之）



長谷の池（長谷）



本村を望む（西之）



道路がよくなったインノババ（島間、上方）



宇都浦を望む（茎永）



大川を望む。立石～牛野の海岸（立石より）

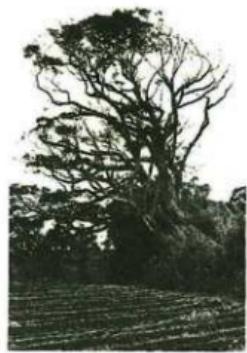


里を望む（上中、里の浜山により）

南種子町の景・信仰・芸能から (2) —— ガローヤマ・エビス



徳瀬のガローヤマ（平山）



黒山のガローヤマ（上中）



中島のガローヤマ（平山）



森山の中に鎮まるガローのヤマ



瀬の上のエビス（西海）



浜渡のガローヤマ（平山、広田）



瀬の上のエビス（西海）

### 南種子町の景・信仰・芸能から (3)

—— 魔除け (シュエー (潮井), シュータ (釜蓋) の的, 辻札, 寺の札)



石塔に供えたシュエー  
(左は小石を、右は巻き貝を包む、下西目)



神社に供えた釜ジュエー (下西目)



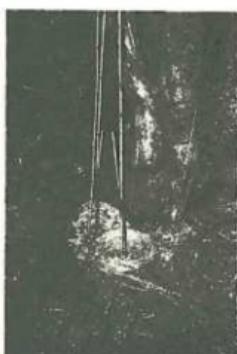
エビスに供えた釜ジュエー (木原)



辻札とシュータの的と突き棒 (下西目)



辻札 (下西目)



シュータの的と突き棒 (中西目)



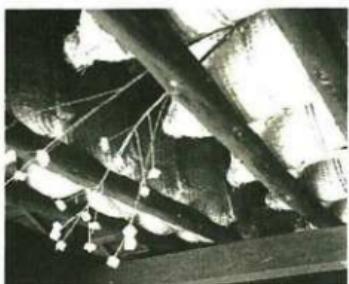
辻札とシュエー (島間 中之町)



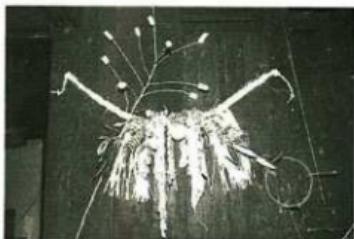
寺の札 (上野中)

## 南種子町の景・信仰・芸能から（4）

—— 正月のゴーサシ、オーバン、臼祝い、辻札



天井の様子物にゴー(団子)をさす(平山)



オーバンとゴーサシ(平山)



門木にゴーサシ(平山)



亭主柱と祝い餅とゴーサシ(平山)



亭主柱の祝い餅(平山)



臼祝い(平山)



辻札(西山)

## 南種子町の景・信仰・芸能から（5）—— 小正月の蚕舞い

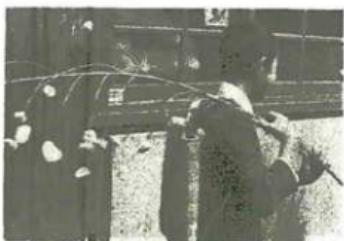
1月14、15日の晩、南種子町各地で蚕舞いが行われる。歌詞・メロディ・振り・意義共にすぐれた芸能である。



女装の若者による蚕舞い（平山）



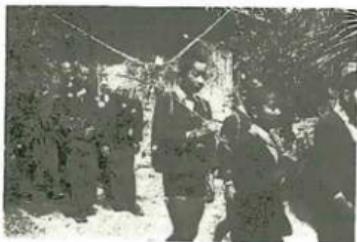
ゴーをもって蚕舞い（平山）



カンザーを背負い、ゴーをかついで（平山）



もらったゴーを皆で分ける（平山）



蚕舞いの一団（平山）



蚕舞い（平山）

## 南種子町の景・信仰・芸能から (6) —— 盆踊り

種子島の伝統的な盆踊りは、日本の盆踊りの中でも群を抜いてすぐれている。カムキ（冠）をかぶり、浴衣を着、センスを持って、中・近世の小歌を合唱しながら舞うのである。盆踊りがもっともたくさん伝承されているのは南種子町である。島間の盆踊りはしばらく途絶えているらしいが惜しいことである。それは上中とも西之とも違った独特の踊りからなっている。



カムキ（冠）（上中、信光寺にて）



盆踊りの人びと（島間、田尾の本妙寺で）



盆踊り（上中、信光寺で）



盆踊り（小二歳踊り）（島間、田尾の本妙寺で）



石塔祭り（平山、広田）



盆踊り（島間、田尾の本妙寺で）



大踊り（安城踊り）（平山、平山神社で）



山口ゲンダラ（源太郎踊り）（笠永）



ヤートセー（団七口説）



ヤートセー（清左口説）（西之、御崎神社で）



ヤートセー（団七口説）（平山、平山神社で）



棒踊り（島間、中之町）



ヤートセー（平山、平山神社で）



ヤートセー（清左口説）（西之、御崎神社で）

## 南種子町の景・信仰・芸能から (8)—— 宝満神社のガンジョージ（願成就祭り）

旧暦9月9日、南種子町では、茎永、平山、島間上方の三ヵ所で願成就祭りが行われる。茎永では、宝満神社で祭典のあと、境内で各村落の民俗芸能がいくつも演ぜられ終日にぎわう。大踊り（太鼓踊り）、中踊り（山口くだり、他）が踊られ、弁慶踊りも見られる。これらは、太鼓踊りの日本南端の地での民俗芸能大会でもあり、すばらしい芸能のかずかずを楽しむことができる。



弁慶踊り（茎永）



旧暦9月9日、宝満神社願成就祭りの日



山口くだり（源太郎踊り）（茎永）



大踊り（茎永）



大踊り（茎永）



大踊りの人びと（茎永）

### 南郷子町の位置



調査地域の特徴

鹿児島県能手郡

## みなみ たね ちょう 南種町



(1993年度「南種子町町勢要覧」より)

南種子町民俗資料調査報告書II

# 『南種子町の民具』

1994年調査・1995年発行

## 目 次

表紙写真（トクマルガノの石塔。説明は表紙裏）

口絵写真（南種子町の景・信仰・芸能から）

南種子町の地図（調査地域 —— 鹿児島県熊毛郡南種子町<sup>（さ�こまち）</sup>）

発刊にあたって

南種子町長 —— 柳田長谷男 —— 5

『南種子町の民具』の発刊によせて

南種子町教育委員会教育長 —— 堂ノ脇大雄 —— 6

『南種子町の民具』の刊行を祝して

南種子町文化財保護審議委員会会長 —— 河野長平 —— 7

民具調査報告書の発刊によせて

南種子町教育委員会社会教育課長 —— 崎田宏 —— 8

## 南種子町の民具

### I 調査方法・南種子町の特色・方言

『南種子町の民具』の調査方法と実施

鹿児島大学法文学部教授 —— 下野敏見 —— 9

民俗学から見た南種子町の特色

鹿児島大学法文学部教授 —— 下野敏見 —— 22

南種子町の方言 —— 鹿児島大学教育学部助教授 —— 崎村弘文 —— 34

## II 農具・運搬具

農具 I (稻作・畑作・農耕儀礼・民具解説) -----	南野 晴美 -----	45	
農具 II (稻作・畑作・民具解説) -----	藏田 弓子 -----	56	
農具 III (収穫・調製具・民具解説) -----	首藤 由美子 -----	67	
農具 IV (畑作・民具解説) -----	大学院院生 -----	庄武 恵子 -----	76
運搬具 (人力運搬・畜力運搬・民具解説) -----	引地 ルミ子 -----	88	

## III 漁具

漁具 (漁法・民具解説) -----	日比野 恒 -----	96	
丸木舟とその漁撈 -----	鹿児島民具学会会員 -----	砂田 光紀 -----	107

## IV 牧関係・鉄関係

牧の民俗 (牧・製塩村落と牧、総論) -----	大学院院生 -----	田中 勉 -----	116
製鉄民俗 (鉄関係伝承) -----	大学院院生 -----	町 健次郎 -----	132

## V 衣・食・住

衣服 (晴れ着・普段着・仕事着・被り物・他) -----	田島 由紀子 -----	140
食関係具 (日常の食生活・年中行事の食事・砂糖製造・他) -----	牧 志保 -----	151
住居 -----	上田 泰士 -----	163

## VI 人生儀礼具

産育	鹿児島民具学会会員	近藤津代志	—175
葬・墓制具（葬送・石塔祭り・墓地・墓石）	森田江身子	—178	
墓制	鹿児島大学卒業生	加塩明子	—191

## VII 年中行事具

年中行事具 I	迫田加代	—197
年中行事具 II	小松美貴	—208

## VIII 信仰具

信仰具 I（屋内神）	前田晶子	—227
信仰具 II（屋内神・屋外神）	是枝智美	—236
各村落の諸相		

（信仰・社会組織を中心として）	大学院院生	楠本智郎	—253
南種子町の浦とエビス	鹿児島民具学会会員	砂田光紀	—257

## IX 遊戯具・民俗芸能・民間療法

遊び道具	首藤由美子	—288	
民俗芸能			
（南種子町に伝承される民俗芸能の時代による変遷）			
鹿児島民具学会会員	馬込恵里	—291	
民間療法	鹿児島民具学会会員	近藤津代志	—302
南種子町の民具・民俗写真から	鹿児島大学教授	下野敏見	—305
伝承者名簿（敬称略）			—333
編集後記			—336



## 発刊にあたって

南種子町長 柳田 長谷男

このたび鹿児島大学の下野敏見教授の率いる比較民俗学研究室の皆さんと鹿児島民具学会の皆さんの調査にもとづき、『南種子町の民具』の報告書が編さんされ、発行されることになりました。

関係者の皆さんの大層なご努力に対し、深く敬意を表します。

町内の民具については、町民各位のご協力により、町立「郷土館」に収集し、展示してありますが、まだ不十分です。したがって今後、さらに調査をすすめると共に、本格的な郷土の歴史民俗資料館を設置して、その充実をはかる計画をしております。

この機会にあたって、この『南種子町の民具』の報告書が発刊されることは、内容的にも時期的にもきわめて適切なものであり、大変に意義深いことあります。

本町の文化財については、かねてより町民各位の熱心なご努力により、有形・無形の各分野に、かず多くの貴重なものを保存し、伝えていきます。

特に各大字の郷土芸能などは、秋の願成就の折に盛大に踊られ、明日の南種子町を築く力の源泉ともなっています。

南種子町は民具・民俗の面でも又歴史の面でも実に多くのものを伝えてきていることが本報告書『南種子町の民具』および別冊の『南種子町の民俗』を通してよくわかるのであります。

先祖の残したこれらの遺産をだいじにすると共に、町内の生産・経済の活動をいっそく活発にし、町民のゆたかな生活を築かねばなりません。

この報告書がその方面に役立つように広く活用されることを期待する次第です。

## 『南種子町の民具』の発刊によせて



南種子町教育委員会教育長 堂ノ脇 大 雄

南種子は、周りを海に囲まれ、豊かな実りをもたらす肥沃な土地が多く、昔から人々の生活に最適な地であり、日本書紀に「髪を切って草の蓑をきたり、梗稻（いね）常に豊なり、一𦗩（ひとたびうて）<sup>一</sup>両たび収む、土毛（くにつもの）は、支子莞子（くちなしかま）及び種々の海つ物等多なり。」と、7世紀末の頃の島民たちの生活をうかがわせる記録が見られます。豊かな生活から、南種子には多くの民具等が生まれたものと想像されますが、こうした郷土の先人たちが、生活の中から知恵をしづり、創りあげ伝えてきた多くの価値ある民具等は貴重な財産です。大切な郷土の文化財であり宝です。私たちは、今後、より豊かな郷土を創造していくために、その一つ一つの民具等は、大切な文化財として後世に伝えるべき使命を背負っています。町内のあちこちに貴重な民具等が散在している中で、早急に保存の手を打たねばと常に思っています。特に丸木舟等は貴重なもの一つであります。

こうした時に、鹿児島大学比較民俗学研究室の皆さん、本町の民具等を調査され、報告書にまとめて下さったことは誠に意義深い事です。この貴重な報告書は、今後、町民の生涯学習や郷土教育等の資料として活用したいと考えております。終わりに、この報告書を発刊するにあたり御協力いただいた方々に心から感謝申しあげます。

## 『南種子町の民具』の刊行を祝して



南種子町文化財保護審議会会長 河野長平

人類は何時の時代でも幸福の追及に明け暮れ、そして今日までに目覚ましい成果をあげたと言える。これは、人類のみに与えられた器具の製作と使用に負うところがきわめて大きいと言えよう。

今日、多量生産多量消費で、家屋の改築等では、長年伝えられてきた諸器具が、粗大ゴミとして処分されているのを、よく見かける。

各地域の遺跡から出土する遺物をはじめ、現在何気なく廃棄される器具は、先人達の生活の様態の証となるものであり、平素、重宝がられて使用中の機器のルーツで、その機能に関わる原理は、多かれ少なかれ現代のものに継承されている。

南種子町立郷土館には、温古知新のよすがとすべく、遺跡からの出土品や農耕器具・漁具をはじめ、各分野の民具八百余点が収納されているが、先人達の一連の生活の軌跡を綴るには、今後さらに多くの器具を収集する必要がある。町内の民家に保存されている鍔口が県の文化財として指定されている例もある。未公開のまま民間に埋もれている文化財的器具を、人目に触れ易くするような手立てが望まれる。また、絶滅した民具も、数少ない古老達の存命中に再現をと急がれている。

民具伝承活動として、一部の集落で、簡単な彫細工や子ども用の遊具の作り方を、青少年に教えているが、この活動の広がりが期待される。現在の町立郷土館は狭く、収納物の30%程度を展示できる広さで、製作学習の場も不備の現況にあり、増改築が急がれる。

今回、専門家の方々によって、本町の民具の調査研究がなされ収録されたことは、時宜を得たもので、深謝のほかありません。この収録が数多くの人達に活用され、私達町民は、提起される課題を真摯に受け止め、民具の保存・伝承への一層の配慮が望まれる。



## 民具調査報告書の発刊によせて

南種子町教育委員会社会教育課長 崎 田 宏

私たちの生活の根底には、私たちの先人の歴史、文化が生活の中に脈々として伝承し、継承されており、これは、現在でも、遺跡、史跡、民俗芸能、年中行事など、様々な形で生きつづき温存されております。

このような文化財（民具）は、先人の生活の中から生み出し、育んできた生活の知恵であり、日常生活や生産活動を潤すために用いた貴重な財産であります。

特に民具等は町民の理解と協力により、郷土館に展示保存されて生涯学習のために広く活用されております。

これらは、先人の生活形態を学ぶと共に、人々の知恵を知る事が出来る貴重なものであります。

しかし、近年、地域社会の変遷と生活様態の変化に伴い、姿を消し、風化しつつあるのも事実です。

そこで、地域社会の環境が変貌していく中で、民具等を正しく記録保存し、人々の生活様態を学び知る事はきわめて意義深く、重要な事であります。このような観点から、今回、鹿児島大学比較民俗学研究室において民具等調査を行ない、ここに調査報告書が発刊されることになりました。

調査にあたり、御協力いただいた地域の方々及び鹿児島大学比較民俗研究室（下野敏見教授）の皆様に心から御礼申し上げるとともに、本書が郷土教育の一環として寄与できることを願っております。

# **南種子町の民具**

## THE PRACTICAL APPROACH

As a practical approach, the first step is to identify the specific needs of the organization.

The second step is to determine the best way to meet those needs.

The third step is to implement the plan and monitor its progress.

The fourth step is to evaluate the results and make any necessary adjustments.

The fifth step is to repeat the process as needed to ensure continued success.

This practical approach can help organizations achieve their goals and objectives more effectively.

By following this approach, organizations can ensure that they are meeting the needs of their stakeholders and achieving their desired outcomes.

Overall, the practical approach is a proven method for achieving success in any organization.

It requires a clear understanding of the organization's needs and a commitment to meeting those needs.

With this approach, organizations can achieve their goals and objectives more effectively.

It is a practical approach that can be used by any organization to achieve success.

By following this approach, organizations can ensure that they are meeting the needs of their stakeholders and achieving their desired outcomes.

Overall, the practical approach is a proven method for achieving success in any organization.

It requires a clear understanding of the organization's needs and a commitment to meeting those needs.

With this approach, organizations can achieve their goals and objectives more effectively.

It is a practical approach that can be used by any organization to achieve success.

By following this approach, organizations can ensure that they are meeting the needs of their stakeholders and achieving their desired outcomes.

Overall, the practical approach is a proven method for achieving success in any organization.

It requires a clear understanding of the organization's needs and a commitment to meeting those needs.

With this approach, organizations can achieve their goals and objectives more effectively.

It is a practical approach that can be used by any organization to achieve success.

# 『南種子町の民具』の調査方法と実施

鹿児島大学法文学部教授 下野 敏見

## 1. はじめに

鹿大の民俗調査を南種子町で実施するのは今回は、平成2年3月について2回目である。3年前に調査した時とは学生の顔ぶれが入れ替っている。又、特別参加者も鹿大教育学部の崎村弘文助教授ほかたくさん居られて、にぎやかな団体になった。

柳田長谷男町長さんのご理解のもと、堂ノ脇大雄教育長さん、崎田宏社会教育課長さんのご協力を得て調査を実施することができた。町役場ご当局ならびに教育委員会の皆様方にここに厚く御礼申し上げます。

## 2. 調査法と実施について

これらについては、いろいろなメモがあるのでそれを収録して述べることにする。

まず、次は、責任者の下野からの町への打診である。しかし、この前に、下野は南種子町に、何回も行ってその意義を説き、調査協力方のお願いをした。

事務連絡  
平成6年3月11日  
南種子町教育委員会  
教育長 堂ノ脇 大雄 殿

鹿児島大学法文学部  
教授 下野 敏見

南種子町の民俗調査について  
春うららかな日和になって参りましたが  
ますますご清祥のことと拝察申し上げます。  
さて、平素よりたいへんお世話になって  
おりますが、来る3月15日より3月23日まで、  
御地南種子町全村落の民俗を調査する  
予定でございます。

当鹿大法文学部比較民俗学研究室では、学生、大学院生、研究生、特別参加の研究者を含めて27名で参ります。御地は日本本土文化の貴重な伝承地として、また、南からの文化の上陸地としてもまさに豊かな民俗文化に恵まれており、私共の調査研究は貴町の将来の産業、文化の発展に対してたいへんよい効果をもたらすものと考えられます。

つきましては、お忙しい時節柄、恐縮ではございますが、マイクロバスの御手配や宿舎（福祉センター）の借用など、何卒よろしくお取り計らいくださいますようお願い申し上げます。

\* 参加者および日程は別紙のとおりでございます。

平成5年度後期「文化人類学(比較民俗学)野外実習」(南種子町) 参加者名簿  
期日: 1994年3月15日~3月23日

1. 参加者

参加者	氏名	メインテーマ	サブテーマ
鹿児島大学教官(団長)	下野 敏見	学生指導	民俗全般
学生リーダー2年会	上田 泰士	住居	社会生活具、神社・寺院の形態と構造
3年計	小松 美貴	年中行事具(全般)	交通・他
4年	加塙 明子	人生儀礼具(葬・墓)	遊び道具
3年	是枝 智美	信仰具(屋内・屋敷)	年中行事具
"	迫田 加代	年中行事具(全般)	芸能具
"	南野 晴美	農具(耕・収・調・保存)	衣服
"	森田 江身子	人生儀礼具(葬・墓)	農耕儀礼
2年	藤田 弓子	農具(耕・除・調・畜)	山樵具
"	小林 千尋	住居	産・婚具
"	首藤 由美子	農具(収穫・調整)	食関係具
"	田島 由紀子	衣服	住居関係具
"	引地 ルミ子	運搬	遊び道具
"	日比野 兼一	漁具(船・網・針・突き具・メガネ他)	ホーキ・タバコ盒・ミノカサ・仮面
"	前田 晶子	信仰具(屋内神)	社会生活具
"	牧 志保	食関係具	遊び道具
研究 生	楠本 智郎	屋敷神(ガローヤマ)	信仰と社会組織
大 学 院 生	小島 摩文	漁具(全般)	神社・寺院の形態と構造
"	庄賀 錠子	烟作具	食(野・畑)関係具
"	田中 勉	牧関係具	畜産関係具(特にクラ・畜舍・馬車)
"	町 健次郎	鉄関係具	農具

2. 特別参加者

鹿児島大学教官	崎村 弘文	南種子町方言
鹿児島民俗学会会員	近藤 淳代志	郷土食の作り方とその道具
"	小川 秀直	竹細工
"	砂田 光紀	海の信仰具
"	松村 莉規	竹・木・草・貝・石・ワラなどの素材と民具
"	馬込 恵里	芸能具
		神社・寺院の形態と構造

連絡先

〒891-37 鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2793-1 南種子町教育委員会社会教育課 TEL09972-6-1111(昼)

宿泊所

〒891-37 中之上2283 南種子町福祉センター 社会福祉協議会取次 TEL09972-6-1703(夜)

役場のご理解とご協力の約束をいただい  
て、さっそく、「南種子町の民具」の調査に  
向けて準備がはじまった。

各人、テーマを選定。選定については、卒論やこれまでのテーマとの関連や今後のこ  
となど考えて、指導教官（下野）と相談し  
て決めた。そして、南種子町郷土誌や種子  
島関係のものをいろいろ読み、又、テーマ  
に沿う広い分野の文献を読んで、そして、レ  
ジュメを用意しての研究発表会を持った。こ  
の発表会はどこの調査をするにも必ずやる  
ことになっている。又質問表も必ず作って  
教官に提出し、指導をうけることにしてい  
る。教官のほうでは、二年生と三年生、四  
年生の扱い方は当然違う。学生のフィール  
ドワークの経験の多寡や深度によって、一  
人一人の指導が違う。

又、卒論や修論での資料採取やその一節に  
組入れる目的の学生もいる。それも適切に  
希望に叶うようにアドバイスしなければ  
ならない。この事前研究と事前指導は非常  
に大切だと思われる。

次に、学生の南種子町調査に向けての事  
前研究のレジュメや質問表を掲げてみよう。

#### 南種子町野外実習質問表

2年10番 牧 志保

- ・カマド、カマゴヤの状況（今と昔ではどう変化したか）
- ・炊事場と炊事用具の変遷（まわりもよく観察する）  
ナガシのところにセシナギはないか。
- ・火の神、大黒の信仰はなかったか
- ・囲炉裏へどこにあったか。その部屋の名  
称。囲炉裏の呼称、使用法
- ・蒸し器の変遷（それぞれの蒸し器で何を  
蒸すのか？）
- ・臼の変遷。（昔からある臼は？新しい臼  
は？臼は何でできているか）
- ・石臼の利用法（何を粉にするか、何のため  
にするのか、だれがするのか。）  
木臼と杵の種類と利用法（ウスとキネの  
儀礼はどんなものがあるか）

- ・すり鉢、木鉢の利用法（何をするのか）
- ・弁当箱の変遷（何でつくられていたか、  
竹あんだんカゴはいつ頃はいってきたか）  
とその内容、またその呼称。
- ・重箱、提げ重、吸筒はあったか。その利  
用法は？
- ・山や野で採集する食料はどんな道具を使  
っていたか。
- ・モチ、団子の種類とつくるときの道具、  
食べ方
- ・盆、正月の食事とそれに伴う道具
- ・被前、戦時中、戦後の食事の変化
- ・日常の食事（季節毎）
- ・人生儀礼。その他の祝いの膳の内容とそ  
れに伴う道具
- ・チマキの種類。（できれば実践してもら  
う）
- ・菓子の種類と時期、作り方、道具
- ・ミソ、ショウユ、黒砂糖の作り方、保存  
の仕方、道具
- ・豆腐の作り方と道具
- ・サツマイモの保存法、食べ方
- ・山芋の採集法と道具
- ・つけものの種類、作り方、材料、道具

#### 種子島実習事前発表

牧の民俗

940308 田中 勉

牧

##### A. 牧について

- (1) 名称 ~マキ（その由来も尋ねる）
- (2) 場所 地図に落とす
- (3) 性質
  - ①種類…御牧、塩屋牧、百姓牧、（私  
有牧）
  - ②組織（管理）…牧を所有・管理し  
ている組織、その規約
- (4) 棚（土壁）について
  - ①形態…材質、大きさ（深さ）
  - ②範囲…居住地や田畠との関連
  - ③組織（管理）…管理者、修復する  
時期、その規約
- (5) 目的  
性質と直接的に関係してくるが、そ

- の牧が営まれる目的を考察
- ・薪炭用材（松炭）を供給
- ・薪炭用材（松炭）を運搬
- ・ホイトウ

#### B. 牧の神と祭祀

- (1) 牧神
  - ①神体の形態 神体と神木の関係を明確にする
  - ②神木の形態
- (2) 祭祀
  - ①馬追い（馬焼き）→焼印
  - ②耳きり→耳きりばさみ
  - ③火入れ祈祷→祭祀道具
  - 牧の行事が村落の行事になったもの
  - (④祭祀に関する古文書、現在の規約書なども調査する)

#### 塩釜神社

- (1) 神社の形態…ツマイリカヒライリ、木鼻
- (2) 境内物…手水鉢、石碑
- (3) 宝物

#### 厩舎

- (1) 防風対策
- (2) 堆肥…利用まで
- (3) 二階の使用
- (4) 家屋全体の中での位置づけ

#### 〔南種子〕

- ・西之小近くの徳永氏のもつ系図（牧見回りの役名がある）
- ・砂坂、立石（上・下）、大川、中ノ塩屋、牛野一塩屋牧
- ・長谷野牧が一番大きな牧、周辺の部落共有牧

#### 〔補助資料〕

- ・マキの歴史
- 1201 平信基の代に牧畜が行われるようになつた。

1352 種子島第六代島主時充  
直営のマキを設け模範とさせた。

- ①北種子町国上・湊
- ②南種子町西元・立石 以後島内24ヶ所に及んだ

1634 種子島家直営のマキ  
島内に4ヶ所

1879 地租改正

1945 農地改革 マキの崩壊

・ホイトウ

田植前に、牧に放し飼いしてある馬をひいてくる。一群の先頭のかしら馬を一頭ひくと、あとはぞろぞろとついてきた。水をひいた田に放ち、かしら馬のハナを取って、田の中をぐるぐる廻ると、一群の馬が田を踏みながらついて廻り、田は自然にやわらかく耕されてるのであった。しかも田の底はかえってしまうという効果をあげた。

#### 【参考文献】

大山彦一『種子島マキの研究』

鹿児島県農地部農地管理課 1951

下野敏見『タネガシマ風物誌』未来社 1969

#### 南種子町野外実習事前発表

940224 3年 森田江身子

メインテーマ《葬制・墓制》

#### 1. 死の予兆

- ・鶴のエー鳴きは厄である。
- ・妊娠の夢は厄。

#### 2. 死亡の確認から納棺まで

- ・死者は母屋の横座にゴザを敷き北枕にして寝せ、顔に白い布を被せる。
- ・死者の四方に襖や屏を立て、その側に内ポウキを立てておく。
- ・死人が出ると「町に出す」といって葬式は全て村落内の人々の加勢によって行われる。・触れの場合は、服装を整え、玄関から入り、座敷に上がりきちんと礼を尽くしてから葬式の依頼をする。
- ・町頭の音頭で吟味。町として出すか否か。

- ・無常講として町民は米二合を出し合う。
- ・湯濯は近親者の手で行われ、イッショウラを着せ、女性の場合は日本タオルで姉さん被りをしてやる。二つガマといって二つのカマドで湯を沸かす。
- ・入棺（ニッカン）の時、夫が死んだ場合の妻は、自分の髪一握りを切り取って棺の中に入れる。
- ・副葬品～仏教はシキビの小枝、神道は椎の小枝。杖、枕、藁草履、日用品、米、お茶の葉、錢、使い残しの薬
- 3. 出棺から埋葬（火葬）まで
  - ・柩が門を出るときに家族の手で故人の湯飲みや茶碗を割る。
  - ・ウッタチ飯を参列者全員で食べ、縁側から出棺する。
  - ・山棺後、家に残った町民が二人で必ず座敷内ボウキで掃き出す。
  - ・靈屋が家を出て墓地に着くまで靈屋の前を歩く肉親か近親者が靈屋に向かって米と錢をまく。これは死者が先の世に着くまでの食料と旅費である。
  - ・仏教の場合は入口で靈屋を背負ったまま左回りに7回回ってから靈屋を下す。
  - ・埋葬するときは棺桶と一緒に、握り飯12個、錢12文を埋葬する。
  - ・息吹き竹を立てる。
  - ・出棺から埋葬まで近親者は晒の布を男性は首に巻き、女性は髪に結び付ける。
  - ・旗は野辺送りの行列と共に墓地まで年少者が立てて運び靈屋の周囲に立てる。
  - ・草履はそのまま墓地の入口に置き素足で帰る。草履は近親者が履く。朝夕の墓参の時はこの草履に履きかえて墓参を済ませる。
  - ・後始末～身内の者はニッカンをした部屋は払い清める。「ここは石原、竹やぶ、ソマ畑」洗濯は二人で行き、左手に鎌を持ち、水面を切る。
- 4. 埋葬（火葬）から忌明けまで
  - ・四十九日までは朝夕膳を墓地に供えるが、四十九日を過ぎても膳を供えることはよくない。
- ・四十九日忌には墓地で歌を唄いお祭りをする。これでもって人間の世界との縁はなくなる。
- 5. 忌明けから弔上げまで
  - ・1, 3, 13, 17, 49年忌。3年忌に靈屋を取り除き墓石を立てる。
- 6. 墓地の様子
  - ・一族の墓地の片隅に石塔がある。これは共同祖靈を祀っている。この石塔は墓参の度に祀り、特に盆のときは丁寧に拝む。新暦8月15日に「石塔祭り」
  - ・浜砂を撒き、珊瑚礁のかけらで区切った墓なども。

#### サブテーマ《産育・婚姻》

##### ◎産育

1. 出産
  - ・お産が間になると、庭の片隅か土間の入り口近くに産屋をつくる。実際のお産は母屋の横座（寝間）。力みやすいように天井からロープを吊るす。
  - ・産湯は二つガマであってはならない。
2. 名付け祝い（名付けイワフ）
  - ・生後一週間位で幼児に名前を付け、名付け祝いをする。
3. 子祝い（子イワフ）宮参り
  - ・男児32日目、女児33日目。幼児に晴れ着をつけさせ宮参りをする。床の間に白毛（ないときはソウメン）を供える。長寿祈願。
4. 足引き餅
  - ・乳児が満1歳の誕生日以前に足を引き始めた場合は足引き餅をする。これは直径30cm位のお盆状の餅の上をカンザアを背負い、稻ワラでつくった草履を履いた子供に歩行させるというものである。
  - ・ソロバン、エンピツ、ハサミ、ノート、物差などの遊び取りをさせる。

##### ◎婚姻

##### ○結婚（御前迎え）

- ・ゴゼムカバーといい、仲人が話をつける。ゴゼムカバーの当日、花嫁は決して床の間に入らない。またこの日の花嫁の服装

はふだん着のままである。

- 翌日レエガエシ（礼返し）。3日後ウチ上げ餅。

#### 【参考文献】

『南種子町郷土誌』

#### 南種子町有形調査質問表

3年 森田江身子

##### メインテーマ「葬制・墓制」

- 死の予兆にはどんなものがあるか。
- 遺体はどこに寝かせて、何を供えるか。（まくら飯、死者の服装、ホウキ）
- 死亡通知者はどのようにするか。（その持ち物）
- 無情講の内容（持って行く物）
- 葬式の準備（カマド造り、料理、靈屋造り、イケ掘り、草履作り、荷負木切り、その他の葬具作り、葬儀委員長）
- 湯漬は、誰が、どこで、どんな格好でするか。男女の違い。（二つガマ）
- 入棺（ニッカン）の仕方。副葬品（仏教と神道の違い）。棺桶の形や材質、大きさ。
- 喪家の標識。喪服、香典帳はないか。
- 出棺（野辺送り）の仕方。どこから出るのか。
- 葬列の順序・順路。誰が何を持つのか。その意味。近親者の服装。
- 参列者の持ち物、服装。
- 埋葬の仕方。墓地に着いてから何をするか。棺桶と一緒に埋めるのは何か。息吹き竹。ツカ木。旗。草履。
- スリバチ被せ。
- 参列者は骨ってからどんなことをするか。
- 後始末。死者の衣類などの洗濯の仕方。
- 忌み明け・年忌はいつするか。仏教と神道の違い（参加者、持って来る物、供物）。その道具（位牌、卒塔婆、弔いあげの塔婆、盆棚、先祖樋）。
- 改葬の仕方（移住部落などでは洗骨採取をするか）。
- 靈屋について。（材質・寸法、ヒライリカツマイリカ、方角）

その中には何があるか（ツカ木、マエジヨク、香炉、線香、墓標、石、砂、花、旗、草履、棺桶の担い棒）  
いつ靈屋を壊すのか。

- 土葬から火葬への変化。土葬の時のイケの深さはどのくらいか。火葬場はどこか。  
現在の土葬の割合はどれくらいか。
- ハカの区画。墓地割り。
- 墓石の種類（材質など、青みかけ）・変遷・地域毎の違い。自然石のものはあるか。
- 石塔はあるか。誰を祭っているか。  
それは共同のものか。そのお祭りをするのか。
- 埋め墓と参り墓。
- 特殊な墓はあるか。（乳幼児、異常死、産婦、無縁仏）

##### サブテーマ「産育・婚姻」

- 妊娠中の祝い、禁忌
- 安産祈願（神社の安産祈願の札、神社の鈴についている布やよだれかけ）
- 出産の場所（産屋の有無）と出産の方法
- へその緒、後産の処理
- 命名（名付け親、名付け祝いの仕方、名付けの命名の紙、贈り物）
- 初宮参り
- 初誕生祝い（エラビトリ、足引き餅）
- 育児の祝法（拾い親、夜泣き・瘤瘡・はしか・百日咳・夜尿症）
- ヤシナア親（養い親）との関係
- 七五三のお祝い、帯ほどき（帯とき）
- ニサア入り
- 婚礼に使った着物・道具・化粧道具

#### 種子島野外実習事前研究

940224 2年2番 上田 泰士

##### テーマ：住居

・屋敷とは家屋を構えた一区画の土地空間をさす。そこは住生活の場であり、社会集団としての家が機能する場でもある。  
・日本民家の間取型は、基本的には床張りの居住部分と土間という二部分からなっている。機能や住生活、土間や高床（居住部分）

などに留意して、九州地方の民家間取型を分類すると次のようになる。

- (一) 四間取り
  - (二) 広間型
  - (三) 板間の拡大によって広間化した型
  - (四) 併列型
  - (五) カギ屋
  - (六) くど造り
  - (七) 土間極小・無土間型
  - (八) 二棟造り
- 種子島の民家

母屋…オーエといい、オーエの間取りは

田の字型が基本であり、上の座  
(表)、奥の間(横座、ナンド)、下  
の座(中の座、次の座)ジロ(火  
代)の間の四つの間取りからなる。

柱……中心柱を亭主柱といい、入口の中  
央の柱を聲柱、縁の側の柱をエン  
柱、床の正面柱をトコ柱という。

台所…昔は台所をアザーナー(中種子、南  
種子)またはアザーダー(西之表)  
といい、丸竹を組んで筏状に敷き  
並べ一段高くし、水桶や半胴などを  
置き、そこに外から泥足で上がって  
柄杓で水をかけて洗い、雑巾  
で拭いて板敷経由座敷へ上がった。  
アザーナーは炊事場でもある。(た  
だし、ながしに当る)

セシナギ…昔、土を掘って石灰と粘土と  
混ぜたタタキで塗り固めた壺に汚  
水を流しこみ、その水留めをセシ  
ナギといった。  
今も台所のながしの水留めをセシ  
ナギという。

玄関…昔の平民の場合はなかった。士族  
の場合もない場合が多かった。し  
かし、薩摩族の家老格の家や上級  
武士の家(小牧の平山家、地方庄  
屋の家など)では玄関があり、そ  
の小部屋を玄関の間とも呼んだ。

天井…農家の場合

下の座の上にはツシギを渡して  
あり、その上にクブキ(昔の巾

着型の儀)をいくつものせてい  
た。クブキには羽を入れてあり、  
必要に応じて下からカラ竹のサ  
シ(二尺五寸長さの尖ったもの)  
で突っついて肩にかついだバラ  
にうけてとっていた。

・薩摩族屋敷の場合

外見上は平屋建てにすぎないよ  
うだが、中に入つてみるとニワ  
の上と奥の間の上が中二階にな  
つていて、クラになっている。

<参考文献>

杉本尚次著『九州地方の民家』

(1977 明玄書房)

下野敏見著『種子島の民俗II』

(1990 法政大学出版局)

福田アジオ・宮田登著『日本民俗学概論』

(1983 吉川弘文館)

○農業(メインテーマ) 3年 南野晴美

- 1 どんな農業を営んでいるか。(稻作、たばこ、ソバ、大豆、茶、その他)
- 2 作物はいつ植えて収穫するのか、生産  
暦を作成する。
- 3 稲作について…種蒔き、苗代つくり、苗  
引き、田植え方法、除草、除虫、稻刈り、  
運搬、干燥、貯蔵、調整法(脱穀、米つ  
き、精米法)畝つくり、堆肥など
- 4 畑作について…麦、粟、大豆、大麦、裸  
麦、陸稻(野稻)、小豆、ソラマメ、エン  
ドウ、カライモなどについて。中引き、土  
入れ等の中耕農具について詳しく聞く。
- ・山間部における、山の開墾時の焼畑、切  
り替畑、植林、コバについて、儀礼的  
なことはしなかったか。併せて、山の  
神の伝承について尋ねる。開墾時期、  
呼称、場所、道具、焼畑の方法、作物  
は1年目2年目何を植えたか。
- 5 儀礼…タネマキ祝い、虫祈禱、サナボ  
イ(サノボイ)、雨乞い、初穗祝い、亥の  
子祝い、ニアガイ。新暦、旧暦を明確  
にして順序よくきく。

- 6 里芋，水芋，ニガシキ（ミガシキ），山芋，他，その栽培法と収穫の仕方，道具，食べ方，貯蔵法をきく。
- 7 農地の種類と呼び名…サエン，ハタケ，コバ，ノ，アサバタケ，クワ畑，牧地
- 8 田の水利，溝，堰の呼称，管理の仕方
- 9 稲，麦，粟の昔からの品種名とその特徴（背丈，実の長短，色）
- 10 在，浦，半浦，野町の農業を比較させる
- 11 農業集団…結について。麓の農業では，小作人や奉公人についてもきく。
- 12 出稼ぎについて
- 13 農作業時の服装
- 14 馬，牛等の労働力としての家畜の飼育について。馬喰について，交渉の仕方など
- 15 田の神について，ガラッパの伝承

#### 山椎（サブテーマ）

- 1 地名，呼称について…山頂，峰，峠，山腹，傾斜面，台地，崖，山崩れ地，岩山，禿地，岩穴，日当，日陰など
- 2 山中の境界の仕方，呼称。茅野の呼称と利用，原野，焼畑の呼称と利用法
- 3 宮山と個人山の違い…モエヤマ（グループで共有）
- 4 伐採する木の種類について，道具，服装，時期，運び出し方（ダイゴロウ）
- 5 植林の木の種類と道具，服装，時期
- 6 初山入り（正月）の儀礼
- 7 薪の種類と採取，運搬道具とその方法
- 8 山小屋の呼称，作り方，間取りと利用法
- 9 山師，キコリの仕事，服装，道具，修行方法について
- 10 山の神について，祀り方，供物。ショウゴクについて  
神社①山王神道…日枝（村原）  
②修驗道…松坂，近戸官，川畑湯舟  
の12所宮など
- 11 炭焼きについて（鉄山，東山）製作法について，道具，運搬，販売法。所有方法（個人か共有か）
- 12 製材業と大工との提携の有無
- 13 出稼ぎ業…渡り木挽きについて

#### 住居の質問表

上田 泰士

- 屋敷内の建物配置とその名称（今と昔）
- 家の平面図と間取りの名称（母屋と，隣居屋）
- 各部屋の使われ方（昔と今）
- 防風林の名称と植物の種類
- 家の構造（平屋建て，二階建てなど）
- 台風に対する家の補強
- 厩，便所，納屋などの付属建物の位置と名称，使用法
- 倉の構造，内部収納物，倉の造り方
- 柱の名称と位置
- 炉の位置と名称
- 神棚，仏壇，大黒などはどこにまつてあるか
- 天井の造り，屋根の造りの今と昔
- 昔の茅屋根の葺き方と道具
- 土間，台所などの昔と今
- 風呂場と風呂桶の変遷
- ついたて，ほうき，長持，ゴザなどの利用法
- 地づき用具
- 棟上げ関係品（昔の茅屋根葺き祝い関係品も）
- 建築儀式における供物，かざりもの
- 家移り関係品
- 門構え
- 寝具布団，枕，寝ござ

以上，学生の事前準備としての事前研究例と質問表を紹介した。

ところで，学生の中から，毎回，リーダーと会計係を選ぶが，それは推せんによることにしている。一人一回きりの経験をしている。リーダーと会計になった責任，教官が呼んでかんたんに，「つねに皆んなのこと，全体のことを考えること。人生において，それは大事なことだが，今頃，なかなか団体生活のそういう機会がない。したがって，今回は，そういう自分を高める絶好の機会であるので，頑張ってもらいたい」  
「全員をぶじに連れて戻ることが，よいことをすることよりも大事である。リーダーは

### 全員の安全と健康を考えよ」

「つねに和が大事である。リーダーは、学生と団長と何か重要なことで合宿上の意見が分かれたら、さいごは団長に協力すること。団長とリーダーが対立しては絶対にうまくいかない。但し、リーダーは常に団長に学生の意見、どんな意見も伝えておくこと。お互い、風通しをよくしておかないといけない」

このようなことを述べて、リーダーと会計係に自覚をうながすのである。又、会計係は副リーダーとして、やはり全体に気を配り、リーダーを補佐するようにと述べる。

一週間も狭い部屋に若者がしかも男女、二十余名もザコ寝、合宿すると、やはりストレスはたまる。そのストレスは、毎日のフィールド・ワークそのものが一つの解消策であるが、夜、ミーティングのあとの慰労会などもそうであろう。それでも団長、リーダー、会計係は、いかにして皆が明るく愉快に生活でき、調査できるかを常に考えておらねばならない。

学間に志す一群の若者たちではあるが、男女学生が一室に合宿するとどうかと心配して下さる方もあるが、鹿大の学生の場合、これまで全く問題はなかった。私は、合宿のはじめに団長として学生にこういっている。

皆さんは、これから一週間、合宿することになって、男女が同じ部屋、同じ炊事室で生活する。又、調査もリーダーの指示で男女が組んでフィールドに行き、一日中、いらっしゃるにいることにもなるが、その間において仲良くなれば仕方はない。皆さんは、皆、二十歳を越した成人であり、親の承諾がなくとも仲良くなれば結婚できる。しかし、もし、そのように仲良くなったり、間違いがあったら、私は皆さんを預った身として、又、団長として、さっそくご両親に電話をして、ここに来ていただき、当地の町長さんにでも仲立ちになってもらって結婚式を挙げるようにしましょう。大へんよいことではなかろうか。

このようにいうのである。学生の皆さん

は大いに笑って聞く。リーダーを中心として運営を学生に任せたるせいか、こういうと却ってそれが抑制になって、学生の自覚は高まるようだ。これまで、学生の間違いは一件もおきていないのである。そこには学生同志の锐い相互監視も無意識に働いているのかもしれない。

でも、フィールド・ワークを通して、その時のお互いの知り合いがちになって芽を吹いて、とうとう同専攻の者同志で結婚した例がいくつかある。それに南種子町の今回のフィールド・ワークにおいても、一件のおめでたが芽生え、近く結婚式を挙げることになっている。それは、宝満神社や門倉岬の御崎神社の加護と柳田長谷男町長さんのご人徳による幸せかもしれない。めでたし、めでたし。

ところで、参考までに、学生たちの持参品などを記しておこう。本土の他の町村などで、学生が合宿すると、ずい分昔の学生を考えておられるようで、汚い、乱暴、低道徳といった見方で接せられることもあるが、鹿大の学生はきれいさぎ、ていねい、道徳的であって、全く隔世の感があるとはこのことであろう。こんなりっぱな若者ばかりであってよいのか、と戦中派の私などは却って国の将来を心配するといったあんぱいである。

### 南種子町有形調査学生持参品リスト

#### 衣類など

下着など

シャツなど

ズボンなど

パジャマなど

ソックスなど

帽子など（出来ればひも付き）

◎マフラー（風がつよい）

手袋

洗面・入浴具

歯磨きセット

櫛・ブラシなど

タオル類  
 石鹼・シャンプーなど  
 手鏡  
 その他  
 ◎保険証  
 薬（傷薬・風邪薬など）  
 懐中電灯  
 ◎シュラフ（寝袋）  
 米10合  
 16,000円  
 生命保険  
 虫除け・かゆみ止め  
**調査携行品**  
 フィールドノート（大学ノート）  
 ◎質問表  
 筆記用具  
 ◎カメラ  
 ストロボ  
 フィルム（白黒）  
 諸資料  
 ◎紙ばさみ  
 電池（ストロボ・カメラ用）  
 ◎巻尺  
 方位磁石  
**◎南種子町地図**  
 雨具  
 錄音機（口承芸芸他必要者のみ）  
 ほうき・はたき・タオル  
 （民具のほこり落とし用）  
 軍手  
 ◎民具カード

- ♪ 水田調査等にはマムシに注意！
- ♪ 体を調えておく！
- ♪ ◎は必携品。
- ♪ ラジオ・トランプ・花札などは持てこない。
- ♪ なるべく荷物はコンパクトに。

以上は学生が自主的に考えた持参品リストであった。

次に食事当番表を記載しておく。このよう組合せで、男女で、又、2年から4年

および大学院生もまじって、料理する。当番の者は夕食から翌日の朝食までを担当。調査からの帰途、当番の者たちは個人商店やスーパーなどに寄って材料を購入し、帰るとさっそく夕食準備にかかる。夕食後はあと片づけも忙しい。ミーティングの後の懇親会の料理の世話は、団長自身もよく手伝う。材料は大方、トーフである。実は、昭和30年代、自転車（のち単車）で、夏休みなどは見知らぬ島や村を廻りながら、いつもトーフですませた思い出があるのだ。トーフは安値で酒に対して大へんよい食物であり、消化もよい。調理もかんたん。湯ドーフにして生やさいをちょっと入れ、カツオ節をぱっと振りかけ、生醤油を注いで終了。時には生ドーフのまま出すこともある。酒は、ビールはぜいたくで、焼酎。上級生と下級生、男女の仲は友人としていつも、この上なくよいのは、トーフのせいかもしれない。

#### 食事当番表

15日	森田・小林・迫田・藏田
16日	首藤・是枝・牧・庄武
17日	楠本・南野・引地・前田
18日	小島・日比野・田島・加塙
19日	町・首藤・森田・庄武
20日	田中・牧・引地・藏田
21日	南野・小林・田島・前田
22日	是枝・加塙・迫田・日比野

※当番の日の昼（おにぎり）、夜、翌日の朝の分を作ります。

南種子町に魅せられた若者たち ————— 調査団の紹介



宝満神社で調査團一同



宿舎で（左端後は近藤さん、隣は松村君、前列白は崎村先生、その右は下野）



ガローヤマの勉強



里で（左から崎田宏謀長さん、牧さん、引地さん、小川先生）



ミーティングのあと（写真が語る）  
二人はいつもいっしょであった



ミーティングのあと、ほっとして（宿舎で）



崎田宏謀長さんのお話（宿舎で）



店のトーフの昼食  
(左より下野、橋本君、前田さん。上西目で)

次は団長とリーダーが作った調査の日程案である。

南種子町民具調査（鹿大野外実習）日程案  
(1994年)

3月15日(火)	午前8時半鹿児島港発、午後12時半西之表港着、マイクロバスにて出発。 平鍋ガローヤマ～中種子町歴民館～町山崎牧の神～平山向井里ガローヤマ～広田遺跡～エビス・岩穴～宇宙センター通過～宝満神社・お由の森～真所の森山～南種子町郷土資料館～福祉センター到着
16日(水)	マイクロバスにて、茎永・平山の各村落に分散して調査
17日(木)	" 島間・西海の各村落
18日(金)	" 下中・西之の各村落
19日(土)	" 茎永・平山の各村落
20日(日)	" 下中の各村落
21日(月)	" 島間・西海の各村落
22日(火)	" 下中・西之の各村落
23日(水)	マイクロバスにて、午前9時宿舎を出発～種子島開発センター博物館(西之表市)～昼食～乗船～午前1時半西之表港発～午後5時半鹿児島港着

\*上記の調査村落は、学生各人が毎回交代で違う村落に行く。

\*各村落への学生の分散と組合せは、前日までに学生リーダーが案を作る。

九州商船(鹿児島～種子島)

鹿児島港発 8:30～「フェリー出島」丸

西之表港着 12:20

西之表港発 13:30

鹿児島港着 17:30

\*学生7時半集合(切符、学割、現金提出)。

8時乗船

料金

2等 2500円 学生割引 1750円(但し、団体で学生割引) - 学割必要

手荷物運賃 590円(1個につき)

無料: 主として鞄・ハンドバック傘など  
の身の回り品で、その容積合計が  
0.09平方メートル以下で、かつそ  
の重量合計が20kg以下

有料: 上記以外の手荷物は、1個につき590  
円

九州商船連絡先

旅客・車両 22-8271

貨物 26-0115

鹿児島港(北埠頭)

### 3. さいごに

南種子町の民具・民俗調査がひと通り終った。こまかに見ると、いくらでもあってきりはない。それだけ宝庫である。学生の調査は町内のたくさんの方々のご協力に支えられたものではあるが、まだまだ見方が浅い。しかし、たくさんの学生による町内全域のいっせい調査という点では意義があったのではないか。

南種子町が今後、発展していく上には町内のすべての文化のいっせい調査による点検がどうしても必要にちがいない。教育にも観光にも、いや住民自身の生きる誇りとしても、こうした基礎調査は将来、必ずお役に立つと思う次第である。

次は、調査お礼の手紙で、鹿大より町内の全協力者、全伝承者およそ二百数十名の方に出した。ご参考までに記載することにします。

#### 民具・民俗の調査ご協力の御礼

トピウオが姿を見せる初夏の季節になり、南種子町の山野は新緑の色で美しいことと存じます。

去る3月15日から23日まで、当鹿児島大学法文学部「比較民俗学」研究室で御地の民具・民俗の調査をいたしましたところ、町ご当局、特に教育委員会をはじめ各村落の公民館長さんや老人会長さん、たくさんの方々、またたくさんの町民の方々

に大へんお世話になりました。ありがとうございました。心から御礼申し上げます。

わずか一週間ではありましたが、全国各地から参加している二十数名の若者たちが合宿し、ミーティングをくり返しながら、南種子町の全村落を回って、祭りや行事や農・漁業、衣食住、人生儀礼、信仰などに関係の民具等を調査しました。その結果、南種子町は民具・民俗の宝庫であることが確認できました。しかし、貴重な民具・民俗も年ごとに急速になくなりつつあることもわかりました。

宇宙センターは町の誇りですが、先祖伝来の民具や民俗も誇りであります。しかもそれは自分たちが今まで大事に伝えてきたものであり、本当の南種子町のものであります。このように貴重な民具および民俗のかずかずを永久に残し、町民はもとより出鄉者や外來者、観光客にも見せてその意義をかみしめたいものです。

種子島には西之表市と中種子町に博物館があって郷土の誇りを展示してありますが、民俗文化や歴史、考古出土品、自然などの一番ゆたかな南種子町にこそ、一番りっぱな博物館が必要だというのが、今回の調査の結論であります。

では、南種子町のますますのご発展を祈り、お世話になった方々に対し、心から感謝申し上げたいと存じます。ありがとうございました。

平成6年4月27日

鹿児島大学法文学部「比較民俗学」研究室

下野 敏見

様

では、さいごに町ご当局特に町教育委員会の皆様に対し、厚くお礼申し上げます。柳田長谷男町長さん、堂ノ脇大雄教育長先生、社会教育課の崎田宏課長さんには学生をたびたび激励して下さり、又、社会教育課の皆様方には課長さんほか課内のたくさんの方々にいろいろと、大へんお世話になり、ま

ことにありがとうございました。心から感謝申し上げます。

なお、町内全域で学生たちがお会いし、いろいろなお話を下さったお年寄り、伝承者、協力者の方に、又、学生たちが町内各地で出会い、道端で、店先で、あるいは縁側などで、あるいは田畠のそばで、親切に、にこやかに、いろいろ教えて下さり、励まして下さったたくさんの皆様方に対し、心からなる感謝の言葉を捧げたいと思います。南種子町の皆様、ありがとうございました。

なお、南種子町文化財審議委員会の諸先生方や町内の小・中・高校の先生方にも各地で学生がお世話になり、又、南種子高校教頭の吉元正幸先生にはお忙しい中、学生を激励して下さり、まことにありがとうございます。これら諸先生方に対し、心から感謝申し上げます。

## 民俗学から見た南種子町の特色

鹿児島大学法文学部教授 下野 敏見

皆様こんにちわ。わたしは、昭和29年から昭和44年まで15年間も種子島にお世話になった者です。その間、南種子町にはとくにお世話になり、各村落、各家々にたいへん親切にしていただきました。昨日のこと、社会教育課長の崎田宏さんのご案内で、町内を一巡したのですが、たいへんなつかしい所が多いでした。

さて、今回は友人の長谷男町長さんから、たまには話をして欲しいと、おさそいを受けましたので喜んで参りました。昨日、出張先の京都を発ち、大阪経由で種子島に到着して、先ほど申しましたように町内を一巡したわけですが、最近、種子島はたいへん交通が便利になってきました。

さて、昨日、島間から屋久島のきれいに見える西海の海辺に降り、牛野漁港に行ったところが、そこに丸木舟が1艘浮かんでいるではありませんか。今では、種子島の丸木舟はたいへん貴重なものです。これはすぐ文化財に指定されたらどうですかと、社会教育課長さんに申し上げたのでした。でも、なぜ丸木舟が重要なのか。そもそも丸木舟というのは、一万年も前から使ってきました舟です。先のとがったタイプを鰐節型といいます。それに対して、孟宗竹か唐竹を、節のところでスッと切って二つに割ったタイプ、かまぼこをひっくり返しておいたような形のものを割り竹型といいます。

ところが、牛野で見た丸木舟は折衷型です。つまり、舳は鰐節型、艤<sup>ひき</sup>は割り竹型です。これは和船の形でもあります。種子島の丸木舟は櫓を積んでいます。丸木舟は本来、沖縄のサバニがそうであるように、櫓<sup>櫓</sup>を積んでいて、それをこいで進んでいたのですが、種子島の丸木舟は櫓をこいでいるのです。櫓は和船の道具の一つで帆を使わない時に用いる道具であります。積んでいるものは、ほかにもあって、アカトリ、釣り竿、石のいかり、スバル（星の名）というおもしろい名称の錐状の綱引き上げ具、ミザオなどの七つ道具があります。最近は船外機もつけるようになりました。このように種子島の丸木舟は、非常に古い要素を持ちながら、しかも、和船の伝統を取り入れて新しく作ったものです。その材料はヤクタネゴヨウマツ（屋久種子五葉松）という土地の材木であります。

牛野漁港に浮かんでいる丸木舟は一見、原始的見えますが、実は、いろんな創意工夫が加えられて、日本でも唯一のめずらしいタイプに出来上がって今日に到っているのです。牛野漁港の近くにあるエビス様、これがまたおもしろい。そこからは屋久島が目の前に見えるたいへん眺めのよいところです。手前に熊毛層という地層が露出している瀬<sup>瀬</sup>があって、その黒々とした瀬の上に小石を置いて、エビス様をまつってあ

ります。そのエビス様は、ベンザシ（弁濟使）という役目の人人が、海中にもぐってい  
ちばん最初に拾った石を持ってきてまつたものだそうです。ちなみにベンザシとい  
うのは、平安時代の頃は莊園の収穫上納物を集めて中央へ送る輸送官の役目をしてい  
たのであります。それが後世、エビス神や網の管理などをする漁村の役目に変わった  
のです。ベンザシという呼称は、九州全域に残っていますが、種子島がその南限地です。

さて、そのベンザシとともにムラギミという役もあります。ムラギミというのは、  
村君のことと、古代には村の長老役で指導者であったらしいのですが、近世では魚を  
発見する魚見や漁撈長の役をいうようになりました。南種子町では、西之本村などに  
ムラギミ役が残っています。ムラギミは北海道の紋別市を北限として（おそらくこれ  
は和人の移住に伴って伝播したものであろうが）、南限地は種子島であり、その南端の  
南種子町西之本村であります。

ベンザシが世話をするエビス様は、海の中から石を拾って来て、すこし高い瀬の上に  
おいて、祭りの日には、ベンザシは沖の方から岩によじ登り、丘の方を向いてエビス  
様を拝むのであります。つまりエビス様は、いつも海を向いているのでそうするわけ  
です。不思議なことに、日本中の漁村のエビス様で海を向いていないエビス様はない  
のです。もしも陸の方を向いているエビス様があったら、それはインチキです。

では、なぜエビス様は必ず海を向いているのでしょうか。種子島のエビス様は、そ  
の根本のことを教えているのです。といいますのは、海中にあった石を瀬の上に置い  
てあるということは、魚といっしょにおった石、すなわちエビス様が沖を向いて、「魚  
来い、魚来い」といつも招いていることを意味します。これを学問的にはマナの力と  
いいます。このように、瀬の上のエビスの石は、豊漁の呪術をかけているのです。こ  
れが日本のエビスの始まりであり、原理であります。

ところが、島間の海岸の近くにエビス神社があって、そのわきにミヤマツバロ（宮  
松原）神社という古い社があります。エビス神社はりっぱな社殿をこしらえてまつ  
っていますが、すぐ隣りの宮松原の社には社殿はなく、その代わりに小さな丸い海石を  
五百個も六百個も積んであるのです。それは参拝することに昔の人が持てて来たもの  
です。つまり、海の聖なる石を持って来て、神願いをした証拠です。これも先ほど述  
べたエビス様の原理、マナの呪力を持つ海石をすくえて拝むという形式と似ています。  
しかも、宮松原の社にはサンゴの巨大な岩があって、昔は、それを神体石としていた  
ようです。神の魚群に連なるサンゴ礁の呪力への願いが行われる場所であったので  
す。これこそもう一段古い海の信仰といえましょう。このように、わが国の海の信仰  
の古い伝統が、種子島の南岸を深く洗っているのであります。

エビス様といいますと、鯛を小脇に抱えこんだエビス顔のエビス様が浮かび、又、  
大黒様と並んだエビスや七福神のエビス様も思い出します。エビス様は、浜辺ばかり

でなく、町中にも農村にもまつってあります。兵庫県の西宮には、日本のエビスの総本社のエビス、つまり、西宮があります。西宮の周辺は見渡すかぎり市街地で、海などは見えません。が、わたしは一つの信念を持って聞いてみました。

「宮司さん、昔はこの西宮のすぐそこまで海が来ていなかったかどうか、聞いておられませんか」

こういったら、わたしの話が終わらないうちに、

「聞いています。昔はこの近くまで海で、鯛の魚の宝庫であったそうですよ」と、こういわれました。わたしはひとり深く肯くことでした。いま、西宮のエビス神社は大きな社で、参拝客がひきもきらないあります。ところが、本来は南種子町の牛野や、中ノ塙屋、大川、広浜などに見られる、あの磯の上にまつてある海石、その海石に働いているマナの呪力が、この西宮の成立の根本の理由になっているにちがいないということを確信できたわけです。

このように、日本のエビス信仰の一番基層の部分が、この種子島南部の南種子町の西海地区に残っているのです。これは、りっぱな文化財といえるでしょう。その神事を毎年やっておられ、豊漁を祈っておられるその心も尊いものであります。

さて、話が一転しますけれども、昨日、上中の町を一巡した時に黒山のそばを通ったのです。そこには、ガローがあることを思い出したのです。南種子町役場に勤めておられる日高澄夫さんの家の近くにあります。

ガローとかガローヤマというものは、島内にたくさんあって150カ所もあります。ガローの森に入ったら、たちまち巣る、小便でもしたらだいじなものが腫れ上がっててしまう、森の木の枝でも折ったら腹が痛くなる、ひどい場合には命が亡くなる、こんなふうにいわれています。わたしが種子島に住んでいた30年以上前の頃は、ガローは祟り山として恐れられていました。最近はガローもだいぶおとなしくなったようですが、それでも、まだまだ祟るようです。役場の平島典夫さんの平山の生家の近くにも平島ガローということがあります。これは有名なガローです。

大字平山全体には、平島ガローを含めて24カ所にガローがあります。宇宙センターのある大字茎永は18ガランといって、18カ所にガランすなわちガローヤマがあります。島間には10カ所、そういうふうに各大字にいくつもあるのです。

こんな恐ろしいガローが祟るとどうしたらよいのでしょうか。ところが、その解決法は至極簡単。例えば一人の子供が急に病気になった、医者にみてもらってもはっきりしない。こんな場合にはモノシリというシャーマンに聞きに行きます。モノシリは神がかりの中で「これはガローの祟りのようだ」というわけです。そこで、子供の父親は、すぐ蓑、笠をつけて、片手に鎌を持ち、宙を切って悪霊を祓いながら、人に逢わないようにして海岸に行きます。渚の波が七回寄せたあとでの清い海砂をとってネコノ

キンタマ（タマシグ）の葉に包みます。これをシュエー（潮井）といいます。そしてガローヤマの中心にある一本の大木の根元に供えて詫びをいって拝むのです。すると、子供の腹痛や、原因不明の病気がケローッと癒るのだそうです。

種子島ではシュエーすなわち潮井、黒潮の力に対する信仰が非常に強い。日本の大相撲の時に、力士たちが塩をつかんで土俵にまくのは、本来は種子島のシュエーを擲げるのと同じような気持だろうと思います。黒潮に象徴するシオへの信仰は、塩の浄化力で悪霊を祓ってくれるのに期待しているといえましょう。こう見ると、大相撲も呪力的であり、いかにも日本のあります。

ところで、茎永の阿多羅経村落の弥八ガローは、岩下ガローともいい、岩下門の人びとが宝満様の願成就の日の旧暦9月9日に、初穂を持って参拝します。弥八ガローは、宇宙センターの入口に近い山の斜面の照葉樹林の中にあって、ユスの大木を神様の依り木にしてまつっています。そのわきには、サンゴ石をいくつかおいて祭壇をこしらえてあります。それだけの簡単な構造です。

ところが、この神様が、なかなか威の高い神様らしく、茎永の総鎮守神である宝満様の神の子分ともいわれています。また茎永には、雪の子ガローというのもあって、これもたいへんな神様で、崇りやすいが、女の神様だともいいます。

雪の子ガローの前の道を、葬式の列が通ると、たちまち崇って、棺桶をひっくり返されるといわれていて、宇都浦の葬列の人たちはそこは遠廻りして行ったということです。

さて、平山小学校のそばの向井里には、13軒でまつるガロー山があって、今も健在です。タブの大木が何本も生い茂る山で、その奥にある一番大きなタブの朽ち木の前に石の祠を作り、その前には、ヒツッパ（横）の木を左右一本ずつ立て、注連縄を張ってまつっています。その姿を見てわたしはうなりました。これこそ日本の神社の起りだ、と思ったのです。元は、大きなタブの木をまつっていたが、大木が枯れたので、その前に社型の石塔を建てて、中に小さな丸い海石を入れてあります。そして注連縄を張ってある、これは、石塔が社殿になり、左右のヒツッパの代わりに鳥居が建てば日本の神社になります。

或る年、種子島に学生たちを連れて比較民俗学の野外実習に来た折り、向井里のガロー山を見せて、これが日本の神社の成立の過程をもっとよく表しているのですよ、このようにガロー山というのは、森の信仰であり、木の信仰でありながら、日本の神社の起源を説明できるところに、民俗文化としての価値があるのだと話したら、学生たちも深くうなづいてくれました。

さて、その森をまつる信仰は、福井県にもあります。それは、若狭湾の西の大島にあって、24カ所にタモ（タブ）の大木を神木として祀っています。玄界灘の対馬にも

あって、そこでは茂地といっています。このように日本の各地に点々と祟り森の山があるのです。薩摩半島では指宿市を中心にモイドンというのがあります。日本中のこれらの祟り森の中で、もっとも原初的な形で、又、もっとも基本的な形で見られるのが種子島のガロー山です。ではなぜガローというのか。これはさきほど述べたようにガラン（伽藍）というのが本当の言葉の始まりです。伽藍神というのは、もともとお寺の伽藍を守る神で、ひいては、お寺の敷地全体を守る地神です。このように本来、佛教的な神様ですから、ホトケガミの一體であります。これが種子島に入って来たわけですが、いつ頃入って来たか。わたしが考えますに、ガローは宝満信仰との関係が深いので、宝満信仰が入った頃いっしょにガラン信仰も入ってきたのだろうと思います。

宝満様は、北九州の太宰府にある宝満神社を勧請したものです。宝満神社は対馬にも見られます。大隅半島の志布志には、宝満寺というお寺もあります。宝満信仰が種子島に入ったのは一四世紀の頃です。その時の種子島の島主が、第六代島主の種子島時光です。この人は産業政策をかけ、今日の南種子町のように、どんどん経済開発を行い、発展した時代です。その頃、ガラン信仰が、種子島に入ったものようです。

やがて法華宗が入りますと、法華宗の坊さんたちが、ガランをまつたがよからう、ホトケガミだから大いにまつれ、といって奨励したフシがあります。そして、屋敷の北東あるいは北西の、台風が最も強い場所に、防風林としてまつるようにしました。それで、台風にも安全。神様をまつてあるから絶対に切ってはいけない。切ったら祟る、ということになります。このような先人の知恵が働いて、ガロー山ができるわけです。でも、いつしか、その知恵が忘れられてしまった。今では、家も立派になり、もう暴風雨になっても家が倒れることはありません。したがってガローの役目ももう終わりになって来つつあるわけです。だけどその意義は、日本の森神信仰の根幹を示し、また日本の神社の成立状況を示していく、貴重な文化財であるというわけです。

さて話は一転しますが、昨年の秋、わたしは宮崎県から30分位西に行った所の、大淀川中流にある高岡町川原田の大将軍神社に参ったのです。ちょうど村の祭りの日で、トントントンと、太鼓の音がします。入ってみると、太鼓踊りを踊っていました。50人ぐらいで踊っています。わたしは、自分では芸能は何もできないくせに、見るのはたいへん好きなので、じっと見とれていたのです。すると、左右のバチを下に向かって前に垂らしたかと思うと水平に持ち、前の方にひっつけて、次の瞬間、太鼓をポンと打っています。「おやっ、これはどこかで見たようだな」と思ったのです。実は、これは昨日、御崎神社の境内で見た太鼓踊りの振りと同じ振りなのです。昨日は、門倉岬にある御崎神社の願成就の日で、わたしは運よく拝見できたのでした。御崎神社では、昔から国土安穏という踊りを最初に踊るのですが、その国土安穏につづく太鼓

踊り、すなわち種子島でいう大踊り（安城踊りともいう）の時には、バチさばきの中に先に述べたような振りがあるのです。

そこで、高岡の大将軍神社において、わたしは今度は耳を澄ましたところが、これまた聞いたようなメロディーです。そして、「堺北の町」という言葉が聞こえました。あっ、これは種子島の安城踊りの堺北ノ町だ、と、こう思ったのです。踊りがすんでから、歌い手さんにお願いして「あなたの歌は、たいへんよかったです。ぜひ、もう一回歌ってくれませんか」といったら、喜んで歌ってくれました。それは、種子島の安城踊りの一節の「堺北ノ町」と、歌詞もメロディーも全くいっしょで、まぎれもない種子島の大踊りです。その名称は、「城攻め踊り」ということでしたが、種子島大踊りと同系のものにまちがいありません。楽器は太鼓、小太鼓（入れ鼓）、カネ（鉦）の三つです。これも種子島と共通です。踊る時は、カネと小太鼓の人たちは、タテ二列になって入れかわるのです。これもまた、昨日、御崎神社の境内で見たのと全く同じです。御崎神社で踊ったのは、本村の大踊りは三部構成で、その中の一つを関（堺）踊りといいます。それは、たいへんハレをとる場面で、二列の人たちが互いに入れちがいながら踊る場面です。この場面をもって、宮崎では「城攻め踊り」というのです。種子島では、この場面を「掛けり」ともいいます。

種子島大踊りは、薩摩北部の川内川上流域の約百カ所に伝えられ、「種子島踊り」とか「種子島樂」といって今も踊られています。どこでも、これはすばらしい踊りだといって、大事にして踊っているのです。そして、出水市では、これを鹿児島県の無形文化財にして、それは大事にして踊っています。

種子島に住んでいた頃、ある日、わたしは出水市に出かけて、種子島樂の話を聞いたのです。すると、小雨の日に大勢の人びとが、わざわざ集まってくれて踊ってくれました。そして、1回約40分もかかる踊りを三回も踊って、「あんたは、種子島おるということだが、出水の種子島樂をどう思うか」との質問です。わたしは、「出水の種子島樂はすばらしい踊りです。それは種子島のものは非常にすぐれている。しかし、出水に土着してもう何百年もたつ種子島樂は、出水人の気風が乗り移って出水化し、気品の高い芸能になっている。種子島の優雅さに較べて、出水のものもたいへんよい芸能である」といったのです。そしたら、すかさず、市長さんはその秋の無形文化財に申請し、見事にパスして、県の文化財になったというわけです。もっとも、出水の種子島樂のよさを、県文化財審議委員の一人に話して、根回ししておきました。

ところで、種子島の芸能が、宮崎県南部から薩摩北部にかけて、あちこちに伝えられ、しかも大事にされていて、その名も「種子島踊り」という所も多く、種子島の安城踊りの「堺北之町」や「佐渡と越後」、「締むれば鳴る」、こうした歌が各地で歌い踊らされているということは、種子島の人にとっては、愉快なことではありませんか。

さて、種子島の芸能でもう一つどうしても忘れてはならないものは「ロッパー」です。ロッパーというのは、あの読み方の「読法」という解釈もありますが、ほんとうは「六法」が正しいのです。なぜか。普通これは「早物語り」ともいいます。その早物語りをロッパーと種子島でいうのは、これはたいへん意味が深いのです。ロッパーというのは種子島だけです。本土のほうでは「早物語り」、あるいは「早もん語り」といいます。なぜロッパーというのか。

これは千年前の平安時代のころ、坊さんたちが、仮装し、徒党を組んで京の街を徘徊した。それを六法者といっていました。それから世が変わり、江戸時代になりますと、いわゆる非行集団の若者たちが、徒党を組んで江戸の街を徘徊した。これを六法者といいました。ところが一方、歌舞伎俳優が大振りな様相で花道からやって来ます。それを六法といいます。このように尋常でない、大振りな、あるいは異様な、あるいはおかしな、こういうものが六法の本質に流れています。したがって種子島では尋常でない、異様な語り口と内容の早物語りをロッパーというのです。ちなみに種子島にはテンボウという言葉もあります。

テンボウは、少し悪口をいう場合に使い、愚か者というのです。ところが、東北地方では、早物語りをテンボウ物語りといいます。

さて、この六法すなわち早物語りは、昔は全国にありました。記録もあるのです。ところが、今、ロッパーを語る人は全国でも、種子島にしかいません。しかも録音として残っているのは、わたしが種子島にお世話になった30数年前に、南種子町で録音したものだけです。先般、南日本放送の藤原一彦さんが来られて、何かめずらしいものはないかといわれますから、種子島のロッパーを、昔、わたしが録音したものを見せて紹介しました。そうしたらそれをもとに非常にすぐれた番組を作られ、ラジオで放送され、好評を博しました。口承文芸の一つの分野の早物語りは、種子島が日本の南限地であるばかりか、今では日本唯一の伝承地でもあるのです。このロッパーに続き、もう一つ「バッcker舞い」という座敷舞いがあります。バッcker舞いとは、あのおかしな格好をしたドンコすなわちヒキガエルのこと、バッcker舞いはその生態を模しておもしろおかしく舞うのです。これも日本中で種子島だけにあって、しかも南種子町だけに伝承されています。この貴重なバッcker舞いの伝承は、今や風前の灯で、島間大久保の小山種丸さんだけが知っています。が、最近、若い方が憶えて舞われたという話を耳にして喜んでいます。種丸さんは、30年も前、わたしに一回すばらしいのを舞ってくれました。しかし、それ以後はもう気分が出ないといって舞ってくれないので。何とかして種丸さんにもう一回やっていただき、あのすばらしい芸を、たくさんの方々に見てもらい、伝承してもらいたいものです。

この芸能は、国の文化財級といっても過言ではないでしょう。というのはバッcker

舞いと並ぶ座敷舞いは、ガニ舞いや、水舞い、佛舞い、婆じょう舞いなど、合計12種類あります。これらは、日本の座敷舞いの典型的なものでそれが種子島だけに保存伝承されているのです。

さて、舞いというと、ほかに赤米の舞いがあります。新暦四月初旬、宝満神社のお田植祭りが行われますが、その時、赤米を持った社人夫婦が「舟田」で舞う。それは両足で、田を踏んで舞うのですが、ただ舞っているのではないようです。足で田を耕す足耕の形態をとっています。その舟田は、お田の森に舳を向けた格好の舟型の田で、大昔、宝満様（玉依姫）が龍宮からやって来た時の舟の形であるという伝説がありますが、舟田自体は舳を長辺三角形の頂とすれば、三角田であり、それは、日本各地の神田が三角田が多いように、聖田を表す形象であるといつていいでしょう。なお、その舟田は、天水田で、下の溝から水を汲み上げているのです。天水田は水田でありながら水がないと畑です。赤米はこのように水田と畑の両方に育つ稻なのです。それは、水陸未分化の古い稻といえましょう。元京都大学教授の渡部忠世先生も、わたしが書いた資料をもとに種子島の赤米について、このことをいっておられます。（渡部忠世著『稲の大地』1993年、小学館）

種子島では、昔、馬耕がありました。明治19年に馬耕技術が入ってくる以前は、犁は知っていて、作れば作れたけれども、種子島では、犁は使いませんでした。種子島では代わりに、ホイトウをして田を耕していました。南種子町の長谷野のマキ（牧）に島間も上方も、上里も平山も村落ごとに放牧していましたから、田植前になると、その牧の馬をつれて來たのですが、大特馬をひいてくると、あの馬はぞろぞろついて來ました。それを田んぼに入れて、そのまわりを二、三人で囲み、竹の竿を持って、「ホーイ、ホーイ、ホイトウ、ホイトウ」と叫ぶと、馬は田をぐるぐる廻った。その結果、一時間もしないうちに田浦は馬の足でよく耕されます。これが馬による足耕で、ホイトウという耕転法です。馬による足耕は犁でやるよりもよかったです。なぜかというと、馬の足で田んぼの底を踏みしめて、モグラ穴を塞ぐと同時に、上の方は泥をよくこなして、田植がしやすくなるのです。だから犁は必要ではなかった。

人間の足でホイトウをするのは、インドネシアでも見られるといいます。小規模の所は、牛馬を導入するまでもなく、人間の足でやったほうが早いという場合もあります。そういう稻作の始まりの形態を思わせるような動作が、赤米の舞いの中に残っているわけです。

さて、その宝満神社の神田の赤米は、渡部忠世先生の『稲の大地』という本によると、ブルという品種だといいます。ブルとは、インドネシアでいう言葉だそうです。赤米はどこからきたのか、とたいへん疑問視されていました。ジャボニカか、インディカかといわれましたけれども、最近ではブル説が有力で、ジャバニカともいわれま

す。そして、南の島伝いに伝わってきた米であり、日本の一一番古い原種米であるということが、いよいよ実証されつつあるようです。そういう意味で赤米と、赤米の舞い、その祭りが非常に重要であります。同じ茎永に存在する宇宙センターは、日本の科学の幹を示すものであれば、宝満神社は日本文化の伝統の根本を示すもので、実は対照的で、まことにおもしろい。ところが、残念なことに地域の人びとはことの重大さにまだよく気づいておられないフシがある。舞いの伝承や、田植歌の伝承など風前の灯のようだ。また、社殿も白蟻がくっているという話をいつか聞いたことがあります。宝満神社とその祭祀および赤米の伝承は、南種子町が日本民族に誇るべき国レベルの聖地です。これは、末永くだいじにすべきではないでしょうか。

さて、いろいろと述べましたが、種子島の、特に宇宙センターのある南種子町から日本文化を考えるという観点から、いったい、南種子町のどこに特色があるのか、ということをまとめますと、それは、第一に日本文化の根元を示すことがあるということです。町民たちが、何気なくやっている行事や、祭りは、日本の基層文化を示していることがあるということです。

第二点は、北からの日本文化が、ここを本格的南限地として存在している例が多い。ここから南へ渡るともうなくなる、あるいは影がうすくなるというものがあります。巨木を中心とする森山信仰や、ガロー山信仰もそうです。エビス神は、トカラ列島まであるけれども、もっとも原初的なものはここが南限地です。それは日本のエビス信仰のほんとうの姿を説明してくれています。

ちなみになぜエビスというのか。エビスというのは、これは夷狹の夷を書きますね。夷人と書いて、エビス、その夷は、外からやってくる人、外国人がエビスです。では、なぜそんなのをつけたのか。それは、海の底から石を引き上げてきて、彼方の魚を招き寄せる力を持つ神様を迎えていたわけで、その神様を異人という感覚で認めているからです。

ところで種子島でもう一つ、たいへんかいじなことを最後に述べなければなりません。それは、南種子町島間の上方にある上妻城です。だが、上妻城に上妻氏が住んでいたという証拠は何もありません。いや、西之表市居住の上妻氏本家の系図を見ると、ないどころか、むしろ否定的因素が多い。上妻家は、本家は西之表に二カ所あって、二カ所とも、自分の所が本家だと思っておられる。その両方の系図を見ましても、昔の根拠地は一方は中種子町増田、もう一方は西之表市住吉がそうであると記してあります。

上妻姓の人は、中種子町野間の上方や、南種子町の一部にもありますが、集中的にあるのは、住吉です。ところが、南種子町の島間に上妻姓があったという証拠はない。上妻城を管理してきたのは河東家が多かった。そして今、上妻城の一つ、「内城」に

は、柳田家の人人が住んでおられ、「仮屋」には日高家の人がすんでおられます。

30年ほど前、わたしは仮屋にすんでおられた日高善三さんに会いました。夕暮れのことでしたが、日高さんは目が不自由にもかかわらず、「よう来たなあ、まあ上がりや。」こういって、話をして下さった。それは実にいい話ばかりで、わたしは吸い込まれるように聞きながらノートしました。そして、「おれの家の上のほうに、『見ずが上城』という所がある。見てはならない場所じゃ。だから見ずが上城というのじゃよ。ここに入ったら、たいへんな神罰があるといって、誰も昔から入らない。だが、あなたは希望すれば案内して行くよ」といわれたのですが、もうす暗いし、日高さんは盲目であったので、行くことはできませんでした。ところが後年、河東不凡さんといふそこの地主の方がわたしに連絡しまして、「ぜひ、上妻城を見てくれ」とのことです。それでわたしも、一週間ずつ三回にわたって、徹底的に見せてもらいました。そしたら、びっくりするようなたいへんな所だと思いました。その上妻城の今ある姿は、中世の頃、数百年前につくった城趾であり、西之表の榕城とよく似ています。名前が内城、仮屋というのも共通しています。ですから数百年前に造ったのは事実であるけれども、底にある原型をなすものがあるのではないかと考えたのです。

そもそも島間というのは、島と島の間、それは屋久島と種子島の間にある港という意味で、上妻城というのは、国の府、国府の津で、国府津城のことではないか。そしてコウヅ城がなまってコウヅマ城となつたのではないかと考えたのです。全国の国府の遺蹟に国府津城というのがあります。

国府津城と水田地帯を結ぶのは長谷野台地です。長谷野に馬を走らせますと、平地ですから、道は無くとも走れます。すると、島間から上里へでも15分か20分あれば可能で、今から千二百年前でも走れたはずです。また、下中へも上中へも容易にぬけられます。つまり、長谷野を媒介しますと、南種子全域をつなぐことができます。こう考えると、一番よい支配地は、屋久島との接触点の島間港を見おろし、また、南海を警戒できる島間上方の地であるということになります。

話は変わりますが、下中の真所神社の前に、円形の美しい森山があります。これも種子島が誇るべき文化財で、だいじにしなければなりませんが、この森山のまわりの神田では、宝満神社と同じようにお田植が行われます。ところが、その前の田んぼを「市の坪」といいます。市の坪は、鹿鳴川の近くにもあります。市の坪は、一の坪のことと、二の坪、三の坪があるから一の坪というわけで、これは奈良時代に、田の区画整理すなわち、条里制を施行したそのあとだといわれます。

下中の里から郡原まで、種子島で一番長い道路が水田の真中を、まっすぐ走っていますが、どうもあの道路の直線も、やはり条里制の痕跡ではないかと考えられます。種子島の古代の開田は、下中の平地あたりから始まったようです。そして、田も、下

中の田浦も、西之の田浦もつなぎ、また、上中の下の河内からもつなぐのは、先ほど述べた長谷野台地であり、その台地の西斜面の島間上方に、多歎国政府機関の国府津城があったと考えられます。国府には必ず国分寺がありますが、その前身の国府寺を大興(大光)寺ともいう。その大興寺は、種子島では島間の「大広」字にあったのです。

南種子町長柳田長谷男さんの出身地の小平山の上の台地は、天神、という台地で、これまた意味が深いですが、その下のところに大広という字があります。これこそ大興寺で、のちの大広寺ではないかと思われます。そこには寺趾があって、それは五百余年前に法華宗が流入する以前の律宗時代の寺趾であるけれども、すばらしい礎石がいくつもあるのです。日高善三さんは、笑いながら、

「おれの目がつぶれたのは、実はここのせいだ」と、いわれたのです。

「それはどういうわけですか」

「いやあ、そこにある大きな石を、若げの至りで『なんの罰などかぶるもんか、おれが使ってやろう』といって、石を割ったんだ」

なるほど、割りかけたあとがあります。柱の礎石ですから大きな石です。ところが、石片善三さんの目にとんできて、目が不自由になったのだと、苦笑しながら話してくれました。その場所に今でもその寺趾があるのです。これが奈良時代と直結するかどうかはよくわかりません。今、見ているのは律宗時代とつながります。島間には、そのような証拠がいろいろあるのです。だから今後もっともっと解明しなければならない場所です。そののち、種子島の国府は、種子島が全島的に開発され、また、大隅、薩摩の地も安定しますと、場所を移したと考えられます。移した行先は、今の西之表市の榕城中学校のあたりを中心(国庁)とする地域かと思われます。多歎国は、中心が南種子町から始まって、のちに西之表に移転した、と考えられます。その種子島の国府があったのは、正確に年数までわかっているのです。西暦702年から824年の間です。引き算をしますと、122年間です。この間、多歎国分寺もあったのです。ところが、全国60余州の中で、種子島だけが今だに国府および国分寺の在りかが確証されていないのです。島間の国府津城や大広の寺趾ももっとよく研究されなければなりません。

このようなわけで、南種子町は日本の奈良時代の島の政府機関が最初にあったと考えられる所であり、その誇り高い伝統が今だに根強く残っているという見方でできます。また、日本の稲の始まりもここであります。今や宇宙センターを知らない人は、日本中いないというくらいです。その宇宙センターは、たしかにすばらしいものです。しかし、それは外来の文化であり、先祖が育て上げ、自分たちが持ち伝えてきた文化ではありません。自分たちの伝統文化をほんとうによく見て、それをだいじにし、また活発化して、新しい今日の経済発展時代に適応するような方向に育てて行き

たいものです。

※本稿は1993年11月3日、南種子町において講演した時の録音稿で、一部文章体に改めた。南種子町の柳田長谷男町長さん、堂ノ脇大雄教育長さん、崎田宏社会教育課長さんには大変お世話になった。なお、この原稿は、拙著『フォークロアは生きている』(1994年、丸山学芸図書)にも「宇宙センターの町から日本文化を考える」というテーマで収録してあることを記しておく。本稿は南種子町に特に関係が深いので本報告書にも採用して、町内の方々に読んでいただき、ご批判をしていただきたいと思って入れた。

# 南種子町の方言

鹿児島大学教育学部助教授 崎 村 弘 文

## 1. はじめに

平成6年3月21日から22日にかけて、鹿児島県熊毛郡南種子町の3集落の方言につき聞き取り調査を行った。

調査方法は、共通語の単語と短文を方言に翻訳してもらうというかたちを取った。各集落の方言は微妙な差異を示しつつも、隣の屋久島などにおける集落方言間のそれよりはるかに小さな差異を示すにとどまるものとして存在している。共通語の影響はここでも顕在化しつつあるようであるが、なお老年層における方言の使用は活発なようである。今回は、共同調査への参加日程の関係で、必ずしも十分に南種子町各地の方言の様相を把握するには至らなかったが、それでもいくつかの興味深い実事を明らかにすることはできた。從来、南種子町方言の実態については、ほとんど報告を見ないので、この点得るところが有ったように思う。

結果的に見て、南種子町の方言は鹿児島市方言などとはかなり異なった様相を示し、また隣の屋久島の方言とも微妙に異なる点を持つ方言であると言える。以下の記述に当たっては、そのあたりが良く分かるようにと心がけた。

### 話者一覧

大川	大川 助藏	明治36年2月10日生
	大川 イ子	" 40年3月10日生 (上記の妻)
里	寺内 弥六	" 35年7月30日生
広田	徳永 ヒデ	" 33年3月15日生

## 2. 南種子町方言の発音

### (1) 音調 (いわゆるアクセント)

南種子町方言の音調は、ほぼ一型ないし無アクセントである。

南種子町でも南端に程近い里の方言には一定の調値が存し、次のような様相を示す。即ち、

○▷ ○○～○○▷ ○○○～○○○▷…

(○○) (○○○▷)

(○は音節。▷は助詞。傍線部を高く発音する。)

の如くである。

2音節名詞3・4・5類のうち網・池・色・馬・神・草・米・時・年・波・墓・山・夢・綿・恩・中・箸・針・汗 (アシエ)・影・声等は○○の調値を取るが、助詞が付いた場合、他の○○調値を取る語の場合と同様○○▷の調値を取る。3音節名詞4・5・6・7類のうち男 (オツコ)・鏡・しらが・助け・頼み・僕・はさみ・枕・ねずみ・畑 (ハッケ) 等は、助詞が付いた場合○○○▷の調値を取るようであるが、他の語の○○○▷の調値との間に韻律論的ないし音韻論的な区別は認められないようである。これらることは、南種子町方言が2型音調を持っていた頃の名残であろうが、現在は韻律論的ないし音韻論的意味を失っているものと考えられる。

大川と広田の方言には一般名詞の場合一定の調値は認められず、全般に平板な感じで発音される

傾向が有り、稀に語句の中央部が高めに発音されることが有るといった様相を示す。ただし、外来語彙の場合には或る程度の傾向性を持った調値が現れるようである。例えば、大川では、次の如くである。

ガス	インキ	ゾファー	ピアノ	ボット	ライヤ
ガム	ガメラ	ダンス	ピール	マスク	アイロン
ギー	ガラス	テープ	ビデオ	マット	アンチナ
ゴム	キャップ	テレビ	ール	マント	エンジン
シャツ	ケーキ	メント	ブラン	ミルク	オーバー
ダム	コーラ	トラン	ブリキ	ミンチ	オレンジ
バス	コップ	トマト	ベタル	メダル	カーテン
ハム	ゴリラ	ティフ	ベッド	メロン	ガソリン
パン	ジース	ニュース	バンキ	ヨット	キャバレー
ビル	スキー	ホット	マンチ	ライト	キューピー
ピン	ズック	バイブ	ホーイ	ラジオ	クリーム
ベル	シェーフ	バット	ホース	リュック	コービー
ベン	ワース	バチナ	ポート	レモン	サーカス
アート	ワーダ	バレー	ホール	ローブ	サービス
サイダー	スポーツ	ハンガチ	メートル	ウイスキー	
サイレン	スポンジ	ハンドル	モーター	エトシェトラ	
サンダル	シェーター	ビーチ	ライオン	オートバイ	
ジャングル	シェント	ビーマン	ライダー	オルゴール	
ジャンバー	ソケット	ビニール	リューマチ	カーバイト	
ジャンパー	タグジー	ビンポン	ルンペン	ガスタンク	
スーパー	チャンネル	フィルム	レコード	カレンダー	
スカート	テーブル	ブレーキ	ロケット	カンガルー	
スケート	デパート	ベンギン	ロボット	クリスマス	
スタイル	トンネル	ベンジン	アスマルト	ソーシェジ	
スブランド	ナイロン	ボイラー	アルコール	ダンブガード	
スティッキ	ナシバー	ボーチス	アンモニヤ	チャシビオン	
ストップ	ネクタイ	ボケット	イヤホーン	チューリップ	
スピード	ハイヤー	ヌーター	インディアン	ナボレオン	
ハーモニカ	オーテストラ	ビデオテープ			
バイオリン	カレーライス	プロパンガス			
ハイキング	カスタネット	リュックサック			
ハイヒール	コントロール	エスカレーター			
フライパン	サイクリング	オレンジジュース			
プレジエント	サラリーマン	クリームソーダ			
ボーリング	シューグリー	パトロールカー			
ボクシング	スチワーデス	ミルクコーヒー			
マーチット	シェールスマン	ルームクーラー			
モーニング	ダイナマイト	ガソリンスタンド			
ヨーグルト	チューインガム	クリスマスツリー			
レスリング	バイナップル	テーブレコーラー			
ワンピース	バレーボール	バスケットボール			
エレベーター	パンフレット				

この傾向性を見ると、全般に語句の2音節目から高くなり末尾から2音節目まで高い中高の調値を取るのが基本的で、末尾から2音節目に促音・撥音・単独の母音等が有るとその前まで高い調値を取る、また2音節の語句では末尾から2番目の音節が高いという規定によっているものようである。万メラ・ツファー・テレビ・トラン・メタル・レモン・ジャンバー・シャンプー・スーパー・シェーター・ネクタイ・ズーター・モーター・アルコール・アンモニヤ・エトセトラ・ダンブカーナ・ハニモニカ・エレベーター・オーテストラ・バスケットボール等若干の例外は有るが、このうちネクタイ・アンモニヤ・ハニモニカ・バスケットボール以外は共通語の語彙の調値との一致が見られ、その影響が考えられるところである。全体の傾向は上記の通りで動かないものと思われる。外来語彙のようななじみのやや薄い語彙については中高の調値で発音するのが南種子町方言の基本的なあり方と云うことができよう。そのあり方が里方言の一般名詞のそれと一致することは、南種子町方言が基本的に中高の調値を好むものであることを示唆するものと考えられ、興味深い。

## (2) その他の発音

### i 非薩隅的特徴

南種子町方言はいわゆる薩隅方言の一派であるが、本土の薩隅方言とは種々の点で趣を異にするものである。

まず、語中尾の例音、ウ列音が促音化（入声音化）したり撥音化したりすることがほとんど無い。首・耳・髪・指・釘・蜂・右・水・道・紙・旅・夏・絹・神・靴・月・時・波・息・海・帯・數・松・秋・形・はたち・鏡・頬み・はさみ・命・涙・ほうき・ねずみ・椿等いずれも、語形としては共通語のそれと同一であり、わずかに犬のみがインとなるに過ぎない。また、腰・脚・牛・星・虫・石・櫛・年・臼・箸・煤・印等語尾がシ・スの語もその部分が弱化してヒの如くなることが無い。これは、薩隅方言としては極めて異例に属することからである。しかし、一方、男をオツコ、畠をハツケとするようなタ行オ列音・ア列音の弱化ないし狭母音化が存したことを窺わせる例が有って、本土の薩隅方言とは若干方向を異にしながらも母音を粗末に発音する傾向性が無くはなかったことを示している。なお、アッケー ミエッタ ウミヂヤチッカラー（あそこに見えるのは海ではないかな）の如く、方向を示す名詞（丁寧にはアスコ）、動詞語尾、形容詞語中カ行音等は発話中で促音化することが珍しくない。（ただし、丁寧な発話ではアスキー ミユルトワ ウミヂヤチカカチの如く非促音形を見る。）

また、語中尾のリ・ル・レがイと変化するのは指示代名詞アレ・コレ・ソレ・ドレ等の例を除けば、ます認められない。尻・蟻・鳥・針・飼・春・踊り・鎖・煙・よだれ・流れ・光・左・薬等いずれもラ行音の部分は端正に共通語と同様のラ行音で発音される。これは、本土の薩隅方言と異なるのはもちろん、隣の屋久島の方言において非常に顕著なr音の脱落が認められるのも大きく異なる現象である。ただし、下ーカ アンター ミチヂヤロコ・タイチーの如く（どうもあれは道らしい助動詞語尾等は発話中ではイと変化することが珍しくない）。

さらに、長母音の短縮がほとんど生じず、また連母音の変化傾向が異なるのも本土の薩隅方言に見られるところと大きく趣を異にする。祖父・祖母はデー・バーであり、弟・妹はオ下ート・イモ（一）トである。甥・姪はウェーまたはイエー・ズー、夫はトブジョー、婿・嫁はモゴジー・ヨブジョー、沢山はオーコトまたはギョーザン、焼酎はショーチュー、相撲はスモー、昨日は平ニヨー、ほうきは不ーキ、牡牛はゴッテー、天井はデンジョー、会ったはズータ、思うはオモー、赤くてはアローシチー、高くてはタローシチー、～だろうは～ジャロー、～でございますは～レゴザリモースといった異合である。ai (ae) · ei · oi (oe) · ui の各複母音は a : e : o : i : の如く変化する。嬢はバー、貝は万ー、咲いているはサーチェラー、丁寧はテーーー、ここにはコティー (<kokoi < kokoi) ただし來いはコヨイ)、西瓜はシーケラ、水道(下水)はシードー、茶などが

ついであるはチーチェラーといった具合である。前マエ、声コエ等、その傾向に合致しないものもあるが、多くは以上の如くである。本土薩摩方言において、それらがe・e・e・iと変化することは、周知の通りである。

## ii 南薩的特徴

一方、南種子町方言には薩摩半島南部から屋久島へかけての諸方言に通ずる特徴も認められる。まず、ガ行鼻濁音が存する。語中尾のガ行音は、血が出たチカ<sup>タ</sup> チエタ、手が痛いチカ<sup>タ</sup> イダカ、釘キ<sup>タ</sup>、この川ぐらい泳ぎ渡れコ<sup>タ</sup> カリク<sup>タ</sup>ライ オヨイヂエ ワタランバイ、影カ<sup>タ</sup>、どうもあれは海らしい下カ<sup>タ</sup> アンター ウミジャロ<sup>タ</sup> ダンローの如く、鼻濁音となる。聞こえからすると屋久島方言等のそれよりも鼻音の傾向が弱い如くであるが、若年層でもその存在についての意識は明確なようである。

また、て・でが語彙的にではあるが口蓋化してチ・ヂとなる現象が認められる。今回の調査では、広田方言においてその傾向が最も顕著であり、手・手のひらがチ・ヂヒラとして認められた（他の2地点ではテ・テノヒラの如し）。父の云い方については、各地点でテヂとともにチツヂーという形が現れ、口蓋化形の存したことが確認できた。助詞のて・では、そのままのこともあり口蓋化形で現れる事もありゆれているようであるが、~ているが~チャルという形で実現されることがほとんどである（時に鹿児島風に~チョルとなることも有る）のは南種子町方言の特色を示すものとして興味深い。

さらに、せ・せっか<sup>ハ</sup>がほぼ例外無くシエ・ジェとして実現されるのは加世田市方言等の場合に比べても一層顕著である。背中シェナ万、風万ジエ、汗アシエ、道で先生に会ったミヂデ シエンシエニ イキオータ、絵を描くだけ金がかかるエオ カタシコ ジエニ万<sup>タ</sup> イル、仕事をしないシコ<sup>タ</sup> 下オ ジエンといった具合である。

次に、屋久島或は瓶島の方言等で聞かれる2音節以上の語の短音長呼現象の名残と見られる例が、わずかながら見出された。虹三<sup>タ</sup>ジ、蛇ヘニ<sup>タ</sup>、はだしハラ<sup>タ</sup>、またはハーラ<sup>タ</sup>である。椿カ<sup>タ</sup>ターシも一見その例の如くであるが、これはカタイシのai複母音がa:に変化したと見るべきものようである。

また、屋久島方言で聞かれるると同様のダ行音のラ行音化現象も認められた。咽ノロ、袖ソレ、踊りオリ、よだれヨ<sup>タ</sup>レ、涙<sup>タ</sup>ミラ、このあいだコナイヲの如くであるが、それらにはしばしばダ行音形も同時に認められ、次第に共通語の影響が及んで規則性が失われつつあるものようである。なお、肘ビジ、水ミズ、ねずみネズミ、蔓カズラ等がラ行音化しないのは四つ仮名の混同が進んで、サ行音として認識・発音されているためと考えられる。

そのほか、南薩諸方言に限らない現象であるが、シの後のラ行音がタ行音に変わる現象も認められた。後<sup>タ</sup>シト、柱ハシタ、かしらカシタ、知らないシタ<sup>タ</sup>の如くであるが、しらかはシラカ<sup>タ</sup>であってシタカ<sup>タ</sup>とはならない。これは、共通語の影響によると考えられる。

また、同様に、ナ行連声現象の名残りも認められた。シテンノ ウケル（試験を受ける）、シテンノ ウケットキワ ヨージンノ ジックル（試験を受ける時は用心して受ける）の如くである。

## 3. 南種子町方言の語彙

### (1) 身体語彙

頭アタマ・ビンタ 頬カズ・ツラ 首クビ ひたいムゲン・ミゲン あごアゴ 眼メ 鼻ハナ  
口万チ 耳ミミ 髪ビンタンケ・カミ 眉マユケ<sup>タ</sup>・マエ 齧クヂヒケ<sup>タ</sup>・エケ<sup>タ</sup> 齧ハ、舌フ  
タ・ジタ 咽ノロ・アド 肩万タ 胸ムネ 腹ハラ 乳チチ・チッヂー へそヘン 背シエナ万  
腰ゴシ 尻ブリ・シーアブタ 腕ラ<sup>タ</sup> 肘エジ・ヒジンコ<sup>タ</sup> 手テ・チ<sup>タ</sup> 手のひらテノヒラ・チ

エフヒラ 脚デシ 腿ヒザ・モモ 膝ヒザ（なお、大川で正座のことをツンブシズワリと云うとの回答が有り、古くはツンブシとも云ったかと思われる）踵カガト・アシノカド 指エビ 親指オオユビ・オヤユビ 人指し指ヒトサシユビ 中指ナカユビ 薬指クスリユビ 小指コエビ 爪ツメ

### (2) 親族語彙

親オヤ 小コ下モ・コ 孫マコ。 祖父ジー 祖母バー 父テテ・チエッチエー・トト（やや新）母ハヂ・アッパー・カカ（やや新）兄アイヤー・アイジヨー 姉アン不ー・ア不 弟オ不ト妹イモ（一）ト おじオジー おばばー 蝶ウエー・イエー 姪メー いとこ下コ 夫オヤジ・オット・トフジョー・オジー 妻ウチ万タ・バギー 婿モコ・モラジョー 嫁ヨメ・ヨヅジョー むすこムスコ むすめムヌメ

### (3) 一般語彙（珍しい語形のもののみ挙げる）

蠍アガリ・アリ 庭ニワ・ホカ 蝶ハーベ 虹ニージ 姬コケ 池イケ・フチ 箸ハシ・テモト泥ドロ・ロロ・ベッター 夜ヨリ・ヨル 男オツコ かんな万ナ 昨日ギニヨー・キフー 大人ギシェ 蛙バッター（大川）・ヒヨッコー（里）・ヒヨッギー（広田）裸ハラカ・バンカ はだしハラシー・ハーラシー みみずミジヨー 椿ツバキ・カダーシ 姫ハツケ 牛牛コッター・コッテーウシ・オッチャ（一）着物キモノ・キモシ・ベージョー（良いもの）たばこタバコ・タブコ 牛牛メッチャ・メッチャー・オテンウシ・メラシ あなたオマエ・アンタ あなたたちオマエタチ・アンタタチ おまえはワゴー おまえたちワタクチ わたしゾイ わたしたちはドマー・ワタイロマー 井戸イロ・ツリー（つるべ井戸）太陽ギヒサマ・オテンント（一）サマ 屋根イエンツラ 梓マーシ・マラシ・エッヂューマージ 老人トジナモン・トショリ 若者ワッカモンこのあいだコナイラ・コブマエ

## 4. 南種子町方言の文法（広田方言を中心に記述する）

### (1) 動詞

#### ① 行く

行く

イガ

私はきのう役場へ行った。

オラー キニヨーワ ヤクバー イダ（イドー）

町へ行って買い物をした。

マチー イダチエ カーモノオ ジタ（シカイドー）

町へ行く時はバスに乗る。

マチー イクトギワ バスニ ノル

あんたは町へ行くか。

オマヤ（ワゴー） マチニヤ イッカ

行くよ。

イグヨ

行くぞ。

イガー（ヨ）

行きます。

イキモーサー（イタデキモーサー）

行きたい。

イゴーコ・タッ

行くだろう。

イダモネー（イガジャロー、イッカモシレンチエ）

行ける。

イギカ・ナル

あの人は役場へ行くのか。

アン ヒ下ワ ヤクハイ イクトヤンロー

行くらしい。

イガコ・タラー

行きそうだ。

イガコ・タンロー

行くそうだ。

イガチューロー

行かせる。

イガスル

行かれる。(受け身)	イカルル
行かない。	イカン (イカンナエ)
行け。	イケ
お行きになる。	イカットー (イカレモーシトー)
②書く	
書く。	万ク
私はきのう手紙を書いた。	オラー キニヨー テカシオ カイトー (カータ)
手紙を書いて出しに行った。	テカミオ 万ーチェ クジイヲ (ダーチェチエートー)
手紙を書く時はペンで書く。	テカミオ カクトキヤ ベンデ 万ク
あんたは手紙を書くか。	ワゴー テカミオ 万クカ
書くよ。	万クヨ
書くぞ。	万ク下
書きます。	カギモース
書きたい。	カゴーコ°タル
書くだろう。	万クカモ (カッカモシレン)
書ける。	カギカ°ナシロー
あの人は手紙を書くのか。	アン ヒ下ワ テカミオ カクトヤンローカイ
書くらしい。	万クゴ°タル
書きそうだ。	万クゴ°タル
書くそうだ。	万クチユーロー
書かせる。	カガスル
書かれる (受け身)	カガル
書かない。	カガン (カガンナエ)
書け。	万ケ
お書きになった。	カガレモーシトー
③その他	
着る	
着物を着る。	キモノ
着た。	キタ
着て顔を洗った。	キテ カオオ アロータ
着る時は急いで着る。	キットキヤ シエーチェ キル
着たい。	キローコ°タイ
着ろ。	キレ
着ない。	キラン
見る	
テレビを見る。	テレビオ ミル
見た。	ミタ (ミ下ー)
見て笑った。	ミテ ワロータ
見る時は静かに見る。	ミルトキヤ ダマッチエ ミル
見たい。	ミローコ°タル
見ろ。	ミレ
見ない。	ミラン
浴びる	

湯を浴びる。	エオ アビル
浴びた。	アビ(ッ)タ (アビットー)
浴びて着替えをした。	アビッヂェ キガエオ シダ
浴びる時はゆっくり浴びる。	アビットキャ ユックリ アビル
浴びたい。	アビローコ <sup>°</sup> タイ
浴びろ。	アビレ
浴びない。	アビラン

### 起きる

朝早くから起きる。	テサ ハヨーカラ オギル
7時に起きた。	シヂイ オキ(ッ)タ (オキットー)
起きて顔を洗った。	オギッヂェ ツラオ アロータ
起きる時は急いで起きる。	オギットキャ イシェーデ (ハタラーチェ) オギル
早く起きたい。	ハヨーオギローコ <sup>°</sup> タル
早く起きろ。	ハヨー オギレ
なかなか起きない。	ナカナカ オギ(ラ)ジ

### 蹴る

石を蹴る。	イシオ ケル
蹴った。	ケッタ
蹴って遠くへ飛ばした。	ケッヂェ トーカトコイザナ トマータ (ケトマータ)
蹴る時は靴で蹴る。	ケットキャ クツデ ケル
蹴りたい。	ケローコ <sup>°</sup> タル
蹴ろ。	ケレ
蹴らない。	ケラン

### 入れる

ふところに手を入れる。	フトコロイ テオ (チエオ) イルル
入れた。	イレタ
入れてあたためた。	イレチエ ヌクメタ
入れる時は寒い時だ。	イルルトキャ ヒヤカ トキヂヤ
入れたい。	イレヨーコ <sup>°</sup> タル (イレタカ)
入れろ。	イレー (イレレ)
入れない。	イレン

### 受ける

試験を受ける。	シケンノ ウケル
受けた。	ウケタ
受けて帰って来た。	ウケチエ モドッテキタ
受ける時は用心して受ける。	ウケットキワ ヨージンノ ジッ (タマシーオ イレチエ) ウケル
受けたい。	ウケヨーコ <sup>°</sup> タル (ウケタカ)
受けろ。	ウケー (ウケレ, ウケロ)
受けない。	ウケン

### 為る

仕事を為る。	シゴ <sup>°</sup> 下オ スル
為た。	シタ (シト一)
為てひと休みした。	シチエ ヨゴータ

為る時はひとりです。	<u>ス</u> <u>ット</u> <u>キ</u> <u>ヤ</u> ヒ <u>ト</u> <u>リ</u> <u>デ</u> <u>スル</u>
為たい。	<u>シ</u> <u>ョ</u> <u>コ</u> <u>°</u> <u>タ</u> <u>イ</u> ( <u>シ</u> <u>ダ</u> <u>カ</u> )
為ろ。	<u>シ</u> <u>ェ</u> ( <u>シェ</u> <u>ロ</u> )
為ない。	<u>シ</u> <u>ェ</u> <u>ン</u>
来る	
私はあしたもここへ来る。	<u>オ</u> <u>ラ</u> <u>ー</u> <u>ア</u> <u>シ</u> <u>タ</u> <u>モ</u> <u>コ</u> <u>テ</u> <u>ー</u> <u>ク</u> <u>ル</u>
きのうここへ来た。	<u>キ</u> <u>ニ</u> <u>ヨ</u> <u>ー</u> <u>コ</u> <u>テ</u> <u>ー</u> <u>キ</u> <u>タ</u> ( <u>キ</u> <u>下</u> <u>一</u> )
来て仕事を為た。	<u>キ</u> <u>テ</u> <u>シ</u> <u>ョ</u> <u>ト</u> <u>オ</u> <u>シ</u> <u>タ</u> ( <u>シ</u> <u>下</u> <u>一</u> )
ここへ来る時はバスで来る。	<u>コ</u> <u>テ</u> <u>ー</u> <u>ク</u> <u>ッ</u> <u>ト</u> <u>キ</u> <u>ワ</u> <u>バ</u> <u>ス</u> <u>デ</u> <u>ク</u> <u>ル</u>
あしたもここへ来たい。	<u>ア</u> <u>シ</u> <u>タ</u> <u>モ</u> <u>コ</u> <u>テ</u> <u>ー</u> <u>コ</u> <u>ー</u> <u>ゴ</u> <u>°</u> <u>タ</u> <u>ライ</u> ( <u>キ</u> <u>ダ</u> <u>コ</u> <u>ー</u> )
ここへ來い。	<u>コ</u> <u>テ</u> <u>ー</u> <u>コ</u> <u>イ</u> <u>ヨ</u>
私はあしたここへ来ない。	<u>オ</u> <u>ラ</u> <u>ー</u> <u>ア</u> <u>シ</u> <u>タ</u> <u>ー</u> <u>コ</u> <u>テ</u> <u>ー</u> <u>ゴ</u> <u>ン</u>
死ぬ	
死ぬ。	<u>シ</u> <u>ヌ</u>
死んだ。	<u>シ</u> <u>ン</u> <u>ダ</u>
虎は死んで皮を残す。	<u>ト</u> <u>ラ</u> <u>ワ</u> <u>ジ</u> <u>ン</u> <u>ヂ</u> <u>エ</u> <u>カ</u> <u>リ</u> <u>オ</u> <u>ノ</u> <u>コ</u> <u>ス</u>
死ぬ時のことなんか考えない。	<u>シ</u> <u>ヌ</u> <u>ト</u> <u>キ</u> <u>フ</u> <u>コ</u> <u>ト</u> <u>ナ</u> <u>ン</u> <u>ド</u> <u>カ</u> <u>ン</u> <u>ガ</u> <u>°</u> <u>エン</u>
死にたいなんて言うな。	<u>シ</u> <u>ヌ</u> <u>ゴ</u> <u>°</u> <u>タ</u> <u>ッ</u> <u>ト</u> ( <u>シ</u> <u>ニ</u> <u>ヨ</u> <u>ゴ</u> <u>°</u> <u>タ</u> <u>イ</u> ) <u>ミ</u> <u>ー</u> <u>ナ</u>
死ね。	<u>ジ</u> <u>ネ</u>
死がない。	<u>シ</u> <u>チ</u> <u>ン</u> ( <u>シ</u> <u>チ</u> <u>ン</u> <u>ニ</u> <u>ヨ</u> , <u>シ</u> <u>不</u> <u>ン</u> <u>ニ</u> <u>ヨ</u> )
居る	
私は家に居る。	<u>オ</u> <u>ラ</u> <u>ー</u> <u>イ</u> <u>エ</u> <u>ー</u> <u>オ</u> <u>ル</u> ( <u>オ</u> <u>ラ</u> <u>ー</u> <u>ヨ</u> )
きのう家に居た。	<u>キ</u> <u>ニ</u> <u>ヨ</u> <u>ー</u> <u>イ</u> <u>エ</u> <u>ー</u> <u>オ</u> <u>ッ</u> <u>タ</u>
居て仕事をしていた。	<u>オ</u> <u>ッ</u> <u>テ</u> <u>シ</u> <u>ョ</u> <u>ト</u> <u>オ</u> <u>シ</u> <u>チ</u> <u>ョ</u> <u>ッ</u> <u>タ</u>
家に居る時はよく茶を飲む。	<u>イ</u> <u>エ</u> <u>ー</u> <u>オ</u> <u>ッ</u> <u>ト</u> <u>キ</u> <u>ヤ</u> <u>ミ</u> <u>ー</u> <u>チャ</u> <u>リ</u> <u>オ</u> <u>ノ</u> <u>ム</u>
居たい。	<u>オ</u> <u>ロ</u> <u>ー</u> <u>ゴ</u> <u>°</u> <u>タ</u> <u>イ</u>
家に居ろ。	<u>イ</u> <u>エ</u> <u>ー</u> <u>オ</u> <u>レ</u>
私はあした家に居ない。	<u>オ</u> <u>ラ</u> <u>ー</u> <u>ア</u> <u>シ</u> <u>タ</u> <u>ー</u> <u>イ</u> <u>エ</u> <u>ニ</u> <u>オ</u> <u>ラ</u> <u>ン</u>
有る	
ここに茶碗が有る。	<u>コ</u> <u>テ</u> <u>ー</u> <u>チャ</u> <u>リ</u> <u>ン</u> <u>カ</u> * <u>アル</u> ( <u>ア</u> <u>ラ</u> <u>ー</u> <u>エ</u> )
有った。	<u>ア</u> <u>ッ</u> <u>タ</u>
有って茶がついである。	<u>ア</u> <u>ッ</u> <u>テ</u> <u>チャ</u> <u>リ</u> <u>オ</u> <u>チ</u> <u>ー</u> <u>ジ</u> <u>エ</u> <u>ラ</u> <u>ー</u>
有る時は茶を飲んで良い。	<u>ア</u> <u>ッ</u> <u>ト</u> <u>キ</u> <u>ヤ</u> <u>チャ</u> <u>リ</u> <u>オ</u> <u>ノ</u> <u>ー</u> <u>ン</u> <u>テ</u> <u>ヨ</u> <u>万</u> ( <u>ヨ</u> <u>コ</u> <u>ー</u> )
なお、可能表現については、 <u>フ</u> <u>不</u> <u>サイ</u> <u>カ</u> <u>エ</u> <u>モ</u> <u>オ</u> <u>ザ</u> <u>ン</u> ( <u>舟</u> <u>さえ</u> <u>こ</u> <u>げ</u> <u>ない</u> )、 <u>ナ</u> <u>ベ</u> <u>サイ</u> <u>カ</u> <u>エ</u> <u>モ</u> <u>モ</u> <u>タ</u> <u>ン</u> ( <u>鍋</u> <u>さえ</u> <u>持</u> <u>て</u> <u>ない</u> ) の如き表現が有って注意を引く。	

## (2) 形容詞

### ①赤い

うさぎの目は赤い。	<u>ウ</u> <u>サ</u> <u>ギ</u> <u>ノ</u> <u>メ</u> <u>フ</u> <u>ア</u> <u>ッ</u> <u>カ</u> ( <u>ア</u> <u>ッ</u> <u>カ</u> <u>エ</u> , <u>ア</u> <u>ッ</u> <u>ゴ</u> <u>ー</u> )
赤かった。	<u>ア</u> <u>ッ</u> <u>カ</u> <u>ッ</u> <u>タ</u>
赤くて丸かった。	<u>ア</u> <u>ゴ</u> <u>ー</u> <u>シ</u> <u>ュ</u> <u>マ</u> <u>ル</u> <u>カ</u> <u>ッ</u> <u>タ</u> ( <u>マ</u> <u>ル</u> <u>カ</u> <u>ッ</u> <u>ト</u> <u>ー</u> <u>チ</u> )
赤いか。	<u>ア</u> <u>ッ</u> <u>カ</u> <u>カ</u>
赤いぞ。	<u>ア</u> <u>ッ</u> <u>カ</u> <u>ド</u> <u>ー</u>

赤いです。	アコゴザリモーサーヨ
赤かろう。	アッカロー (アッカンローカー)
赤いらしい。	アッカコ <sup>タ</sup> ル (アッカコ <sup>タ</sup> ラーヨ)
赤いそうだ。	アッカチューロー
赤くない。	アコーナ万 (アコーナゴーヨ)

②高い

あのは背が高い。	アブ ヒ下ワ タケカ <sup>タ</sup> 方方
高かった。	タッカッタ
高くてやせていた。	タコーシュ ヤシエチェック
高いか。	タッカカ
高いぞ。	タッカド
高いです。	タコーゴザリモース
高かろう。	タッカロー (タッカンローヨ)
高いらしい。	タッカコ <sup>タ</sup> ル
高いそうだ。	タッカチューロー
高くない。	タコーナ万 (タコーナゴー)

③その他

良い

天気が良い。	ヒヨリカ <sup>タ</sup> ヨ万
良かった。	ヨカッタ
良くて気分が良い。	ヨーシチエ キブンカ <sup>タ</sup> ヨ万
良かろう。	ヨカロー (ヨカンローエ)
良くない。	ヨーナ万

良い天気。 ヨ万 ヒヨリ

重い

荷物が重い。	ニモツカ <sup>タ</sup> オモカ (オムカ, オヲカ)
重かった。	オムカッタ (オヲカッタ)
重くてたびれた。	オモーテ (オブシチエ) グレター
重かろう。	オムカンドー (オブカンロー)
重くない。	オムーナ万 (オヲーナゴーヨ)
重い荷物。	オムカ (オヲカ) ニモツ

長い

髪が長い。	アタマカ <sup>タ</sup> (カミカ <sup>タ</sup> ) ナンカ
長かった。	ナンカッタ
長くてきれいだった。	ナゴーシチエ キレーカ
長かろう。	ナンカンロー
長くない。	ナゴーナ万
長い髪。	ナンカ カミ

遠い

町まで遠い。	マチマデ トーカ
遠かった。	トーカッタ
遠くてたびれた。	トージチエ グレタ
遠かろう。	トーガンドー (トーガンロー)

遠くない。 トニナガ

遠い町。 ナカマチ

近い

町まで近い。 マチマデ チカガ

近かった。 チカラカッタ

近くで楽だった。 チコーシチエ ラクジャッタ

近かろう。 チカランドー (チカランロー)

近くない。 チコーナガ (チコーナゴーヨ)

近い町。 チカガ マチ

イ語尾系の形容詞は共通語の影響によるものとしてしか現れない点、注目を要する。

### (3) 助詞・助動詞

名詞に接続する助詞・助動詞の例を若干挙げる。

①川+~

川に何か浮かんでいる。 カワニ チンカ ライチュル (ウイチエラアラ)

川で子どもが泳いでいる。 カワニ コドモガ オエージュラー

あの川は幅が広い。 アブ カワワ ハバカ ヒロガ

川と海が見える。 カワト ウミカ ミユル (ミユラアラ)

川か海かが見える。 カワカ ウミカガ ミユル

あれは川か。 アンダ カワカ

川と思う。 カワ (ジャ) ト オモー

あれは川だ。 アンダ カワジャ (カワジャラハラ)

川です。 カワデゴザリモース

川だろう。 カワジャロー (カワジャンロー)

どうもあれは川らしい。 ナーモ アレワ カワノコタル

川から岸へ上がる。 カワカラ キジニ ノボル

川しか見えない。 カワシカ ミエジ (ミエジナアラ)

この川さえ泳ぎ渡れないのか。 コブ カワサエ オヨイジ ワタリヤナラントガ

川なんか簡単に泳ぎ渡れる。 カワナンカ モヤスー オヨギワタラー

川ぐらいい泳ぎ渡れ。 カワク ライ オヨイジエ ワタランバイ

川ばかり見ている。 カワバカリ ミチュル

あっちの川はこっちの川より幅が広い。 アッチノ カワワ コッチノ カワヨリ ハバカ ヒロガ

この川こそ島で一番大きな川だ。 コブ カワコソ シマデ イチバン フトカ カワジャチー

②海+~

海に何か浮かんでいる。 ウミニ ナミカ ウイチュル

海で魚を見る。 ウミレ イオオ トル

ここは海はきれいだ。 ココノ ウミワ 平レージャ

海と川が見える。 ウミト カワカ ミユル

海か川かが見える。 ウミカ カワカガ ミユル

あそこに見えるのは海か。 アッケー ミユッタ ウミカ (ウミジャチッカラー)

海と思う。 ウミト オモー

あれは海だ。 アンダ モミジヤ

海です。 ウミデゴザリモース

海だろう。	ウミジャロー
どうもあれは海らしい。	下ーモ アレハ ウミノコ <sup>タ</sup> ル (ウミジャロコ <sup>ダ</sup> ンロー)
海から浜へ上がる。	ウミカラ ハマサ <sup>フ</sup> アガ <sup>ル</sup>
海しか見えない。	ウミシカ ミエ <sup>フ</sup>
海さえ見たことないのか。	ウミサイカ ミダコ下カ <sup>フ</sup> ドカト万
海なんか見たことない。	ウミナンド ミダコ下カ <sup>フ</sup> アイモン万
海ぐらい見ておけ。	ウミドマ ミチエ <sup>フ</sup> (ミチヨ <sup>フ</sup> )
海ばかり見ている。	ウミバカリ ミチエル
海より広いものはない。	ウミヨリ ヒロ万モブワ ナ万
海こそ一番広いものだ。	ウミコソ イズバン ヒロカ モンジャ

## 5.まとめ

南種子町の方言は、いわゆる薩隅方言の中に在って非薩隅的要素の色濃い（どちらかと云えば肥筑方言的色彩を帯びた）方言であると云える。それは瓶島から南薩・屋久島等へつながる薩隅周縁部的性格を示すものと表現することも可能かもしれない。中世から近世にかけて政治的・文化的に一定の独自性を保持して来た種子島の立場が、その方言にもそうした傾向性を与え、鹿児島市方言や共通語の強い影響力に抗して存立する基盤となったものであろう。そのことは方言史・国語史研究上実に貴重なことと言わなければならない。それを知り得た点で今回の調査は大変有意義な経験であった。この機会を御与え下さった鹿児島大学比較民俗学研究室ならびに地元教育委員会・話者の皆さんに驚く御礼申し上げる次第である。

# 農具 I (稻作・畑作・農耕儀礼・民具解説)

南野 晴美

## 1. はじめに

三月の中旬の南種子町は、ちょうどオーギ (サトウキビ) の収穫時期と重なって忙しい。同じく三月の中旬から下旬にかけて、水田地帯の広がる下中や基永では田植えがはじまる。整然と区画された畦と水を張った田圃は素晴らしい景観だった。ときどき畑地に、強い風から作物を守るために防風林が見える。気候も植生も本土とは違っているのだと強く思った。

## 2. 概観

南種子町では、下中・基永の両大字が特に広い稻作地帯として注目できる。基永の宝満神社では、お田植え祭りが新暦の四月に行われ、舟田と呼ばれる天水田では、社人夫婦が赤米の舞を舞う。この、赤米の舞はホイトウ (足耕) の名残であるといわれている。ホイトウは、明治19年、基永で馬耕が導入され、明治30年代に全島に本土式馬耕が普及するにつれ廃止された。現在では、ホイトウはもちろん、馬耕を実際に行っているという話は聞けなくなっている。耕耘機の導入が、昭和30年～昭和40年初めころからはじまったというが、一般に普及したのはもっと後になつたのではないだろうか。ともあれ、農村における後継者不足の問題と労力を省く機械化の波はここ南種子町の農業事情にも認められている事である。



お田の森。すぐ側に舟田がある。



お田の森の御神体

### (1) 稲作について

南種子では、3月の下旬から田植えをはじめて7月になると収穫をする早期米が主流である。これは、夏の台風を避ける意味がある。田圃では、稲→麦の2毛作をするところはほとんどなく、1年を通して稲のみを田圃に植えるという所が多い。山肌や谷間を開墾して、山の湧き水を利用した乾田 (ヒア



美しい棚田の景観。(西之・下西目)

ケタ→日焼け田・干分け田) や湿田が各地に散在しているのもこの南種子の特徴である。水資源にあまり恵まれていない所では、干ばつに備えて溜め池を設けているところもある(※茎永の上里)。近年、減反政策により、米からさとうきびに切り替えた農家も多く、稻作をとりまく状況は決して優しいものではない。

#### ○稲作過程

昭和初期から耕耘機が導入されるまでの時期に行われた、馬耕による田圃の耕耘から収穫・保存までの手順を次ぎに説明したいと思う。

①田圃にて水苗を栽培する。3週間もすれば苗になる。今は、ハウス栽培による箱苗が普及し、こちらは18日くらいで稻が成長する。

②田圃の耕耘…オコシ(草)を農耕馬にひかせる。秋、稻の収穫の後すぐオコシをかける。この1番草の次ぎは、2月ごろの2番かえしがあり、田植えの直前になる3月にはモーガ(馬鍼)をかける。代かきのことを代アケ(シロアケ)という。1回目の草はアラジロ、2回目がナカジロ、最後、馬鍼を使った代かきをシロアケと呼ぶ。オコシのかけ方は田圃に歟をいくつも作りながら往復し、それから歟のマクラの部分つまり田圃の両側端を掠く(掠ズキ)。ヒラズキ(平ズキ)を昔やっていたという伝承もあったが(西之・下西目)、ほとんどのところでは歟ズキをやっていたらしい。ヒアケダの馬耕は、田植えの直前に行われる。そうないと、すぐ田圃に水気がなくなり固くなってしまい田植えができなくなるからだ。

綠肥としては、秋の田圃にれんげ草をまいていた。又、波打ち際にある藻をひろって田圃にもって行った(西海・牛野)例が挙げられる。馬の通らない所の耕耘には、田下駄を使ってカシキを土に踏み込み床を作る。仕上げにエブリ(枠)でならす。



エブリズキをしている女性。(郡原)

③田植え…田植え網を使って行う正条植えである。イー(結)による共同作業になる。イーは、田植えの時にオーギ切り、砂糖すめの時にも組まれる。

④除草・防虫…除草は雁爪打ちから、田車による除草にかわる。雁爪打ちは普通片手打ちでやるが、熟練者になると両手打ちでやる者もいた。防虫は、竹筒に軽油をいれて田圃にたらしていた。メイチュウという虫の被害に悩まされた。稻の切り株の土表面から1寸くらいのところに虫がいるため株切りをしたこともある。

⑤収穫…稻刈りには草きり鎌を使う。終戦前には鋸鎌がはやった。鋸鎌はコンパクトなサイズで、内側の刃の方を横に引いて使う。生の稻を刈る時は切れ味がよかったが、稻刈りにしか使えなかったのでその内廻れていった。鎌は、「加世田鎌」を使用していた。

⑥脱穀・調整…稻を1週間掛け干して、田圃でカナクダ(千齒)による脱穀を行う。カナクダの後、足踏み脱穀機による脱穀が普及する。そぎ落とした粉は扇風機をかけることで粉殻を飛ばして振り分ける。扇風機が流行る前は、調整具には目のあらいモミ通しや目の細かいコメ通しを使って、風の吹く日、クズが飛ぶように箕でひる。これらの丸口箕は、内地から行商人が売りにきたものを使っていた。

⑦保存…昔はクブキ(巾着型の兜)に入れて屋根裏に保存していた。クチワラを入れて耳をしめて縄でくくる。

⑧精米…石臼で玄米にして、さらに木臼で

白米になるまでつく。川のあるところではサコンタロウという水車で精米をしていた。

## (2) 烟作について

南種子では、先に述べたように、広大な水田地帯が地域により偏って存在するため、烟作により多くの比重がかけられる場合があるのも少なくない。烟作では、有力な換金作物として、オーギ(さとうきび)又はカライモを日々的に栽培している。オーギの砂糖すめは村ごとに行われ、圧搾機を馬にひかせていたが、今では中種子町に精糖工場があるため昔ながらの砂糖すめの光景は見られなくなった。砂糖すめの技術に関する伝承は、まだはっきり残っているので詳しく話を伺うことができた。

### ○オーギについて

オーギの栽培・収穫は12月から5月ころまで続く。3月ころは、成育したオーギの先端や葉を切る作業をする。切断したオーギは節々から根をはやし、土にさすだけで成長する。オーギは2年でさしかえを行うので、1年目は根っこは抜かないでおく。



オーギの葉を落とす作業をしている。差し変えるためのオーギを手慣れた仕草で短く切り揃える（西之下西目）

オーギの収穫が終わると砂糖すめにとりかかる。薬莢きの小屋がありそこで砂糖すめを行う。圧搾機は後に原動機つきに変わったが、それ以前は馬にひかせ、オーギからエキス(汁)を絞り取る。朝の2時・3時ころから夕方まで休むことなく圧搾機は作動

し続ける。馬が圧搾機を引いているその間、砂糖すめ時に必要な薪を準備する。

砂糖すめは火加減の調整に勘と技術を要する。汁が煮詰まってアメのようにドロドロになったら、火を弱くして釜熱で温度具合を計る。砂糖たきの人のことをタッコドンと呼び、年配の男性に任される。煮えてドロドロになった砂糖あめを、大きな砂糖鍋に移し、タッコドンが先にシャモジのついた棒でそれが冷えるまでまぜる。そして砂糖かんやタルに詰められ、固まると大工の使うノミで打ち碎かれる。1斗カンの2つ分が農家の1年分の砂糖になる。小さく刻んで溶かして調味料として使う。このようにして作られた黒砂糖は、体の健康のためにも良いといわれている。

### ○麦

田圃に麦を植える2毛作の形をとっているところは少なく、麦植えは畑地で行う。中引きなどの中耕道具はほとんど今回の調査では見られなかった。かわりに平鋤で耕耘していたらしい。畝を作って、それを崩して平らにし、堆肥と種子を混ぜ合わせたものをソーケ(笊)に入れ、ソーケを脇に抱えて撒く。

また、味噌は作っていたが、醤油はつくっていなかったという話を2カ所(牛野・下西目)で聞いた。醤油をこすための道具なども、農家では見つけることができなかつた。麦ごはんを常食にしていた(島間)という伝承もあり、麦作が畑地でどのくらいの比重を占めていたのかは農耕儀礼との関係から注目する必要がある。

### ○ソマ(蕎麥)

かつてソマを作っていたという話は各地できかれた。(島間・下西目・牛野・前之原)今はほとんど栽培されていない。

### ○野稻(陸稻)

田圃の所有面積の少ない家では、畑に野稻を植える。西海の下立石は海沿いにある漁村で、田圃の面積が極端に狭い。ここでは、山の谷間に開墾して耕地にしている。夫婦2人で戦後開墾して1町ほどの畑に野稻を

植えたという話もあった。

○カライモ（甘藷）

5月20日ごろに植えて、10月に収穫する。サトウキビと同様、貴重な換金作物であった。現在も多く栽培されている。

○里芋

①ハス芋…種芋ではなく、カラ（茎部）を食す。味が辛い。大根のかわりに煮しめに使ったりする。

②水芋…水気のある所に成育する芋。

③クロトウ…荒地（アラジ）といって開墾したばかりの耕地に植える。根元の黒い芋。大きい芋。

④アカトウ…根元が薄い赤色。

⑤シロトウ…盆に食べる早生芋。白い芋。

⑥のアカトウとシロトウは10月から11月ごろとれる芋である。

○山芋

琉球山芋がある。ヤマンクワ（山椒）やキンツ、または串を使って山芋を掘った。山芋は、11~12月が掘り頃である。

○脱穀について

稲・麦・粟・ソマ等の脱穀にはメグリ棒を使う。カシの木の皮を焼いて折り曲げ、それを竹の先端部にくくり付けて、勢いよく上から振り落とす。この道具を使わないとときは、台の上に振り落とし叩き落としたりしていた。メグリ棒をツツメン棒という所もあった。（上中・焼野）ここでは竹に丸太をくくりつけていたという。

農耕儀礼

茎永（上里）

上里は標高の高いところにある村落で、近年では、新上里村落が下の方に形成されている。村落の水は、掘り当てた井戸が近くにあり、水神と刻まれた石碑があるという。正月には、モチとダイダイをお供えする。

○秋まつり…米の収穫祭。社人爺が管理するヒジリ神社には豊受の神が祀られている。そこに踊りを奉納する。この日は、大きなお椀にごはんをついでたらしく食べていた。

○春まつり…田植え前に、豊作であつたら秋に大踊り、筑前踊りなどを村落民が総出で踊りますといつて祈り、「ぜひ、米がたくさん取れますように」と願立てをする。

○鍵入れの日…伝承なし

○正月行事について

・水迎…元日の朝は、一家の主が初水をいただいてくる。

・臼起こし…2日に行う。臼がないので、もうしなくなった行事。

・福祭文…7日夕方から、生年や子供が祭文を唱えながら、各家々をまわる。不幸のあった家には祭文を言いにこない。今年はこの村落でも、この行事を行った。子供には大きなモチとお金をあげる。

・蚕舞い…14日から20日まで続く伝統行事。14日の晩、女装した青年がゴー（ダンゴ）を差してある柳（または竹）を肩にかけて茎永中をまわる。14日は、ついたばかりのモチを柳に差して、家の柱に飾る。

・農具をまつる行事…14日から20日にかけて、農具類にお供え物をする。いちごの葉に、煮しめとごはんを添えたりする。

・正月のモチ…ユズリハを敷き。3段重ねのモチの上にダイダイ等をのせる。

・門松…松の木、竹、マテを立てる。注連縄を張りダイダイを下げる。

○盆行事について…モチ米の粉を水で練ったダンゴをマキの葉につつんで炊き、それを墓石の上に乗せ拌む。

○十五夜…子供がいなくなり、綱引きはやらなくなった。モチ米とササゲをませたツノマキと、ススキ・荻などを縁側に置き月を拌む。

○田の神まつり…宝満神社に向かって拌み、田圃にお酒をたらす。

○サノボリ…田植えが終わったあと、田圃の見えるところで飲み方をする。

西海（下立石）

○氏神様の神社…下立石で祀っている神社。ここで新暦9月15日に踊りを踊る。6月灯

には、ツノマキを供える。また、お盆や正月には必ずお参りに行くという。門まわりで管理している。

○十五夜…綱引きをしていた。ワラを持ち寄り、大綱を作る。子供達にツノマキやお金を配ったりする。縁側には、里芋・カラ

イモ・おはぎ・ダンゴを供える。綱引きの後は、公民館で青年と子供が相撲をとった。

○盆…16日の盆の明ける日が精霊送りの日。朝方、墓前の花を松に変えるという。“また、来年も待っている”という意味を込めるとい

う。盆の最中は、そうめんやマキの葉で包んだモチゴメのダンゴを先祖に供える。このダンゴは墓石にも供える。火を焚いて、先祖の靈を送り迎えするところもあったが、ここではやらなかった。

○正月行事について

- ・床の間に半紙とモロバを敷き、3段重ねのモチにダイダイを乗せる。
- ・若水迎え…夜の12時すぎ、年が新しくなると、水迎えといって家の主人が水汲みに行く。汲んできた水で顔を洗ったりお茶を沸かして飲む。

○旧の正月…モチをつきなおして、テース柱（亭主柱）にモチを3つ、箸で差したものを作りつける。

○亥の日…“亥のようさ”といって、今晚モヤー（催）があるから出て来いというお触れがまわる。その日は村落の寄り合いがある。一晩中起きている。お膳には、ごはん・おかずなど少しごちそうがでてくる。亥の晩に子供の無病息災を祈る。

○サノボイ（サノボリ）…田植え後の飲み方をする。サバやアラを野菜と一緒に砂糖醤油で煮る。豆腐やこんにゃくなども煮物にして食べた。

### 上中（焼野）

○正月の床の間…モチにダイダイを乗せる。農具にもモチを供える。

○カーゴマー（蚕舞い）…蚕舞いで使うダンゴを5つ門松に差して置く。子供達はそれを取りにいく。晩の7時ごろ、真っ白い布ぎ

れをアネサンカブリで目だけ出して女装した男性が訪れて踊る。昔は、顔にも手にもきちんと化粧を施していた。

○ひょうたん踊り…秋祭りに踊る。（旧暦9月11日ごろ）ヒョウタンを腰に下げ、赤ふんどし姿で踊る。

○十五夜…ツノマキ・スキ・萩の葉・焼酎をゴザの上に置く。お月様に“来年も照らしてくれ”と祈る。子供は公民館で綱引きをし、相撲をとる。

### 西之（下西目）

○正月行事について

- ・水迎え…元旦の朝、夜明けの3時ごろ新しい水を仮壇にあげたり、顔を洗ったりする。モチをもって水汲みに行く。
- ・正月4日は鉢入れの日。田圃の水口にお酒とモチをもって行く。
- ・正月6日はチョウギトウ（町祈祷）をする。神職の人を頼んで願立てをする。ヤリを持ってシュークを打つ。ヤリは魔よけとして村落境に立てておく。
- ・11日は田の神祭り。お米の櫛の上に飾ったモチを田の神に供える。
- ・11日の晩は組祝いがある。村落の組を2分して、それぞれ組頭のところで飲み方をする。
- ・床の間にユズリハを敷き3段重ねのモチとダイダイを置く。
- ・門松は松、マテ、ユズリハ、椎の木を立てる。神道では竹を飾ったりする。
- ・20日正月には、松の葉を墓前や床さんに飾る。
- ・旧正月には、下中から蚕舞いを踊る人がやってくるので、その人たちにダンゴを配る。柳の木の枝にダンゴを差して、家の四方と床さんに飾る。穀が豊かに実ることを予祝している。
- 盆…神道の家の盆行事は仏教の家とは少し違う。
- 十五夜…青年団が中心になって綱引きをしていた。お供え物はあまりしない。
- サノボリ…昔は田植えが終わった後にし

ていたらしい。

○亥の日…伝承なし

○秋まつり…9月の願成就の祭りには、豊受神社でヤートセーを踊る。

#### 西海（牛野）

○春分の日は漁に出てはいけない。仏さんの壇って来る盆にも、海に出てはいけない。先祖は海の彼方からやってくる。七夕に向こうをたって、お盆に到着するのである。

○ガラッパ…春分の日は山から海へ、秋分の日には海から山へわたる。

○十五夜…各自子供達はワラを持ち公民館に集まって、青年団の人と一緒にになって綱をつくり綱引きをした。綱引きがすんだら田圃に土俵をつくって相撲をとった。お月様には、チャブケ（煮シメ）をあげる。チャブケには、里芋・馬鈴薯・ツワ・アザミ・カライモンセン・カボチャなどを使う。他には、ツノマキやオーギの葉などを供える。

○お盆…そうめんとチャブケとトコロテンを供える。トコロテンは、テングサを取って来て自分たちで作る。カボチャや芋類も供える。

○正月

- ・旧の正月はモチをつきなおし、枝に差したモチを柱などにくくりつける。
- ・門松は昭和40年台ころまでは立てていた。椎の木と竹（唐竹）とユズリハを立てて注連縄を張る。タケシバ（ドングリ）の木を切って来てそれも門の両方に立てて縄でくくる。また門松にはダイダイをつけていた。新暦1月14日に門松や注連縄を海に流す。

### 3. 民具解説

#### ○鍬

西之 前之原

柄の長さ105cm。刃の長さ45cm。刃幅14cm。口金の長さ4cm。



○田打ち鍬

#### 茎永 上里

柄の長さ106cm。刃の長さ40cm。幅（最大部）14cm。角度60度。



○鍬

#### 西海 下立石 立石トネ

柄の長さ107cm。刃の長さ37cm。刃の幅14cm。



### ○鍬（改良鍬）

西海 牛野

柄の長さ 99.5cm。刃の長さ 34.5cm。刃幅 12.8cm。口金の長さ 8.8cm。幅 3cm。高さ 77cm。角度 45 度。刃の部分に清水製とある。腰を曲げて手だけ動かす作業に向いている鍬。



### ○山鍬

西海 牛野

右の山鍬：柄の長さ 105.5cm。口金の長さ 3.7cm。幅 4.8cm。刃の長さ 17.4cm。最大刃幅 12.5cm。高さ 100.5cm。角度 75 度。  
左の山鍬：柄の長さ 73.8cm。口金の長さ 5cm。幅 4.5cm。刃の長さ 17cm。最大刃幅 12.2cm。高さ 74.5cm。角度 75 度。左の鍬には鹿の絵を描いた登録商標が張っている。右の山鍬は柄の先端を破損している。



刃先の鎌れ具合が激しい。右の鍬と比べて首が長いのが特徴である。

### ○鍬（田打ち鍬）

下中 郡原 河野儀一

左の鍬：柄の長さ 104cm。高さ 76cm。角度 60 度。刃の長さ 40cm。最大刃幅 14cm。溶接部の幅 10cm。口金の幅 4cm、長さ 8cm。値段は 3730 円。右：柄の長さ 104cm。高さ 80cm。刃の長さ 33cm。刃の幅 11.5cm。角度 60 度。この四角い刃の鍬は畠を作るときに使う。刃先には軟鉄を使っている。軟鉄部分の長さ 7cm。



### ○ヤマンクワ（山鍬）

下中 郡原 河野儀一

左の鍬：柄の長さ 103.5cm。全長 104cm。角度ほぼ 90 度。刃の長さ 17cm。刃の幅 12.5cm。口金の長さ 4.5cm。口金の幅 7cm。右の鍬：柄の長さ 91cm。全長 86cm。刃の長さ 16cm。刃幅 12cm。口金の幅 7cm。口金の長さ 5cm。角度は 75 度くらい。



### ○ヤマグワ（山鋤）

西海 下立石 立石トネ  
柄の長さ 103cm。全長 105cm。角度 75 度。刃の長さ 21cm、刃幅 12cm。開墾用の山鋤で、土の中の木の根をたたきる。使い込んでいて、購入時より 1 ほど刃先が擦り減ったという。



### ○四つ又

西海 下立石 立石トネ  
石を寄せたりするときに使う。柄の長さ 107.5cm。刃の横幅 17cm。長さ 12cm。搔き手となる 1 つの刃の幅が 2cm。長さ 10.5cm。



### ○鍔・山鋤・三つ又

#### 西之 小田

左の鍔は柄の長さ 105cm。角度 60 度。刃の長さ 37.3cm、刃幅 11.5cm。口金の幅 4cm。中央の山鋤：柄の長さ 103cm。角度はほぼ直角。刃幅 10cm。刃の長さ 19.5cm。口金の幅 3cm。右の三つ又：柄の長さ 103cm。口金の幅 3.5cm。刃の横幅 19cm。長さ 19cm。隣は牛小屋で、牛小屋の中央の柱には大麻が貼ってある。「南無法蓮華經奉祈牛頭天王六月如來」と記載してある。牛小屋の隣の小屋に農機具類が置いてある。横柱に刃をかけてあった。耕耘具は、鍔、山鋤、三つ又の 3 機だけであった。ヒラガ（平鋤）は戸作りと畑の中耕に、三つ又是、代アケしてモンガの入らない手狭な所の耕耘に使用する。山鋤は田、畑両用である。特に山鋤はアラノ（荒野）を打つ時に使用する。



### ○モーガ・モンガ（馬鋤）

#### 西之 小田

全長 73cm。取っ手の幅 58cm。台木の長さ 98cm。引き手の長さ 28.3cm。剣の長さ 34.5cm。剣は 9 本。引き手を手前にして壁際にかけてあった。小屋の 2 階にしまってあった。オコシをかけたあと、このモーガを牛にひかせて泥塊を碎く。



### ○田 車

西海 牛野

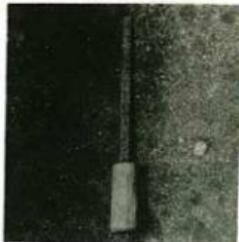
田園の除草、中耕に使う。これは2つ車がついている。柄の長さ100cm。全長145cm。刃先の最大幅21cm。長さ23cm。車の部分の幅19.5cm。5枚刃が6組ついている田車。登録商標には、「新案特許 脱金貨印 通産農林大臣賞17回賞 水田中耕除草機11件鳥取県米子市浦津 大昭農工機械株式会社」と書いてある。



### ○串

西之 下西目 日高静一郎

山芋を掘るときに使う道具。まず、ヤマンクワ（山歯）で表土を掘って、クシで深く山芋の周りを掘り下げる。下中の付近では、先に平たい刃を付けた長い棒（キンツ）を使用したりする。その他、草取りに使用したりする。今は、先端が鉤状になっているクシを使っている。全長31。杉の柄。金具の部分の長さ22cm。幅1.2cm。



### ○ワラ打チゴロ

西海 牛野

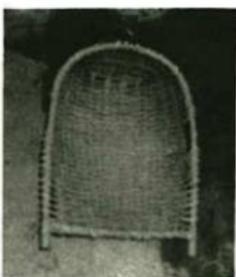
全長36cm。叩く部分の長さ22.5cm。直系9.5cm。柄の幅4cm。ワラを叩いて柔らかくするときに使う道具。



### ○ソーケ

下中 郡原 河野儀一

ザル編みのソーケ。取っ手はパイプを曲げて使っている。全長48cm。幅38cm。深さ14.5cm。堆肥の運搬の時に使用する。



○ソーケ

西海 下立石 立石トネ  
丸口のソーケ。直系47.5cm。底が深くて  
8.5cmある。大根を干すときに使用してい  
る。



○ウセグラ（牛鞍）

西之 小田  
さとうきびの運搬に使われる。全長90cm。  
幅33cm。



ツワをカンザーにくくりついている。(西山)

○カンザー（背負い籠）

西海 下立石 立石トネ  
タケノコ、ツワなどを収穫してカンザー  
で運搬する。底幅49cm。袋口の幅41cm。  
全長39cm。

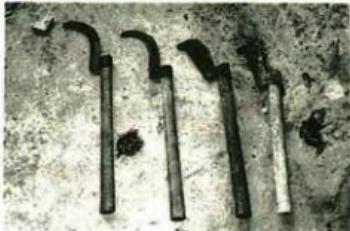


カンザーの中には鍼を入れてある。(西海牛野)

○ナタ（鉈） 下中 郡原 河野儀一

左の2本は一見鉈鎌に見えるが、鉈鎌より  
も一回り大きく、刃も厚い。鉈鎌ではなく、

鉈になる。『深水』の銘が掘ってある。小枝を払う時に使う。



#### ○カマ（鎌）

西之 小田

サトウキビの収穫に使う鎌。刃の先端は刃鍛れしている。全長39cm。刃の最大幅8cm。口金の幅4cm、長さ5cm。短い柄で、軽い鎌である。



#### ○草払い鎌

西海 牛野

稲や草払いに用いる鎌。柄の長さ33.5cm。刃の長さ17.7cm。刃の根元の幅が2.3cm。



#### 4. さいごに

農具を調べたのだが、南種子町の豊富な年中行事も併せて調査してみた。道行く人がカンザーを背負って山に入る姿が一番印象に残っている。さとうきびの収穫・田植えの準備と、とても忙しい時分に調査に早く協力していただいてほんとうに感謝しております。紙面をかりてお礼申し上げます。

## 農具II（稻作・畑作・民具解説）

藏田弓子

### 1. はじめに

農業をテーマとして実習を行なったのは、前回の川辺町に引き続き二回目であった。前回は無形調査であったためいいお話を多く聞くことができても、実際にどの道具をいつどこで使うのか、どのような知恵が隠されているのか、など実物から学ぶ機会が少なかったように思う。しかし今回の南種子町は有形調査で、しかも田植えのシーズンであったため視覚的に学ぶことが出来、不明だった点がかなり明瞭になったと思う。

### 2. 概観

#### (1) 畑作

・上中 大宇都 田上 広喜さん

大宇都是山間部にあり南種子町の中心地である上中に隣接する。この集落は昔からあった訳ではなく、様々な所から人々が移住してできた集落である。田上家も広喜さんの父の代（大正12年）に熊本から移住してこられた。

ソマは二期作を行なった。4月の中旬に播種し1ヶ月後に収穫したあと甘藷を植える。甘藷は10月～11月に収穫し再びソマを植える。片刃ガマで刈ってもよいが手で引き抜いて、庭に広げたムシロに朝のうちに干し、夕方には竹の棒でたたいて実を取る。ソマの殻は肥料にした。また枕に入れ、これで寝ると頭が良くなると言った。

陸稲はノイネと言い、稭の種類にはアイゼン、フクトンがあった。アイゼンはイゲが無く殻は茶色、中は白で背は45センチと低く3月の彼岸ごろ播種した。フクトンはイゲが少し有り殻は茶色、中は白で背は高い。粘り気が無く美味しいので一年しか作らなかった。稗は作ったことが無い。

・西海 牛野

平地が少ないため水田が少なく、多い人で5～6反持つのに対し、畑は1～2町もある。粟は梗、糯を収量が2倍ずつ程度作っていた。黍も梗、糯を作っていた。粟、黍の梗は米と混ぜて炊く。粟の糯は糯米と一緒に掘いて粟餅にして食べた。黍は梗も糯も粉にひいて黍のみの団子を作った。また粉にひいた粟と混ぜて団子を作ることもあった。

稗は作ったことが無い。

・西之 平野 植田 ツカさん

ツカさんの姑にあたる方が大正12年に静岡県から種子島に移住してこられた。そのとき静岡ではカンナイモと呼ばれるワセの里芋も持ってきて栽培したため、この里芋はこの辺りで植田芋と呼ばれている。ワセなのでお盆前に収穫でき、煮崩れはしないが美味しい。

小麥は団子や醤油や味噌に、裸麥は米に混ぜて炊くのに使っていた。醤油の麹を作るには、小麦を石臼でひいて4つ割りにしたのと、煮した大豆にサラサザにするためのアレという粉をまぶしたのをモロブタに入れ寝かせておく。旧9月19日頃良い麹ができると言う。麦の粉殻を取るには臼に少し水を入れて、3回手杵で搗いた。1度目をカッカワズキ、2度目をマズキ、3度目をハナゲと言う。搗いたらイナマキで乾かす。

「大豆を作る時は水汲みの人に行き合わんほうがよか。」と言う。すぐに腹を割るので少しは土の中に埋まっていたほうが良いという意味がある。

粟の梗をシャクアワ、糯をモチアワと言う。「ソマは75日の夕飯になる。」と言う。ソマガー、ソバガーといって糯米と甘藷を炊いたのにソマの粉を入れて食べる。冷たくなったら丸めて閉炉裏のオキ（消し墨になる手前）に載せて焼いて食べた。またワ

ンガキといってソマの粉にお湯を加え、醤油で味付けして食べた。

稗は作ったことが無い。

西海ではダゴタカキビを栽培していた。実は赤く、粘り気があり、石臼で挽いて粉にし、団子を作っていた。ダゴタカキビとは高粱の事でモロコシの種類である。モロコシは熱帯アフリカのエチオピアを中心とする地域が原産地と考えられている。モロコシの栽培は各地へ広がって行ったがインドにはBC4C頃伝わり、インドから中国には4C以前に伝わった。それは六朝時代のこととて次第に中国北部から旧満州一帯に普及して高粱の系統を成立させた。そしてその一部が朝鮮を経て日本に中世(5~8C?)に伝來した。年代は詳しくは不明であるが次第に各地の主食代用や飼料として栽培されるようになった。またモロコシにはウルチとモチがあり茎の竹崎で大正時代までモチを作り団子にしていたというお話を聞けた。(※注1)昔の炊事場の足場は竹で編んだもので、下は地面で穴が掘ってあり(瓶を据える人もいた)そこに使った水などを流していた。これを便所を汲み出す約と桶を使って汲んで肥料にした。

## (2) 稲作

### ①品種

ここでは主に水稻についてまとめたいのだが、赤米の中に陸稻の品種が入ってしまったことをお断りしておきたい。赤米について整理すると次のようになつた。なお、分類方法は下野敏見氏の『種子島の民俗1』の「種子島の稲の品種一覧表」を参考にした。

白い水稻の粳米にはリク132号、フジミノリ、コウジワセなどが有つた。リクウ132号はイゲが少し有り背は1メートル20センチ位で美味しい米だった。15年前までは作っていた。フジミノリは10年前まで作っていた、この後コシジワセを作った。コシジワセの後にコシヒカリを作った。準早期栽培が始まったのは昭和11年で6月植え付け10月収穫から4月植え付け8月収穫へと変わつた。また、表ではイゲの有る米が多いが、米作改良のため明治時代に熊本県から種子島に迎えられた春木敬三郎により無芒の神力種の浸透が進められた。

(※注2)

### ②馬耕

南種子に馬耕が導入されたのは明治19年のことである。南種子には熊本県菊池郡山

名 称	大字 小字	糯・梗	水稻・陸稻	背	穂の色	粒	イゲ	そ の 他
アカモチ	島間 小平山	糯	水稻に 混生	1m以上	穂は赤 中は白		イゲ有	
	中ノ下 郡原	梗	水稻に 混生	高い	穂も中も赤	少し粒 が長い	3cm ぐ らいいの イゲ有	
	西 海	梗	陸稻を 栽培	高い	穂は赤 中は赤 精米しても 赤い	長手が 入つて いる		バサバサして いる。オクテ(11月 収穫)穂の長さは 15~20cm
トーボシ	茎竹 永崎	梗	水稻に 混生	高い	穂は茶 中は赤 精米しても 赤い	細長い	イゲ有	バサバサして いる。オクテ大正10年頃 まであった。自分 の種で作っていた人 は白い米の中に 混じっていた。
	西牛 海野		陸稻に 混生	1m以上	穂は茶 中は赤 精米したら カバ色	細長い	20cm ぐ らいいの イゲ 有	茎が太目 オクテとワセがあ る。分力なし(肥料の 関係も有)

表1

鹿の人、春木敬太郎を迎えた。彼は稻の品種の改良だけでなく、従来の牛耕にかえて高能率の馬耕を傳授し、水田の深耕により生産力の向上をはかった。(中略)馬耕と米作改善は逐次水田地帯の東海岸地帯から西海岸地帯へと普及し村全域が馬耕となった。馬耕が盛んになるにともない明治18年から馬耕試験(馬耕競走会)と称して青年男女を対象にした馬耕競技会が開催されるようになった。(※注2)

・茎永 宇都浦 大崎 薩市さん

馬耕競技会は昭和18年頃盛んで、出来るだけ深ズキするよう、「7寸以上鋤けたら満点」と言われた。また馬への声かけは、進め=ハイハイ パック=アトアト 曲がる=たずなをひきながらコチコチと言った。また今年が継だと翌年は横に鋤くようにした。

・西之 平野 植田 ツカさん

「そーれ やーれ ホイトー」と歌いながら耕した。

### ③耕耘

・茎永 宇都浦 大崎 薩市さん

所有している6分の1位が牟田だった。深い所では腰位あるため腐りにくい松の木を縦にして埋めこんで作業をしやすくした。木のことをトマリキと言い大正10年から始まり、それ以前は牟田下駄を使っていた。牟田は収穫時も乾ききらないので難儀する。

#### 牟田の耕耘の順序

牟田打ち(一番打ち)3月までに三つ  
又で打つ

↓  
打ち返し(二番打ち)水を入れて

牟田カンゼ カンゼは数える  
ことで何回も土  
を碎く意味

#### 乾田の耕耘の順序

冬ズキ 年内までに馬を使って耕す

↓  
鋤き返し 4月頃

↓  
アラカキ 水を入れてモーガ(マンガ)を引く  
ヒトメ、フタメ、ミメと  
いって何度も引く

↓  
フタガズキ エブリで均下したのを  
鋤で耕す  
平グッケで畔塗りをする

↓  
ナカシロ 念の入った人がする

↓  
シロカキ

耕耘は念を入れる人は何度も耕すし、また個人によって呼び方も多少違ってくる。

	①乾を砕き 肥料を混ぜ 合わせる	②水を入 れて耕す	③更に土を 細かく碎く
平山 西之町 西田正夫さん	アラジロ	ナカシロ	シロカキ
島間 小平山 山下秋哉さん	アラタタキ	アラジロ シロアケ	ツクリジロ シロアケ
中ノ下 郡原 中岡亮彦さん	アラジロ アラカキ	シロカキ	シロカキ
中ノ下 郡原 羽生克己さん	アラジロ	ナカシロ	ホンシロ

表2



シロカキの状態



エブリで田をならす様子

#### ④苗床

・中之下 郡原 羽生 克己さん  
種を蒔いた次の日から21日後に植えるのが基本で、現在のワセは12センチになって植えるのが良い。15センチになると季節風の南風で倒れてしまうからである。昔の人は「稲の苗が水に入るのが丁度いい」と言っていた。

・基永 宇都浦 大崎 蘇市さん  
田に苗床を作っていた頃は5月頃種を蒔いていた。1メートル50センチ位の短冊を切り、桑の葉など柔らかい葉を踏み込んで平らにならしてから蒔いた。これをシラクサと言い肥料になり、また苗を取りやすくする働きもあった。昭和11~13年に早期栽培が始まってから種を蒔いたら熱を吸収するために黒く焼いた羽殻を上に蒔き、ビニールをかぶせた。種を蒔くことをチョッポーウエと言った。

#### ⑤田植え

・基永 宇都浦 大崎 蘇市さん  
枠作りといって田に何本も縄を引きその中に4列ずつ後退りしながら苗を植えた。縄を引かずには植えていく方法は在来作りと言う。

・西之 平野 植田 ツカさん  
縄に赤いシベをつけた物を先生と呼び、先生に沿って苗を植えていった。まっすぐ植えないで除草のさい車をつくのに困るので「下手な田を作って、まっ」と言われた。この時の間隔は7寸~7寸5分位である。

#### ⑥除虫 除草

・基永 宇都浦 大崎 蘇市さん  
害虫駆除には一節(35センチ位)の竹の筒に穴を開けて除虫油(重油の中に薬を入れたもの)を入れ栓をして田に垂らしてから、竹で稻をはらって虫を落とし殺していた。

草を一番草、二番草、三番草と呼ぶ。除草には田車を使い、草がまだ小さい内に反転させ腐らせる。反転させる事には除草だけでなく酸素を土に含ませる役割もあった。

ガンズメを使うこともあり、やはり酸素を含ませる働きもあった。しかし牟田には田車もガンズメも使えない所以手取りで行なっていた。

#### ⑦収穫

・中之下 郡原 中園 亮彦さん  
刈るときは片刃ガマを使った。掛け稻は昭和15年頃から始まった。それまではコズンでいた。山から種類は関係なく沢山木を取って来て、杭を打って脚を作り長木を渡して掛けしていく。一週間、風通しの悪い所では15日間位掛けておく。

収穫後はれんげ草は早期には適していないので今は植える所が少ない。稻が柔らかくなりイモチ病にかかりやすくなるからである。昭和2、3年頃は青刈り大豆が流行ったがまたれんげ草に変わってしまった。

・基永 宇都浦 大崎 蘇市さん  
刈り取ったら掛け干しにしたり地面に広げて干したりする。この時、稻が飛ばないようにムシロを掛けておき、足踏み脱穀機で脱穀した後、初通して荒通し、仕上げ通しの2回通してゴミと糞を分ける。仕上げ通しの時風に当てるが、自然風が無いときは手で回す扇風機で風を起した。ゴミの中に脱穀されてない穂があれば足で踏んで通しにかけ、何回も無くなるまでやった。

精米は食べる分だけ手杵で搗いていたが、共同で土臼(ドロウス)を回して精米した。収穫後、田にはれんげ草、ルーピン(黄色い花が咲く)など、綠肥を植えていた為、春はとても美しい田園風景となつた。これらの種を買って植える人もいたが、働き返しをせず荒田のままにしておき去年のれんげ草を生やす人もいた。

#### ⑧ヒツツ

・中之下 郡原 中園 亮彦さん  
ヒコバエとは言わざヒツツと言ふ。湿気のある田が適して1段から5俵取れた。収穫すると水を入れ、芽が出ると硫安をかけると良いのが取れる。皮が薄く8月末には

取れるので自分の家で食べる。

・茎永 宇都浦 大崎 蘇市さん

ヒツツとかヒコバエといった。オクテの時は取らなかったがワセの出来の良い年は10俵位取った。

#### ⑨二期作

・中之下 郡原 中園 亮彦さん

二期作をする人は少なく始まつたのは昭和に入ってからである。7月にシロをあけ11月～12月に収穫する。二期作はコブトヤ（山にある四角でない田をコブトと言ふ）で行なう。村の中ではウンカやサンカメなどの害虫が多いからである。

・茎永 宇都浦 大崎 蘇市さん

昭和30～40年代に行なつた。1町当たり2～3石位で自家用に作った。昭和43年の記録では7月21日～8月8日に一期作の脱穀を足踏み脱穀機で行ない、ズイホウ、アキコガネ、ニキサカエ、新木3号を7月19日に浸種し、8月11日頃に田植えを行なつてゐる。

#### ⑩裏作

・茎永 宇都浦 大崎 蘇市さん

オクテの頃、小麦 裸麦 ピール麦を作つた。早期になってソマを作つた。半田では裏作をせず、出来る田を「裏作の出来るいい田圃だなあ」と言った。

### (3) 年中行事 その他

・下中 中之下 中園 亮彦さん

田植え前に種蒔き祝いをする。各集落で日程を決め、その日に各家で餅を揚げシャニンの葉で包んで薄切りにしたのを食べる。またこの日には線に餅を持たせて実家に帰らせていた。餅作りに欠かせないモチ米は収量の10分の1程度で、自家用の為だけに作っていた。

田植えが終わるとタウエアガリじゃ、サノボリじゃと言ってイイの人達が集まって魚、素麺、鶏などの御馳走を食べた。

6月の丑の日には蟹を食べる。蟹は田圃に

上がって来るのを取つていた。

新1月7日はタノカンマツリと言つてユズリハ、モロバを田圃の片隅にお供えし、鍬で葉の根元に土をかぶせて寝かせる。今でも行なつておられる。

・島間 牛野

注連縄には水稲のモチ米の葉が柔らかいので適しているが、祝い事に必ず用いるわけではない。陸稲の葉は短いので注連縄には使わなかつた。

旧1月1日には柳やコヤスの木（昔の傘のロクロ木に使われた。冬に葉が落ちる）に掻きたての小さな丸い餅や大きい餅を切つたのを刺して牛野の神社に持つて行きお供えしたり、家の仏壇、テーブルシタ、門松にさしたりする。

稻妻が多いと豊作になると言つた。また12月の始め頃大きい雷が一回鳴ると屋久島に雪が積もり、これをユキオロシと言つた。

・西之 平野 植田 ツカさん

盆や正月には米を1俵ずつ掘いた。米を掘く音がすると近所の若い娘が手伝いに行き、行かなければ「カラブショウモン、人が米を掘いても加勢にこんし」と言つた。手杵を使う時は3人で順に調子良く掘いた。また正月や祝い事にはヤマイモを山から取つて来てゆがいて皮を剥き、手杵で掘いてから布巾に入れてしづり、上に食紅を少しつけて食べていた。

お盆は8月13日の晩に仏様が着くので精進料理（にしめ、そうめんなど）をお供えした。15日の夕方には仏様を送り出す。モチ米の団子をマキの葉で包みミチシバでくくつてゆがいた物を仏壇にお供えして、ショウリョウ送りと言つて食べる。16日は寺で盆踊りをした。

米が収穫期になると一番最初に実つたウルチ米を根から引っこ抜いて仏壇の両脇に掛ける。昭和40～50年頃までやつた。お墓には甘藷をお供えする。

トシオパン、水迎えと言つて川に水汲みに行った。川に行く時はモロバ、ユズリハ、餅を持ち、一番を争う。持つて来た物は水

を汲んでいる間川の側にお供えしておくが持ち帰る。水を汲む時「年とり男が水汲み始める時 水を汲まずにコガネ汲む コガネ汲む コガネ汲む」と唱えながら3回汲んでから後はいくらでも汲む。この水は1日の朝沸かしてユズリハ、モロバ、米を入れ顔を洗う。

2日の晩には「臼返し」が行なわれた。臼を逆さにし中に米を入れた一升瓶、ユズリハ、モロバ、餅を入れておくと、真暗闇の中青年が臼を起こし(返し)、米と餅を入れ3回杵で搗く真似をする。この時「年の初めに年取り男が米搗き始めるときは…」と言う。米を一粒でもこぼすととても怒る人がいた。戦前まではやっていた。

14日にはカーボマが行なわれた。一番しなったダゴサシの木をテースパシタにさしておくとカーボマを舞った人が肩に下げて持って帰る。またこの日にオカドギサマ(門松)に餅を切ってさしておき近所の子供達が餅を取りに来ると、その家の主人は「ワーレ ワーレ ダゴ取りに来てっ」と言いながら子供を追いかける。多くの子供を倒せば倒すほど、その年の稻は豊作になると言った。

・茎永 宇都浦 大崎 蘇市さん  
餅は手杵で2人で両手でそえて搗いていた。  
一方糞は片手で搗いた。

5月は種蒔き祝いといつて種蒔き餅を搗いて親戚の人に配る。

田植えを始める時自分の家でノーダティワイ(苗立て祝い)をする。特に御馳走をするわけではない。田植えが終わるとサノボリをする。イイの人達を呼んで御馳走を食べる。水稻が実ったら一番出来のいい稻を根から引き抜いて神棚(神道のお宅)の片脇に掛ける。これを穗垂れ稻と言い、次の稻が取れるまで掛けておく。

・島間 小平山 滝口神社  
神社の石碑に次の様に記されている。

祭神 滝口大明神

由緒 部落の西南の小高い丘に部落の守り神 滝口神社がありこの神社の地はもともと石塔と呼ばれ、最初にこの部落に住みついた祖先の墓だと言われ、小平山の人々は昔から部落の守り神の聖地として祭って来ました。小平山部落は昔から畑は広く田圃にひく水がないので水田が少なく、人々はかねてから水に不自由していた。今から三百八十年位前重遠妙思と言う修業僧がこのようすを見て自分の力で住民達の不自由を救おうと思いつち家族にも語らず、一人で水源地を探し、山腹の難所を切り開き大変な苦労の末、遂に八百間余り(千五百八十米余り)の用水路をつくり、水田四町歩をひらくことができました。その時はじめて家族にもそのことを語り、実際に見せたと言うことです。そのおかげで住民達は、その大きな恩恵を受け感謝しておりました。明治維新前には小平山十六門の百姓の田の神様として祭っていましたが明治十四年になってから全部落の人達の氏神として祭ることになり、新しく神社を建てこれを祭り、その功德を永遠に讃える事にしたのでした。神社のかたわらに小さな石碑があります。延宝卯年次右エ門と書いてあります。延宝卯年(西暦一六九五年)に次右エ門と言う篤志家でその功德に報いるために建てた神社です。

昭和六十二年十一月十日

小平山部落民一同建立

神社では春と秋に祭りが行なわれるが、部落で2年交代の当番を決める。当番になった人は神社の2畝程の田でモチ米を作る。2年前に道路が出来て田が無くなってしまったので自分の田で神社用の米を作る。米は1俵程取れ、秋の祭りには餅を3升程搗いて一人につづつ配り、余った米は自分のものとなる。御田植え祭りは無く米の種類も作る人の好みで良い。秋祭りには4、5年に一回は長刀踊りや棒踊りを踊った。この時、田尾から神主さんを呼んだ。また筆者が訪れた時は昭和60年10月27日に落成した拝殿に実の付いた海草のシュエーが中に入った

トクワのツト、その両側に掛け穂があった。トクワは固くて使い物にならないが、昔は田畠の防風の為に植えていた。シュエーは「ミナヒラーに行くよー」と言って皆で海に下りて行って取る。シュエーの他に砂利、コロビという貝も入れる。拝殿の上には祭殿があり、そこには神主さんしか行けない。祭殿の祠には石と手鏡が入っている。



拝殿の中、ツトの中には乾燥した藻が入っている。

### 3. 民具解説

(4) 中耕機 島間 牛野  
長小田 岩男

陸稻を播種して約15日後に中耕をする。その後も草が生えたら手で取り、中耕をする。中耕機を使わない人はヒラグワを使う。高さ140センチ、直径13センチ。



中耕機

(5) オーギ用のクワ（左）とナタ（右）

平山 西之町 中畠 ヤス

クワは片手で横から振り落として使う。ナタよりも古い。

ナタは6年前に購入。クワは長さ39センチ刃の幅9.5センチ長さ7センチ。ナタは長さ40センチ 刃の幅7.5センチ長さ10センチ。



オーギ用のクワ（左）とナタ（右）

(6) 剪定鉄 上中 大宇都 田上 広喜

お茶を摘んだ後、剪定するのに使う。静岡から取り寄せた。刃の幅4センチ長さ27センチ。



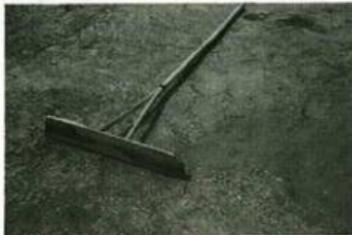
お茶の剪定鉄

(7) エブリ 平山 西之町 中畠 ヤス  
高さ132センチ、板の幅11センチ、長さ78センチ厚さ3センチ。



エブリ

- (8) エブリ 上中 大宇都 田上 広喜  
調査する2,3日前に広喜さんが作られた。  
(3月19日に調査) 材質は杉高さ199センチ、板の幅12センチ、長さ68センチ。



エブリ

- (9) ヒラグワ 上中 大宇都 田上 広喜  
2年前に上中の農協で購入。柄の長さ106センチで左に約25度傾いている。刃の幅12.5センチ、長さ39センチ先の黒い部分の長さ20センチ、最大幅14センチ柄と刃の角度約55度。



ヒラグワ

- (10) フログワ 平山 西之町 中島 ヤス  
全体に小さく柄の角度が浅いことから牛や馬が入れない程の深い犁田を、人が田下駄を履いてこのフログワで耕したのではないかと考えられる。また右の刃だけがすり減っていることから右利きの人が使ったと考えられる。柄の材質はカシノキ長さ62センチ、鉄製のクッ先の部分の幅9.5センチ。最大の長さ42.5センチ、最少の長さ14.5センチ。刃が差し込まれた木の材質は杉。幅17センチ。刃までの最大の長さ29センチ。

最大の厚さ3.1センチ、柄と刃の角度約32度。



フログワ

- (11) 三つ又 上中 大宇都 田上 広喜  
牛小屋の堆肥をかき集めたり運ぶのに使っていたが現在はガジュツを掘るのに使っている。高さ101センチ刃の幅2センチ、長さ20センチ。  
刃と刃の間7センチ(手前)と6センチ。



三つ又

- (12) 平山 西之町 中島 ヤス  
田植えの際、これで筋を引き筋に沿って苗を植える。「線を引くあれ」と呼び、特に名称はない。十年前までは使っていたが今でも機械の入らない小さな田では使うことがある。柄の長さ167センチ。横215センチ。歯の幅4.5センチ、長さ29センチ、歯と歯の間22.5センチ。



特に名称なし

(13) 車、田車 西之 平野 中脇 時則  
ガンズメの後除草機として使った。畠の間を回して土を返すことによって除草する。柄の長さ98センチ、柄と柄の間15.5センチ。前方の車は五角柱で一つの面に刃が3本と4本が互い違いについている。後方の車も五角柱であるが2本と4本が互い違いについている。前方の車の刃はまっすぐだが、後方の車の刃は先2.5センチが曲がっている。



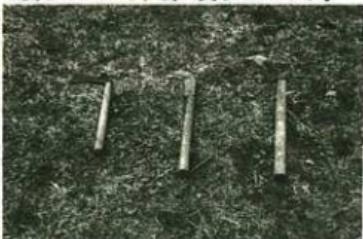
車、田車

(14) 片刃ガマ ナタガマ ナタ  
平山 西之町 中晶 ヤス  
片刃ガマは草や稲、麦を刈るのに使う。柄の長さ35センチ、刃の幅3.5センチ、長さ7.5センチ。

ナタガマは木の枝や竹を切るために使うがナタより弱いので大きな木は切れない。土手や畠の草を刈るのにも使う。柄の長さ35センチ、刃の幅4.5~6.3センチ、縦16センチ、横12センチ。

ナタは正月過ぎてから燃料の薪を切るのに使った。大まかに鋸で切ったのを細かく切ったり、木の枝や竹を切るために使う。柄

の長さ51センチ、刃の長さ15センチ。



片刃ガマ（左）ナタガマ（中）ナタ（右）

(15) 竹切りナタ

茎永 宇都浦 岩下 ハト

この写真を写した時は、田植えが済み田に鴨がやって来るのを防ぐ為、鴨のシレといつて竹の先にビニールをつけた物を作る為にナエダケを切っていらっしゃる所だった。台木は使わないことが多い。



竹切りナタ

(16) イナマキ 島間 牛野 長小田 岩男

何枚も広げて脱穀機を置き、脱穀した穀物を載せて乾燥させる。材質は粳米の茎。



イナマキ

(17) クブキ

編目は一つとび一つぐり。口は70センチ  
チ縦65センチ（地面に接している方），55  
センチ（上側）。



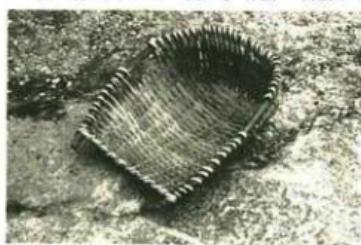
クブキ

(18) 杖 島間 牛野 牛野 春芳  
柄の材質は楠。楠は虫が付かず香りが良  
い。長さ92センチ、掘く部分の材質は椿  
ひび割れが入る。長さ39センチ、直径11セ  
ンチ、柄と掘く部分の角度は90度。



杖

(19) ミゾーケ 島間 小平山 浜上 義男  
脇に抱えるように持つ。甘藷の収穫や堆



ミゾーケ

肥を蒔くのに使う。箕に形が似ているので  
ミゾーケと言う。木はグミの木竹はチンチ  
ク竹で地面と接する方が表皮口は36センチ  
奥行き40センチ、高さ18センチ。

(20) コゾーケ 基永 宇都浦 大崎 蘇市  
二つとび二つぐり。縦のヘギの幅4ミリ、  
横のヘギ2ミリ。



コゾーケ

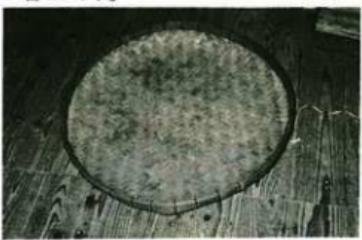
(21) アライゾーケ

基永 宇都浦 大崎 蘇市  
ゆがいた素籠アライゾーケに入れて水  
を切る、等色々な使い方がある。二つとび  
二つぐり。縦のヘギ幅7ミリ、横のヘギの  
幅9ミリ。



アライゾーケ

(22) バラ 茎永 宇都浦 大崎 蘇市  
二つとび二つぐり。ヘギの幅15ミリ、  
一目25ミリ。



バラ（表側）

(23) バラの裏側  
六角形の編目。ヘギの幅13ミリ、一目4  
センチ。



バラ（裏側）

#### 4. 最 後 に

種子島の豊かな自然の中と親切な方々に囲まれての調査は自分にとって良い経験となりました。また忙しい田植えの時期にもかかわらず御協力して下さった皆さんのおかげで、自分には経験の無かった農業がより具体的に分かったように思います。本当にありがとうございました。

##### 参考文献

注1『新編 食用作物』星川清親著

注2『南種子町郷土誌』

# 農具III (収穫・調整具・民具解説)

首 藤 由美子

## 1. はじめに

鉄砲伝来の島・種子島は、縦に細長く、平坦な地形を持つ、自然の美しい島である。また本土と南西諸島の文化的接点に位置し、様な民俗芸能が伝承されてきた。この島での農業は、サトウキビ、カライモなどの畑作が主であるが、南種子では豊かな田園地帯がかなり見られ、稲作も盛んに行われているようであった。

今回の私のテーマは収穫・調整具であるが、当然予備知識として農業全般を頭に入れておく必要がある。しかし、私はそれがうまくできず、中途半端な知識のまま調査に臨むことになってしまった。

不十分な調査ではあったが、とにかくまとめていこうと思う。

## 2. 概観

農具という、人々の生活に最も身近な物であるだけに、かなりの数が出てくるのではないかと期待していたのだが、思うように見つけられなかった。使わなくなったのでもうとっていないとか、家を建て替える時に処分してしまったとか、公民館や学校などに寄贈した、という家が多くかった。

取りあえず、収穫から調整までを段階ごとに整理する。

刈り取りには鎌が使われていた。刈り取った稲は田で干すが、干し方にはカケボシとヒラボシ(ジボシ)の2種類がある。カケボシは、カケギに稻束をかけて干し、ヒラボシは田に直接束ねないでそのまま広げて干す。干す日数はカケボシが4、5日から1週間、ヒラボシが1日から3、4日という所が多かったが、これは天気次第で変わってくるという事だった。今でも脱穀しきれない分はコヅミにしておく所もあるが、干さ

ずに脱穀して、その後乾燥機にかけている所もあった。

脱粒には、カナクラ(金管=千歯抜き)が使用されていたが、大正末期から昭和初期にかけて足踏脱穀機が入ってきて、これに代わって使用されるようになった。

落とした稻米は、通しや箕などを使って糞くずなどの塵や中身の入っていない糞と選別して糞殻を取り除いた。古くは、松材の搾き臼と手杵を用い、下にイナマキ(筵)を敷く。搾き臼では糞殻の除去から精白までやってしまう。臼で搾く前に、まず稻米をイナマキの上で干すという所もあった。松材の木臼が普通だったが、石臼を使用していたという話も聞けた。石臼は、餅や味噌、裸麦などを搾く時に使用していた。杵は椿や松の手杵だが、その後、打ち杵に変わったという所もあった。手杵は餅や栗を搾くのに使われた。打ち杵を味噌を搾くのに使うこともあった。また、糞殻の除去までを搾き臼で行い、精白は精米所に持つて行ってやってもらっていたという所もあった。搾いた米は箕で簸て(播すて選別して)、搾けていないものは再度臼に入れて搾く。

その後、搾き臼に代わって松材の挽き臼(搾り臼)が使われるようになった。これは糞殻を取り去るだけの臼で、上下に分かれている。下の臼(雄臼)は中心が盛り上がり、上の臼(雌臼)はそれに合うようなくり抜かれており、接合面には刻みが入れてある。上臼にある小さな穴から穀粒を入れ、上臼に付いている横木を廻すと、下に敷いたイナマキの上に落ちるようになっていく。そして箕や通しで、ゴミやくず粒と選別する。

通しには、モミトオシ(糞通し)とコメトオシ(小目通し)があって、モミトオシ

は目が荒く、コメトオシは目が細かい。モミトオシ・コメトオシの順にそれぞれ篩（ふるい）として使用する。その後、筭は唐箕に、通しは千石通しへと変わっていった。しかし、千石通しはあまり普及しなかったのか、今回の調査ではこれに関する話は、ほとんど聞けなかった。唐箕は、風力を利用して精粒とくず粒とゴミとに分ける器具である。穀粒を上から流し込むと、重さの違うから、それぞれ別の口に落ちるしくみになっていて、これらを一度に選別することができるようになった。千石通しは上から穀粒を流し込むと、傾斜を転がり落ちながら振るい分けられるというものである。この2つの器具により、能率は大幅に上がった。

選別した後は保存し、必要分だけをその都度出して、搗き臼で精白する。糲や玄米の保存にはクブキが用いられた。クブキは藁をコモ編みに編んで作った俵のようなもので、湿気を防ぐため天井に上げて保存する。一升枡で4斗2升を量り、1俵とした。クブキを使わなくなつて臼を使っていたという所や、臼は白米、クブキは糲・玄米に使っていたという所もあった。

麦の脱穀は、短い棒で叩いて行っていた。そのほか、小麦は、横にした臼に束を打ちつけて脱穀したり、裸麦はメグリボウ（めぐり棒）で脱穀したりした。メグリボウは、木を2つに曲げて紐で結んだものが長い柄の先に取り付けられたもので、材質は梶の木が最も良いという事だった。

### 3. 民具解説

#### (1) 収穫・調整具

○鎌 大久保 西園 ハツエ  
柄の長さ 36.2cm、刃の長さ 18cm、刃の最も太い部分の太さ 2.7cm。柄は椎の木、刃は鉄製。柄は桟の木が最も良かった。稲刈り用。



鎌

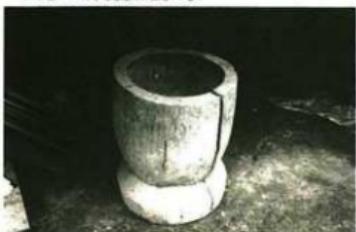
#### ○カナクラ（千齒抜き）

郡原 河野 義一  
縦 27cm、横 32cm、歯の長さ 21.5cm。  
下に付いている金具で台に取り付けて使用した。歯の数は 23 本。



カナクラ（千齒抜き）

○ツキウス（搗き臼） 小田  
高さ 61cm、直径 47cm、縁幅 5cm、内側の深さ 20cm。木製。通りすがりの家の小屋に置いてあったものを撮影した。外見に比べて内側は浅い。



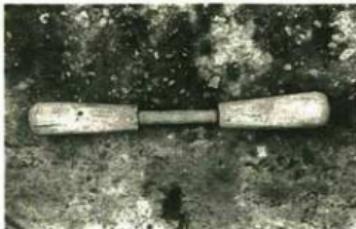
ツキウス（搗き臼）

○石臼 大久保 西園 ハツエ  
高さ 33cm、直径 45cm、縁幅 5.3cm、内側の深さ 19cm。石製。筵を敷いた上に置き、手杵で搗いて玄米を精白する。昔は松の木臼を使っていたが、松が無くなつたので石臼を使うようになった。餅や味噌を搗くのにも使った。これも昔は木臼だったが、石臼の方が搗きが良かった。



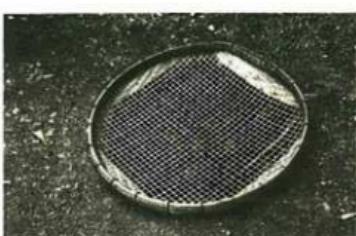
石臼

○手杵 西之町 河野 泉  
長さ 78cm、最も太い部分の直径 8cm、両側の太くなっている部分の長さ 29cm、28.5cm、中心の細い部分の直径 4.2cm、長さ 20.5cm。材質は椿。味噌や大豆を搗く。昔は精米にも使っていた。終戦直後まで使用。



手杵

○モミトオシ（初通し） 西之町 河野 泉  
直径 54cm、高さ 8.3cm、縁幅 3cm、目の大きさ 1.7cm。縁は 4 枚合わせ、針金を巻いている。孟宗竹製。  
初と、葉などのゴミを篩い分ける。終戦当時まで使っていた。



モミトオシ（初通し）

○ミ（箕） 西之町 河野 泉  
幅 66cm、高さ 19cm、縁の厚さ 1.7cm、縁幅 2.5cm。縁に針金を巻いている。これは網代編みだが昔のものは、籠編み。孟宗竹で作られたもの。農協で購入。今でも選別用に使っているが、他の家では使



ミ（箕）

っていない。

昔の籠編みのものは、モミトオシで篠った後、糠と米を分けるのに使われていた。

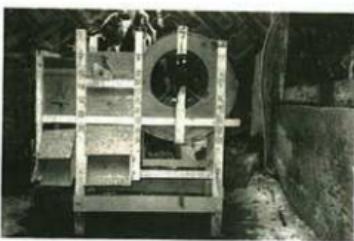
○ミ（箕） 上中 大脇 藤作  
幅71.5cm, 奥行56cm, 高さ17cm, 緑の厚さ1cm, 緑幅2.5cm。釘金で緑を巻いている。唐竹製。外側に竹の表皮が一部使われている。内側は内皮のみ。

糞を取り除いた糞を、ゴミと選り分ける。



ミ（箕）

○唐箕 郡原 河野 義一  
高さ97.5cm, 幅73cm, 奥行き42.5cm,  
円の直径54cm。上部に漏斗状の箱をのせ、  
そこから糞を入れる。  
昭和30年頃に購入。20年位前まで使って  
いた。



唐箕

○イナマキ（籠） 郡原 河野 義一  
縦180cm, 横80cm, 厚みがある。

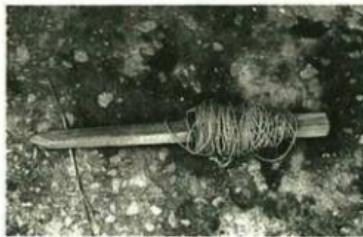


イナマキ（籠）

## (2) その他の農具

○田作り繩 大久保 西園 ハツエ  
柄の長さ51cm, 幅3.5cm, 厚さ3cm。巻かれていてる繩には22cm毎にプラスチック製の印を付けてある。

田植えの時に、苗を植える間隔の目安にする為に用いる。柄を田に突き刺して繩を張り、反対側にも棒を立てて繩を結び付ける。昔は田植えのことを田作りと言っていた。



田作り繩

○ヒラグワ（風呂鎌）

大久保 西園 ハツエ

全長61.4cm、台部の長さ34cm、幅19cm、刃の最も幅の広い部分16cm。檜の木で作った台に刃をはめ込んでいる。柄は台に差し込んでいる。柄は以前、切ってしまった。台のことをヒラ（風呂）と言う。畑を耕すのに使う。



ヒラグワ（風呂鎌）

○ヤマグワ（山鎌）

西之町

柄と刃のなす角度が小さい方は、柄の長さ96cm、刃の長さ18cm、刃の最も幅の広い部分12cm。角度が大きい方は、柄の長さ86.5cm、刃の長さ19.5cm、刃の最も幅の広い部分13.5cm。角度が小さい方は刃の四隅が丸くなっている。通りすがりの家の小屋に置いてあったものを撮影した。



ヤマグワ（山鎌）

○払い鎌

大久保 西園 ハツエ

柄の長さ99cm、刃の付け根から先端までの長さ24.5cm、刃の最も幅の広い部分5cm。柄は椎でできている。畑や杉山の雑草を刈るのに用いる。



払い鎌

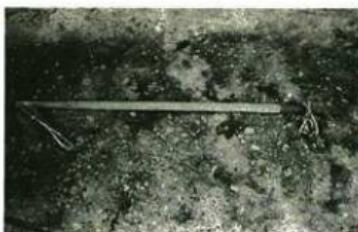
○チキリ（秤） 大久保 西園 ハツエ

柄の長さ125cm。柄の先には、直径5.9cmの鉤が付いた、長さ8cmの鎌が下がっている。おもりは高さ10.3cm、底面の直径9cm。柄とおもりには、ビニール紐が付いている。

畑で芋やキャベツを量ったり、米を1俵1俵、量ったりするのに用いる。紐に棒を通して2人で担ぎ、鉤になっている部分に芋などを吊す。柄に目盛りを打ち、釣り合う所におもりを吊して量る。

50年以上前に購入。

女性は、これを跨いでいけないと言われていた。



チキリ（秤）

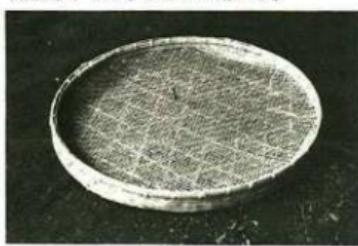
### (3) その他

○鉈 大久保 西園 ハツエ  
柄の長さ 41cm, 刃の長さ 15.7cm, 刃の  
最も幅の広い部分 5cm。柄の握る部分の  
直径 3.4cm。柄は櫻か淡柿の木。  
木を打ち払うのに用いる。



鉈

○ソウケ(笊) 上中 小脇 カツヨ  
直径 55cm, 高さ 5cm, 目の大きさ 0.7cm。  
大根を干したりするのに用いる。



ソウケ(笊)

○コゾウケ(小笊) 大久保 西園 ハツエ  
直径 32.5cm, 高さ 10.5cm, 縁幅 1.5cm,  
縁はビニール紐で巻いてある。昔は葛で  
巻いた。孟宗竹製。

米や素麺、野菜の水切りに用いる。



コゾウケ(小笊)

### ○バラ(笊)

小田

直径 66cm, 高さ 8cm, 縁幅 3.3cm, 縁  
の厚さ 1.5cm。縁は 6 枚合わせ。竹の表  
皮と内皮の網代編み。通りすがりの家の  
小屋に置いてあったものを撮影した。



バラ(笊)

○石臼 郡原 河野 義一  
臼の高さ 32cm, 直径 49cm, 深さ 18cm,  
縁の厚さ 5.5cm。縁 12cm, 横 13cm, 厚  
さ 6cm の突起が外側に 2 つ, 対角線上に  
付いている。台の高さ 41cm。全体の高さ  
61cm。餅搗きに使ったもの。



石臼

### ○挽き臼

小田

直径 30.5cm。上面に刻みを入れてある方  
が下臼。上臼は上面に深さ 2cm の窪みが  
ある。上臼の高さ 10cm, 下臼の高さ 8cm。  
上臼には中心から少しづれた所に直径 4.  
5cm の穴があいている。下臼には中心に  
直径 3cm の穴があいている。上臼の縁は  
4cm で, 4.5cm の窪みがある。ビニール  
紐が下臼の穴に結び付けている。上臼は  
苔も生えていて全体に黒っぽいが, 下臼

は全体に白っぽい。通りすがりの家の小屋に置いてあったものを撮影した。



挽き臼

○挽き臼 下西目 日高 亭二  
上面に浅い溝みのある方が上臼。上臼は、  
直径29.8cm、穴の直径3.5cm、高さ13cm、  
縁は3.5cm、側面に縦3.2cm横4.4cmの  
長方形の穴が2つ、対角線上にあいている。  
下臼は、直径29cm、穴の直径4cm、高  
さ10cm、穴の周囲に梢円形の溝みがある。  
上臼は全体に白っぽく、下臼は全体に黒  
っぽい。大豆を粉に挽く。



挽き臼

### (3) その他

○鞍 西之町 河野 泉  
幅29.3cm、前部の高さ27cm、後部の高  
さ20cm。棕櫚の繩を穴に通して、それぞ  
れの部分を結び付けてある。  
武士の乗馬用。曾祖父が使っていたもの  
で、父は草や米の運搬に使っていたとい  
う事だった。下にシタビラを敷いて使用  
する。



鞍

○十手 下西目 日高 亭二  
長さ33cm。握る部分が最も細く、反対側  
の先に向かって次第に太くなっている。  
最も太い部分の直径1.5cm。手元は、直  
径2cmの球状になっている。鉤の部分の  
長さ5.5cm。

この家は昔、西之表の殿様から西之一帯  
を取り締まるように言われていて、何か  
あった時の為にとこの十手を授かったと  
いう話だった。



十 手

○草履 西之町 河野 泉  
河野泉さんは、沢山の薬草品を作られている方である。この方によれば、慶事に履く草履と弔事に履く草履では鼻緒に違いがあるという事だ。慶事用の草履は鼻緒を上から下に出して、下で留めるため結び目は下に来るが、弔事用では下から上に出すため結び目は上に来る。



慶事用の草履の編み始め。輪の上に鼻緒になる部分が来ている。



弔事用の草履の編み始め。輪の下に鼻緒になる部分が来ている。

○餅踏み用の草履 西之町 河野 泉  
長さ12.5cm、幅6.5cm。鼻緒に巻きつけてあるのは、糸を継って作った市販の紐をほどいたもの。昔は芙蓉の木を叩いて繊維にして使っていた。腰緒（足の甲に掛ける緒の部分）は、赤と白の布を巻きつけた藁の束を交互に縫って作る。  
子供が生後1年経たないうちに歩き始めたら、これを履かせて餅を踏ませる。餅踏みは今でも行われている行事である。



餅踏み用の草履

○豆草履 西之町 河野 泉  
長さ7cm、幅4cm。形、色は餅踏み用の草履と同じ。  
昔の道中安全の御守り。現在は交通安全の御守りとして使う。



豆草履

○葬式用の草履 西之町 河野 泉  
長さ20.5cm、幅8cm。鼻緒は藁。腰緒は白い紙を藁の束に巻き付けたものを縫って作る。  
葬式の時、近親の者が墓地まで履いて行き、脱いで畳ってくる。これは現在も行われている。



葬式用の草履

#### 4. さいごに

初めての民具調査だったが、思うように農具を見つけることができず苦労した。

また、初めて農業を調査してみて、農業というものの奥の深さのようなものを感じた。一口に農業と言っても内容は多岐にわたる。歴史や風土とも大きく関わってくるものである。そういう意味で、今回の自分の勉強不足を深く反省している。そして、最も日常的で身近なものの1つであったはずの農具も、私にとっては馴染みの薄いものになってしまっている、という事を改めて認識させられた。

今回は、丁度農作業の忙しい時期に重なり、調査させて頂いた方々には大変な御迷惑をかけてしまった。にもかかわらず、南種子の人々は親切で、とても温かかった。そして自然も素晴らしい、美しい海と砂浜が心に焼き付いている。これからもずっと残していきたいと強く感じた。

最後になりましたが、温かく迎えて下さった南種子の皆様、御世話下さった関係者の方々に、心から御礼を申し上げます。

#### 伝承者一覧（敬称略）

茎永	宇都浦	大崎	蘇市	(M45. 3. 26)
"	"	"	アキ	(T 2. 9. 2)
西之	前之原	鮫島	宗英	
"	"	"	和子	(S 2. 1. 25)
島間	大久保	西園	ハツエ	(T 9. 6. 1)
上中	西之町	河野	泉	(T 13. 10. 30)
"	"	"	ツミ	(T 14. 11. 1)
"	中之上	小脇	カツヨ	(S 14. 10. 1)
"	上野	大脇	藤作	
"	"	"	トヨ	(T 12. 3. 10)
西之	下西目	日高	亨二	(T 8. 3. 10)
"	"	西村	いづえ	(S 15. 12. 3)
"	"	日高	静一郎	(M33. 2. 25)
"	"	徳永	アキ	(T 7. 1. 20)
下中	郡原	河野	義一	

## 農具IV（畑作・民具解説）

大学院生 庄 武 憲 子

### 1. はじめに

今回の南種子町での民具調査に望むにあたって、方法として一村落一軒の家における畑作農具の時代的変遷をつかむことに焦点をおくことにした。しかし、思ったより、現存している農具の数が少なく、結局途中で方法を変更して、現在残っている銀を中心に行なうこととした。

調査村落は、茎永地区の雨田、中之町、松原、中之下地区的山神、西之地区的田代、下立石、中之上地区的中之塙屋、焼野、河内である。

### 2. 概 観

#### (1) 村落の概観

田代 T・11 生 m (農業)

真所～鹿鳴川までの水田約60haは昔から平野と田代村落が耕作している田であった。この中には西之表の土族の所有している土地を小作しているものも多かった。

また田代村落は、下立石～砂坂の間の海上に漁業権を持っていた。

河内 M・39 生 m

(S20～農業、営林署、県の土木課勤務)

河内村落は中之上地区で一番最初に開けた村落であった。昔は茎永地区に役場があったため、もっとにぎやかであった。この村落は温泉が涌きだしており現在は村落中の人が種芋が早く発芽するように、お湯につけてきている。



河内の温泉に種芋をつけて干す所

中之塙屋 T・4 生 f (半農・半漁)  
マキについての昔話がある。

昔、ある一軒の家が、牧場(マキ)の馬を盗んできて食べてしまった。それがばれて調べの者が訪ねてきた。馬を食べた家の両親は、何を聞かれてもだまっていた。調べの者は、その家の子供にも訪ねようとしたとき、母親が子供に何をしゃべらないようにと目で合図した。その目を見た子供は「アッパー(母さん)の目は、厩の隅にある馬の目んごとじゃ。」といってしまった。それを聞いた調べの者が、厩の中を調べてみると、(食べたあと)馬の頭が厩の隅に隠してあった。そのためこの家のものは島流し(追放)にされることになった。そして、船にのって流される時に母親は村落に向かって「この部落はこの後、九軒以上決して増えるな」と言い残していった。それ以来この大川の村落は本当に九軒以上増えない。

馬を盗んだ家は大川に新しく十軒目にきた家であったという。共有権(カブ)ももっていなかったので、薪をとることもできなかつたし、生活が苦しいので、馬を盗んでしまったのだろうと思う。

下立石 M・43 生 m (S21～農業)

下立石村落には今から五百年以上前、島主の種子島家より106町の山(共有地)が当てられた。下立石村落は耕作地が少なく、この共有地から切り出す森林の木材を燃料にして塙を製造し、それで食べていいということであった。この村落は塙のおかげで生活をしていた。

また共有地のおかげで、耕作地のない家も、そこを開墾し耕作地をつくることができた。

#### (2) 農業概観

雨田 M・40 生 m (農業)

・田……一番多い時は一町六反程作っていた。現在は五反程。

・畑

①主要作物はカライトモとサトウキビ。(減反政策のため田をサトウキビに作りかえたものである。)

②ソノバタケにキュウリ、ナス、カボチャ、玉菜(キャベツ)、白菜、大根などを作っていた。

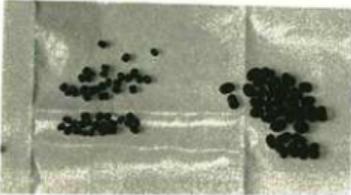
また七夕から盆にはモヤシを必ずつくるものである。(これは現在も作っている。)ブンドウササゲ、クロササゲを使用する。その豆を一晩水に浸し、翌朝芽ができるように割る。ソノバタケを二帖程掘り返して水をまき、種をおいて、ふた(木を横に渡し、葉などを被せる)をして一週間程おく。



雨田のソノバタケ  
菜の花が植えられている



雨田のソノバタケ  
ビニールハウスの中で福の苗が育てられている



ブンドウササゲ(左)とクロササゲ(右)

中之町 M・38 生 f (農業)

・田……1町程作っていた。

・畑

①家の近くに七畝、上中の長谷近辺に2反ほどあった。主要作物はカライトモとソバであった。

②開墾地はアラキという。大崎近辺の官山を払い下げてもらったものを、開墾して畑にしていた。主にカライトモ、サトウキビを作っていた。

③家のまわりの野菜畑をソノバタケという。

松原 T・3 生 f (農業)

・田……1町2、3反程作っていたが、その大部分は借地であった。収穫の半分ぐらいを地主に渡すものであった。

また田の裏作には麦をつくっていた。

・畑

①村落の近辺にスナバタケをもっていた。主に自家用の粟、ソバを作っていた。

②山を開墾して畑にしたものアラキという。あちこちの山を開墾してアラキにしていた。主にカライトモとオーギ(サトウキビ)を作っていた。カライトモは戦前~戦後にかけては主食であった。その後換金作物となっていました。

山神 T・7 生 m (農業)

・田……1町程作っていた。裏作にはハダカラ麦を作っていた。

・畑

①坂を上った土地に畑をもっていたからウエノハタケと呼んでいた。オーギとカライトモを作っていた。

②カヤのはえている土地を開墾して畑にしていた。アラキという。主にカライトモをうえていた。

田代 T・11 生 m (農業)

・田……6反程作っていた。

・畑

①一般の畑をセジョウの畑という。家から離れてそとにあるのでそういうのであろう。

昭和30年くらいまで、粟、ソバ、ダゴタカキビ（コウリヤン）を主食の補助として作っていた。また現在の様に米がなかったので、ノイネを作っていた。大豆も少し作っていた。

②農閑期に山の木を切り払って開墾し畑にした。アラキという。主にカライモを作っていた。

③家のまわりにある畑はソノバタケという。

下立石 M・43 生 m (S21~農業)  
・田……7反程作っていた。この田は兵隊にいた時の月給をためて人から買ったものである。現在は自分の甥が耕作している。

・畑

①自分の土地4反と共有地に1町ぐらいもっていた。主にでんぶんの材料としてだすカライモを作っていた。

②山を開墾した畑をアラキといった。カライモ、キビ（サトウキビ）、ノイネ、また豆類、カボチャ、里芋なども作った。

③家のまわりにある畑をソノバタケという。大川、上立石、下立石の村落は山が多いので、ソノバタケを持つ家は少ない。自分の家は、家の前にネギやナッパをつくっている。

中之塙屋 T・4 生 f (半農・半漁)

・田……河内に2反、大川に1反4畝ぐらい持っていた。息子の代になってから河内の土地は売って、大川のマルノに2反新しく開いた。

・畑

①島間のチップ工場近辺と上中の方に1町ほどついていた。主にカライモ、キビ（サトウキビ）、ナタネを作っていた。またガシンサンという薬の原料になる作物を作っていた。粟、ソバ、ノゴメも作っていた。

②家のまわりにある畑をソノバタケという。カボチャ、キュウリ、ネギ等を作る。



中之塙屋のソノバタケ

焼野 T・13 生 f (農業) 肝属郡出身

・田一

・畑

①カライモ、サトウキビ、大麦、小麦を作っていた。サトウキビは6反程作っていた。養蚕の桑を1町ほど作ったこともある。現在はハウス栽培でエンドウ、インゲンなどを育てる。またカライモを作るまわりにはササゲをつくるものであった。

③家のまわりの畑は、ナッパ、ネギ、ナスピ、フロウマメ、ツルナシインゲンなどを育てる。

河内 M・39 生 m

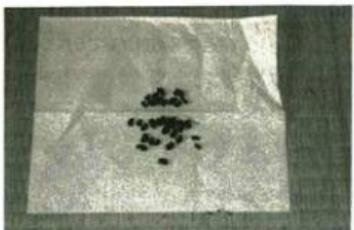
(S20~農業、営林署、県の土木課に勤務)

・田一

・畑

①粟、ソバなどを作っていた。

③家のまわりの畑をソノバタケという。昔から、盆にあげるためにササゲをつくるものであった。またささげでモヤシをつくるものであった。現在は、トウモロコシ、キュウリなどを作っている。



クロササゲ（河内）



河内のソノバタゲ  
カライモの苗床が作られている



カライモを貯蔵するための「カマ」(河内)  
カヤが使用されている。

### (3) 農具

茎永 T・3 生 f (農業)

#### 脱穀について

- 田……稻はセンバ、足ぶみ脱穀機を使用して脱穀していた。
- 烟……粟、ソバはメグリ棒でたたいて脱穀していた。メグリ棒は1m50cmぐらいの棒の先に30cmくらいのひもをつけ、そのまた先に棒をついたものでバタン、バタンとたたくものであった。  
……ハダカ麦はイゲがあったので、サシでたたいて落とすものであった。

田代 T・11 生 m (農業)  
脱穀について

- 烟……大麦、小麦は臼を横に寝せて、それに麦をたたきつけて実を落とすものであった。
- ……ソマは竹製のサシでたたいて実を落とすものであった。またメグリ棒を使用した。
- ……大豆は、木の棒でたたいて実を落としていた。

下立石 M・43 生 m (S21~農業)  
収穫について

- 烟……カライモはヒラグワで掘り起こす。  
……里芋は、ミツマタ、ヤマグワで収穫する。またガジュツを掘るのにミツマタは便利である。



「カマ」に使用されるカヤ (河内)

## 3. 民具解説

### (1) 鍬

タウチグワ (改良鍬)  
柄の長さ 100cm、刃の長さ 40cm、刃の幅 13cm。腰のあとの小屋に収納している。田、烟を耕すのに使用していた。



タウチグッ（改良鋤）

雨田

柄の長さ 93cm, 刃の長さ 46.5cm, 脪のあととの小屋に収納している。田、畑を耕すのに使用していた。馬が通らないようなムタダ（湿田）、畦きりなどの作業に使用していた。



ヒラグッ（改良鋤）

山神

柄の長さ 111cm, 刃の長さ 42cm, 刃の幅 13.1cm。脹のあととの小屋に収納している。鋤は金物屋で購入する。昔は、田代の鍛冶屋で、購入、修理をしていた。

この鋤は現在もまだ使用している。



ヒラグッ（改良鋤）

下立石

柄の長さ 104cm, 刃の長さ 42cm, 刃の幅 13cm。脹のあととの小屋に収納している。農協で購入したもの。田、畑のどちらにも使用する。二年ほど前まで使用していた。

ヒラグッ（改良鋤）

中之塩屋

柄の長さ 108cm, 刃の長さ 38cm, 刃の幅 13cm。脹のあととの小屋に収納している。農協（牛野、大川、上立石、下立石村落の支所）で購入したもの。ソノバタケで野菜を作るのに使用している。



ヒラグッ（改良鋤）

焼野

柄の長さ 100cm, 刃の長さ 33cm。脹のあととの小屋に収納している。上中の店で購入したもの。これは百姓一般の鋤で畠の溝をたてたり、中うちに使ったりする。10年ぐらい前まで使用していた。



**ヒラグワ（改良鋤）** 燃野  
柄の長さ 104cm, 刃の長さ 33cm。刃の部分は、鋸びよけと軽くするためにステンレス製になっている。厩のあと的小屋に収納している。普通畑に野菜を作る時に使用している。

**ヒラグワ（改良鋤）** 河内  
柄の長さ 74cm, 刃の長さ 39cm, 刃の幅 13cm。柄は使い易いように自分で切ったものである。現在使用していないため鋸びている。



**ヒラグワ（改良鋤）** 河内  
柄の長さ 105cm, 刃の長さ 36cm, 刃の幅 11cm。店で購入したもの。家まわりの畑で使用する。現在畑では、トウモロコシ、キュウリの種をまき、カライモの苗床をしている。



**ヒラグワ（改良鋤）** 河内  
柄の長さ 106.5cm, 刃の長さ 40.5cm, 刃の幅 12.5cm。



**ヒラグワ（改良鋤）** 雨田  
柄の長さ 105cm, 刃の長さ 33.5cm, 刃の幅 12cm。刃の部分はステンレス製である。厩のあと的小屋に収納している。田、畑の耕耘、除草に使用している。引いて使用する。



ヒラグツ（改良鋤）

雨田

柄の長さ 105cm, 刃の長さ 35cm, 刃の幅 12cm。刃の部分はステンレス製である。既のあと的小屋に収納している。田、畑に使用する。



ヒラグツ（改良鋤）

山神

柄の長さ 110cm, 刃の長さ 36cm, 刃の幅 12.1cm。刃に「清武中川 ステン」と彫りがはいっている。倉庫に収納している。最近はやってきたヒラグツである。ステンレスでできているので鋸びにくい。



ヤマンクツ（山鋤）

山神

柄の長さ 106cm, 刃の長さ 20cm, 刃の幅 8.5cm。倉庫に収納している。開墾に使う。もう少し刃の幅の広い山鋤もある。刃の狭いもののはうが古い。

ヤマグツ（平山鋤）

下立石

柄の長さ 107.5cm, 刃の長さ 25cm, 刃の幅 12cm。既のあと的小屋に収納している。農協で購入したもの。アラキを打つ（開墾する）時に使用していた。



ヤマグツ（平山鋤）

焼野

柄の長さ 104.3cm, 刃の長さ 22.5cm, 刃の幅 12.5cm。既のあと的小屋に収納している。上中の店で 20 年ぐらい前に購入したものの。普通木の根を掘ったり、竹の根を掘ったりするのに使用する。



ヤマグワ（平山鋤）

柄の長さ 107cm、刃の長さ 17cm、刃の幅 11.5cm。厩のあと的小屋に収納している。木の根を掘ったり、竹の根を掘ったりするのに使用する。現在も使用している。



ヤマグワ（平山鋤）

河内

柄の長さ 72cm、刃の長さ 17cm、刃の幅 9.3cm。柄は使い易いように自分で切ったもの。現在はあまり使用しないが、竹をおこしたり、道を作ったりするのに使用する。



ミツマタ

柄の長さ 104cm、刃の長さ 23.5cm。厩のあと的小屋に収納している。農協で購入した。ソノバタケで野菜を作るのに使用している。

中之塙屋



ミツマタ

焼野

柄の長さ 99cm、刃の長さ 23cm。厩のあと的小屋に収納している。主に田で使用する。水を張ってから田の高低をならすのに使用していた。



## (2) 除草機

タオシグルマ（田車）

雨田

柄の長さ 99cm、柄の幅 35cm、車の長さ 49cm、車の幅 15cm。水田の除草に使用する。土を反転させて、草をひっくり返す。昭和 50 年頃にほとんど使われなくなった。



タウチグルマ（田車） 山神  
柄の長さ 110cm, 車の長さ 53cm, 車の  
幅 26cm。柄に五〇型・文明式 鹿児島市郡  
元町 文明農機株式会社と文字が入ってい  
る。水田の除草に使用していた。



タウチグルマ（田車） 田代  
柄の長さ 110cm, 車の長さ 59cm。柄に  
五〇型・文明式 鹿児島市郡元町 文明農  
機株式会社と文字がはいっている。南種子  
農協で購入したもの。昭和35年ぐらいまで  
使用していた。子供から大人まで使用でき  
る。草をひっくり返すために押すだけであ  
る。



(3) サトウキビ用農具  
タオシグワ, キビタオシ 下立石  
柄の長さ 39cm, 刃の長さ 14cm, 刃の幅  
8cm。サトウキビをたおすのに使用する。2  
年ぐらい前まで使用していた。



オーギタオシグワ 焼野  
柄の長さ 40cm, 刃の長さ 12cm, 刃の幅  
9.3 cm。サトウキビをたおすのに使用する。  
サトウキビ栽培をやめてから 13 年たつ。



オーギガマ 焼野  
取っ手の長さ 13cm, 刃の長さ 6cm。サ  
トウキビの葉を落とすのに使用する。





オーギガマの使用（下立石）



#### (4) 鎌

ハライガマ

下立石

柄の長さ 36cm, 刃の長さ 16cm。柄に土佐（中）と文字が入っている。草をはらうのに使用していた。



クサキリガマ（草切鎌）

河内

柄の長さ 33cm, 刃の長さ 17cm, 刃の幅 4.3cm。使い込んで刃が細くなっている。昔は馬のエサを刈るのに使用していた。

クサキリガマ（草切鎌）

河内

柄の長さ 33cm, 刃の長さ 17cm, 刃の幅 2cm。昔は馬のエサを刈るのに使用していた。



クサキリガマ（草切鎌）

河内

柄の長さ 33cm, 刃の長さ 17cm, 刃の幅 4.3cm。使い込んで刃が細くなっている。昔は馬のエサを刈るのに使用していた。

#### (5) そのほか

ナタ（鉈）

下立石

柄の長さ 44.3cm, 刃の長さ 14.5cm。風呂の炊き物（薪）を切るのに使用していた。



ワリヨキ

柄の長さ 90cm, 刃の長さ 22cm, 刃の幅 5.3cm。大きな木を割るときに使用する。



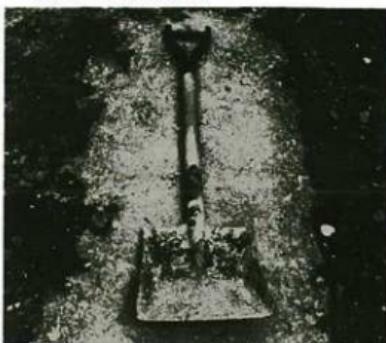
スコップ

柄の長さ 69cm, 刃の長さ 30cm。砂利をどけるのに使用する。



フォーク

取っ手の長さ 9cm, 柄の長さ 73cm, 刃の長さ 29cm。馬のこやしをまくったり, 牛のエサをまくったりしていた。現在は荒い草をどけたりするのに使用する。



ジャリヨセ (砂利寄せ)

柄の長さ 106cm, 刃の長さ 13cm。砂利を寄せるのに使用する。



カリコ（背負い梯子） 山神

全長100cm、幅、上19cm、中22cm、下33cm。背負う縄は本来藁縄がつけてあったが、現在はゴムホースをかわりにつけてある。草、木を藁の縄でくくりつけ背中に背負って運ぶ。今は耕耘機で運ぶが、ない場合カリコを使用する時がある。



#### 4. 最後に

田植え、サトウキビ収穫にあたる大変忙しい時期に、ご親切にいろいろと教えて下さいました南種子町の皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

# 運搬具（人力運搬・畜力運搬・民具解説）

引 地 ルミ子

## 1.はじめに

雄大な黒潮の流れを受け止める南種子町。美しい自然と古きよき伝統、そして近代科学が共存するこの町で、人々はどんな生活を営んできたのだろう。

私は運搬具を中心とした調査を進めた。自分自身の予備調査の不十分さから調査に偏りがあったり、不明瞭な点が多くあることをはじめにお詫びしておきたい。

## 2.概観

運搬具には大きく分けて人力運搬と畜力運搬がある。リヤカーや、自動車が普及している現代において、昔から使っている運搬具を見つけることはなかなか困難であった。あっても今は使っておらずほこりをかぶっているというものも多かった。

そんな中で、1日目は茎永の雨田、2日目は西海の中塩屋、3日目は下中の里、4日目と5日目は上中周辺、6日目は下中の真所、7日目は平山の仲之町と西之町を調査した。

### 《人力運搬》

#### ・頭上運搬

荷物を頭の上にのせて運ぶことを、「カンメる」という。クッション代わりとして、カーブシが使われていた。これは種子島では「カーブシ」と呼ばれている。カーブシは藁、または藁は重いということでユガヤ、ユ（藺草のこと）を使い、一輪車の車輪ほどの大さきのドーナツ状に編んで作られるものである。頭が痛くならないようにブクブクした具合の良いものを作るようになっていたよ

うである。

カーブシを使うのは女性だけである。つまり頭上運搬は女性のみが行っていた。馬の飼料や薪、稲、からいなど時には米一俵などかなり重いものまで運んでいたという。

カーブシのうえに荷を載せ、一旦肩に載せてから頭にもってくる方法、頭の上にまづカーブシを載せ、あらかじめ少し上の方（土手の上など）に置いておいた荷を載せる方法、荷物の上にカーブシを載せ、それをひっくりかえす形で頭にもってくる方法などを聞くことができたが、荷の重さによってその方法もさまざまだったのである。荷は両手で支えて運んでいた。

頭上運搬、及びカーブシについては誰もが知っていて詳しく聞けたものの、カーブシ自体は見つけることができなかった。使っていたのは戦時中までという伝承者の話もあったことから、昔は成人女性なら誰もが行っていたカーブシを使った頭上運搬は戦後急速に消えていったと思われる。この理由として、一輪車などが普及したことや、頭上運搬は歩きやすいが両手が不自由になってしまうという欠点があったことなどが考えられる。

#### ・肩担い運搬

肩に担う運搬として一番多く聞くことができたのは担い棒を使っての水の運搬であった。担い棒は種子島ではニナイギ、ニナギと呼ばれている。杉の木を削ってつくるもので、その断面はすべてが梢円形であった。両端に担い鉤をつける。最も古い形のものはその鉤に木のまたを使用している。そして時代とともに針金で作られた鉤に変わっていたようだ。鉤の長さは使う者の体

型に合わせて調整していた。多くは水の入ったタンゴを運ぶのに利用されていたが、時として魚や畠での収穫物を運ぶのにも利用されていたようだ。水道のなかった時代は川から水を運んでいた。その水を運ぶためにニナーギは欠かせないものであつただろう。水道の普及とともにニナーギは利用されなくなつていったと思われる。

水を運ぶためのニナーギのほかに、縄を運ぶオウコの話を聞くことができた。ひとつ葉の木を2メートルほどに切り、削って、一方だけを尖らせたもので、それを縄束にさして肩に担って運んでいたそうだ。

また、詳しくは聞くことができなかつたのだが、ニナーギ、オウコを使い一人で担う方法のほかに、棒の真ん中に編みモッコをさげて二人で運ぶ運搬方法もあったようだ。

#### ・背負い運搬

背負い運搬は、運搬の中でもいろいろ種類がある。背負い籠、背負い梯子、背負い縄がそれにあたる。種子島で聞くことができたのは、カンザー、カリーコ、カリーノー、ククリなどの民具である。

カンザーは川や田に生えているミチシバを花の咲く9、10月頃に取ってきて乾かしたものを使って編んで作る。特に山仕事には欠かせないものであつたらしく、山へいくときは弁当や鎌を入れていき、帰りには薪などを縛り付けて運んでいた。時には子供達も教科書を入れて学校へ通っていたという。

カリーコもカンザーと同じく薪や馬の草を運ぶものとして使われていた。立木は杉の木かまたはシイの木を使っており、真っすぐのものでなく背中の形に合わせて少し曲がったものを選んでいた。横木は2本または3本で、その間にシロ縄が巻かれている。昔は藁を巻いていて藁が腐るたびに新しいものを巻き直していたようだ。クギは使っておらず、はめ込み式である。

カリーコの爪の有無であるが、今回わた

しの見せてもらったカリーコの中には爪のあるものはなかつた。有爪のカリーコを使うのは木炭業、炭焼きの仕事をしている人々であったらしい。隣の屋久島と比べると種子島は平たい島である。無爪カリーコよりも有爪カリーコの方が多く見られる屋久島と比べて種子島では有爪カリーコを使うのが山師に限られているのはそういった理由によるのかもしれない。

種子島のカリーコの特徴として上方に木のまたを利用した固定のためのものが付属していることが挙げられる。これは横木が2本の場合は立木に、3本の場合は一番上の横木に縄を使ってぶら下げているといった感じである。この形であると、単に横木を使って縄で荷を固定するよりも、固定するための縄が左右に動くことなく、よりたくさんのものをよりしっかりと固定して運ぶことができるのではないかと考えられる。私の考えはここまで、なぜ種子島のカリーコにこういった特徴が見られるのかという疑問に対する結論は出せなかつた。

カリーノーはそれ自体単独で使われているものと、カリーコやカンザーに付属しているものとに分けられる。単独で使われているものは1本縄であり、背中や肩にあたるところはくい込まないように太く三つ編みに編んであってほかのところは普通に細く編んであったという。カリーノーは実際に見ることができなかつた。

そのほかに背負うものとしてククリの話を聞くことができた。これはカンザーよりも少し小さめのもので、藁やシロを編んだりして作るものである。山や、海に行くときに弁当や小道具を入れるために使用していたそうだ。

#### ・その他

ソーケにはコゾーケ、アライゾーケ、ミゾーケなどの種類があり、アライゾーケ、ミゾーケで肥やし、芋等を入れて手に抱えて運んでいたようだ。チンチク竹を使って編んで作っていた。ミゾーケの芯は曲げやす

いように柔らかい若木を使っていた。

モッコには編みモッコと竹モッコがあり、竹モッコはチンチク竹を編んで作られるもので、石や砂を運ぶ家の建築時、窓の開墾時には欠かせないものであったという。向かい合わずに二人でもっていた。編みモッコは土などを入れて担い木の真ん中にさげてそれを二人で担って運んでいた。

カガイには大小いろいろな大きさのものがあり、繩を小指くらいの太さに結った袋状のものであった。砂や堆肥、芋を入れて鞍をつけた馬に運ばせたり、棒にさげて担っていたりしたという。

### 《畜力運搬》

種子島では昔はどの家でも馬が飼われていたそうだ。馬は畑の耕作から、荷物の運搬まで幅広く活動していた。馬の鞍に関じて、ニグラ、ダシグラ、バシャグラの3つを見せてもらうことができた。

ニグラは椎の木、または松の木を利用して作る。馬車が出てくるまでは専らこのニグラを使い、米、ライモ、サトウキビなどを運んでいた。馬と荷のバランスを保つために坂道を上ぐるときは胸の方にムナガー、下るときは尻の方にシンガーをつけていた。

ダシグラは山から木を降ろすときに使われていたもので、木にホタマワシを打ち付けて馬に引かせていたそうだ。

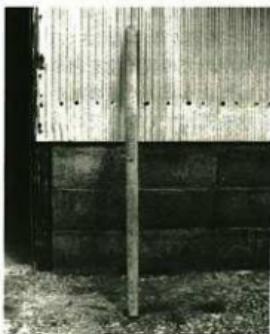
また海に馬を連れて行き、海水に浸からせ、浜を歩かせてついてきた砂をカガイに入れて運ばせるという昔の人々の知恵を聞くことができた。

## 3. 民具解説

### (1) 担い棒

#### ①ニナーギ

西海（中塙屋） 中峯エダ  
杉の木を削って作る。長さ 124.6cm。海の浦でとれた魚を籠に入れ、それに紐をつけてつるす。時には畑のものも運んでいた。



#### ②ニナーギ

下中（里） 寺内ツヤ

一つ葉の木を使って作る。鉤の部分は針金。鉤は人の体型に合わせて長さを調節する。水を運ぶときに使用する。長さ 126cm。鉤の長さ 46cm。写真は寺内さんにニナーギを担ってもらったところ。



#### ③ニナーギ

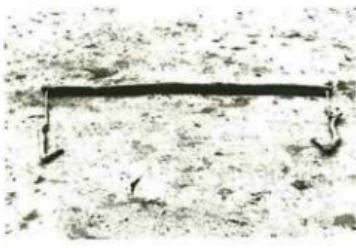
下中（真所） 才川貞巳（亡） 家跡

長さ 111.5cm。鉤の部分の長さ 49cm。鉤の部分は針金で作られている。おそらく購入したものと思われる。重箱をふろしきに巻いてさげたり、水を運んだりしていた。木の名前が彫ってあり、これは人に貸したりするためのものと思われ、家だけでなく外でも使っていたことが分かる。写真は社会教育課長の崎田先生に担ってもらったところ。



#### ④ニナーギ

下中（真所） 羽生繁保  
杉の木を使っている。ニナイカギの部分には木のまたを利用している。長さ116cm。鉤の長さ48.5cm。真横に担うのではなく、肩に斜めにして担う。水を川から運ぶときに使用していた。



### (2) 背負い籠

#### ①カンザー

茎永（雨田） 雨田新七  
ミチシバを編んで袋を作り、カリーノーをつける。昔はそれぞれの家で作っていた。ミチシバは川の土手、たんぼによく生えていて、花が咲く9月から10月頃刈り取り1,2日干してから使っていた。主に畳の表に使われていた。

山仕事に行くとき、縄、鎌、弁当などを入れていた。そして帰りには薪を運んでいた。特に山仕事には欠かせないものであつたらしい。また、山仕事だけでなく子供達

も教科書などを入れて使っていた。このカンザーは観光品用に作られたものである。縦19cm、横42.2cm。



#### ②カンザー

西海（中塩屋） 中峯エダ  
ミチシバを結って作る。横45.8cm、縦39.5cm。野菜や弁当、鎌、鉈などを運んでいた。現在でも使用している。



### (3) 背負い梯子

#### ①カリーコ

西海（中塩屋） 中峯エダ  
立木は杉の木を使う。それに藁縄を巻きつけている。立木はずっと同じもので壊れた部分だけを直していく。高さ99.2cm。下の幅34.5cm。馬の草や薪を運ぶときに使っていた。これは中峯さん自信が使っていたもので次に挙げるご主人が使っていたものよりも軽い。



### ②カリーコ

西海（中塙屋） 中峯エダ

中峯さんご主人が作ったもので、中峯さんが使っていたものよりもかなり重たく丈夫にできている。高さ 98cm。



### ③カリーコ

上中（上野） 大脇トヨ

立木は杉の木を使っている。背にあたる部分には昔は藁を編んで巻いていたが今は綱を使用している。たき物や草を運ぶときに使用していた。現在も使用している。高さ 95.4cm。下の幅 31.2cm。



### ④カリーコ

上中（上野） 外園チカ

立木は杉の木を使う。立木は男の人が作り女のが藁を編んで巻いていた。藁は腐ってしまい今ははずしている。現在立木だけが残っている。高さ 98.3cm。たき物を運ぶときに使っていた。



### ⑤カリーコ

上中（仲西） 日高フジエ

立木は杉の木を使っているがどんな木を使ってもよかった。背にあたる部分は昔は藁を編んで巻いていたが藁は腐ってしまうためシュロの綱を使用するようになった。たき物などを運んでいた。ふろを沸かすのに

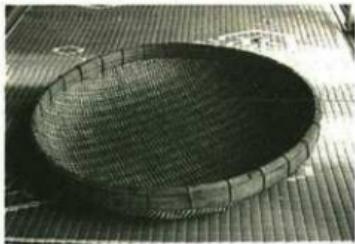
使う薪を山で集めるために欠かせないものであった。高さ 101.6cm。下の幅 32.7cm。



#### (4) ソーケ

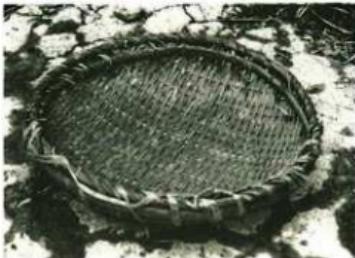
##### ①アライゾーケ

下中（里） 寺内ツヤ  
チンチク竹を使って編む。肥料を入れて畑まで運んだり、芋を売りにいくときに使用していた。主に女性が使っていた。今でも使っている。直径 50.7cm。



##### ②アライゾーケ

上中（仲西） 日高フジエ  
チンチク竹を編んで作る。堆肥や芋を運んでいた。直径 53cm。



##### ③ミゾーケ

上中（仲西） 日高フジエ  
チンチク竹を編んだものに杉の木で作った取っ手のようなものをつける。杉の木は曲げやすいように若いものを選ぶ。肥やしや芋を運んでいた。幅 30.6cm。



##### (5) 鞍

##### ①ニグラ

平山（西之町） 山田キヨコ  
馬車の入れない場所に荷物を運ぶときこの鞍を馬に背負わせて荷物を運んでいた。坂を下るときは鞍がずれないようにシンガーをつけていた。小さいほうが前。前の高さ 53.2cm。後ろの高さ 49cm。幅 71.6cm。



### ②ニグラ

下中（里） 寺内弥六

椎の木を使って作る。おかげたは松の木を使うようだ。大きさの違うものが二つあり、小さい方が前、大きい方が後ろになる。これは後ろのものである。馬と荷のバランスを保つために、坂道を上るときはムナガー、下るときはシンガーをつけていた。米やからいも、サトウキビなどを運んでいた。馬車が出てくるまではこのニグラを使っていた。高さ 48.5cm、幅 78.5cm。



### ③ダシグラ

下中（里） 寺内弥六

山から木を降ろすときに使われる。ホタマワシを木に打ち込んで馬に引かせる。高さ 80cm、幅 97.5cm。



### ④バシャグラ

下中（里） 寺内弥六

大きな馬用のものである。二輪の馬車をひいていた。高さ 117.3cm、幅 91cm。



### ⑤バシャグラ

下中（里） 寺内

弥六

小さな馬用である。二輪の馬車をひかせていた。高さ 96cm、幅 95.5cm。



### ⑥バコウグラ

下中（里） 寺内弥六

馬耕のときに使われる。馬にこの鞍を乗せてスキを引かせていた。馬の背中が痛く

ないようにするため、馬の背に当たるところに藁で作ったクッションのようなものをつけた。高さ 60.2cm、幅 69.3cm。



#### 4. 最後に

初めての民具調査であった。自分の予備調査の不十分さから訳の分からぬことを聞いて伝承者の方々を困らせたこともあった。ロケットマラソンなどで島中が慌ただしく、しかも田植え時の本当に忙しい折り。突然訪ね、長々と居座ってしまった私に最初から最後まで貴重なお話しと素敵な笑顔を教えてくださった伝承者の方々、並びに私たちに調査しやすい環境を整えてくださった役場及び教育委員会の方々に、心よりお礼申し上げます。

#### 〔伝承者名簿（敬称略）〕

茎永	雨田	雨田 新七	(M40. 1. 11)
西海	中垣屋	中堯 エダ	(M43. 3. 20)
上中	上野	大脇 トヨ	(T12. 3. 10)
		外園 チカ	(T9. 9. 1)
		原田 シズエ	(S2. 2. 15)
仲西	日高	フジエ	(M36. 2. 23)
	里園	フキエ	(T13. 8. 20)
下中	里	寺内 弥六	(M35. 7. 30)
		寺内 ツヤ	(M40. 8. 20)
		寺内 トメ子	
真所	羽生	繁保	(T10. 11. 10)
平山	西之町	山田 キヨコ	(S9. 5. 25)
		西田 カメ	(M45. 7. 19)
		中畠 ツギ	(T12. 2. 1)
仲之町	鮫島	増夫	(M43. 3. 31)

# 漁具（漁法・民具解説）

日比野 恭一

## 1. はじめに

今回の南種子調査は、有形調査である。今まで無形調査しかしたことのない自分にとって、この調査には何か前回までの調査とは違った緊張感があった。

メインテーマは漁業である。回りを海に囲まれた種子島は絶好の漁場といえよう。それだけに、漁業は自分にとってやり甲斐のあるテーマとおもわれる。

## 2. 概 観

種子島は、民俗の豊かな土地であるとよくいわれている。漁業に関連して、その豊かさを象徴的に表すものとして、エビスがあげられるであろう。

種子島のエビスは、自然石を神体とした極めて素朴なものである。しかし、これにはこの土地に住み、生活をしてきた人々の思いがこめられており、民俗の宝の一つといえる。また、このエビスには日本のエビスの原点があるともいえる。

種子島のエビスが象徴するように、ここには古くから変わることのない習俗が根付いている。

しかし、時代の流れとともに、変化を余儀なくされる面もある。その一つが技術の向上に伴う変化である。網漁の盛んな種子島であるが、網の材質も今ではナイロンがほとんどである。ここにも時代の流れの一端がうかがえる。

次にモジャコ漁に目をむけてみる。昔は人の手で網の調節をしたそうである。今では、それはローラーによって動力化されて

いる。また、今ではすくい網でモジャコをとっているのだが、昔は巻き網を用いていた。(平山 浜田)

漁業を行う一方で、観光客を対象とした民宿を経営したり、船で沖釣りに連れてていったりと、漁業以外のところでも、それに関連した様々な変化が見られる。

このような変化のある反面、古い習慣を維持している面もある。西之の西目や大川、砂坂では、ベンサシの役割が今でも機能しているという。また、西之の下西目、大川では魚のアテについても、カブの制度がしっかりと働いている。種子島で代表的な魚といえば、トッピー(トビウオ)である。トッピー漁はどの部落でも行われており、漁法についてもほぼ同じであった。

他にイセエビ、モジャコ、アサヒガニをはじめイワシやボラ等、多くの魚を網を用いてとっている。そうした中で、イカを網でとったというのは、島間の中之町からしか聞くことができなかった。他の土地では、全てエギを用いていたので、興味深く思った。民具についても、エギの保存は他のものに比べてかなり良かった。

この実習を通して、港の廃船とともに放置されている木製の橋が、かなり目立った。つい最近まで使っていたという話を聞かれた。こうしたものにもっと注意を払って調査をすると、さらに多くの民具と出会えたかもしれない。

こうしてみると、民具の消滅もかなり進んでいるのがわかる。漁具は消耗品が多いので、やむを得ない面もあるのだが、それでもかなりの物が消えてしまっているというのが実感である。



大川のエビス

### 3. 漁 法

#### (1) 茅永 竹崎

##### ①トビウオ漁

2月から4月に行う。夜のうちに網を流しておく。網は高さ2メートル位、長さ300メートルから500メートルの建網で、ナイロンの8号の糸を使っている。昔は木綿や麻を使用していた。漁法としてはいわゆる流し網である。

##### ②イセエビ

9月から4月にかけて行う。網の高さは1メートル、長さ300メートル位の建網を用いる。瀬にいるエビをとるために、底に網を設置する。

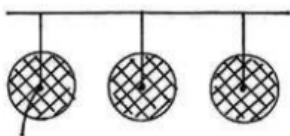
##### ③モジャコ

9月から4月にかけて建網を使ってとる。

##### ④アサヒガニ

12月から4月にかけてとる。昼間に行う。同じ網を二つ用意し、この二つの網を交互に使う。そのため、常にどちらかの網が海に入っていることになる。

網の長さは100メートル位で、サバやアジ等の餌がついている。



サバ・アジ等のエサ

##### アサヒガニ用のアミ

##### ⑤ザコアミ

いわゆる巻き網で、ザコを巻いてとってしまう。

##### ⑥イ カ

木製のエギを使用した。エギは四国から取りよせたもので、当時はかなり有名だった。

##### ⑦キビナゴとり

昔はキビナゴとりをしていた。夜に船の上から、竿を海中にさしてキビナゴの群れを探し当てた。竿は親指位の太さで、3メートル位の竹を使った。キビナゴが竿にぶつかるので、群れがわかったという。

##### ⑧ウミガメ

終戦頃までとっていた。大きな鉢のようなもので、ウミガメが息をしに水面に出て来たところを突いた。

ウミガメは、かなり匂いがきついが、ゆがいて食べるとおいしかった。

##### ⑨その他

漁には普通2、3人ででた。ただし、イセエビは1人でとる人もいる。

建網は一種類しかないが、それを使ってカツオ、ブリ等の様々な魚をとった。この辺りは主に建網をしているが、4、5年前までは定置網もしていた。また、網自体は10年位前まではよく使っていたが、今ではトビウオ、イセエビ、アサイガニ程度になつた。

ナイロン網は一週間位すると、ウキとオモリを残して取り替える。

そのほかの漁として、タコとりがあるが、タコは潜って、突きとった。また、潮のひいた時に、素手でテングサを取りにいった。

終戦後20年位までは、専門の船大工がいた。

## (2) 西之 下西目

### ①ウチアミ

追いかけ網ともいい、船2艘に網を積んで、沖から丘に向けて魚を両側から追い込む。その際、石を投げて魚を追い込む。

網の目は2寸8分と小さく、小魚をとるのに適している。他にもブダイ、クロダイ、ヒツウオなど様々な魚がとれたという。

網は海底にとどくようにしてある。海面の方は隙間ができるてもよい。

### ②オオアミ

網の目は今では4寸5分から5寸だが、昔は6寸位だった。高さは20ヒロ、長さは200から250ヒロまたは300ヒロで、なぎさえよければ網をいたた。

網は晩にいれて朝にあげた。カツオ、ブリ、ヒツウオ、カマスなどがとれる。

### ③エビアミ

網の目は3寸5分、高さは、今は5尺だが、昔は3尺だった。長さは100ヒロから200ヒロ、20ヒロ位のものを30タン位いたたといふ。

潮の荒い所に夕方、エビアミをしづめておくとかかった。40歳の頃はエビがたくさんとれたといふ。

### ④トビウオとり

戦前までしていた。5月の初めから中頃までしていた。トビウオは大川や立石の方によく来ていたらしい。

トビウオは子持ちでやって来て、それを2艘1組の船でとる。追い込み網の規模が大きくなつたようなもので、網の目が少し大き

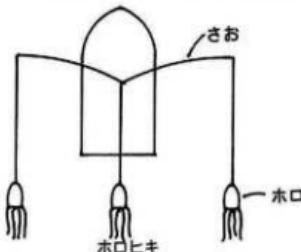
きい。オモリをつけ、下からすくい上げるようにしてとった。夜明け前に卵を産むので、それを見てとった。トビウオとりには20から30艘位の船が出た。

### ⑤ガガアミ

アサイガニをとった。延縄のようにのばし、1、2時間してあげた。

### ⑥ホロヒキ

カツオをとる。繩にホロをつけて流す。こ



れをホロヒキという。繩は20から30ヒロ。

### ⑦鉢づき

クロダイ、イシダイ、ブダイ等をとった。タコも冬には鉢づきでとったが、タコはひっかけてとることもあった。

### ⑧船

30歳位までは丸木舟を使っていた。丸木舟は、西之表のゴヨウマツをとってきて製作した。

丸木舟を使わなくなつてからは、屋久島の方に頼んでカツオ船を作つてもらつた。トビウオとりには5丁櫓を使い、3丁櫓はトビウオ、イワシ、エビとり等に使用した。

### ⑨その他

大きな網は村落でもついていた。今はイワシ網を浦で所有している。イワシ網は目が小さく、何でもとれる。

網を作る時は、本カブはいくら、半カブはいくらという具合にお金を出し合つた。こ

れは村落の資金になる。

### (3) 西之 砂坂

#### ①トッピー網（トビウオ網）

2月から3月にかけて行う。網の目は1寸9分で、高さは3メートル、一山の長さが700メートルから800メートルあり、全部で4km位になる。各々の網の中間毎に点滅ブイが1つづつある。網のオモリの他に、緑のロープの中にもオモリが入っている。

トッピー網は、潮に流しておく刺し網で、夕方に入れてその日の夜のうちにあげる。早ければ夕方6時に入れる。1つの網を入れるのに1時間位かかる。それを全て入れ終えると、最初にいたものから順にひきあげる。1回で200から300匹となる。かかる時は1000から2000匹もかかる。

刺し網なので、トビウオは頭が刺さって抜け出せない。網の目から外れそうなトビウオはタビですくいとる。刺さったトビウオは、頭をおさえて投げるようにすれば簡単にとれる。

昔は網の材質には木綿を使った。次にクレムナ、スパン、そして現在のナイロンになった。木綿の頃は、あまり網は使わなかった。今は鹿児島漁網、アサヒ漁網から網を購入している。



トッピー網を船につむ漁師

とったトビウオは冷蔵庫に入れておき、漁協が積みにくる。

#### ②タテアミ

1年中使用する。様々な魚がかかり、4kgから5kgのイシダイやクロダイがかかることがある。

夕方に入れて底にしづめておき、朝にひきあげる。オモリには石も使っている。

#### ③オオアミ

昔の人はブリをとるためにこれを作った。そのため、オオアミをブリタテアミといった。

高さは10ヒロ、網の目は4寸2分。ヘタ(丘)で水面にうかせる。刺し網の一種で、カツオやネリゴ(ソウジの子)が頭を突っ込む。

#### ④モジャコとり(ブリの子)

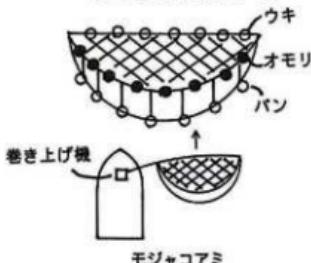
トッピー網の次に行う。5月いっぱい行う。

モジャコはモについているので、それをみつけやすくとるすくい網。モジャコ網は袋状になっており、片方を船に固定し、片方をひっぱる。網のロープにはパンというステンレス製のオモリが、普通のオモリとは別についている。丸い形をしており、隅のほうにロープをつける。パンの真ん中の穴にロープを一本通し、1つにまとめる。パンの直径は5cm、厚さは5から6mm。パンによって、網の下の部分がすぐにしまる。

すくい網は船の舳先に竹を横にたてて、これに網を付けローラーで網を調節する。ローラーを使う前は、人が網を調節していた。



モジャコとりに使うローラー



#### (4) 平山 浜田

##### ①トッピー漁（トビウオ漁）

2月から4月にかけて行う。カクトビ（トビウオの一種）は、流し網でなければとれない。この網をトビウオ流し網という。カクトビ以外は追い込み網でとれる。しかし、追い込み網は大掛かりなので、浜田では行っていない。一方、流し網は2人ができる。

トビウオ流し網はナイロン製の5mmのテグス網。ナイロン製の網はいろいろあるが、テグスが一番かかりが良いという。テグス網はアサヒ漁網から仕入れる。昔は、糸車を使って木綿や麻の糸で自分で作った。

網の目は1寸9分、糸の太さは4本糸。高さは1ヒロ半で、長さは60ヒロ弱。アバは親指位の太さで、長さが15cm位のもの。オモリとして、ナイロンのロープの中に鉛がはいっている。

刺し網なので、目が少しでも大きいとトッピーは逃げてしまう。網の目は1寸9分が一番良い。刺された魚は、帰ってから全て手でとる。

網は夕方に入れ、8時頃にあげる。網をあげるのに1時間位かかる。

網は10タンづつないで、両脇に点滅灯をつける。10タンづつぱらぱらだが、点滅灯のおかげで網の位置がわかる。

##### ②モジャコ漁（ハマチの稚魚）

4月20日から25日の間にモジャコが解禁になる。モジャコ網はすくい網の一種。

イワは60キロ位、アバは10ヒロで50個位つける。網の目は29セツ。上手に船を進め、海藻や他の漂流物をすくいとると、その中にモジャコがいる。船には1ヒロ位の孟宗竹を横に出し、これにロープをつけ網を設置する。どの船にも無線がついているので、連絡が入ると競ってとりに出た。最初の頃は、速くても15マイル位しか速度がでなかつたが、今では30マイル位はできる。

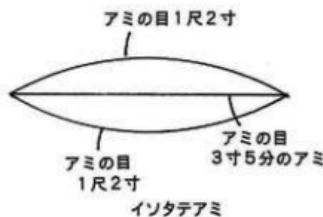
昭和57、8年までは巻き網だった。イワが25ヒロ、アバが30ヒロ、高さ10ヒロ、長さが20ヒロ位だった。船で漂流物を巻き

込み、3人位で網を引き上げた。網は、最初にイワをあげてからアバのついている方を上げた。

##### ③磯タテアミ

瀬もののイセエビをとった。イセエビは5月1日から8月1日までが禁漁で、モジャコ漁が終わってから行った。

要領はトッピー漁と同じだが、岩の多いところに網を沈めた。これを固定式タテアミという。網の高さは2ヒロ、長さが25ヒロで、8タンづつ3ヶ所に入れた。網は3層になっており、真ん中の網の目は3寸5分、外側の網の目は1尺2寸。真ん中の網は、1尺5寸位のたるみをもたせてある。



イソタテアミ

##### ④アサヒガニ

直径1尺5寸位の網に縄をつけ、延縄式にとる。広田でよく使用される。

##### ⑤一本釣り

タルメ、チビキ、ホタ、コマツ、ムツ、チライの他、たまにマダイを釣る。この中でタルメ、チビキ、ホタは専門的。船の上から釣る。

タルメ、チビキは水深200メートル位の深いところにいる。ホタ、コマツ等は120メートル位のところにいる。ムツは水深300メートル位のところにいる。

魚によって使うハリの太さ、テグスが違う。エサは、タルメ、チビキ、ホタ、コマツを釣る時は、サンマの切り身を使う。このサンマは、東北方面のものを使用している。

### ⑥イカ

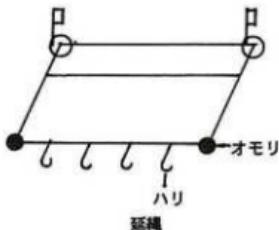
ミズイカはエギを使ってとる。トンギョウ（スルメイカよりも少し大きい）は、イカガナを使う。イカガナは今は孟宗竹で作ってあるが、昔はキリ等で作った。イカガナにはサバ、イワシ、ウツボ等をエサとして巻いてある。中でもウツボが一番良い。

### ⑦延繩

主にショウブをとる。

テグスを使用する。母繩が30号、エラ繩は20号位。ハリは20号のものを使い、ハリとハリの間は1ヒロあける。

3ヶ所に仕掛けて、順に上げていく。



### ⑧鉤突き

モハミ、コウメジロ、キンゴダイ、タコやイカ等も突いてとった。この時は二又の鉤を使った。また、イザイの時、漁師でない人が三又の鉤を使ってとっていた。

鉤突きをする時は、真鍮製の一つ目のメガネをつけて、1ヒロ位潜った。このメガネをイチガンといった。二つ目のニガンは木製で、沖縄から来た人は、これを使用していた。

### ⑨ウミガメ

5、6月の産卵期をねらった。櫓船で漁にする。ウミガメが背中を海面にだして浮いているところを後ろからまわり、甲羅を突いた。ユスの木で作った鉛を使い、先は中に穴が空いており、ロープがつながっていた。

櫓船は戦後昭和30年までは使っていた。

3丁櫓位で、幅5尺、長さ15尺位のもの。櫓船の前は丸木舟を昭和14、5年まで使用していた。

ウミガメが、昭和30年頃までは味噌煮にして食べた。

広田、竹崎方面で盛んだった。

### ⑩服装

トッピーをとりに行く時は、わらの笠を着た。戦後からカッパ等が流行りだした。今のはナイロンガッパは、昭和30年頃から使いだした。

昔は、軍の防毒用の衣類を払い下げもらい、使用した。

## 4. 民具解説

### ○イカのエツケ（エギ）

茎永 竹崎 山下重人  
長さ 18.0cm。上中方面の釣り具屋で購入した。

材質は木材だが、他にも木に布を巻いたものや疊のヘリを用いたものもあった。

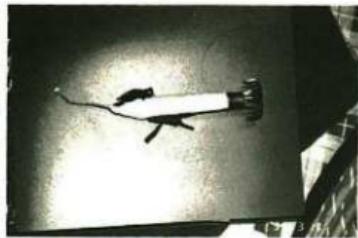
夜に海に出て沈めておくと、イカがとれた。今では、プラスチック製のものにとてかわられた。



イカのエツケ

### ○イカのエツケ（エギ）

西海 田尾 峯山秀太郎  
長さ 16.0cm。クサギ製。  
船に乗って竿を持ち、船を走らせながらこれをひっぱる。



イカのエツケ

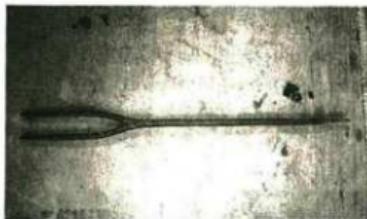
○オオヅキ（ホコ）

西之 下西目 日高静一郎

長さ 45.0cm。上中で購入した。銀冶屋は西之表にいた。

このオオヅキに7尺5寸の竹をつけて、ヒツメガネをかけて潜り、ブダイ等を突いてとった。とった魚は、ウキについたヒモにつなげていく。

昔は三又を使っていたが、終戦後二又を使うようになった。



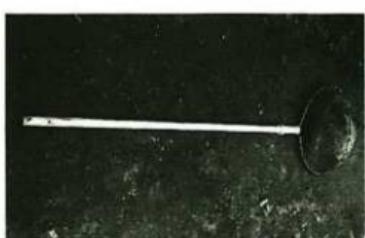
ニ又のオオヅキ

○タ ブ

西之 下西目 日高静一郎

長さ 182.0cm。海に流れてきたものを拾って、自分で直した。

釣りに持つて行き、釣り上げた魚をすぐう。また、船にも1つづつ積んでいた。柄には棒を縫ぎ足せるように道具を作り、遠いところまでとどくようにした。



タ ブ

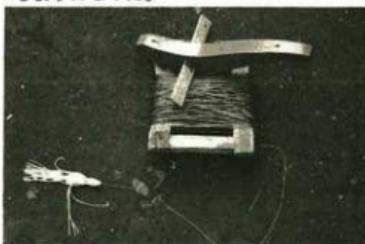
○ホロびき

西之 下西目 日高静一郎

今ではホロは購入しているが、昔は自分で作っていた。当時は、鳥やワシの羽根をつけた。

ヒモの先にホロをつけて、延縄式に流してカツオをとる。水面には飛行機と呼ばれる道具をつけ、水面を小魚が跳ねているように似せる。

昔はホロだけで、終戦後に飛行機をつけるようになった。



ホロひき

○ク シ

西之 下西目 日高静一郎

長さ 42.0cm。トコブシ（貝の一種ナガラメ）を引っかけてとる。

フォークの古くなったものを利用して作り直した。フォーク（タイをつく四つ叉のホコ）を切ってヤスリで削り、それを焼いたりたいたりして作った。キンリョウウのオモリを下にひいて、それを台にしてたたいた。

昔のトコブシは、今よりも大きかった。4月までのエビ漁と入れ替わりに、5月から

8月にかけて行った。トコブシは丘からスネ位の深さの岩場にいた。



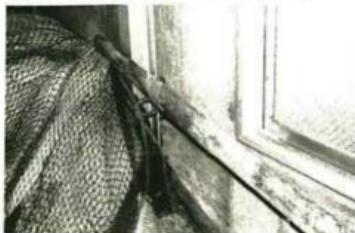
クシ

○櫓

西海 下立石 立石豊一

長さ 356.5cm, 466.5cm。落ちていたものを工事現場の人が見つけた。

つい最近まで使っていたらしい。こうした櫓は、機械が壊れた時に使用した。



○櫓

西之 砂坂 砂坂要次郎

ウレはシイ、ミはシラカシで作られている。櫓が悪くなつた時は、現在の船体の素材と同じもので補強した。

イデコと呼ばれる部分を船についている棒にひっかけて、櫓を滑いだ。



放置された櫓

○クチ

西之 砂坂 砂坂要次郎

長さ 36.0cm 直径 21.0cm。孟宗竹でできている。

筒のふちにクチをとりつけ、ウツボをとる。ウツボを高く買う人が来たら、ウツボ漁をする。それ以外はしない。



○タビ

西之 砂坂 砂坂要次郎

長さ 283.0cm。刺し網から抜け出して逃げようとする魚をすくいとる。



タビ

○マタキ (マタ木)

西之 砂坂 砂坂要次郎

長さ 90.0cm。カシ製。

小船の脇につけ、竿等の漁具をひっかける。



マタキ

○ブイ

西之 砂坂 砂坂要次郎

長さ 159.5cm。パイプ、発泡スチロール、点滅灯、オモリ、ヒモによって構成されている。ヒモは、木工用ボンドで固めてある。

網漁の時に、網の両端につけて浮かせて目印にする。夜に行う漁なので、点滅灯がついている。点滅灯は、締めると明かりがつくようになっている。

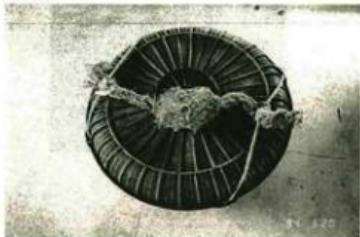
○カゴ

西之 砂坂 砂坂要次郎

高さ 43.0cm、上底直径 43.0cm、下底直径 67.0cm。青年の頃は、自分で孟宗竹を編んで作った。

下底のはオモリがついている。

ロープで船につなげておき、魚やエビのイケスとして利用した。主にエビが入っていた。



カゴ(底面)

○ザル

西之 砂坂 砂坂要次郎

高さ 20.5cm、ふたの直径 17.5cm、下底 28.5cm。孟宗竹製。

潮から釣りをする時に、エサであるカニをいれておく。蓋を開けると、クチの部分に金具があり、カニが外に逃げ出さないようにになっている。



ザル

○カジ

西之 小田 不明

長さ 158.5cm。田尻港の廃船の中にあった。



放置されたかじ

○椿

西之 小田 不明

長さ 507.5cm。田尻港の廃船の中にあった。



放置された椿

### ○竹ボウキ

西之 小田 不明

長さ 110.0cm。田尻港の廃船の中にあった。

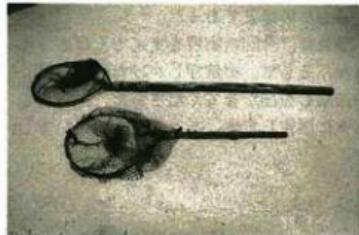


放置された竹ボウキ

### ○タモ

西之 小田 不明

長さ ①97.0cm, ②121.0cm。田尻港の廃船の横にあった。



放置されたタモ

### ○エサ突き（自称）

平山 浜田 長田俊信

アカバラの稚魚をとるのに使う。とった稚魚は養殖する。

オモリをつけ、海の深さにあわせたロープをつけて沈めておくと、エサをつけなくても入ってくる。

### ○タルメのタル流しのタル

平山 浜田 長田俊信

高さ 28.5cm, 直径 33.0cm。本来はタルメ漁に使っていた。このタルにオモリとハリをつけ、これをウキの代わりに流しておくとタルメ等が釣れた。これをタルメのタル流しという。しかし、今ではこれに一本釣りの時に使う、ハリとテグスを入れて持っていくようになった。



タルメのタル流しのタル

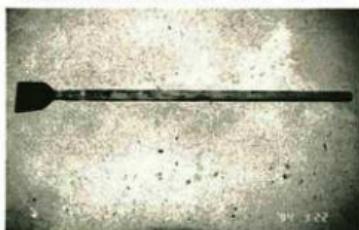
### ○ガッサイとビシ

平山 浜田 長田俊信

ガッサイ 長さ 38.0cm, 幅 19.5cm。  
ビシの長さ 20.5cm

ガッサイ釣りといって、ガッサイに巻いてある糸にビシをつないで魚をとる。ビシの中には、撒き餌が入る。

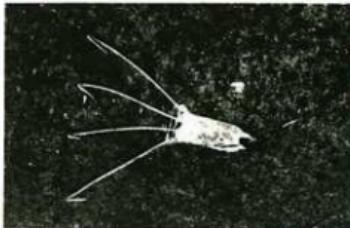
瀬もののメバルやグジライがとれたということだが、今ではもうしていない。水深30から50メートル位の岩場の上で行った。



エサ突き



ガッサイとビシの使い方を教えてくれる伝承者



フグかけ

#### ○エサ入れ箱

平山 浜田 長田俊信

24.0cm × 18.0cm, 高さ 6.5cm。スギの板を用いて、自分で作る。

1つは撒き餌、1つはエサ、1つはオモリを入れて一本釣りにでかける。オモリを入れる箱は、他のものに比べてやや縦長で、底が深くなっている。オモリは水深によって、大きさが異なる。



エサ入れ箱

#### ○フグかけ

平山 浜田 長田俊信

レンガに穴を開けて、鉛を溶かして型を作り、できた型にエサをつけた。

フグかけにエサをつけ、船から垂らしてサバフグをとった。このフグかけにはロープがついており、これを手で引っ張った。ハリにフグが食いつくのではなく、フグの腹を引っ搔けるようにしてとった。

#### 5. さいごに

今回の実習で、初めて種子島を訪れた。目にするもの全てが、そのまま教科書のようなものばかりであった。実習期間の間、いろいろな村落をまわったが、まさにいきつく暇もないほどであった。

最後に、今回の実習を支えてくださった方々、そして、突然押しかけたのに、多くののはなしを聞かせてくださった、伝承者の方に感謝します。ありがとうございました。

# 丸木舟とその漁撈

鹿児島民具学会会員 砂田 光紀

## はじめに

南種子町の西海岸（牛野～下立石）地域は最近まで「西海（せいかい）」と呼ばれていた。東シナ海に迫る高台の裾に形成された狭い平地に、海岸線に沿って形成された集落群は、そこに住む人々と海とをいやおうなしに結びつけてきた。この地域の海は嵐の日も嵐の日も、実に豊かな表情を見せてくれる。遠い昔の浦の姿と営まれてきた人々の暮らしを彷彿とさせるその景観は、沖に望む屋久島の姿とともに種子島南部の民俗を特徴づける魅力をたたえている。

本稿では当該地域のうち、牛野と大川を対象に、連綿と受け継がれながらも今までに消え去ろうとしている丸木舟と漁撈に関する伝承を、聞き書き調査と写真をもとに構成、紹介するものである。

## 大川の漁撈習俗

明治36年生まれの大川助蔵氏は付近の人々も認めるすぐれた漁師であった。助蔵氏は大川出身で、今も当地に元気に暮らしておられるが、この地域で行われるあらゆる漁法を体験しており、その伝承は豊富である。ここでは助蔵氏のお話から、漁法と丸木舟について紹介したい。

このあたりには大川、中ノ塙屋、上立石、下立石の集落があるが、上立石はもともと漁師の集落である。これに対して下立石はシオタキ（塙炊き）の集落で、旧暦12月中に師走祈祷をし、年が明けると製塙が始まっていた。今でもカマジ（1名）とマスドリ（2名）という役職があり、マスドリは会計的な役である。これは輪番制であり、祈祷はカマジの家にホイドン（神職）を呼んで

行っている。他の集落では家族など少人数でやるのに対し、下立石は大勢で本格的である。牛野ももともとはシオタキの集落であった。

### （潜水漁）

潜り漁をする人のことを「スミテ」と呼び、助蔵氏もスミテであった。スミテはカケパリヤホコを使う。ホコは一丈ほどの柄に以前は3つ股、現在は2つ股の刃がついた刺突漁具である。柄にはゴムはついていない。柄の後ろを右手のヒラに当て強く押し出して魚を突いていた。魚はモハミ（ぶりだい）、アカジョウ、コウコダイ、ヒサ（ヒサンイオとも呼ぶ、石鰯）、イカ、タコなどが多かった。

### （トビウオ漁）

団体である漁にはトビウオ漁がある。大正5年頃から大正14～15年頃が特に盛んで、大正8～9年は全盛期であった。この頃にはトビウオを煮て煮干しにして出荷した。家一軒が80円で建つ時代にカマス一俵10円で売っていた。3月にはウラマツリをしていたがトビウオの調子が悪いときには海岸に出てホイドンを招いてご馳走をし、トビウオ招きを行っていた。男はかぞえの15歳になつたらみな漁に参加して、本アクリ（配当）を受けていた。これは老人にも配った。トビウオが来たら砂板で火を焚いて合図した。だからこの時期は浜で火を焚くことができなかった。

### （舟のこと）

助蔵氏は昭和20年頃に自分の舟を買った。その後何艘も乗ってきた。古くは舟はみな木造船であった。長さが5尋半位、ハラ（ゼ）5尺5寸の薩摩型では3丁櫓、長さ6尋3尺、

ハラ6尺3寸なら6丁檣であった。3丁檣の場合はトモ檣が1名で、歩くとき（航海するとき）には3人でこいだ。3丁檣で屋久島一湊まで3~4時間かかった。漕ぐときに「ヨーイヨイ」とかけ声で左右の調整をし、舟が（首を）振らないようにする。昭和24~25年くらいからエンジンが導入された。

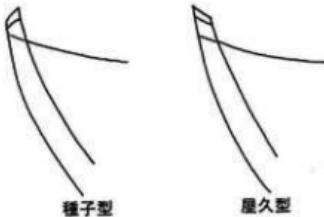


図1. 和船の「ミヨセ」の違い（大川助藏氏談）

#### （水死体、妖怪のこと）

漁に行くときにはトリカジ（左舷）から乗ると縁起がいいと言われる。降りるときはオモカジ（右舷）側である。ドザエモン（水死体）を上げた舟は縁起がいいと言われる。或る時上中の郵便配達の男がアナゴを捕りに来て沈んだときに上げてやって、大川に持ってきて降ろしてやったことがあったが、その時は縁起が良かった。

夜、網打ちに行く。シッソグレという3~5キロぐらいまでなる魚を捕る網で、4人ぐらい乗って行った。島間岬のこっちにドザエモンが寄りついてくるところがある。そのあたりはそのまま埋めてあるところである。ちょうどその沖で漁をしようと網打ちをしていたら、舟のまわりを真っ白いものが走り回り、網にアタリがあるが魚は入っていない。こういう時には下に行こうとするときには「上さ行こう」と逆の方向を言い、流れながらタバコを吸ったりして下の方に行った。（ここで言う上とは島間岬つまり北を指し、下とは砂坂側、つまり南を指すものである。）こういう時は「メンがつけた」といい、「メンがつけたら網打ちはダメじゃ」といわれる。

また、潮が引いたときに大きな帆をつけ

た舟が寄ってくる。そんなときにも「メンがつけた」といい漁はダメである。こんな時、人が「俺に舵を取らせろ」と言って乗ってきたらヌカシアナに押した舵棒を持たせ、自分は本当の舵を持つ。こんな時のために舵には上方にヌカシアナが開けてあった。昔は遭難も多く、墓にも遺骨がないもの多かった。

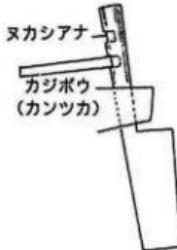


図2. ヌカシアナ

#### （フカのこと）

舟の上では四つ足の話、フカの話をしてもいけない。フカのことは「オーアヨサマ（大魚様）」と言えといわれていた。3メートルほどのフカに襲われそうになったことが何度かあったが、こちらから傷を付けなければ大丈夫だ。一時期、三郎という琉球人（糸満人）が来て、助藏氏が世話をしていた。アカゼを7匹捕まえたところでフカに囲まれた。舟に上がろうとしたら三郎に上がると言われた。水面に上がるときには男2人が背中合わせになってまわりながら上がって行く。ホコで突くときには先の方で突いて傷つけたりせず、柄で軽く突き離す。またあるときは頭だけで5貫のアラがいて、モリの先にヨモをつけて打ったが、ヒレから下はフカに食われてしまった。マイド（ダイナマイド）を使って魚を捕っていたときに、三郎は死んでしまった。

#### （船靈と舟おろし）

船靈は女の神様である。助藏氏は「オレが娘」と言っていた。昔は女を舟に乗せるときは1人では乗せなかった。どうしても1

人の時には人形（ふつうの人形や紙に書いたもの）と一緒に乗せた。船靈には一文銭が12枚入っていた。これは法華宗で言う「十二センジン」に由来するという。舟おろしの時には女の子を2人、化粧させて乗せる。清いで歩いて舟を揺らし、舟主を海に投げ込む。

#### （天候と航法）

航海の目標はアテである。屋久島砂坂周辺の瀬や山、島間崎のくぼみや松、その冲合いのオオボシ（瀬）など、いろいろなものがアテになり、瀬や岩など、この周辺のものにはすべて名前が付いている。

夜、悪天候の時など羅針盤がないと風に注意して潮流れをしないようにする。羅針盤があるときは、その度数でどこへ行きつくかはっきりわかる。その数字もすべて覚えている。屋久島にかかる雲が南側で上がったときは西風が吹く。屋久島から帰りに南西の風が吹くときは非常に危険である。砂坂から南に行くとひどい波である。

#### （亀のこと）

亀が捕れたときには赤ハチマキをして焼酎を飲ませて海に帰すと縁起が良く、子どもを乗せたりするとその子は元気に育つと言われた。東海岸の人は亀を食べるが、ここでは食べない。

#### （願かけ）

願をかけるときには「人より良い漁をさせろ」と言うなと言われる。「人並みでいい」と言えと自分のおばあさんに教育された。

#### （丸木舟のこと）

丸木舟は1人用の舟である。3人で乗ることもあったが、その時には1人が櫓を押し、1人が「沈み子」1人が「浮き子」の方についた。こうして網を沈め、直徑10センチぐらいの石を投げ込んで網に追い込んでモハミを捕った。網打ちはU字型に行う。晩にはクロヤシツオを網で捕った。晩用の網は

糸が大きく、網目も大きい。

丸木舟の上げ下ろしは6人でおこなった。カンヌキやケアゲにドウギを結びつけて持ち上げて運ぶ。丸木舟の帆柱は杉製で、帆についた3本のケタも杉であった。帆は2反ほどである。風上へ進むのをヒラキバシリといい、帆の3分の1ぐらいに風を受けると進んだ。

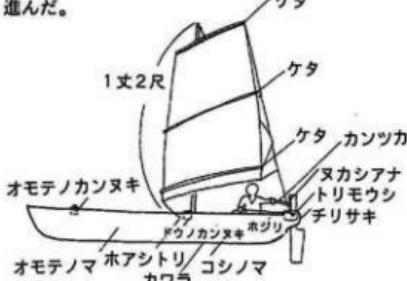


図3. 丸木舟と操船（大川助藏氏譲）

#### （遭難のこと）

州崎で焚きもんを積んで出た。3里ぐらい行ったところで砂坂セイキチの舟がナンセン（難船）をしていた。自分の舟には3人乗っていたので「助けんばや」といってロープを持って泳ぎ、その舟に結んで助けた。屋久島と往来する頃には何度も危険な目にあったり他人のナンセンに出くわした。しかしどうしても助けることができなかつたこともある。ミズブネ（水が入って沈没直前の舟）を助けることは難しく、また、急に嵐になったときなどには助けようとした遭難者が波一つで遠く離れてしまう。自分の方も危険にさらされることがあった。

シケの時には

「そらー がんばれー

よいときたー ふんばれー

かけ波じゅー」

「くんどー ふとか波がくんどー

娘 がんばれー」

と、船靈様に声をかける。帆柱から「ジー」とセミの鳴くような音がするときには「船靈様がいさむ」といって船靈様が機嫌がいい。

調査日：平成3年1月1日～平成6年3月  
伝承者：大川助藏氏（明治36年2月10日  
生）大川集落

### 牛野の漁撈習俗

中川スマさんは大正5年生まれ、夫の中川ジンヤス氏（故人、明治44年生まれ）が丸木舟を使ったモハミ釣りの名人で、自ら丸木に乗ってこれを手伝っていた。スマさんがこのときの漁の様子を詳しく話してくださいましたのでここに紹介する。

スマさんはジンヤス氏のモハミの竿釣りを手伝っていた。餌にするガン（蟹）をジンヤス氏と一緒に磯で捕る。ガンは石の下にいるので石を返して（裏返して）捕った。捕ったガンはエジシタミと呼ばれる下げ籠に入れた。捕ってきたガンはガン箱と呼ばれる木箱に移し、干潮の時は浜となり満潮になると水中になるようなところに石を乗せて置いておく。

丸木舟を出すとジンヤス氏はトモの方（コシノマ）に乗って船を押した（後に船外機）。魚がいる場所は満ち潮の時はどこ、引き潮の時はどこだいたいわかっていた。釣り場にくるとオカ側にトモイカリ、沖側にオモテイカリを降ろして舟を固定した。この2つのイカリは網の先に海岸の丸石を結んだだけの簡単なものである。イカリは何もないところに置いてもかからない。したがって海底に付け、何かに引っかかるように置く。ジンヤス氏は舟の中央の方（ドウノマ）に移って釣り始める。餌のガンは藻とともにエジシタミに入れて（入れない場合もあった）舟の外に投げてあり、釣るときにはこれを舟の中に入れる。時折海水に浸けていた。

スマさんはオモテに座ってガンを漬したりしていた。ガンバコの上で石で漬したが、男の人などは手で漬したりする。ガンは軽く叩いて2つに割れるくらいの漬し方である。魚は舟のそばには来ないので、少し離れたところにこのガンを撒く。ジンヤス氏とス

マさんがガンを撒く。ジンヤス氏は左手にハコメガネを持ち右手に釣り竿を持って構える。ハコメガネでは水中の魚の様子を見る。魚がこちら側を向いているときにはダメで、舟より向こう側を向いて針についたときに引く。竿には糸と鉤、針がついているだけの簡単なものである。モハミはたくさん捕れるときには20も30も捕ってきた。5～6、10匹くらいは普通だった。釣れた魚

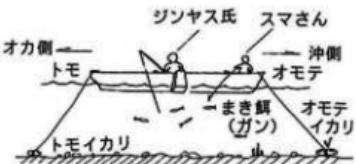


図4. 丸木舟によるモハミの竿釣り

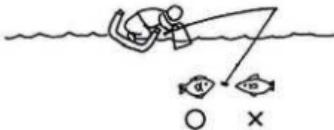


図5. モハミ竿釣りの方法

はタビですくう。口が閉じるようになった網に入れて海水につけておいた。釣れたモハミは自分で食べ、多く釣れたら魚屋へ売っていた。食べ方には刺身、塩焼き、煮付け、唐揚げなどがあるが、ジンヤス氏はにおいが嫌いで刺身は食べなかった。ジンヤス氏は若い頃、ヒサ（石鰯）釣りを行っていた。ヒサは「潮がいかん時は何匹おっても食わん」といわれ、潮が強してもぬるしても捕れん」といわれる難しい魚である。また、ショウブ、アカジョウ（すじあら）などは夕方から夜にかけて捕りに行っていた。ちなみにモハミは潮が止まったときよりも

動いているときに釣れる。このあたりでは亀が上がってきたときには焼酎を飲ませて赤ハチマキをして帰した。

調査日：平成4年3月21日

伝承者：中川スマ（大正5年生）牛野集落

牛野春芳氏は現役の漁師である。春芳氏は牛野州崎港に櫓漕ぎの丸木舟を所有し、現在も竿釣りを行っている南西諸島最後の刺り舟漁師であり、貴重な伝承者である。ここでは春芳氏のお話を紹介したい。

イシダイの餌はエビ、トコブシであるが、小さいものはガニ（蟹）にも来る。イシダイが来るとオカの牡蠣を歯で叩いているのすぐにわかる。ショウブ（ピンク色の魚）の餌はエビと小魚で、これらの魚は食う（引く）力が強く、12号～15号のハリソでないと切れてしまう。モハミは「ジュワッ」と食うので8号～10号のハリソでよい。これらの魚は竿を使わなくてもハリソとミツソだけで手で釣ることができる。

クロダイは晩にタテアミに行く。舟でたておいてオカの方へ石を投げ、驚かせて追い込む追いかけ網である。クロダイは臭い魚だ。ヒツオ（4～5キロと大きく、黒い魚）という魚も臭い。ヒツオは夜明けに集団で出て行く時にかけるとたくさん捕ることができ。追いかけ漁は3人で、1～2隻でたてる。2隻の時には半分ずつ積んで両方にたてる。晩には小さい石を投げ、昼には大きい石を投げないと魚が驚かない。網をたてるときには錘のあるところと浮きのあるところを持つ人、それに船頭がいる。追いかけ漁は10月～11月の寒くなった頃がよい。この頃でないと魚が驚かないので、その他の時期は釣りをやる。

大きい魚が釣れるのは田植えの頃で「春モアミ」という。これに対して小さい魚がたくさん捕れる時期を「秋モアミ」という。釣りたての魚を舟の上で食べるのが一番うまい。味噌に海水を入れてこれを付けて食

べるのがうまい。

亀を食べたら漁がない。亀がかかったら赤い布を首に付け、焼酎を飲ませて「また来いよー」と揚げてやる。茎永、平山の人々は祭りの時は亀がないとはじまらない。彼らは亀の卵も食べているが牛野の人は絶対に食べない。

昔はフンドシをしていたのでカガが来たからフンドシを解いてホコに結び、長くして引いてまわれと言っていた。

昔は鹿卵に来るトビウオを袋網で捕っていた。8丁櫓の舟で押し櫓で（帆走ではなく）、5～6月だから裸で漁をした。風のない時にはいつも押し櫓であった。屋久島に行くときには帆を立てていた。船を漕ぐときにはオモテダテという人が船頭に指示を出していた。トビウオが来ると西野の人が砂坂に知らせ、麦藁を焚いてその炎で連絡していく。焚く場所は決まっていていつもは焚くことができなかった。終戦の頃まではこのような漁が見られた。

調査日：平成4年6月25日

伝承者：牛野春芳氏

## 総括

昭和60年に牛野州崎港を訪れたとき、そこには木造構造漁船やFRP船とともに6～7艘の丸木舟が並んでいた。港外の荒波が冬の日差しにきらめきながらも黒潮らしい大きなうねりの表情を見せているのに対し、こんな外洋へ漕ぎ出すにはあまりにも頼りない刺り船の姿に驚いたのを覚えている。しかしながらその後数回の訪問のうちにこの舟の活躍を見ると、一本のヤクタネ五葉松から刺り上げられた実にブリミティブな船体が、数十万トンクラスのタンカーが沖行くこの外洋へフラフラと揺れながら出て行く様は、人間の作り上げてきた物質文明の大きな流れに逆らっているかのようにも見える、ある意味で痛快であった。

そして10年近くのうちに丸木舟は次々に漕ぎ手を失い、種子島のすべての浦から姿

を消した。牛野漁港に浮かぶ船漕ぎの1艘を残して。昨年まで西之表の漁港の片隅にあったエビ網用の船外機付きの丸木舟もすでに廃船となっている。同様に、1000キロメートル以上にも及ぶ琉球弧の島々から、いわゆる刺り船はすでに姿を消している。島浜貝塚の例を挙げるまでもなく、縄文時代の遺跡から出土する刺り船や舟型の遺物は、わが国でも先史の昔から刺り船を使っていた文化を物語っている。数千年にわたって連續と続くこの文化の象徴を、残念ながら私たちは簡単に歴史の舞台から消し去ってしまうとしている。

技術や物質文化は常に変化し発展する宿命を持つ。船にしても例外ではない。木造構造船へバトンタッチし、さらにFRP船が台頭する現在、丸木舟はもう使用に耐えられない船である。しかしながらせめて10年前に、南西諸島全域の船、さらに種子島の丸木舟を国指定の重要文化財に指定していたならば、これらの船を大量に収集し、保管する事もできたであろうし、国費を持って船を使った様々な漁の映像化、記録も可能であったろう。幸いなことに島内では西之表の開発センターや中種子町立歴史民俗資料館、南種子町立歴史民俗資料館、その他小学校などに若干の船体は保管されている。

しかし、それぞれの船の持ち主とその漁撈を収録して資料価値を高め、後世に残すために徹底して記録を試みた例は稀である。ここに報告した漁撈の数々は、そのような状況を考慮して、伝承者が得られるうちにまとめようと試みたものである。内容に不備な点も多く、さらに詳細な調査の機会を得たいとは考えているが、この好機にとりあえず現時点での成果を報告させていただいた。

ちなみに北海道のアイヌの刺り船、東北の刺り船など、地域ごとに形態も用途も材質も異なる国内の貴重な刺り船たちは、後世に残すべき特に貴重な文化遺産であることから国指定重要有形民俗文化財となって

いる。種子島の丸木舟をはじめ、鹿児島県内の刺り船は国指定はおろか、県の指定さえも受けることなく、寂しくその姿を消そうとしている。

## 写真1 南種子町西海岸の漁業集落



下立石 種子島製塩初地解説板



下立石「種子島製塩初地の碑」



エギとその調整（下立石）



大川漁港



牛野集落のたたずまい



大川浦の漁船（船首に正月飾りを見る）



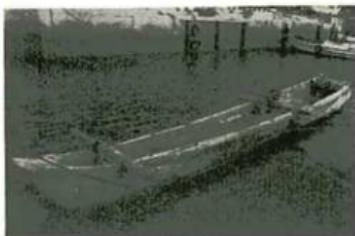
牛野州崎港



牛野州崎港に入港した木造船

## 写真2 牛野州崎港の丸木舟

昭和60年～平成6年 筆者撮影



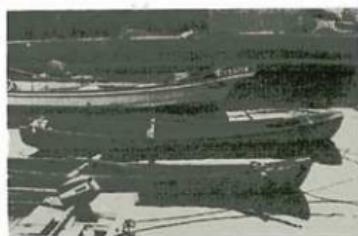
丸木舟



牛野の丸木舟群（岸壁上も含め、4隻）



船外機付の丸木舟（舷側にガンバコを見る）



港内の丸木舟



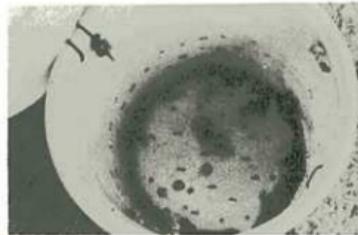
棒の押し方（再現）



ドウノマでエサのガンを見る



竿針りの方法（再現） 左手：ハコメガネ  
右手：釣り竿



ガン

### 写真3 牛野州崎港の丸木舟



正月の丸木舟



オモテより見た丸木舟  
(オモテイカリとトモイカリが見える)



丸木舟の正月飾り



丸木舟の船首（オモテ）



丸木舟の船尾（トモ）



左の丸木舟は現在ミュージアム知覧に展示  
右の丸木舟はすでに腐朽して存在しない



丸木舟に乗り込む

# 牧の民俗（牧・製塩村落と牧・総論）

大学院院生 田 中 勉

## 序 章

快晴の日に鹿児島県の本土から遠く南に目をやれば、黒く島影が見える。すぐ目の前に種子島がある。鹿児島市内の新港北埠頭からフェリーに乗船し、4時間ほどで種子島の海の玄関口西之表港に着岸する。乗船してから2時間ほどで錦江湾を抜け、外洋に出る。そこから急に波が高くなり、本土と距離のあることを認識させられる。

『日本書紀』天武六年（677）の二月条に「多羅嶋人等を飛鳥寺の西瀬の下に要す。」と多羅嶋人の記述が見られ、天武十年（681）八月条にも「多羅嶋に遣わせし使人等、多羅國図を貢ぐ。」と記事が掲載されている。したがって、種子島の歴史はとても古い。古代には鹿児島県本土よりも先んじて歴史に名を連ね、長い鎖国体制の下にあって、近世には種子島への銃の伝来と改良から種子島統を作りだし西洋の近代兵器に遭遇した、日本文化において重要な位置にある島である。さらに、民俗学的な視点からはヤマト文化圏の最南端で琉球文化圏との接点になる貴重な島でもある。

種子島は南北に渡って非常に長い地形の島である。標高200m程度の山しかなく、山というよりは小高い丘である。南種子町は種子島の南に位置し、北部に標高100~200mの台地があり、東部から南東部まで同じような標高の土地が続いている。南西部や南部はなだらかな平坦地で水田地帯が広がっている。

南部の平坦地には、今なお赤米を栽培しその祭りを行っている宝満神社がある。宝満神社の赤米は下野敏見著『トビウオ招き』では、「きわめて古い時代に、黒潮ルートを利用して活動した海人族が赤米の種子をもたらし」（注1）た、と考察されており、種子島では古い時代から稻作が行われていた

であろうことを示唆している。また、広田遺跡から出土した貝札には日本最古の文字が発見されており、南種子町（種子島）と中国大陸との文化交流が見られその歴史の重みを感じさせる。

## 第一章 牧

種子島全域において“牧”といわれる牛馬飼育形態がある。下野氏によれば、種子島の民俗文化の特色の第一に「マキ（牧）が多いこと」（注2）を挙げている。今回の実習では、種子島民俗文化の一端に迫るために“牧”を視座にして、その特色を解明することを意図した。なお、筆者は種子島の牧を牛馬の飼育形態の一つとしての放牧、つまり飼養のみを目的とした放牧とは異なったものと考え、飼養以外の牛馬の使用目的を有して放牧が行われているものを“牧”として論述を進める。

### 第1節 馬

牧では牛・馬が飼育されているのが一般的な形態であるが、ほとんどの場合は馬のみである。牛・馬と共に飼育している場合も見られるが、稀である。牧の発生や役割を考察していくためには、種子島のみならず日本全体での馬の渡來を視座にして考察する必要がある。

日本在来馬という表現を良く耳にするが、日本列島にもとから馬が存在していたのだろうか。これについては、日本で馬は発生しなかったとする明確な結論が導き出されている。縄文文化時代以前の日本の自然環境は「元来が馬の好適には不適当な自然環境であつて」（注3）、「密林に覆われていたと推定され」「馬が野生の状態で存在したとは考えられない」（注4）という根拠のもと

に結論されている。

既に石器時代には馬の骨の化石が出土しているが、これは三趾馬といわれる三本の指を持つ馬であり、現在の馬に見られる一趾馬とは全く異なっておりその関連性はいたって少ない。つまり、今まで連続として続いている一趾馬の在来馬は古来より日本に棲息していたものとは異なる種類の馬形である。それが、いつの頃からか日本に輸入されたかということである。

本稿では日本在来馬もしくは在来馬と表記するものは、古い時代に日本に導入された馬で「日本人が長い歴史の過程で、多様な風土のなかに育て上げてきた馬」(注5)を明示するものである。つまり、明治39年から大正12年に行われた「馬政第一次計画」(注6)のような人為的操作の加わらない馬をさすものである。しかし、この馬政の影響を受けなかった馬は少なく、在来馬という観念をここまで拡大解釈させても完全なる在来馬はない、ということになるかも知れない。

今、「日本に導入された馬」という表現をとったが、馬を導入した地域、その導入時期はいつごろと推測されるか。

古代の馬は大別すると小形馬、中形馬とに二分類されている(注7)。小形馬については「西暦紀元前の相当古い時代から四川・雲南から南中国一帯に蒙古馬より遙に矮小な馬が飼養されていたと推定し得る」(注8)。そのルートについても林田重幸氏は、

- A. 南中国沿岸→九州・本土黒潮海域沿岸
  - B. 南中国沿岸→琉球→九州・本土黒潮海域沿岸
  - C. 南中国沿岸→南鮮→九州および本土
- (注9)

の三種類を指摘し、その中でもA、Bの経路が最重要であるとしている。一般にこの推測は妥当性が強く、南西諸島で発掘されたいくつかの考古学の成果から小形馬の化石の骨格や果下馬と言われる古代朝鮮の小形馬を指摘できよう。筆者としては南中国沿

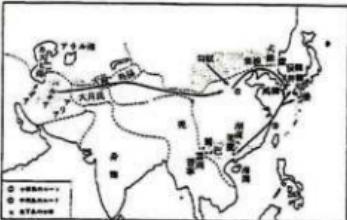


図1 日本馬の源流想定図  
(林田重幸『日本在来馬の系統に関する研究』より)

岸から大陸を通らず南鮮へ行くCの経路には少し疑問を感じる立場である。大陸を通らずに南鮮へ行くには海上運送があるわけだが、その運搬方法のみで馬が渡っていくとは考えられず、南中国沿岸→南鮮への中间地点として大陸も存在しているのではないかと考え、南中国沿岸→(大陸)→南鮮→九州および本土と表記しておきたい。

このような経路により小形馬が日本に渡来したのは、おそらく縄文時代から弥生時代であろうと考えられている(注10)。縄文時代の遺跡のなかで出土(鹿児島県)野上(栃木県)余山(千葉県)などに化石の馬骨が発見されたことで渡来時期が縄文時代であると推測することができる。

中形馬は小形馬とは異なったルートを取ったものと考えられる。その理由として南中国沿岸の四川・雲南の地域に中形馬は棲息していなかったからである。

中形馬は①中国北方から大陸、朝鮮半島を通って日本に渡ってきたとされている。もう一つの経路は②ユーラシア大陸の西方のバルチアから中国大陆に入り、そこから朝鮮半島を通って日本へ、という経路である。漢の武帝以前の時代までは中形馬は中国北方の遊牧民・匈奴より稀に入手していた(①)だけであったが、度重なる匈奴の襲撃の恐怖から馬政を充実させ軍備を整えようとした。そこでフェルガナ遠征(104~101 B.C.)を行った。これによって西域で飼育されていた中形馬を大宛・烏孫・月氏を介して直接入手することができるようになった(②)。この地域から入ってきた馬は、一日

に千里を走り、血の汗を流す汗血馬といわれたり、天馬、千里馬などの名称でとても重宝された（注11）。

弥生時代頃にこの二つの経路で日本に中形馬が渡ってきたとされる。弥生時代の遺跡には小形馬とともに中形馬の化石の骨が発見されている。例えば鶴居（神奈川県）平井（愛知県）熱田（愛知県）田端（東京都）などからである。縄文時代に姿を見せない中形馬が弥生時代になって出現したことによって、中形馬渡来の時期のおおよその検討がつくものと考えられる。

つまり、小形馬は縄文時代に南中国沿岸から黒潮にのって日本に渡来してきたものと考えられる。中形馬は西域から中国大陸に取り入れられ、朝鮮半島經由で弥生時代に渡来してきたものと推測できよう。

## 第2節 牧の分類と役割

種子島に限らず、古くから“牧”で牛馬飼育が行われていた。古代の牧については「大宝令」（大宝二年＝702）に官牧が攝津など13か国に17牧、「統日本紀」（慶雲四年＝707）には国牧が23か国に設置、「延喜式」（延長五年＝927）に甲斐国に3牧、武藏国に4牧、信濃国に16牧、上野国に9牧が設けられた、という記事が掲載されている。「延喜式」が編纂された時代には「律令国家は大きく動搖しており、その現実的な有効性は疑わしい」（注12）とされているが、牧の設置はおそらく行われていたと考えられる。以上のように北は関東近郊から南は鹿児島県まで古代の牧は散在していたと考えられる。時代が下り、中世から江戸幕府成立時になると牧は北は東北付近にまで拡大された。また、幕府直轄の牧ではなく諸藩が藩宮の牧を持っていた。「南部藩（盛岡）は九牧、津軽藩（弘前）は六牧、仙台藩は一牧、水戸藩は二牧、薩摩藩（鹿児島）は七牧」（注13）などにみられるような藩宮の牧を經營していた。

種子島ではどのように牧が經營されてい

たのか。

大山彦一著『種子島マキの研究』の分類によると、

- (1) 自然発生的なる各部落の民間共同牧
- (2) 製塩を主とする塩屋牧
- (3) 製塩と関係はなく放牧を主とする御用牧
- (4) 官有牧に便乗してその後に発生せる私有牧（注14）

の四型に分類している。〔以後これを大一（1）～（4）と表記する。〕また、下野敏見氏の分類によると、

- (1) 領主直営の御牧（外牧）
- (2) 塩屋共有の塩屋牧
- (3) 農業村落共有のマキ（小牧）（内牧）
- (4) 自牧（私有牧）（注15）

の四型に区分していると考えられる。〔以後これを下一（1）～（4）と表記する。〕しかし、比較してみると次のことに気づくであろう。

両者の分類はほぼ共通していると考えられる。大一（2）と下一（2）、大一（4）と下一（4）、少しニュアンスが異なるが大一（3）と下一（1）である。大山氏の分類にあって下野氏の分類にないものは大一（1）自然発生的なる各村落の民間共同牧である。これは「時の領主の土地に自然発生的に『無断に』原始共同体的在り方に於いて、耕し且つ馬牛を放牧していた」（注16）といわれているものである。筆者の考察からはこのように自然発生的に牧が発生したとは思えない。前節において現在日本で見られる馬が自然発生したものではなく、人為的に運び込まれたものであると結論づけた。種子島においても同様の状況であったと思われる。このように運び込まれたときから牧が発生したとは考えにくく、使用目的をもって移入した馬を「無断に」使用することが可能なほどずさんな管理を行っていかなかったと予測される。

筆者は牧の発生は律令国家体制が整いはじめてから後、つまり8世紀以降ではないか

と推測している。律令制度が極南の種子島までどれほど浸透したのか疑わしいが、『日本書紀』『続日本紀』に朝貢関係記事（米朝関係記事）が頻繁に掲載されていることからも種子島は中央と密接に繋がっていたものと思われる所以、ある程度律令体制が浸透していたと予測される。

さらに、中村明蔵氏によれば、律令国家は種子島を「多福嶋以南の南島の支配の足がかり」であり「遣唐船などの航路の確保にもつながり、また唐・新羅との対外政策上の支点の一つにもなり得る」島として認識し、「軍事的拠点化」が行われたと考察している（注17）。そのため律令体制は浸透しやすかったと思われる。また、古代においても軍事力に欠かせないのは馬であるから、重要な馬を「無断に」使用することは不可能であろう。

しかしながら、律令体制が崩壊しはじめると10世紀以降に領地を無断で耕作する可能性はおおいにあり、「領主の土地に自然発生的に『無断に』原始共同体の在り方に於いて、耕し」の記述は妥当性を持つものと思われる。だが、この時期まだ貴重な価値を有していた馬を無断借用できたとはとうてい考えられない。

以上の考察によって大一（1）自然発生的なる各部落の民間共同牧は存在しなかったとしたい。

下野氏の分類にあって大山氏にはないのは下一（3）農業村落共有のマキ（小牧）〔内牧〕である。これは種子島で明治時代まで続いているホイトウを行うための牛馬を飼育していた牧のことである。支配者階級の直営の牧でもなく製塩村落の牧でもなく、個人の所有するものでもない。実際の調査のなかでもいくつか聞くことが出来た伝承なのでこの牧は創設されたと考えられる。

そこで筆者の調査と前述の考察から牧を以下のように分類する。名称はほとんど大山氏、下野氏と同様であるが、内容が少しずつ異なる。

#### （1）御牧（オマキ）

- (2) 塩屋牧（シオヤマキ）
- (3) 共有牧（キヨウユウマキ）
- (4) 私有牧（シユウマキ）

ここからこの分類に沿って牧の役割とそこで飼われた馬の役割や創設される時期について若干考察してみようと思う。

#### （1）御牧（オマキ）

先に少し述べたとおり、牧の発生は律令国家体制が整いはじめてから後であると筆者は考えている。『養老律令』の「廢牧令」にも牧に関する記述が見られ、律令の浸透とともに牧制度は確立したものと思われる。また、先に記したように古代種子島と中央（朝廷）との関わりや軍事的拠点化からもそのように類推できよう。

このような時期に創設された牧が御牧であった。御牧の管理は当時の支配者階級である。この時期の支配者がどこに拠点を置き、どのような支配体制を発揮していたのか不明であるが、馬を飼えるだけの力を持っていた人々である。そこで飼われた馬は軍事、運搬に使用された。軍事面は対外的な軍事勢力としても考えられるが、種子島を統治するための軍事力として利用されたことも挙げられるだろう。運搬は荷駄の運搬もあるが、情報を運搬するという役割も担っていたと考えられる。島、あるいは一部の地域を支配するには軍事力もさることながら情報力も必要である。内乱が起きた場合にもその情報を即座に入手して対応しなければならないからだ。

御牧は支配者が変わりながらも、明治時代になって牧が崩壊する時までその形を存続したものと思われる。

#### （2）塩屋牧（シオヤマキ）

塩屋牧は製塩村落に与えられた牧である。製塩作業に必要な薪材を確保するためとその薪材の運搬に牧で飼われていた馬が使用された。『種子島家譜』に「始めて塩窯を建つ。第一は西ノ村の立石、第二は国上村の淡、或いはいふ、第一大崎、尼泊、第二久

志瀬戸、竹之川なりと」という記載があり、第6代島主種子島時充の時代であるからおよそ14世紀半ばと考えられる。

### (3) 共有牧 (キヨウユウマキ)

製塩村落ではなく農業を生業としている村落に創設された牧を共有牧という。種子島では「田植前に、牧に放牧してある馬をひいてくる。一群の先頭のかしら馬を一頭ひくと、あとはぞろぞろとついてきた。水をひいた田に放ち、かしら馬のハナを取って、田の中をぐるぐる廻ると、一群の馬が田を踏みながらついて廻り、田は自然にやわらかく耕されるのであった。しかも田の底はかえってしまうという効果をあげた」(注18)、ホイトウと呼ばれる耕耘技術があった。牛馬による足耕が行われており、これに使用するために牛馬が飼育されていた。

共有牧の発生については今は明確に結論づけることが出来ないが、近世には既に行われていたことが判明している。そこからどれだけ時代を遡上するのかわからない。小野重朗著「薩南における五月の馬追行事概説」では鹿児島県本土の牧の馬について「古くは牧の馬は農耕用のもので、村落毎に牧をもってい」(注19)たと論じられているが、その根拠については明らかにされていない。確かに、ホイトウ技術は特別な道具を必要としないので稲作が導入されたころまで遡るようと思われる。

さらに小野氏は同論文の中で牧の馬は農耕馬として使用されたものが一番古く、軍用馬として使用されたのは近世ごろであると推測されている。しかし、古代に本土に渡来した馬が近世頃まで飼育されなかつたはずではなく、漢の武帝があれほどまで欲した馬を日本の当時の権力者が軍事力として使用しなかつたということも想像しがたいのである。また、水田の全てを耕作するだけの古代馬が存在していたとも考えにくい。この共有牧の創設時期については、後にもう一度再考する。

### (4) 私有牧

これは牧の制度が崩壊しはじめる頃に出現てくる形態である。明治12(1879)年に地租改正が行われ、村落共有地であった牧をある程度分割して個人の私有地としたものをさす(注20)。

## 第二章 製塩村落と牧

ここでは先に分類した(2)塩屋牧について南種子町の民俗事例に焦点を絞って述べる。南種子町には牛野、中ノ塩屋、大川、上立石、下立石、砂坂と6つの製塩村落がある。これらの村落は南種子町の西海岸に沿って位置しており、旧名では西海といわれていた地域が中心である。種子島全体で製塩村落は24か所ある(注21)。その4分の1が南種子町の西海付近に存在している。

南種子町の牧について考察する場合、塩屋牧をのぞくことは出来ない。種子島の中でも南種子町には製塩村落が集中しており、その民俗伝承が今なお残っているからである。その事実から(1)御牧(3)共有牧(4)私有牧についても触れながら、塩屋牧を中心として製塩村落の民俗を考察したい。

### 第1節 製塩の技術

製塩の技術については『日本塩業体系特論民俗』(注22)を資料としてまとめたものである。

①天日利用製塩…西南諸島を中心に分布している。岩場の産みを利用して水分を蒸発させて塩を探る。

②海藻利用製塩…乾燥藻を焼いたり、その上から海水をかけたりして鹹水を收拾し、これを煮つめることによって塩を探る。

③海水直煮製塩…近世以前は東北地方の全沿岸・佐渡の一带・隱岐、三重県南勢町・南島町の八幡、西南諸島、伊豆諸島にみられる。明治頃になると三陸と磐城海岸に集中する。汲み上げた海水を焚きつめて塩を

採る。

⑤塩泉利用製塩…福島県南会津郡伊北村、長野県下伊那郡大鹿村で明治ごろまで行われ、塩泉から汲み上げた鹹水を直接焚きつめて塩を採る。

⑥枝条架製塩…山形県西田川郡念珠岡村、島根県簸川郡杵築村、岩手県氣仙沼郡吉浜村、千葉県君津郡青砥で行われていた。海水を細滴として高所より落とし、風力により立体的な蒸発をさせて濃縮する方法。

⑦温泉熱利用製塩…青森県庁により試験され、明治12から13年までの1年間のみ稼働していた。

⑧塩田製塩…一般的な製塩方法といえる。揚浜系塩田と入浜系塩田の二系統に分類でき、さらにその中に細分されているが、ここではこれ以上の分類をあえて行わない。詳細は参考文献に直接あたっていただきたい。鹿児島県の垂水・新城（鹿兒島湾を利用）では、揚浜系塩田で干満差の大きいことを利用して行われる干渉浜で塩が採られている。

製塩技術を大まかに7つに分類したが、特殊な条件の下で行われている④⑥を除けばおおよそ5つに分類される。地域的な差があり、時代区分は明確にしにくいがおそらく番号順に時代が下るものと考えてよいだろう。自然を利用し、道具をそれほど必要とせずに塩が作られている①天日利用製塩が古い形態であると思われるが、その恵まれた自然環境においてこそ成立するものであるから、地域が異なればこの製塩方法は成立しない可能性もある。そのため一概に①が一番古い製塩技術であると結論づけることは出来ない。

①以降の技術は自然を破壊しながら塩を採っているという点では同じレベルに分類できる。しかし、②③(⑤)は自然の一部を利用しているといえるが、⑦塩田製塩は自然環境を大きく変えて製塩が行われており、自然を利用しているというよりは人工的な環境を作りだしている。このような製塩技術の進歩は随分時間をかけて行われてきたものと思われる。

南種子町で見られる製塩は③海水直煮製塩である。製塩土器による小規模の製塩とは異なり、南種子町で行われた製塩は土竈を使用して実施されていた。その開始年代は中世にはじまる。

## 第2節 製塩村落の民俗

### 【製塩の由来】

種子島にはじめて製塩技術がもたらされたのは中世の頃である。西之砂板にある砂板神社には『砂坂塩屋由来碑』がある。少し長いが以下に引用してみよう（本文内で送り仮名を平仮名にしてあるが、実際碑に使用されているのは片假名である）。

黒潮洗う南の地砂坂は今を去る六百二十余年前に即ち南北朝の頃、島主種子島時充公の命により創設した誇り高き塩屋村落である。その時徳永十郎左エ門、同八郎左エ門、同与八郎監修のもと貝次郎、貝太郎、貝五郎三人の技術者の指導により、石灰網代竈を築き海水を直煮して製塩を開始し、以来明治二十五年まで続いた。当時の徳永氏在住跡は立石徳丸ケ野にあり、貝氏三人の葬地は砂坂角堂山にありて先祖神として社殿を建て奉祀している。竈は相模の國の地名土居にちなみ土居大竈といい、別名鎌倉流吊竈という。

製塩用の薪伐採地ならびに放牧地として与えられた塩屋牧はおよそ百三十町歩、その境界を串目といい、上の串目は滝の谷下り海岸馬瀬まで、下は橋久保下り浜田川尻まで、東は水尾流し限りとなし、それを文化九年には塩戸七軒で支配し、維新時は上ノ塩屋八軒、下ノ塩屋九軒で經營した。

明治十二年の地租改正に当り、一部共有地を残し他は右十六株の長子が分割し、次三男には長子株の内から分配した。牧馬は馬印をして十四頭放ち、島主に対して年額塩四俵を上納した。

製塩開始の日には火入れ祈禱をなし、竈

を蔽う高屋の大名柱に記る火の神即ち天照皇太神に祈願した。火入れ祈禱は製塩廃止後も伝承し、上下塩屋ごとに旧十二月戊・己、又は壬・癸の日を選び実修しているも、祭典には竈を吊る塩屋釘、薪材を伐る古斧、潮洩れを防ぐ真綿、苦汁煮など供え、塩戸多数が参加して盛大に祀る。その直会には十二鉢、ひと駄おせ、たて飲みなどあり、わが国でも他に例を見ない珍しい行事で、貴重な無形文化財である。

このような由来に輝く砂坂は、島主志与の広大な牧地のもと、上下塩屋の神社および先祖神の信仰を中心に、先祖代々美わしい心で一致協力、精励し、村落を発展させてきた。ここに勤しんで束暦を記し、子孫に永く仕えるものである。

昭和五十二年三月吉日

砂坂部落民一同 建之

日本民俗学会会員 下野敏見撰  
岩坪昌安書

ここに記されている内容だけで、製塩村落の概観をとらえることができる。監修していた人物および技術者についてはその他の資料がないため残念ながら比較、考察ができない。

以下より、この由来記に沿う形式でそれぞれの事例を報告しながら、考察を進める。

### 〔竈〕

種子島の製塩は『種子島家譜』に6代島主種子島時充の時(14世紀)「始めて塩竈を建つ。第一は西ノ村の立石」という記述が見え、砂坂よりも一足早く製塩が行われていたと推測される。また、西之の下立石には製塩初地が残され、そこは赤茶色に焼けた石で今なお囲まれている。

その時に使用されていた竈は、『砂坂塩屋由来碑』には石灰網代竈と記されている。網代竈は竹を網代に編み込んで石灰で固めて釜を作り、落ちてしまわないように吊り上げて竈をつくる。そして、これは1年から2年程で壊れてしまう。下野氏は石灰網代竈

は近世に鹿児島湾岸などで製塩を行う際に使用した竈と同じものである(注23)と指摘している。

しかし、筆者の聞いた伝承の竈は以下のようである。

・島間(牛野)牛野新吉さん

(明治39年8月1日生)

鉄材がない時代だから、石と木と貝殻を焼いて作る石灰が原料であった。まず大きめの石で四角く囲んで石垣を作りその中にぎっしりと木を詰め込んだ。この木は伐採してから何日間か乾燥させたものを使う。はじめて火を入れたときに火のまわりが早くなるように乾燥した木を使用する。

詰め込んだ木の上に石を敷き、石灰と土を混ぜたものをその上から塗り付ける。周囲の縁は海水を湛えることが出来るように高く作っておく。少し乾いたころにドンジリ(木槌)で上からどんどん叩いて固める。乾燥してから海水を汲み入れて火を点ける。

・中之上(大川)大川助藏さん

(明治36年2月10日生)

四角く石を積み上げて、貝を焼いて作った石灰、石を崩したものと塩のにがりを混ぜ合わせて作った土を塗り込む。その中に木を立てて入れる。その上に木を横にして並べ、さらにその上に竹、バシガシワ(クワズイモ)の葉をのせ、さっき作った土を最後に塗る。二十日ほど乾燥させて火を点ける。

・西之(下立石)立石昌男さん

(明治38年1月20日生)

石を積み上げて、貝を焼いて漬して作った石灰を土と混ぜて泥を作り石に塗った。四角く作った。釜が落ちてしまわないように釘で吊り上げた。火を入れるととても固くなり、何十年も使えた。

網代に編んだ竹細工は使わず作られていくことから、石灰網代竈とは少し異なるように思われる。現在の伝えられている竈の種類は『日本塩業大系』によると土釜(焼貝殻粉粘土釜)のようである(注24)。この

釜の分布は「東北・北陸・関東・東海すなわち東日本の海岸」(注25)で、『砂坂塩屋由来碑』にある「相模の国」と分布は重なる。しかし、その沿革については明確に語られておらず、近世から明治期に用いられたことが明らかになっているだけである。

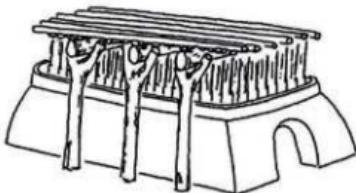


図2 福井県菅浜の土釜  
(『日本塩業大系』より)

現在語られている竈は土釜（焼貝殻粉粘土釜）であるが、種子島で製塩が行われるようになった中世頃には石灰網代竈が使われていた可能性もある。また、土釜（焼貝殻粉粘土釜）が相模で近世以前にも使用されていた可能性も残っており、現在收拾できた資料だけではどちらの竈が使用されていたかはわからない。しかし、『砂坂塩屋由来碑』に記載されている「相模の国」が、全く根拠なく語り継がれてきたとは思えない。さらに、現在残っている竈の伝承から、筆者としては中世頃より土釜（焼貝殻粉粘土釜）に非常に類似した竈が使用されていたと考える。

#### 〔塩屋牧〕

土釜（焼貝殻粉粘土釜）にしろ石灰網代竈にしろ、海水を直接煮て製塩することは同じである。この海水直煮製塩は多くの薪を有する方法である。濃度の濃い鹹水を使用すれば少量の薪でも塩が採れるだろうが、海水は塩分濃度が低いためどうしても薪が多く必要になる。

そこで種子島時充は製塩村落のために広大な牧を与えた。立石（上立石・下立石）には塩屋牧の創設についての伝承が残っている。西之（下立石）の立石昌男さん（明治38

年1月20日生）の先祖の熊一さんの話。熊一の時代、立石は種子島島主に塩で年貢を払っていた。けれど、竈は泥で作られているし薪も少なく25俵の塩を納めることができなかつた。そこで立石の代表の熊一が呼び出され、事情を尋ねられた。「薪が少なくて塩が焚けません」と言ったところ、殿様は「どこまで土地があれば作れるのか、必要な分だけ立石村落に与えよう」と言われた。そこで熊一は正直に「大潮から梅石平、梅石平から大川まで」と申し立てて立石の共有地が決められた。現在、立石村落は上立石と下立石に別れている。川を挟んで大喧嘩をしたそうだ。それ以来、共有地も川を挟んで分割された。

このようにして塩屋牧は各製塩村落に創設されるようになった。切り出した薪材を運搬するために馬を使用する。そこで、その牧で馬の放牧もしていた。「山林の伐採地には野草が豊富に茂り、また天然更新で落葉広葉樹が萌芽するので、格好な牛馬の放牧地とな」(注26)り得たのであろう。

製塩村落に創設された塩屋牧で飼われていた馬は運搬にだけ使用されていたのであろうか。種子島にはホイトウが行われていた事実がある。塩屋牧の馬はホイトウに使用されなかったのか。使ったといわれる方と、塩屋牧の馬は使わずに長谷野牧の馬を使ったと言われている方に分かれた。村落毎の特徴でもなかろう。

筆者は製塩がはじめられた当初は塩屋牧の馬でホイトウをしなかったと考えている。立石昌男さんは、立石の共有地を分け与えられた熊一さんの話の中で塩を島間まで運んだ帰りに米を積んで帰った、と話された。おそらく、製塩村落は塩を作ることを主な生業としていたんだろう。そして余剰の塩で交易をし、米などを手に入れていたのではないだろうか。下野氏も製塩廃止の一原因として製塩によって時間の制約を受け「農業に専念できぬため、塩を半・麦・米などと交換したが、その不利を自覚した」(注27)ことを挙げられている。のことからも製

塩村落の主食の大半は交易によってもたらされていたと考えられ、塩屋牧の馬をホイトウに使用していなかったのではないか、と推測する。

また、製塩村落の水田は非常に狭小なものであってホイトウをする必要がなかったと思われる。しかし、米の需要が高まるにつれて塩屋牧で飼われていた馬をホイトウに使用するようになつた。内陸に水田耕作地を求めて中規模の水田を開拓ホイトウを行つたものと考える。後に製塩を廃止する頃になると、塩屋牧の馬もほとんどがホイトウに使用された。つまり、塩屋牧の馬は製塩が盛況であった頃はホイトウには使用せず、米の需要が高まつてくるころからほいとうに使用した。製塩が廃れて塩屋牧は塩屋牧として機能しなくなり、ホイトウを主な目的とした共有牧として使用されるようになったと考えられる。

製塩準備のために薪を下ろしてくる仕事とホイトウという二つの仕事を行つようになり、馬の絶対数が不足して長谷野牧の馬を使用するようになった、と考えれば長谷野牧の馬を使用してホイトウをしていったという伝承も納得できる。

製塩村落（塩屋）に与えられた塩屋牧は村落共有地という性格を有するものと筆者は思っていたが、そう簡単には割り切れない。

塩屋牧を与えられた時にその土地に住んでいたものだけが代々、その共有地である塩屋牧の権利を持っていた。この権利をカブ（株）という。株は次世代に受け継がれる場合、長男のみが相続できた。塩屋牧が与えられてから600年は経過しており、村落の人口はその当時の何倍にも膨れ上がっていくのだが、株の数は一定していた。

製塩が行われなくなつても株を持たないものは、牧の跡地を利用することができなかつた。村落にいながらその村落の共有地の使用権利をもつてなかつたのだ。

牛野では昭和28年頃、株を持つ長男筋のものと次三男が共有地として牧の跡地を使用できるように争いをおこしたという。村

落の運営は全ての村落民によって行つているにもかかわらず、使用する権利がないというのはおかしい、と次三男が主張した。解決策として長男に5町歩、次男以下に2町歩の土地が分配された。

砂坂も株を持たないものは牧の跡地を使用することが出来なかつた。そのため長男は比較的裕福であり、次三男は努力しても裕福になれず、また、そのために言い争いが起つることもあつた。

製塩村落に与えられた牧は共有地というよりは、長男筋の占有分配地である。

これらのことを見えて示唆していると思われる興味深い話を中ノ塩屋の伝承者から聞くことができた。

中ノ塩屋のある家で、牧の馬を一頭盗んで食べてしまった。馬はきちんと管理されていたので、一頭足りないことがすぐに明らかになつた。調べのものがやってきて中ノ塩屋の各家を尋ねて歩いた。馬を盗み食へてしまつた家にも調べのものがやってきた。母は子供に絶対に言つてはいけないよ、と口止めしておいた。しかし、調べのものがきたときに母が子供に見せた“言つてはいけないよ”という目配せを見て、子供は「アッパーの目は、ヘヤン隅にあるウマン目のごたる（母の目は、奥の間〔床の前にある部屋〕の隅にある馬の目のように丸い）」と言つてしまい、捕縛された。

馬を盗んだ罪で長崎県の島原に遠流になつた。種子島を離れるときに母親が「この村落はこの後、9軒以上に増えるな」と言い放つた。それ以来、中ノ塩屋は九軒以上増えることがないといふ。もし、増えたとしてもすぐによそに移ってしまうそうだ。

海と山の接する辺りの畠（そこを馬洗いつぶきといふ）で馬を殺した。そこから馬の足の骨が出てきたそうだ、と伝承されている。

馬を盗んだ家は新参入者であった。もちろん新参入者は牧（共有地）の株を所有することができない。

この話は江戸時代の話ではあるが、當時

は、塩屋牧の馬が厳しく管理されていたこと、長男筋で株を相続したもの以外は居住することが困難であったことがわかる。

#### 〔火入れ祈禱〕

火入れ祈禱は「製塩開始の火入れに当って、塩竈を蔽う高屋の大名柱に祭る火の神に祈禱する行事である」(注28)。現在、伝承されている火入れ祈禱について以下に記す。

・島間（牛野）牛野新吉さん

新暦の1月頃についていた。はじめて竈に火を灯す日で、神職を呼んできてお祭りをした。昔は盛大に行われ、よその土地に嫁に行った人々も戻ってきていた。村落内にマワリアイ（輪番制）でカマジ（釜司）になり、祭りを取り仕切った。カマジの下にはマスドリ（升取）が二人いたが、これもマワリアイで役についた。カマジという名称は昔の釜を管理する人のことであり、マスドリの名称は塩を献上する際に塩を升で測っていた役職名である。

塩を作らなくなり竈を使用しなくなつてもこの行事は牛野村落内に残っていた。

・中之上（大川）大川助蔵さん

旧暦の12月頃についていた。竈をつくり、はじめて火を灯すときに、ホイドン（神職）を呼び、「釜が崩れることなく、いい塩が採れますように」と祈願してもらう。その後は、村落の人々が集まり宴会をしていた。

・中之上（中ノ塩屋）中峯ツヤさん〔大正4年3月15日生〕

新暦の1月11日に行う。塩屋牧の共有権を持つ家の戸主だけが集まり、昨年の共有地の利用報告などが行われる。夕方からは宴会がはじまる。

・西之（下立石）立石昌男さん

1年に1度必ず行う。期日は新暦1月10～20日の間の1日だけ。火入れ祈禱の日にはホイドンを雇って、塩屋神社で行う。「釜の海水が漏れないように」祈願した。祭りのあとは宴会を開いた。この時に食べる魚を3、4日前から準備して、盛大に行つた。

・西之（砂坂）砂坂七藏さん〔大正10年

12月21日生〕

砂坂村落にとって製塩は生活を支える重要な生業であった。そのため、塩竈に対してとても神経を使っていた。火入れ祈禱が壊れないようにホイドンを雇って祈願してもらった行事である。この行事は塩を作らなくなつた今日でも行っている。

このように、伝承では既に製塩が行われていたころの火入れ祈禱の原型をとどめていない。製塩が行われなくなつてからは塩釜神社で祭式が行われ、公民館などで直会が開かれている。

火入れ祈禱と塩屋牧との直接的な関係はないものと思われる。この祭りは製塩村落のみが行っていたもので塩の生産と関係が深い。いくら精巧に作られたとはいえ貝を碎いた石灰や泥などで作られた土釜はどうしても海水漏れを起こしやすく、塩の生産量も減少しがちであった。そのために海水漏れを防ぐ祈願をし、生産量が少しでも増収するように祈ったものと思われる。なおかつ製塩に携わる山から木を切り出し、薪にして燃やすという一連の危険な作業を無事に行えるよう祈願したものだろう。

#### 〔牧の神（マキンカミ）〕

・島間（牛野）牛野新吉さん

牛野の小牧の入口に牧の神が祀られている。牧の神の特別な祭りはなく、牧で飼育している馬に怪我がないように祈願していた。正月には牧の神に供え物を持参したり、注連縄を張ったりしている。馬を厩舎で飼うようになってからも馬の健康祈願をした。



牛野 牧の神

牧の神は西向きに4つの自然石が置いてある。いずれも高さ40cmにも満たない小さな石である。その周囲には丸石が敷きつめられ、蘇鉄が門のように左右に2本植えられている。近くに小川が流れているらしく、川のせせらぎが聞こえてくる。後ろの大木はタブの木であるが、途中で折れている。

・中之上（中ノ塩屋）中峯ツヤさん

牧の神はタブの大木だった。畠の隅にあったので昼時の休憩場所にはもってこいだった。祭りについての記憶はないが、牧の近くを馬が飛び出して来るかもしれないとびくびくしながら通ったことを記憶されていた。

・西之（下立石）立石昌男さん

牧の神は馬の神様で、タブの大木が1本あつただけらしい。特別な祭りの日はなかった。家を建ててからなくなったのではないか。

立石昌男さんはなくなったのではないかと心配されていたが、現在は山のなかに移され、牧の神は残っていた。

コンクリート製の祠のなかに丸石が2つ安置されている。蘇鉄が2本門のように植えられている。周囲の人々の話では、今は正月に供え物をしているだけである。



下立石 牧の神

このように牧が存在していたわりに牧の神は祭られていないようだ。しかし、牧の神を祭っている村落ではその神に馬の安全を祈願していたことがよくわかる。牧の神は製塩村落よりも農業を主としていた村落のほうに多いようである。中種子町などでは多くの牧の神に出会うことが出来る。そ

こでも牧の神には牛馬の安全を祈願するものだと考えられており、馬頭観音であるといわれる方多かった。

馬頭観音と牧の神の関わりについてほんの少し考察しておきたいと思う。牧の神が馬頭観音として考えられるようになったのは随分後になってからだと考えられる。時期を限定することは出来ないが、馬頭観音という仏教的な言葉の使用はおそらく本土からの流入であると考えられ、その時期は遅いものと思われる。

また、南種子町でコンビヨウといわれる馬喰も馬頭観音の知識を村落内に伝達していたと考えられる。コンビヨウの出現も時期を限定することは出来ないが、少なくとも牧で牛馬を飼育しなくなり、牛馬を厩舎で飼うようになってから出現したものと思われる。

〔塩釜神社〕

・中ノ塩屋

中ノ塩屋神社と呼ばれたり、氏神神社と呼ばれたりしている。塩屋が祀る神様だといわれていた。ヒライリの本殿は山の中にある。神体が何であるかわからない。



中ノ塩屋神社〔中ノ塩屋〕

・大川

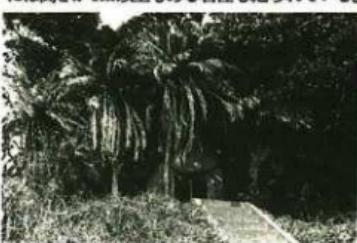
大川小学校の裏手にある。天照（テンショウ）大明神といわれている。塩屋で祀る神社であり、火を扱う村落だから天照大明神を祀っている。拝殿からくねくねと山道を登っていくと本殿に着く。コンクリート製でアルミサッシの扉がついた本殿は見る

からに新しい。注連縄が張られている。本殿内には社があり、その中には白い珊瑚

と赤茶けた石が安置されていた。その周囲は木々が鬱蒼と生い茂っていた。神社内には高さが1m以上もある石柱も祀られている。



天照大明神〔大川〕



砂坂神社〔砂坂〕

#### ・下立石

下立石の山の斜面にあるが、上立石と共に同様に運営されている。立石塩屋神社と呼ばれている。今回、道路の改修工事のためにここに移された。その前はもう少し下にあった。立石塩屋神社は今回の移動で3度目になる。今度の移動によって鳥居、拝殿、本殿など全て新築にした。



立石塩屋神社〔下立石〕

#### ・砂坂

現在、砂坂神社と呼んでいる。砂坂には上塩屋、下塩屋の2つに分かれて製塩が行われていた。上塩屋は代々続く長男筋の經營するもので下塩屋はそこから分家していく。次三男筋の經營する塩屋である。製塩が行われていた時は2つの村落で1つずつ塩屋神社を祀っていた。また、貝次郎貝太郎神社を2つの村落共同で祀っていた。しかし、建物の老朽化も激しく三つの神社を運営していくにはお金がかかるということで、1つにまとめた。これが現在の砂坂神社である。

本殿内には社があり、その中には白い珊瑚

以上が村落内にある製塩に関係する神社である。現在では塩釜神社と呼ばれているものはない。しかし、祀っている人々は製塩村落の神様だったと記憶しており、塩釜神社と考えて良いように思う。塩釜神社とは一般的に武甕翁神、経津主神、塩釜六所明神〔塩土老翁を祭ったもの〕(注29)を祭神としており、塩土老翁に代表されるような海の神様としての要素が強いように思われる。

しかし、種子島では塩釜神社と総称される製塩村落の神社では天照大皇神を主神として祀っているものが多い。これは製塩方法が異なるために生じてきた差異なのではないかと考えられる。塩釜神社の本尊として知られている宮城県塩釜市では入浜系塩田による製塩が行われている。また、宮本常一氏は「この神が全国に分布するようになったのは入浜塩田が各地にひらかれた、その守護神として勧請されるにいたったことが大きな原因となった」(注30)といわれている。

種子島の製塩は今まで見てきたように土釜による製塩が主であり、塩田製塩はあまり行われなかった。土釜による海水直煮製塩では火を扱うことが塩田製塩とは全く異なっていた。そのため塩釜神社と総称されてもその祭神には海の神の要素が消え、火の神の要素が強く引き出されたものと思われる。日の神である天照大皇神を火の神と

して祀ったと考察される。

### 第三章 総論

各章各節毎にそれぞれのまとめを行っており、その全体的なまとめをここで述べてみよう。本稿は種子島の「牧」、特に南種子町の西海岸に位置する牛野、中ノ塩屋、大川、上立石、下立石、砂坂といった製塙村落の塩屋牧に焦点をあて、塩屋牧と民俗との関連やその特色を解明することを主眼としていた。ここまで考察を進めてきて明確な結論は出てこなかったように思うが、牧の文化とも言えるようなものが南種子町のなかに深く根づいていることを実感した。

製塙村落に中世頃与えられた塩屋牧は製塙に必要な薪材を供給するのみでなく、伐採した山野に運搬に使用する馬を放牧していた。製塙の祭りとして火入れ祈願が残存し、製塙の神様として塩釜神社（各村落毎に名称が異なっているが製塙村落で祀っている神様の総称として使用する）を祀っている。そして、放牧していた馬の祈願は牧の神にしている。さらに、馬ではホイトウも行っていた。江戸時代になるとホイトウをするために馬を飼っていたようだ（注31）。種子島における牧の影響は、その時々で用途を変化させながら時間軸内に常に流れていることがわかった。

そこで、種子島の牧の発生とそこで飼われていた馬の使用法を再度考察してみたい。馬は縄文時代後期頃に小形馬、弥生時代に中形馬の渡来があったと考えられる。下野敏見氏は「小形馬とオモゲー」のなかで「オモゲー……非金属文化、小形馬、農耕的、南方的

クツワ……金属文化、中・大形馬、軍事的、北方的」（注32）という指摘をしておられる。これは種子島の牧の発生にとっても非常に示唆的である。

つまり、小形馬は縄文時代後期頃に種子島に渡來したときにはその当時の権力者の

下に管理されていた。その管理方法はトカラ列島に見られるような繋ぎ飼いであったろう。その時小形馬に付けられていた制御具はオモゲーであったと考える。オモゲーは農耕用に使用する場合には不都合な面はなかった。この場合の農耕用というのはホイトウのように耕耘作業などを指すものではない。水田稲作が縄文時代後期頃に日本に渡来していた可能性もあるが、水田稲作技術渡来時期はホイトウではなく人の足による足耕が行われていたものと考え、馬は主に運搬作業に使ったと推測する。

縄文時代の遺跡から馬の化石骨が出土した場合、多くは老馬で丁重に葬られていることからこの時代の馬は貴重なものとして扱われていたと考えられる。さらに、その出土数も非常に少ないことが根拠としてあげられる。ホイトウでは多くの馬を必要とするため、縄文時代にはこの技術は伝わらなかったのではないかと思われる。

古墳時代以降になると日本の馬の頭数は非常に多くなっている。この頃には中形馬が金属製のクツワとセットになって大陸からもたらされており、軍馬として使用されていたんだろう。権力者が中形馬を欲し軍馬に使用した頃には小形馬をホイトウに使用するだけの頭数がそろっていたと考えられ、ここに共有牧が創設されたものと考えられるのではないか。官人の使用する馬は中形馬で平民の使用する馬は小形馬であったと考える。

そこで、牧の発生とこの馬の渡来を兼ね合わせてみると、縄文・弥生時代には切り開かれた山野に数少ない貴重な馬を繋ぎ飼いで飼育し、律令体制が整いはじめて放牧という形態が整い、多くの馬を飼育するようになった。律令体制下では中形馬を軍事や伝達手段とし、御牧が創設され、小形馬を農耕用（運搬）に使用したものと考える。古墳時代には小形馬の頭数も増加はじめ、ホイトウが行われるようになり共有牧が創設されたのではないかと推測する。

中世には塩屋牧が創設され、製塙を行っ

た。この時代から後は、文献にも残されておりおそらく疑問の余地はないものと思う。

明治12年の地租改正に伴って一部の牧は個人名義の共有牧になったり、私有牧になった。明治38年の塩専売法により塩屋牧は解体し、ホイトウを目的とする共有牧になった。この時代には既に中形馬を使用していたものと思われる。

中世に端を発する塩屋牧はその機能が変容しながらも明治期まで存続し、今なお社会構造や祭りにもその影響を及ぼしていることについては本論に述べた。

最後に南種子町最大といわれた長谷野牧と塩屋牧の分布からその地理的な創設場所を考察してみる。お話を聞かせていただいた方々の指摘によって作った図である。長谷野牧は100m等高線上に分布している。この100m等高線地域は長谷野台地といわれており、南の平野村落あたりにまで延びている。塩屋牧ではないが平野の辺りにも牧が存在していたという話を聞いているので、おそらく南種子町の牧は100m等高線上の長谷野台地に創設されたものと考える。また、種子島全域に渡って100m等高線上に牧を創設したのではないかと考察をしている。

縄文・弥生時代の種子島の遺跡分布から人々は平野部に住み着いたと類推でき（注33）、その延長線上に古墳時代があることからも水田開発は平野部で行われ、山野を資源、放牧地として利用したものと推測する。

以上、いろいろな側面から種子島の牧について考察を進めてきたが、何故塩屋牧には中世以来からの行事が存続しつづけたのかといった疑問は解くことができず、表面の民俗現象だけを追ってしまったように感じている。これは反省すべき点である。

しかし、民俗の宝庫といわれた種子島にも民俗が風化していく現象を目の当たりにして、このように記録できたことは幸いである。

忙しい合間をぬってお話を聞かせていただいた南種子町の皆さんのおかげで、このような形で本論をまとめることができた。ここにお礼を申し上げたい。

(注)

- 1 下野敏見『トビウオ招き』  
八重岳書房 1984… (a) 110頁
- 2 下野敏見 前掲書 (a) 120頁
- 3 直良信夫『日本古代農業発達史』  
さえら書房 1956 127頁
- 4 林田重幸『日本在来馬の系統に関する研究』日本中央競馬会 1978 3頁
- 5 市川健夫『日本の馬と牛』  
東京書籍 1981 23頁  
与那国馬、宮古馬、トカラ馬、野間馬、対州馬、御崎馬、木曾馬、土産馬を日本在来馬としている。
- 6 日露戦争後の明治39年、明治政府が馬政を強化し品種改良（主に大形化）を推し進めたもの。これによって明治39年に洋種 0.8%， 雜種 11.4%， 和種 87.8% であったものが昭和27年には洋種 3.1%， 雜種 92.3%， 和種 4.6% と大幅な雑種化が進んだ。
- 7 林田重幸 前掲書 154頁
- 8 林田重幸 前掲書 137頁
- 9 林田重幸 前掲書 160頁
- 10 林田重幸 前掲書 146頁
- 11 林田重幸 前掲書 122～129頁
- 12 京大日本史辞典編纂委員会編  
『新編 日本史辞典』  
東京創元社 1990 105頁
- 13 市川健夫 前掲書 206頁
- 14 大山彦一『種子島マキの研究』  
鹿児島県農地部農地管理課 1951 7頁
- 15 下野敏見「薩南諸島の製塩」… (b)  
（『日本塩業体系 特論民俗』  
日本専売公社 1977） 174頁
- 16 大山彦一 前掲書 5～6頁
- 17 中村明蔵『隼人と律令国家』  
名著出版 1993 283～302頁  
古代多羅島の成立とその性格（第三章）

- 第二節)に詳述されている。
- 18 下野敏見『タネガシマ風物誌』  
未来社 1969… (c) 55頁  
さらにホイトウについては  
下野敏見『種子島の民俗 I』  
法政大学出版局  
1982… (d) 86~96頁
- に詳細な報告がある。
- 19 小野重朗  
「薩南における五月の馬追行事概説」  
(『薩南民俗』第九号  
指宿高等学校郷土研究部 1956) 20頁
- 20 大山彦一 前掲書 21頁
- 21 下野敏見 前掲書 (b) 172頁
- 22 広山亮道「製塙技術の伝承と用具」  
(『日本塙業体系 特論民俗』  
日本専売公社 1977)
- 23 下野敏見 前掲書 (b) 174頁
- 24 広山亮道 前掲書 110頁
- 25 広山亮道 前掲書 110頁
- 26 市川健夫 前掲書 138頁
- 27 下野敏見 前掲書 (b) 190頁
- 28 下野敏見 前掲書 (b) 185頁
- 29 宮本常一「塙と習俗」  
(『日本塙業体系 特論民俗』  
日本専売公社 1977) 819頁
- 30 宮本常一 前掲書 819頁
- 31 下野敏見 前掲書 (a) 122~ 123頁
- 32 下野敏見「小形馬とオモゲー」  
(『南西諸島の民俗 I』  
法政大学出版局 1980… (e)) 139頁
- 33 白木原和美「種子島の先史時代」  
(『南日本文化 一種子島総合学術調査  
報告書』第2号 鹿児島短期大学  
日本文化研究所 1969) 14頁

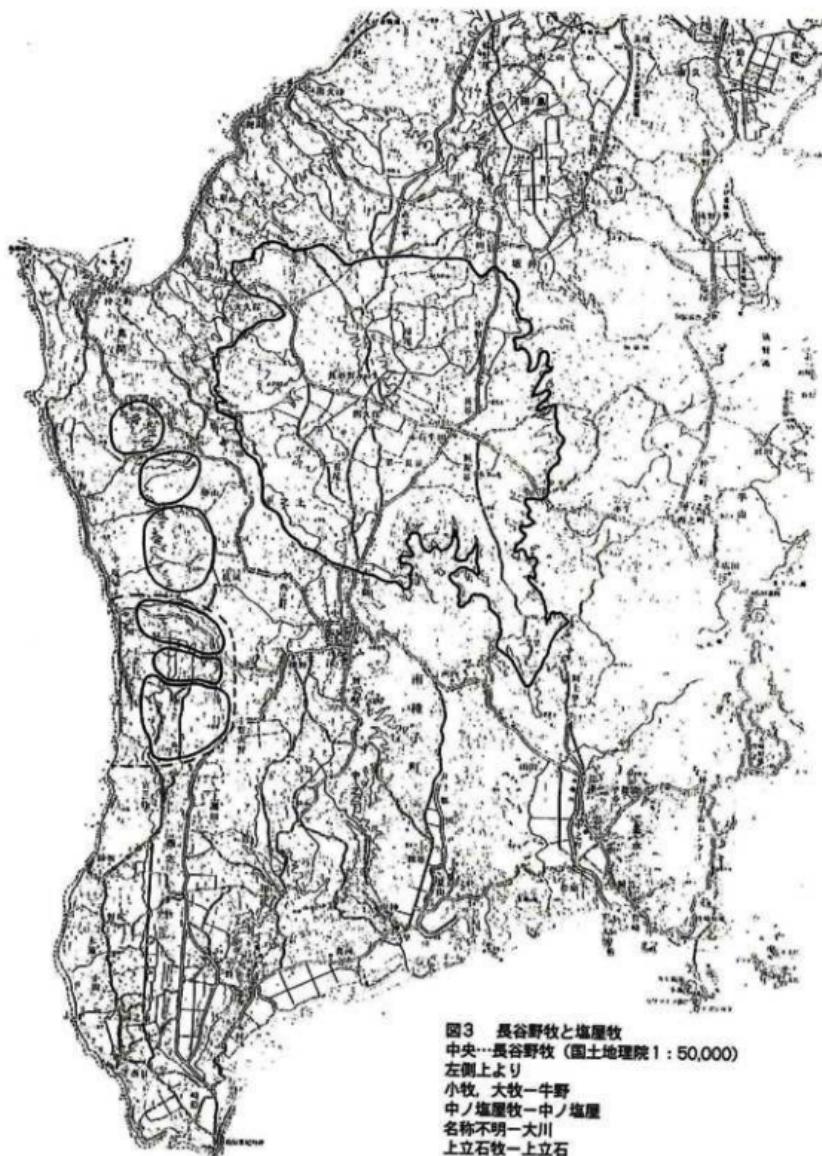


図3 長谷野牧と塩屋牧  
中央…長谷野牧 (国土地理院 1:50,000)

左側上より

小牧、大牧一牛野

中ノ塩屋牧一中ノ塩屋

名称不明一大川

上立石牧一上立石

下立石牧一下立石

## 製鉄民俗（鉄関係伝承）

大学院院生 町 健次郎

製鉄跡を筆者なりに調査し、種子島の製鉄についての一つのモデルを知ることが先決であると考えた。

種子島の中での今回の調査対象地は南種子町である。地図からの予想としては西之の海岸一帯に砂鉄の採集に都合のよい海浜が見られないでおそらく上中より東一帯、島間の海浜周辺であろうと推測した。これは森林は全体的に広がっており砂鉄鉱床から遠い場所でわざわざ行う必要はなかったであろうという理由からである。

先学の研究で知ることのできる南種子の製鉄関係地は以下の通りである。

- ①「種子島の歴史と文化」平山武章  
 橋口尚武『隼人世界の島々』p288  
 小学館1990

製鉄所跡 .... 平山、鍛冶屋ヶ関  
 鉄滓出土地 ... 島間内城、茎永（雨  
 田）、茎永（松原）

これらの調査がされた年代はわからないが、製鉄が行われていたことを知る方々は非常に少ない。中には平山のようにどの年記者に御聞きしても判らない場所もあり調査は困難を極めた。種子島だけでなく鹿児島県の製鉄跡は文化財指定されているものが少なく河川工事、道路工事等で破壊されたものも少なくない。伝承者がいなくなれば破壊されていくことは免れず、調査者は村落内の場所を記す必要が感じられた。

## 二、村落別鉄関係伝承

製鉄伝承を求めて村落から村落へと走り回る。なければ次の村落へと。村落の年配者1、2人を訪ねて鉄に関する事を御聞きする。伝承がなければならない一つの確認作業として意義はある。ここでは製鉄のみに

## 一. はじめに

三月十五日、西之表より単車で南へ下る。三月とはいえ単車で走るにはこの島はまだ肌寒い。ヘルメットの中の露出した肌は赤くなってしまった。南に至るまでおよそ一時間、島の中央部の大地を走れば一段と風は冷たく、海岸を走れば景色は良いのだが浜砂が目に入る。風はどこを走っていても強く冷たい。

種子島に人が住み始めてから、この強風が人々から嫌われてきたと考えるのは早計であろう。この屋を必要とした生業もあったと考えられる。製鉄である。送風器が使用される以前の古代たら製鉄は自然通風によって行われたであろうということはこの分野の歴史に関する書に多く記されている。

風に吹かれて身体を刺す砂には砂鉄が含まれている。この黒い砂は種子島をぐるりと囲む海浜部に風や波で黒い線を描いているのが見られる。

確かにここは様々な民俗の宝庫であると共に「鉄の島」でもあると感じた。

米粒の形をした種子島の大きさは決して米粒程ではなく、日本の島々の中でも大きい類に入る。この島で製鉄調査をするにあたっての筆者の当初の予想としては何よりもどの村落でも製鉄が行われた可能性を秘めているということであった。これまで薩摩半島の製鉄調査を行ってきた筆者にとってこの島は周辺に砂鉄が豊富に蓄積し、森林面積もわりと広く、他所に比べて非常に条件が恵まれているのである。村落を一つ一つ訪ね歩くのが最良の調査であるが、今回は期間が短く文献より知ることのできる

かぎらず鉄に関する伝承を雜記しようかと思う。伝承がないのでその村落では製鉄はなかったとするのは早計であり、伝承ではなくとも鉄滓が残っていた事例は他地域で数例ある。南種子の場合も今後見つかる可能性は十分にあり今後さらに調査していく必要がある。

### (1) 基永（松原）

三月十八日夕方松原を訪ねる。宝満神社の前に単車を止めて、仕事帰りの小川基彦氏に話を聞く。基彦氏は松原の中では年配者なのだがこの村落で製鉄が行われていたという話について御存じではなかった。ただ氏の話によれば小字イナニワには大きな岩があって、そこに鉄分がこびりついていたのを覚えているという。ここは昔井戸があった場所である。この地は三年前に出来た道路を作る際に削られて現在はない。

この場所が製鉄跡がどうか筆者は鉄滓一つでもあれば手がかりとなるであろうと探索したのであるが見つけることはできなかった。

松原は田が広がる村落である。敢えて製鉄がこの村落で行われたとすればどこであろうか。製鉄に必要な木炭をわざわざ田の近くに持ってくることは考えられず、田の広がる平地を省けば残るのは宝満神社の周辺しかないであろうと推測する他にない。



写真中央の道路付近が小字イナニワ

### (2) 島間（田尾、仲之町）

三月十九日早朝、上中からロケット道路をひたすら西へ走ると島間に着く。目的は先学の記載にある島間の製鉄跡である。時間も限られているのでまずその場所を把握

しようと田尾に住む南種子地名研究会会員の崎田善次氏を訪ねる。

氏の机の上の電気スタンドは明かりが灯っていた。勤勉な方のようである。本を開けたまま氏は筆者に対応して下さり、知りたいことの主旨を聞かれると早速鉄の話をしてくださいました。

島間の製鉄跡については、地名研究会の会員である鷲島正孝氏から聞いたことがあるといわれ、直接会って聞くのがよからうとのことであった。

崎田氏は鉄に関する話として次のことを語ってくださいました。昭和10年頃に砂鉄採集の作業をした覚えがあるという。当時小学生だった氏の記憶によれば次の通りである。

島間港から小瀬田までの浜は昔は八丁浜といわれ四つの川が海に注ぎ込んでいた。港側から古川、島間川、今出川、宮の前川で、島間で一番砂鉄が取れたという場所はこの中の宮の前川河口周辺であった。宮の前川は島間の大久保の裏山辺りから流れてきており、川の中にも黒い砂鉄が見られたことから氏は陸から砂鉄が流れきっているのではないかと思ったという。そのせいか海岸でも砂鉄の取れるのは陸に近いところであったという。

砂鉄採集作業のことを島間では「スナトリ（砂取り）」といった。東邦金属の日雇い（一日50銭程）で島間近辺の子供、婦人が50人程働いていた。当時の現金収入（チンドリ）はこの仕事くらいのものであった。子供たちも働いたのは現金を自分たちも欲しかったからであったという。40、50代の男の人たちが日雇いにきていることは殆どなかった。仕事内容は東邦金属の社員らしき砂鉄採集に熟練した大人の集めた砂鉄を運搬することであった。

崎田氏が見られた砂鉄の採集方法は木箱の側面を二枚取り去った檻のようなもののに柄杓で砂鉄の混じった砂を上部に積み上げて上から水をかけて流していた。砂鉄は砂よりも比重が重いので水に流れずに檻の真中にたまつた。檻の底板は松製で東邦

金属が配っていた。樋は地面から50度位の角度で使っていました。

作業は樋を一人が持ち、別の人人が水をかけていた。水をかけるのは強くても弱くてもうまく行かず、軽く上から柄杓で水を落とす感じであった。これだけは社員らしき男たちコウシャ(巧者)によってなされた。砂を樋にのせるときはジョレンでのせた。ある程度砂鉄がたまるまで何回かのせた。

日雇いの島間の人々の仕事は採集された砂鉄を麻袋に詰めて浜の一ヶ所に集めて置いて暫く水分を抜き、それをあらかじめ壁を仕切って作っておいた道のそばの集積場に持っていました。砂鉄採集地点から集積場までの運搬距離は遠くて100m程であった。

以上は昭和10年頃の話であるが、それ以前にも先祖が砂鉄採集をしていたという話は聞くことができなかった。



宮の前川河口周辺。このあたりで砂鉄が採集された。

### (3) 島間（上方）

午前中島間の崎田氏に紹介して頂いた鮫島正孝氏に御会いするため長谷野に足を向ける。鮫島氏は筆者が島間を出た頃に崎田氏から電話をもらっていたようで家で待っていて下さった。

用意していた地図に製鉄跡の場所を書き込んでもらい話を聞くのだが伝承は全くない。その場所が鉄に関係していた地であったことをどうして御存じであったのか御聞きすると、そこは氏の所有する田がある所で以前から鉄滓が出てきていたという。

小字はカネフキバ（金吹場）で製鉄跡の可能性は高いのであるが、近年の道路工事

でカネフキバ一帯は削られて鉄滓が今もあるかわからないといわれた。しかし行って見る必要はあると感じられ早速出かける。

地図を頼りについたところは島間向方の島間小学校のすぐ上であった。鮫島氏のいわれた場所は島間に向かって右手の土手である。単車を止めて墓地の小道をくぐりぬけ土手の裏側で鉄滓を探しはじめる。10分程歩きまわると3つ鉄滓が見つかった。色は黒い。専門家を見て頂かないと判然としないが、筆者には製鉄鉄滓のように思われる。

この地はわりと斜面である。近くに水は流れていながら最近まで田が2つあったといわれ、そこへ水がどこからか引かれていたという。この水を引く水路のようなものは昔からあったものをそのまま使っていたといわれる。

道において単車にエンジンをかけると遠くに島間の海が見えた。



鉄滓が見つかった土手。竹ヤブの下は舗装道路になっている。



水を引いた跡。製鉄と関係しているかわからない。

#### (4) 墓永（雨田）

三月二十日夕方、雨田に至る。丁度、種子島は砂糖黍の収穫と田植えで多忙を極める時期であることもあり、早朝か昼飯時、または仕事を終え帰途につく夕暮れに話を伺うしかなかった。事前に雨田の唄の名人である雨田新七氏から製鉄が雨田で行われていたという話を伺っていたので今日はその跡を確かめにやってきた。

新七氏の話によれば、時代は分からぬが明治以前のこと現在の上蘭繁氏宅の裏山に浜から砂鉄を持ってきて鉄の固まりを作っていたという。雨田で鉄を作ったといわれる場所はここだけである。新七氏の少年時代の記憶に、村人がこの山から大きな鉄の固まりを転がしてくるのを見かけたという。新七氏がこれは何かとそこにいた一人の老人に尋ねると「これは浜から砂鉄を持ってきて、火をたいて固まりにした鉄だ」という風に答えが返ってきた。この鉄塊は後にどこからか商売人がきて買っていったということである。

雨田は種子島有数の米どころであり、旧郷士が居住せず昔から農村であったといわれる。この製鉄跡のある山の所有者は雨田太郎吉氏であるが旧郷士ではあった伝承は聞かれない。雨田太郎吉氏は上蘭繁氏宅よりもまだ山手に住んでいたが今は家はない。

製鉄跡周辺に川は流れていらないが生活用として井戸があり、皆ここから汲んで使っていた。

砂鉄は近くの海岸から運んできたといわれる。砂鉄を採集するときは川の水で流してとったという（砂鉄は重いので水に流されにくい）。

牧（マキ）は雨田にはなかったようで、近い場所といえば上里にあった牧ぐらいでであろうといわれる。

筆者は以上のような新七氏の話をもとに製鉄跡の下に住む上蘭繁氏を訪ねた。製鉄に関する伝承はもはや聞くこともできなかったが繁氏の奥さんのミチコさんが以前山で鉄の固まりをみたことがあるということを話された途端、「ついてきなさい」と鍵を片手に筆者を進んで案内して下さった。裏

山は竹藪になっており道が判りにくくなっていた。七、八分ほど登ったところであろうかミチコさんは地面の枯藪をはらわせて「これかね」と黒ぐろとした鉄滓を取り上げて筆者に手渡して見せた。確かに製鉄鉄滓である。案内して下さった場所は斜面で未だ竹藪の中である。この周辺の枯藪をはらいのけるだけで鉄滓は見られる。かなりの鉄滓の量である。

雨田の製鉄に関する詳しい伝承は得ることはできなかったが雨田新七氏の優れた記憶と上蘭ミチコさんの親切な案内の御蔭で製鉄がここで行われていたということははっきりとしたことは大吸穫であり感謝する他にない。

付記として、この製鉄跡より海岸に向かって200m程町道に沿っていった所に豊受神社がある。この境内に中央に竹が数本植えられており土が盛られている。この中に赤い鉄滓が点在する。雨田新七氏によればこの竹は氏の小さい頃にはなかったが故冷水矢七氏がどこからか持ってきて植えたものだという。冷水氏は雨田の人であるが先祖が鐵治屋など鉄に係わる職であったという伝承はない。



製鉄跡は写真中央の竹ヤブの中である。



雨田、豊受神社境内にある鐵治鉄滓

### (5) 中之上（上中）

上中の町の中にかつて黒山（クロヤマ）といわれていた場所がある。道で出会った40代の方2、3人に場所を尋ねたのだが地名として使っていた世代ではないようで60代の方に場所を御聞きしてやったとたどりつくことができた。場所は「ヤマ」とつくだけに地形も町中では高い所で交差点にある郵便局の近くである。

黒山は南種子町地名研究会会長の河野了氏から教えて戴いたのであるが、氏の小さい頃この一帯は山で現在のように人家が密集していることはなく家は一軒だけであった。その家は日高ミツヨさん宅で「黒山」といえばミツヨさんの家の事をさすものであった。そのミツヨさんの家の付近で鉄滓が転がっていたのを了氏は見られたことがあるといわれた。また鉄滓の転がる付近には石を立てて神が祀られてあったようで、氏の記憶によれば「金焼大神」と刻まれていたという。

筆者はミツヨさん宅を訪ねたが外出中で御会いできなかったが、家の前に鉄滓の出るという場所は教えて頂いた。丁度、大工の方が三人おられそのうちの一人の方が案内して下さった。竹藪の中に入していくと大木が一本あり、その根元には御神酒をあげた跡が見られる。話に聞くとここはガローヤマのようで、鉄滓の出る場所というのもこのガローヤマの中であるという。残念ながら地面を離すほどの藪だったので鉄滓は見ることができなかった。



日高ミツヨさんの家のそばにあるガローヤマ。この大木に御神酒をあげた跡がある。鉄滓がこの付近に見られたという。

### (6) 中之上（河内）

製鉄鍛冶に関する伝承なし。しかし、地名に鍛冶屋ヶ峰がある。日悦神社の上付近である。

### (7) 中之下（夏田）

夏田で製鉄の話は聞かれず、鉄滓も村落内にないようである。

### (8) 中之下（山神）

岩坪善謀氏の先祖は鍛冶屋であったといわれる。

西之表から里（山神村落のそばにある村落）に長男が鍛冶屋として送られてきたがうまく行かず、今度は次男が山神に送られてきた。次男の鍛冶屋は成功したという。岩坪氏の先祖はこの次男の方であるという。今でも里の方とは葬式などのときに行来している。里に送られた先祖（長男）は真所と里の間にある鍛冶屋ヶ間（カンジャンセキ）にいたという。

善謀氏の家の前には川が流れおり、橋がかかっている。この橋をセキノハシ（開之橋）という。昔は橋がかかっておらず家の前に旧道が通っていて、開所がこの付近にあった。開所には皆鍛冶屋があるという。

善謀氏の家の横には竹藪があり鍛冶鉄滓が多く散らばっている。氏が小さい頃にはここに羽口、炉があった。鍛冶職は氏の3代前まで続いていたという。鍛冶屋は長男が代々継いできた。ここで製鉄は行わず鍛冶だけを行っていたという。

山神で鍛冶屋であった家は岩坪善謀氏と岩坪やすまさ氏（現在は上中に移転）の2軒だけであったといわれる。

岩坪善謀氏の家に残っていた刀やノウチグワなどは戦時中に軍が持っていってしまった。

山神の旧郷士の家は平家の落人であるといわれる。



この森の中がかつての鍛冶場であった。  
鍛冶鉄滓が転がっている。

#### (9) 中之下（里）

真所との境に鍛冶屋ヶ関（カンジャガセキ）とよばれている場所がある。昔はここに閑所があったといわれている。

羽生繁保氏が小さい頃に鉄滓を見かけた場所は現在烟になっている。氏の見られた当時は家が建っていたが取り壊され、煙の隣に瓦など積まれたままである。鉄滓は烟の中の電信柱の立っている付近に見られた。鍛冶鉄滓のようである。



鍛冶屋ヶ関遠景。家よりも向こう側で鉄滓ができる。

#### (10) 中之下（真所）

鉄に関する伝承なし。

#### (11) 中之下（本村）

笹川家の先祖が刀鍛冶を本村でしていたといわれる。笹川という姓は今も本村にあるが未調査である。

#### (12) 中之下（郡原）

製鉄伝承なし。昭和初期も鍛冶屋はこの村落にいなかったようで、農具の修理は上中、茎永の鍛冶屋に頼っていたという。

#### (13) 西之（田代）

田代から中之下に抜ける道沿いの一番端にある上妻武靖氏宅前が鍛冶屋跡である。武靖氏の父が鍛冶屋を50年ほど前にしていた。鍛などを作っていたという。

鍛冶小屋がそのまま潰れた状態で鉄滓などその下にあると思われる。

製鉄に関する伝承は田代では聞かれなかった。



羽生繁保氏、上妻武靖氏の立つ場所に鍛冶小屋があった。

#### (14) 島間（向方）

柳田駒則氏の家は先祖代々刀鍛冶であったといいう。家を立て替えて鉄滓は埋められている。上方で鍛冶屋はここ一軒だけであったといいう。

#### (15) 島間（大久保）

製鉄鍛冶に関する伝承なし。

#### (16) 茎永（上里）

製鉄鍛冶に関する伝承は聞かれなかった。

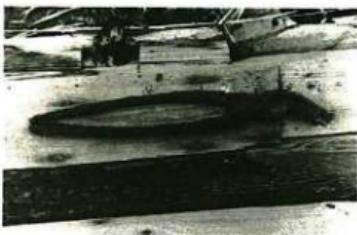
### (17) 茎永（新上里）

南種子町地名研究会会員の羽生源志氏によると上浦正義氏宅の裏山に鉄滓が出るという。羽生氏は鉄滓を数個採集されており見せて頂いたが全て鍛冶鉄滓であった。

### (18) 茎永（阿竹）

阿竹から竹崎へぬける道沿いの崖の中腹に座んだ場所がある。そこで7年前まで高宗としお氏が鍛冶屋をしていたという。高宗氏の父の代から鍛冶屋をしてたようである。

現在も手差しフイゴ、ハサミ、金床が風雨にさらされた状態で置かれている。



残っていたハサミ。



木の台にそなえつけた金床。



阿竹の鍛冶場跡。崖を利用した鍛冶場であった。

### (19) 平山（西之町）

今は納骨堂が出来てわからないが以前は鉄滓があったという。その近くで向里出身の日高吉蔵氏が昭和の初め頃まで鍛冶屋をしていたようである。

製鉄に関する伝承は聞かれない。

### (20) 平山（広田）

小字クルマサで名越中也氏が昭和20年頃まで鍛冶屋をしていたという。

製鉄に関する伝承はきかれない。

## 三. おわりに

今、鹿児島県内の製鉄跡が消えつつある。製鉄に関しての古文書等の記録はほとんどなく歴史学的手法での再構成は難しい。またフィールドワークを中心とする民俗学的手法においても伝承は少ない状況にありこれも難しい。造構に目を向ける考古学的手法をとっても製鉄跡が破壊されていればその力を発揮することができない。

何かと機会のあるたびに書き記していることではあるが、市町村で一刻も早く鉄滓の出土する場所を確認、記録する作業を行うべきである。製鉄跡は山林、川沿いなど

に多く見られるため、今後道路工事、河川工事を余儀なくされることは十分に考えられる。それにはやはり市町村で確かな資料を採集した上で行われるべきであろう。

最後になりましたが、いろいろと便宜を取り計らってくださいました南種子町教育委員会、社会教育課の方々そして人情にあふれた伝承者の方々に紙面を借りて心から感謝申しあげます。本当に御世話になりました。

# 衣服（晴れ着・普段着・仕事着・被り物・他）

田 島 由紀子

## 1. 概 観

### (1) はじめに

種子島へ行くのは初めてのこととて大変うれしかった。特に心に残っているのは、海がとてもきれいだということで、南種子町の周辺は一番良かった。

今回、南種子町での野外実習における私のテーマは「衣」であった。有形調査ということで、初めてであったため調査に戸惑った。民具カード作成に重点を置き、かつ聞き取り調査もしなければならなかったのだが、どちらとも中途半端になってしまったように思う。

調査の事前研究において「衣」は、晴れ着・仕事着・普段着の大きく3つに分けられ、またその中にも被り物や履物があるということは分かっていた。調査を終えてみて、ほとんどが仕事着に関するものになってしまっていた。

「衣」というものの民具をほとんど見つけ出すことができなかつたのは残念であった。というのも、「衣」のものは古くなると焼き捨ててしまつてゐるところが多く、残しておられないためである。

しかしながら、家に大切に残しておられる方もいらっしゃって、その方々はご親切に見せてくださつた。又、残しておられない方はその分お話をしてくれた。

南種子町の心暖かい方々にお世話になりながら、調査したことを以下に述べてみようと思う。

### (2) 晴れ着

晴れ着のことを種子島ではベイジョウという。晴れ着には、礼装・盛装・葬礼の喪服がある。普通「晴れ」という言葉はめでたい意味で使われるが、これが人前とか公然と示す言葉であったとすれば、喪服も晴れ

着に入ると考えここで喪服も含めて述べる。

晴れ着と言つても、一般の人々は特別な衣装などは持つておらず、普段着の中で一番いいものをベイジョウとして着ていた。

七五三の時は、柄のついた布地で手作りのふりそでの着物を着ていた。

婚礼の時は、新郎・新婦に近い人は紋付きの着物を着て、それ以外の人は、普段着の中でもいい着物を着ていた。

葬式の時は、家にある着物の中でもいい着物を着ていた。今は、黒い着物や服を着ているが、昔は黒という色にはこだわっていなかつた。しかし、地味な色の着物を着るよう心掛けた。身近な人は、紋付きの着物を着て薬草履を履いていた。

婚礼や葬式のときの手伝いをする女性の格好は肌じゅばんの上にチッパーを着て、腰巻きをして前かけをつけたものだった。

お正月には、お嫁さんは里帰りの時、普段の着物の中でも一番いい着物に羽織を着て帰っていた。

正月14日の晩と15日の晩に行われる「カーゴマー（蚕舞い）」では、男性が女装をして茎永や上中などを踊り歩く。踊る時は、だごさしの木をつついている。男性は、長着を着て背中におたいこをし、手拭いを2枚頭にかぶる。手拭いの1枚は、顔の前から後ろへもっていって頭の後ろで結び（口をかくす）、もう1枚は目だけ出して目より上をかくすためにかぶる。足には、白足袋を履いている。「男性は女装していて恥ずかしいので、顔をかくして下をむいて踊るのだよ」と、あるおばあさんはおっしゃっていた。「カーゴマー（蚕舞い）」の歌として♪四方の隅々に～♪というのがあった。



カイコ舞（西之表市立種子島博物館）

### (3) 普段着

普段着は、仕事着とは少し違えて着ていた。仕事着にはボロのものを、普段着には少しいいものを見ていた。

朝晩に着たり、防寒として着たものに「ちゃんちゃんこ」があった。このちゃんちゃんこは、よそいきの時は着なかったということだ。

又、寝る時の寝間着であるが、夏は木綿の浴衣やガーゼの寝間着で、冬はネルのものであった。

### (4) 仕事着

仕事着は、労働を行う際に着用する衣服のことであり、仕事着の目的は屋内・屋外をとわず外傷を防ぎ、又寒暑・風雨から身体を保護し、かつ労働の機能を高める（腕や腰の屈伸がしやすいもの）ためのものという。

種子島では一般に、男性用の仕事着をボッター、女性用の仕事着をチッカーといつ。

男性は、ボッターの下にズボンをはいて仕事をしていた。ボッターの布地は木綿で、つぎはぎをしたりふせをしたりしてある手作りのものであった。又、古くなった着物を作りなおしてボッターにしたこともあるということだ。ズボンの下にはふんどしをしている。このふんどしは白いもので、赤

いふんどしはほとんどなかった。このふんどしのことを昔は、「えっちゃん」といっていた。現在はパンツだが、現在80歳以上の方はまだふんどしをしている人が多いということだ。

男性が、紺色で腰のあたりに紐の付いている「バッチャー」というものを着て仕事をしていた、という話もあった。

女性は、かすりやしま模様、ごはん模様のチッカーに、腰巻きの姿で仕事をしていた。チッckerの下には、肌じゅばんを着ていた。終戦後は、腰巻きのかわりにモンペがはやりだし、たいていの人はチッckerにモンペという格好になった。

腰巻きは、夏はしづらるもので、冬はネルのものであった。昔は、パンツのかわりに下着として腰巻き1つであったため、風が吹くと腰巻きがめくれてお尻がまる見えになることもあったそうだ。

戦時中、敵が上陸してきた時追い返すための竹槍の練習があった時は、チッckerにモンペをはいて前かけをしていた。



穂ボッター：海の仕事をする時に着た。塩分・保温を考えて丈夫な木綿を使った。

### (5) 被り物

女性の被り物としては、手拭いがある。冬の寒い時など、手拭いを頭にかけてあごの

下で結ぶ「ほおかぶり」というのをする。これは、男性もする。

田・畑仕事や炊事・掃除、不幸のあった家の手伝いのときなどは、手拭いを頭にかけて頭の後ろで結ぶ「ばあさんかぶり」というのをする。新築祝いや結婚式の時や家で洗濯物を干す時などは、手拭いを頭にかけて頭の後ろであわせるだけの「あねさんかぶり」というのをする。手拭いだけでなく、タオル（ゆうちょ = 日本タオル）もかぶっていた。

男性は、たいてい帽子だった。

又、夏仕事をする時に被る「ツンボリザサ」というのがあった。これは、ケイというのをとってきて干し作ったカサである。



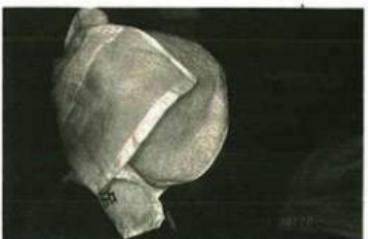
ほおかぶり



ばあさんかぶり



ばあさんかぶり



あねさんかぶり



ばあさんかぶり



あねさんかぶり

## (6) 履物

葬式の時、身近な人だけは、絞付きの着物を着て、村落の人が作ってくれた藁草履をお墓に履いていく。この藁草履は、緒のところに白い紙がまいてある。この藁草履は、お墓にぬいで置いてくる。この置いてある藁草履を履いて海に行くと、けがをしなかったり、大漁だったりしたそうだ。この草履を取っていくのは、女性が多かったそうである。

畑や山仕事をする時は、脚絆を足につけ手甲をして、「山草履」を履いていた。仕事をする時は、裸足という人もいた。田の仕事の時は、裸足だった。

終戦後20年くらいしてからゴムのくつが出てきたということだ。

又、正月には「正月げた（女性のものを『ぼっくりげた』）」を買ってもらって一年中履いていた。正月に下駄やまりを買ってもらうとすごくうれしかったそうだ。

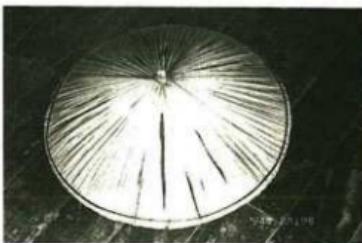
普段家のあたりで朝晩履くのは、ワラで作った草履で、緒は紙をそえて作った「かんもんぞうり」というのだった。

## (7) 雨具

雨具としては、ミノや笠がある。ミノには、カヤミノ・ワラミノ・シュロミノがある。カヤミノは、大変長持ちするし重くないのでたいていの家で使われていた。ワラミノは、重いし腐れやすく長持ちしない。畑作をする家では、シュロミノを使っている所もあった。ミノはたいてい男の人が作っていた。笠には、モウソウ竹の皮で作った「タカラバチ」というのがあった。田代では、「げによむバアさん」といわれていたおばあさんがよくタカラバチを作っておられたということだ。



シュロミノ（中種子町立歴史民俗資料館）



タカラバチ

## (8) 髪型・化粧・染料など

女性は髪を長くのばして、後ろにまとめてダンゴにしてあみをかぶせてとめたり、エスまげというのをしていた。盆・正月に着物を着たときは、「しまだ」にゆっていた、という人もいた。若い人とお嫁にいった人との髪のゆい方は違っていたそうだ。終戦後、パーマをかけたり短くしたりした。

又、洗髪は「カンネンカズラ」といって、カズラの青いのをとってきて、たたいてつぶしてたぎらしてできたドロドロの汁で洗っていた。これは、よく泡だったということだ。又、油としても使っていた。

「アク」といって灰に湯を入れたたれ

たもので洗髪したり、洗濯したりした。  
「ムクロウ」という大きな木の実で洗った人もいた。

化粧は、女性がしていたのだが、クリームやおしろいが多かった。「うてなクリーム」や「ネリおしろい」、「デートメリー」といったものがあった。お歯黒は、お話を聞いたおばあさん達がしていた。

染料としては、「泥染め」といって田の泥を使ったり、あみを染めるとき、しぶがきを使った。しぶがきで染めるとあみが強くなるといわれていた。

衣服の保管には、「棹脳(今のナフタリン)」を使うところがあった。この棹脳は、楠の木を切って細かくしてそれをたたいて煎じた汁を固めて固体にしたものである。

亡くなった人が着ていた着物は、洗って直しておいて、忘れた頃に出して着ていたそうだ。昔は、精神病者を特に嫌っていたので、精神病者や伝染病者が着ていたものは焼いたそうだ。

#### (9) その他

生れて1年がこないうちに歩いた子供には「あしひきもち」というのをさせていた。紅白のおもちをついて、その子供に赤い布や赤い紙を緒にして作った草履を履かせたり、カンザーの小さいのにおもちを入れてからわせたりして、おもちを踏ませていた。このおもちは、近所にもわけたそうだ。

又、生れてから初めてくるお正月に、男の子だけ「ちからもち」というのを作ったそうだ。これは、シダの葉・ゆずり葉をおもちの上にのせてしめなわなどを結んで、お祝いとして男の子の家にあげるおもちだそうだ。

#### (10) 「ホーキ」、「たばこ盆」について

昔は、ホーキは各家で手作りであった。外を掃くものは、モウソウ竹の枝で作り、室内を掃くものは、潮風のあたった竹や、「にが竹」を干したものと、「ちんちく竹」の表皮をこさいで作った竹縄を組み合わせた「箆ボーキ」を作っていた。

たばこ盆は、木の箱に焼き物と竹筒を入れていた。キセルにきざみ煙草を入れてすって、竹筒に灰を落としていた。焼き物の中には、火種になるものを入れていた。竹筒は、カラ竹の形のいいものを切って使っていた。



箆ボーキ



たばこ盆

## 2. 民具解説《衣》

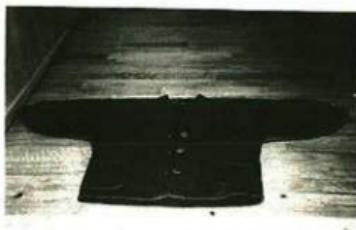
①紋付き着物 基永（仲之町） 園田キヨ  
これは、結婚式の時に着るものである。  
鶴や松が描かれていて、大変きれいである。



紋付き着物

### ②はんてん

島間（仲之町） 小山田 キト  
30年くらい前のもので、朝晩に着ていた。



はんてん

### ③はんてん

島間（仲之町） 山小田 キト  
20年以前のもので、朝・晩着物の上に着ていた。  
木綿でできている紫色のきれいなはんてんで、今でも着ているということだ。



はんてん

④はんてんを着てくださったキトさん  
たいへんよく似合っていらっしゃる。



はんてんを着てくださったキトさん

### ⑤はおり

基永（仲之町） 園田 キヨ  
青っぽい色で銀色のラメが入っていて、葉の柄  
がついているとてもきれいなはおりである。



はおり

#### ⑥肌じゅばん

島間（仲之町） 山小田 キト  
寒いときや着物を着るときに下に来たり、  
仕事をするときにはんてんの下に着る。

素材はネルで、そでや襟におしゃれとし  
て柄の入った布を縫い合わせている手作り  
のじゅばんである。

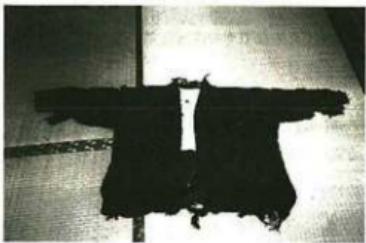


肌じゅばん

#### ⑦チックー

上中（仲西） 日高 フジエ  
これは、夏に仕事をするときにいつも着  
ていたチックーである。

この大切なチックーは、南種子町の方に  
寄贈していただいた。



チックー

#### ⑧モンベ

塩永（仲之町） 園田 キヨ  
裾がしほっていない、80センチメートル  
のモンベである。



モンベ

#### ⑨モンベ

上中（仲西） 日高 フジエ  
冬の畠仕事をするときに、地下足袋と一緒に履いていた。

このモンベの下にはパンツを履いていた。  
裾は、ゴムでしほってある。



モンベ

#### ⑩モンベ

上中（仲西） 日高 フジエ  
このモンベは、夏仕事をするときにチッ  
クーの下に履いていた。

縫でできている。

このモンベは、南種子町に寄贈していただ  
いた。



モンベ

⑪消防団員帽子

茎永 公民館



消防団員帽子

⑫消防団員が着る服

茎永 公民館



消防団員が着る服



消防団員が着る服

⑬とりうち帽子

上中（仲西）日高 フジエ

これは、男性が仕事をするときや外出するときにかぶっていたもの。

フジエさんのご主人がいつもかぶっておられた大切な帽子である。



とりうち帽子

⑭かっぽり

茎永（中部）松元敬子

これは、おばさんが小さい頃、お正月にお宮参りをするときに履いていたものである。高さが6センチメートルもあり、鈴が中に入っていてリンリン音がしてとってもかわいいかっぽりである。「昔は、真っ赤で、鼻緒は金箔だったからすごくきれいだったのよ。」と、おばさんがおっしゃっていた。おばさんが着物を着て、このかっぽりを履いて写っていた写真も見せていただいた。



かっぽり

●田植え足袋

上中（仲西）日高 フジエ



田植え足袋

●本箱

茎永（中部）松元 敬子

約88×64のサイズである。



本箱

●ひなまつりのひな段のたんす

茎永（中部）松元 敬子

黒ぬりで、表には松・梅・鶴の絵が書かれている。

これは、ひなまつりのときひな段を飾っ

たときの付属品のたんすである。



ひなまつりのひな段のたんす

●裁縫箱

茎永（中部）松元 敬子

紙できていて、朱色の裁縫箱である。



裁縫箱

●針箱

茎永（中部）松元 敬子



針箱

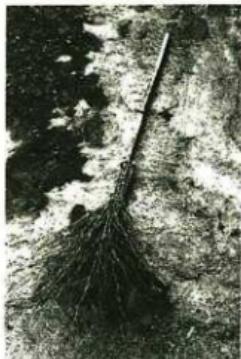
### ●（和裁用の）こて

茎永（中部）松元 敬子

このこてを火鉢の中に入れて温めてから、縫い目の所にあてて折り目をつける。



こて



庭ボーキ

### ●足踏みミシン

茎永（中部）松元 敬子

これは、昭和8年くらいから使っているもので、現在もきれいに塗りなおして大切に使っておられる。



足踏みミシン

### ●庭ボーキ

西之（本村）岩坪 スエ

ホーキの柄の部分は、「かたけ」という竹で作ってあり、掃く部分はモウソウ竹の枝の部分をたくさん針金でまとめて作ってある。

昔から今までずっとスエさんご主人の手作りだそうだ。

茎永（中部）公民館

### ●室内ボーキ



室内ボーキ

### ●籠ボーキ

上中（仲西）日高 フジエ

これは、フジエさんが22歳のときから作り続けて使っている籠ボーキである。

これは、庭用も室内用もある。



籠ボーキ

### ●たばこ盆

島間（田尾）峯山 秀太郎

キセルにきざみ煙草を入れて吸って、焼き物の瓶と竹筒をキセルでたたいて灰を落とす。

木の箱に焼き物の瓶と竹筒の2つを入れるのは、焼き物をキセルでたたくと瓶が傷みやすいので、傷めないために竹筒をたたいて灰を落とすのである。



たばこ盆（撮影、田島）

### 3. さいごに

南種子町のすばらしい景色と、心温かい方々に恵まれて、楽しく調査することができ大変満足できた野外実習でした。

南種子町のお世話になった多くの方々に感謝いたします。

伝承者名簿（敬称略）

大字	小字	名 前	生年月日
茎 永	上 里	浦 門 休 作	T 8. 6.
"	"	浦 門 トキエ	T10. 3.30
"	中 部	松 元 敬 子	S 5. 7.28
"	中之町	國 田 キ ョ	M45. 4.13
"	"	梶 原 ミ ツ	M38. 9. 1
"	"	迫 田 ス マ	T 3. 3.4
"	松 原	石 堂 キ ョ	T 3. 3.22
島 間	田 尾	峯 山 秀太郎	M39. 6.11
"	仲之町	山小田 キ ト	T 4. 3.10
西 之	本 村	岩 塙 ス エ	T 3. 2.20
"	田 代	徳 永 ト ヨ	T 8. 1.25
"	"	鮫 島 宗 典	T11.11.15
"	"	鮫 島 エミ子	S 5. 3.23
"	"	日 高 スミエ	T10. 7.10
上 中	仲 西	日 高 フジエ	M36. 2.23
"	"	里 國 フキエ	T13. 8.20
"	上 野	原 田 シズエ	S 2. 2.15

# 食関係具(日常の食生活・年中行事の食事・砂糖製造・他)

## 牧志保

### 1. はじめに

南種子町の土地利用を見てみると、平坦面においては畠地帯として利用され、南海岸や東海岸、特に南海岸に面する地域は種子島でも有数の水田地帯となっている。(『南種子町郷土誌』参照) このように、南種子に住む人々は昔から農業に従事し、空腹を満たすための食事を一日数回とっていたと考えられる。人々は一体、毎日の食事をどのように受け止め、いかなる工夫をしてきたのだろうか。そしてそれに伴ってどのような道具が使われていたのであろうか。これらのこととを念頭におき、具体的にみていこうと思う。

### 2. 概観

#### (1) 日常の食生活

南種子町は昔から農業に従事していた町であり、現在でも各家庭に「園畠」と呼ばれる自家菜園があり、自給自足で潤っている。しかし、昔は毎日の食事において米が十分になく、ほとんどの家庭が米に麦やカライモを混ぜて食べていた。また空腹を満たすためのものとして、ハッタイ粉、ムギノダンゴ(麦の団子)、カライモンセン、デンブンメシ、コッパメシ、カライモの団子、ソーダ菓子(ふくれがし)などがあった。それではこれらはどういうものであったのか少し説明(伝承者から伺った話をまとめたものである)を加えたいと思う。



長田俊信さん宅の「園畠」

#### ○ハッタイ粉

日に干した麦(小麦)を鉄鍋のような鍋で煎る。そしてひき臼で粉にしたものがハッタイ粉で、砂糖(黒砂糖)と湯を加え団子状にして食べる。

#### ○麦の団子

生の麦をひき臼でひき、水を加え団子状にし、おしいものに入れたりした。

#### ○カライモンセン

カライモ(さつま芋)をすって水につけておくと白い粉(デンブン)が出てくるので、それを布でこす。デンブンを乾燥させカラカラにし、水を加えて油で揚げて食べる。これを作るとき、ブリキカンに穴を開けたものを道具として使うというところもあった。

#### ○デンブンメシ

デンブンを水にといてご飯と一緒に炊いたもの。

#### ○コッパメシ

カライモを千切りにして日に干したものご飯と一緒に炊いたもの。

### ○ソーダ菓子（ふくれがし）

臼で小麦をひいてできた粉に黒砂糖を混ぜ、ソーダを入れる。割合としては小麦の方が多い。現在でも作っている。

※この事例は木原の西之でしか聞くことができなかった。

このように、朝も夜もあり変化のない食事だったわけだが、畑や田でたべることの多かった昼はどうであったのだろうか。各村落をみても弁当をもって行ったということがよく聞かれた。中身は麦の混ざったご飯のおにぎりや、カライモ、漬物がほとんどだった。にぎりめしは主にシャニンの葉などの葉っぱに包んでもって行っていた。竹の弁当箱を使ったという事例はなかったが、平山の浜田ではカネの弁当箱を使っていたという話を聞くことができた。

以上、日常の食事をみてきたが、全体的にみて食事といつてもさまざまなものがあり、お腹が空いたら芋を主体とした、おやつのようなものがよく食べられたことがわかる。

### （2）年中行事における食事

#### ①トイノパン（年の晩）、正月の食事

十分ではなかったが白いご飯を食べることができた。さらに、トイノパンにはスキヤキをするのが楽しみだった。主に自宅で飼っていたニワトリをつぶし、野菜と一緒に醤油で煮込んだものであった。ニワトリがいないときは、他の部落まで買いにいっていた。また平山浜田では、野間の方から商人が豚肉や馬肉を担って売りにきていたという事例をきくことができた。しかし、豚肉の方が高かったので、買うのはやっぱら馬肉の方であったということだ。

同じく、平山浜田では漁村ということもある、正月用の刺し身の話も聞くことができた。これは大きな魚を刺し身用に準備し、塩をかけて米俵のようなものに入れ家の中にかけておくというもので、少しずつ切って食べていたようである。米俵のようなものに入れるのは、魚に塩をよくしみこませ、水がたれないようにするためである。

またほとんどの村落で7日は七草がゆを作るということであった。

次に餅に関する事例を三段に重ねたものを仏様に供えるということころがほとんどで、ユズリ葉、モロバ、ダイダイが伴う。茎永の中之町では、マンゴクモチという餅を神様や仏様に供えていたという事例をきくことができた。これは、シュロの葉で餅を包んで家の中に下げておき、十日ぐらいしてから外して神様や仏様に供えるというものである。

#### ②盆の食事

まず、全体的に共通する事例をあげてみようと思う。盆に欠かせないものとしてマキとモヤシの煮しめとササゲモチがある。マキとは、米の粉でつくった団子をマキの葉（シャリンの葉というところもあった）で包み、ミチシバでぐるぐる巻いて煮たものである。平山の浜田では、14日の晩にこれを作り、軒下などの涼しいところに下げておいて15日の朝に煮るという事例もあった。モヤシの煮しめは、モヤシとアゲ、たけのこ、コンブなどをいれ味付けしたもので、モヤシに関しては自家製がほとんどであった。まず、家のそばの畑に穴を掘って一晩水につけたササゲをまく。このとき水をかけておく。そして、雨が降っても水が漏らないように覆いをしておく。何日かすると芽ができるのでそれを食べる。

ササゲモチは一番最初に供えるもので、ササゲを餅とまぜてついたものである。供物もほとんど違いがなく、マキやソーメン（ゆがいたもの）、あとは自分たちで食べるものを供えるというところが多かった。マキとソーメンに関してはいわれがあって、ショーロー様（精靈様）が15日に帰られるとき、ソーメンで網を練ってマキを枝がわりにして、供えられたごちそうをかついで帰るということだった。これを「ニモツカラグル」と言うそうである。

次に、各村落での異なる事例を少し取り上げてみようと思う。西海の下立石では

16日にショーロー送りをするが、その際にマキをお墓の上に一つ一つ置くそうである。また平山の浜田では、1日目の朝に竹を2本で箸を作り、それを2本ずつ茶碗に入れたご飯の上に差して供えるという事例があった。今は竹ではなく、1回も使っていない箸を使うということだった。



盆に作られる「マキ」

### (3) 砂糖の製造について

平山の水牛をけた事例をあげておく。家の近くに水車があり、そこまで馬車でさとうきびを運び機械にかける。機械の下にはイッコクダルを置いておき、一こく（十斗）溜まつたら鍋でせじる。そしてあめがべたべたならないように石灰をいれる。（当時、石灰を作る職人がいた。）このようにして黒砂糖を作った。この作業を砂糖スメといった。砂糖スメは徹夜で行われていた。このとき歌う歌が次のようなものである。

『カメヨ クルマヨ マワレヨシンギ シルモタマレバヨモアケル』

また西海の下立石の事例では、サトウキビの汁を煮詰めるとき、50歳から60歳のコツを知っている人が混ぜていたようである。そして木で作った型に流し、今でいう黒砂糖を作っていた。

### (4) 味噌の醸造

西之木原の左尾栄子さんは今でも味噌を作っているらしゃるので、作り方をあげてみたいと思う。

材料は、麦（何でもいい、今は小麦を使っている）20キログラム、大豆7キログラ

ム、塩5キログラムから6キログラム。まず、麦を一昼夜水につけて蒸す。ひと肌に冷めたらコウジ菌の入ったもろぶたに入れて3日間ねかせる。そして蒸して擦った大豆を混ぜ、40日ぐらいすると食べられるようになる。ちなみにコウジ菌は日に干して冷凍しておいていつまでも使えるそうである。

### (5) カマド（竈）

カマド（竈）に関しては現在残っている家は極めて少なく、残っていてもほとんど使われていない。昔のカマドは自分たちで造っていたというところが多かった。材料はたんぽの側の粘土にワラを混ぜたもので、水をかけながら足で固めていく。だいたい昭和35年ぐらいまでは使っていたというところが多かった。しかし、今回調査したカマドはレンガ造りのものであり、造り直したものと考えられる。

### (6) セイリョー（蒸籠）

現在使われている蒸し器はカネの鍋型のものであるが、昔は焼き物（主に能野焼き）の蒸し器であった。赤茶色で底には5つから8つほどの穴が空いているのが特徴である。もち米を蒸すときには、底にへちまを乾燥させて広げたものを敷いて蒸す。

### (7) 調整具

臼を使っていたという事例は多く聞くことができた。木の臼を使っていたというのが最も多く、餅をつくだけではなく、モミをついたり味噌を作るときに使う大豆もこの臼でついていた。墨永中之町の園田キヨさんのお話では、小さいころは自分たちで山から松の木を切ってきて臼を作り、モミをつくときは3人か4人くらいで協力してついていたということだった。しかし、この臼はだめになりやすく、焼いたり捨てたりして現在は全くといっていいほど残っていないかった。これに代わったのが石の臼である。しかし、この臼もジャリが入ってしまったりと、なかなか使いにくかったよう

で、庭のすみにおかれてある家がほとんどであった。粉を挽くときに使う石臼は現在でも残っているお宅が多く、かなり使われていたと思われる。

#### (8) 飲食具

今回の調査では家庭での飲食具はみることはできなかったが、下中の真所の才川定巳（亡）家跡ですばらしいお皿をみることができた。大皿がほとんどであったが、風景をあしらったものが多く大変美しい。大勢で集まることが多かったことが分かる。

### 3. 民具解説－食関係具

#### (1) カマド（竈）

仲西 日高フジエ

黒いタイル張りのカマドで、現在は使われていない。まきを入れて燃やし、灰は下におちる仕組みである。下の方は赤茶色にすくっている。縦90cm、横105cm、高さ68cm。

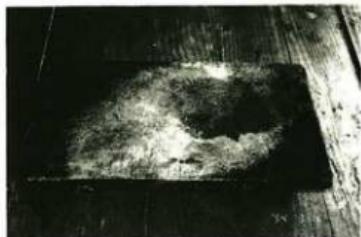


日高フジエさん家のカマド

#### (2) まな板

水牛 向井シヅエ

流し台の上で魚や肉を切るために使用。足が四本ついているのが特徴である。材質は何かわからないが、ヒツバの木が適しているようである。



まな板

#### (3) 果物ナイフ

中部 松元敬子

60年前のもので、クラブのミーティングや遠足などに持っていたり果物などを切ったり、皮をむいたりしていた。長さ13cm。



果物ナイフ

#### (4) サラ（皿）

真所 才川 定巳（亡）家跡

上の3枚が刺し身皿で、下の皿が葉子入れに使われた色絵皿である。どちらの皿も風景や花をあしらって大変美しく立派である。刺し身皿、葉子皿とも大型の皿で多人数で食する場合が多い。したがって祝事や祭事などのときに用いたものである。これらは近代のものと思われるが正確な製作年代は分からぬ。

刺し身皿；直径28~30cm、高さ4~5cm。

葉子皿；直径21~25cm、高さ4~7cm。



刺し身皿と菓子皿

### (5) 蒸し器

#### ①セイリョー（蒸籠）

水牛 向井シヅエ

焼き物のセイリョーで、色が赤茶色であることから能野焼きであると考えられる。昔購入したものである。底には穴が5つあいている。現在は蒸すことには使っておらず、灰のアクをとるのに利用している。ちなみにアクの取り方は、下の穴のところに竹の棒をおいて布を敷き灰を入れる。そしてお湯をかけセイリョーを持ち上げるとアクがたれるので、入れものに保存しておく。もち米を蒸すときは、底にヘチマの乾燥したものを広げて敷く。

くちの直径29cm、高さ23cm。



セイリョー（蒸籠）

#### ②セイリョー（蒸籠）

浜田 長田ヌイ子

焼き物のセイリョーで、赤茶色である。能野焼きと思われる。2年ぐらい前まではアクを取るために使っていたが、現在は全く使用していない。底には真ん中に1つ穴が空いて

いて、それを囲むように8つの穴が空いている。くちのほうが広く、高さはあまりない。くちのところが欠けているところを見ると、よく使い込んでいたと感られじる。

くちの直径33.6cm、底の直径21.2cm、高さ23cm。



セイリョー（蒸籠）

#### ③サンジョームシキ（三升蒸し器）

水牛 向井シヅエ

モチ米を蒸すときやチマキを作るときに使用する。だいぶ前に買った。昔はこの蒸し器をハガマの上に乗せ、さらにカマドの上に乗せて蒸していた。全体は鉄で根取っ手の部分が木でできている。底には真ん中に5つの穴があり、それを囲む形でまた5つの穴が空いている。向井さんのお宅では焼き物のセイリョー（蒸籠）もあり、時代の流れを感じさせられた。

直径29.5cm、高さ15cm。



サンジョームシキ（三升蒸し器）

### (6) ウス（臼）

#### ①イシウス（ヒキウス）

真所 才川定巳（亡）家跡

粉（大豆、麦など）をひくときに用いる。上の臼の裏にある溝と下の臼の表にある溝の間に穀物が入り、粉になる。穴に柄を差し込んで回す。この穴のことをエアナ（柄穴）という。直径30cm、上の臼の高さ12.5cm、下の臼の高さ10.5cm。



イシウス（ヒキウス）

## ②イシウス（石臼）

平山浜田

餅をつくときや、モミをつくときに使われたと思われる。畠のすみの道路沿いに置かれてあったので今は使われておらず、中にドロや水がたくさんたまっていたので、長い間放置してあるものと考えられる。高さはあまりなく、横にでっぱりがある。  
直径47.3cm、高さ29cm。



イシウス（石臼）

## (7) キネ（杵）

### ①キネ（杵）

真所 才川 定巳（亡）家跡

右の杵がテギネ（手杵）で左の杵がウチギネ（打ち杵）である。テギネの方が古くからあるもので、モミをついたりその他の穀物をつくのに使う。ただし臼の中にそれらを入れて作業する。ウチギネは主に餅をつくときに用いるが、米をつくときにも使うことができる。それぞれの特徴をあげるとテギネは堅木でできており、片手で上から下に打ち降ろしてつくので簡単に使えるが、決して能率的ではない。一方、ウチギネの方は柄を両手でもって上から打ち降ろすので、力が入って能率的である。

テギネ；長さ76.5cm、つく面の直径8.5cm、7.8cm。

ウチギネ；長さ77cm、つく面の直径9cm。



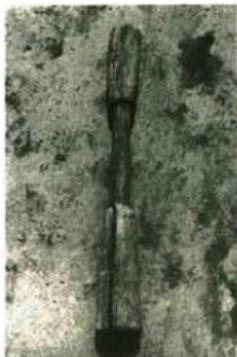
テギネ（上）とウチギネ（下）

### ②テギネ（手杵）

真所 羽生繁保

作ったものか、購入したものかわからない。モミをつくのに使っていた。小屋の中に埋もれており、ひび割れも著しいので長い間使用していないことがわかる。

長さ82.5cm、つく面の直径10cm。



テギネ（手杵）

(8) ミズガメ（水甕）

真所 才川定巳（亡）家跡

くちの方から底の方に向かって黒い模様が描かれている。底の方は茶色である。水を溜めるのに使用していた。苗代川焼。

高さ 68cm, 底の直径 26cm。



ミズガメ（水甕）

(9) 琉球甕（泡盛甕）

真所 才川定巳（亡）家跡

泡盛を入れて、飲み終わったら穀物や醤油、酒、水を入れるのに使用していたと考えられる。全体的に赤褐色でところどころに白い斑点がある。これは沖縄の土にサン

ゴ礁が混ざっているためだと思われる。真ん中より少し下のところには針金の補強がしてある。これは割れないようにするためにある。

くちの周りは丸っこく、みみのようなものが3カ所ついている。

高さ 68.5cm, くちの直径 16.7cm, 一番広いところの直径 39cm。



琉球甕（泡盛甕）

(10) シオカラツボ（塩から壺）

木原 左尾栄子

集落で海にイワシを捕りに行って、捕ってきた魚を塩で保存しておく。くちにはコルクで栓をしておく。茶褐色の焼き物であり、2本ずつの溝が3カ所についている。今は使用しておらず、部屋に飾っている。

高さ 29.5cm, くちの直径 8.5cm。



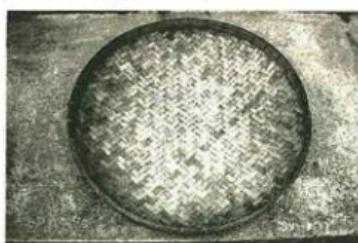
シオカラツボ (塩辛壺)

### (11) バ ラ

下立石 立石トネ

正月餅をついたときに、機械でついた餅をこのバラに入れて1個1個丸める。とても大きなもので、長く使っていらっしゃるわりにはとても美しい。表は網代編みで裏は六目編みである。

直径 63cm、高さ 10cm。



バラ

### (12) オオナベ (大鍋)

下立石 立石トネ

砂糖を作ると、サトウキビの汁を煮詰めるのに使っていた。そのとき混ぜるのは長い木を使っていた。現在は使用しておらず、畑のすみにふせてある。鉄製でまわりは赤茶に錆びている。

直径 60.5cm、高さ 22cm。



オオナベ (大鍋)

### (13) ナベ (鍋)

真所 才川定巳 (亡) 家跡

祝事、祭事の時たくさんの料理（煮物など）やマキを煮たものと考えられる。

アルミ型でだいぶ使いこんでいるため、まわりは真っ黒になっている。くちのところには2箇所取っ手がついており、つりがあつたものと思われる。

直径 40cm、高さ 17cm。



ナベ (鍋)

### (14) ナベフタ (鍋蓋)

鍋の蓋である。主にハガマと一緒に使われる。材質は分からぬが全体的に黒っぽい木である。

直径 21cm、高さ 4cm。

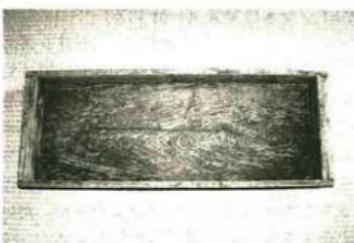


ナベフタ（鍋蓋）

(15) モロブタ

西之 左尾栄子

搗いた餅を入れておく。又、味噌をつくる時、これに蒸した麦を入れて広げておく。今でも味噌を作っているのでこのモロブタを使用している。底は一枚板でできており、まわりの板は縦の方が2枚になっている。縦35cm、横85cm、高さ8.5cm。



モロブタ

(16) ヒチリン（七輪）

仲西 日高フジエ

魚を焼いたりモチを焼いたりするのに使っていた。まだこのヒチリンがきれいな時は座敷にもっていってスキヤキもした。表面は赤茶けていて、黒くなっている部分もある。下の方には一箇所窓のようなもののがついていて、そこを開けて灰を出すようになっている。くちは広くて鍋などがのせやすくなっている。

くちの直径28cm、高さ24cm。



ヒチリン（七輪）

(17) チャガマ（茶がま）

仲西 日高フジエ

囲炉裏にかけてお湯をわかしていた。全体的に白っぽく、昔使っていたという割にはきれいなものである。しかし、ふただけは赤く錆びていて今にもくずれそうである。下の方はしっかりしていて安定感がある。直径26cm、高さ(つりまでいれて)30cm。



チャガマ（茶がま）

(18) ジュウバコ（重箱）

仲西 日高フジエ

花見や運動会など外で食事をとる場合に使っていたものである。2段重ねの重箱で御

の模様がほどこしてあり、大変美しいものである。木製で黒の塗りであるが、ところどころはげて赤くみえている。中は茶色の塗りで光っているが上の段の中はあせいで光沢はない。一方下の段の中はきれいで光沢もあることから、上の段は使う回数が多くたが、下の段はほとんど使っていなかったと思われる。

縦17.7cm、横19.4cm、高さ5.3cm（すべて一段のものである）。



ジュウバコ（重箱）

#### (19) サゲジュウ（提げ重）

仲西 日高フジエ

重箱を運ぶときこれにいれて提げて運んだ。持つ部分は湾曲していてもちやすくなっています。デザインもこっている。材質は木製で赤茶けてあせている。これには蓋のようなものも付いているが、本体の色とは違ひ普通の板で、しかも大きさもちがいはまらない。つまりもともと蓋ではなく、後から何らかの板をのせただけとも考えられる。縦、横24.5cm、高さ45.5cm。



サゲジュウ（提げ重）

### 4. 民具解説－その他

#### (1) マス

##### ①イッショウマス（一升マス）

水牛 向井シズエ

ご主人が作ったもので作り方や材質は分からぬが、きちんと寸法をはかって釘を打って作ったらしい。主に米をはかるときに使うが、稲の種もこれではかっていた。米をはかるとき、10キログラムはかるときはマスで7回ぐらいがちょうどよかったです。だいぶ傷んではいるが現在も使っている。

縦、横7cm、高さ9cm。



イッショウマス（一升マス）

##### ②イッショーマス（一升マス）

下立石 立石トネ

いつかは忘れたが購入したものである。米

をはかる時に使っていた。1キログラムがだいたい7合なのでイッショーマスでは一杯と3合を足さなければならなかった。つくりとしては、釘ではなく板が交互にはまって固定されている。

縦、横7cm、高さ9cm。



イッショーマス（一升マス）

### ③マス（ます）

仲西 日高フジエ

食器だなのすみに無造作におかれていた。横の方には5合という文字が書かれていることから、これで5合はかることができたと思われる。

縦、横14cm、高さ7.5cm。



マス（ます）

### (2) タバコボン（煙草盆）

真所 才川定巳（亡）家跡

マス型のわくの中に陶器製の円筒形の壺を置いてある。壺の両面には彫りこみの穴をあけてある。壺には紺と白の草花の模様をあしらっている。キセルを使って煙草を吸う人がこれを使用していた。タバコをのむときはキセルに火をつけ、吸い終わると

キセルのハチを壺に向けて、手のひらでぼんぼんとたたいて残り火をおとす。壺のふちにはキセルをたたいた跡がある。

マス型のわく；縦、横17.5cm、高さ9cm。  
壺；直径11.2cm、高さ9cm。



タバコボン（煙草盆）

## 5. さいごに

今回も川辺にひき続き「食」というテーマで調査することになったのだが、今までとは違う有形調査ということで、何かととまどうことも多く不十分な面も多々あった。しかし、一週間現地で調査を行ってみて心に残ったことは、いくら古くなった民具でも大切に保存し、現在でも使用しているというお宅が多かったことである。新しいものがどんどん出てくる世の中で、昔と変わらず使っていくということがどんなにすばらしいことか、気付いている人はほとんどいない。私たちの勉強が、そして伝承者とのふれあいが少しでも役に立つことを心から願っている。最後に、今回の調査にあたってお世話になった役場の方々や教育委員会の方々、そしてお忙しい中お話しをして下さり、民具まで見せて下さった伝承者の皆様に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

(伝承者名簿(敬称略))

平山	水牛	向井シズエ	T1.11.10
平山	浜田	長田俊信	S2.1.10
		長田ヌイ子	S2.9.1
平山	浜田	平山イセ	
茎永	中之町	園田キヨ	
上中	仲西	日高フジエ	M36.2.23
下中	真所	羽生繁保	T10.11.10
西海	下立石	立石トネ	T8.3.10
西之	木原	左尾栄子	S12.9.29

# 住居

## 上田泰士

### 1. はじめに

住居は人が生活していく場であり、また1つの小さな社会が存在する場所でもある。この住居を調査することによって、その住居に住む人々の昔から現在に至るまでの生活に触れることが出来ればと思いこのテーマを選んだ。

民具調査は、今回、初めてだったので、民具というよりは民俗の方にかたよった調査となってしまった。

とりあえず、今回調査した住居を以下に述べてみたいと思う。

### 2. 概観

現在の住居の多くが、新しく建てられた家であったり、また昔と間取りは変わってはいないが、新しくした家であり、昔そのままの家をあまり見られなかったのは残念だった。

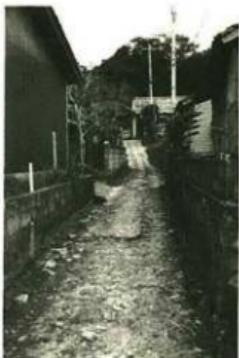
イロリや昔のカマドを見ることは今回の調査では出来なかった。

以下から村落別にみていきたいと思う。

### 3. 民具解説（住居）

#### （1）平山（広田）

広田は北に小高い山を背にし、南向きに家が建っている。また家々は密集して建っている。道は南北に走っているが、道は狭い。またソノバタケがあり、日常の野菜類をつくっている。



広田

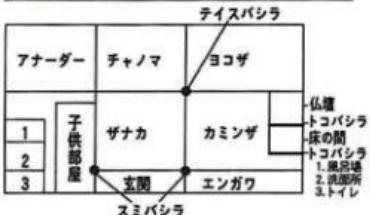
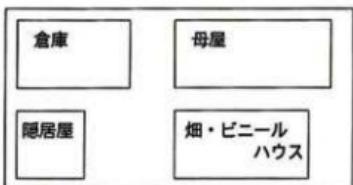
#### ①向井義一さん宅

向井さんの敷地内には次頁の図にあるよう母屋・倉庫・隠居屋がある。また周囲には柿の木が植えている。現在ある隠居屋は昔馬屋だった所で、この馬屋の隣には便所があったそうである。また倉庫には農作業の機械が収納されており、タバコの乾燥場ともなっている。

次に母屋をみていくと思う。

母屋はジロンマ（火代の間）・ヨコザ・ザナカ・カミンザ・子供部屋・アナーダーの六部屋に分かれている。アナーダーとは台所のことである。

図① 向井義一さん宅



## ⑧ジロンマ (火代の間)

昔イロリがあった部屋である。イロリのことをジロといい、ジロがある部屋だからジロンマと呼ばれる。またジロの周囲に座る座り方は決まっている。

## ⑨ヨコザ

寝室になっている部屋で、昔はお産をこの部屋でしていた。

## ⑩ザナカ

客間として使われる部屋である。

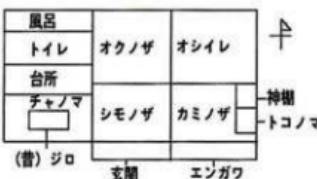
## ⑪カミンザ

この部屋には仮壇と床の間がある。この部屋では葬式・結婚式・礼出し等のように兄弟や親戚が集まる時に使われるが、普段使うことはない。

## ②原 キヨさん宅

昭和28年ごろ建てられた家である。この家の敷地内にはホンタク(母屋)・二階建て倉庫がある。この倉庫は現在は倉として使われているが、昔は煙草の乾燥場として使われていた。また風呂場は現在は倉庫の横にあるが、昔はホンタクと倉庫の間にあった。

図② 原キヨさん宅



## ○ホンタク

この建物は瓦葺き屋根で平屋建ての建物である。この建物は昭和28年に建てられた時からこの瓦葺きの屋根であったそうである。

ホンタクはカミノザ・シモノザ・チャノマ・オクノザ・押し入れに分かれている。

## ⑬カミノザ

トコノマと仮壇があり、この部屋はお客様がみえた時使われる以外に子供部屋としても使われる。

## ⑭オクノザ

出産の時に使われた部屋である。

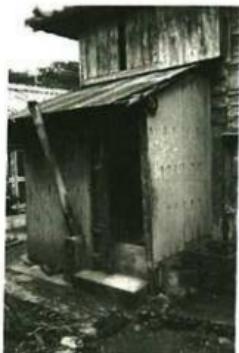
## ⑮チャノマ

昔、このチャノマにはジロ(いろり)があり、このジロに座る場所は決まっており、この家の亭主はシモノザ側に座ったそうである。

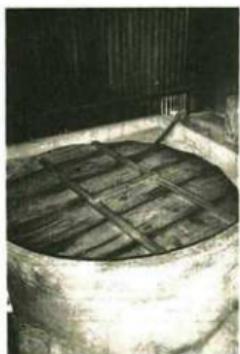
## ○その他

## ○ゴエモンブロ (五右衛門風呂)

まず風呂に水を張り、下から薪をくべて沸かす。この風呂は現在でも使われているそうである。またこの家にはこのゴエモンブロの他にガス風呂もある。



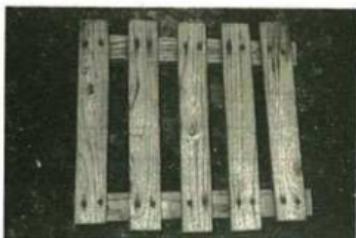
風呂場



ゴエモンブロ

○風呂の底敷

ゴエモンブロは下から薪をくべるため、そのまま入ると火傷してしまうために、入る時にこの上に乗って入る。



風呂の底敷

○ナガシ（流し）

昭和30年頃作られ、昭和30年から45年頃まで使われていた流しである。水留めの部分に水を留めて、その脇の部分で洗い物をしたり調理をしたりしていた。このナガシは現在の台所の場所にあったが、水道がひかれるようになってからは使われることはなくなつた。



ナガシ

○その他の住居の付属民具

○ナガギ 広田 西田清三氏  
田んぼに稲をかけて干す時に使われるものである。×印したクエに横にわたして、そこに稲をかけて干す。



ナガギ

○ツッパリ

広田 永田氏  
台風など強い風が吹く時、板戸が風で飛んでしまわないように、外側と内側に竹をわたして、二つをつなげる。



ツッパリ



広田の墓3

#### ○墓 地（死者の住宅）

山川石を使っている墓で北向きに建っている。花は柳しばが供えられており、色花も少し供えられている。

生存者の住居は変貌が著しく、在来の住居も（馬小屋等含めて）一部改造されている。死者の住居は従来あったものだが、一部新しいのもある。



広田の墓1



広田の墓2

#### (2) 大久保

家が密集しており、木造の家とブロックを組みあわせた家が多い。また新しく建てたばかりの家も見られる。玄関は、道面上に面しておらず、中に入ったところにある。

図③ 西園ハツエさん宅

トイレ（昔）



台所 風呂場 トイレ

エ ン ガ ワ	シモノザ	ヨコザ	シキイ
	カミノザ	オシイレ	

トコノマ

神棚

風呂場 ホンケ キタノトグチ	ジロンマ	ヨコザ	ジロ
台所	シモノザ	カミノザ	神棚
勉強部屋	玄関	エンガワ	床の間

### ①西園ハツエさん宅

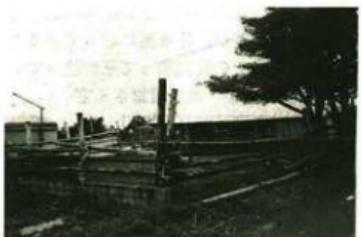
西園さん宅の敷地内にはホンケ・インキヨヤ・牛小屋・牛の運動場がある。昔は牛小屋とホンケの間にトイレがあり、このトイレのことをチニヤと呼んでいたそうである。またインキヨヤは16年ぐらい前に倉庫だった所を改造してつくったものである。また倉庫のことをクラといい煙草の乾燥場として使っており、今はワラをいれている。また牛小屋横の倉庫には牛用の干し草が保管してある。

#### ○牛小屋

牛小屋には親牛が八頭、子牛が五頭おり、横の方には牛の運動場がある。



牛小屋



牛の運動場

#### ○インキヨヤ（隠居屋）

昔ここは煙草の乾燥場であったが、16年前に、長男にホンケを譲るために改造して移り住んだそうである。部屋はカミノザ・シモノザ・ヨコザ・押し入れに分かれている。



隠居屋

### ○ホンケ

ホンケは長男の家であり、また部屋はヨコザ・カミノザ・シモノザ・ジロンマ・勉強部屋に分かれている。



ホンケ

#### ○ヨコザ

着物を入れたり、寝室として使われる部屋である。またお産は必ずこの部屋で行なわれていた。

#### ○カミノザ

上客をもてなす時に使われる部屋であり、また葬式はこの部屋とシモノザを使っておこなわれる。この部屋には、女性が生理の時には汚れているとし、入ってはいけないとされている。

#### ○ジロンマ

昔はここにジロ（いろり）があった。ジロの周りの座り方は決まっており、この家で一番偉い人（主人）がヨコザ側に座ったそうである。

#### ○北の戸口

この家の北側に作られた入口である。この入り口を使うのは、出産後と誰か亡

くなった場合である。まず出産後であるが、これは出産後お嫁さんは八日を過ぎるまでヨコザ以外の部屋には入らないようにされていた。そこで外から入ってくる時もこの北の戸口で手足を洗い清めてからヨコザへ行ったそうである。これはここから入ることによって他の部屋へ入らなくてすむからだそうである。次に誰かが亡くなった場合であるが、その亡くなった人が使っていたものを出したり、亡くなった人に触れた場合、北の戸口に置いてあるタラー（たらい）で手を洗ったりする時に使われる。

#### ○亡くなった人の着物や布団の処理

昔は人は家で亡くなっていた。そしてその亡くなった人が使っていた着物や布団など、その人が触れたと思われる物を全部北の戸口から出します。そして明くる日の昼すぎ頃に身内の女性がそれらの道具をまとめてくくり、クエという棒でかつて海へもっていく。その時一人の男性が鎌をもつてついていく。この三人の間では海へ行くまで話をしてもいいのだが、他の人から語りかけられた時は、その人と話をとはいげないとされている。そして海につくと男性は持っている鎌で十字を切る。これは厄魔祓いの意とこの場所を神に借りるという意味がある。

男性が鎌で十字を切った後、女性は持ってきた物を海水にぬらして洗う真似をする（この時いらなくなった物は捨てる）。そしてまたまとめて持って帰り、屋敷外の太陽のあたらない場所に干して乾燥させてまた使ったそうである。

#### ○防風対策

##### ○ヤネヤマ

防風林となっているもので、サンタブ・ハゼの木・タケが植えてある。これらは木は切ったらいけないとされているが、倒れてもそのままにしておくそう

である。

##### ○ナガキ

モウソウダケ（またはスギ）を雨戸の両側にわたして、ひもで結び雨戸が飛ばないようにした。また農具として稻をかけて干すものもナガキと呼ぶそうである。

#### ○その他の住居付属民具

##### ○ナベ

餅を作る時に使ったり、麦を蒸してみそを作る時に使う。昔は鉄製であり重かったのだが、今ではアルミ製がありして昔より軽くなっている。

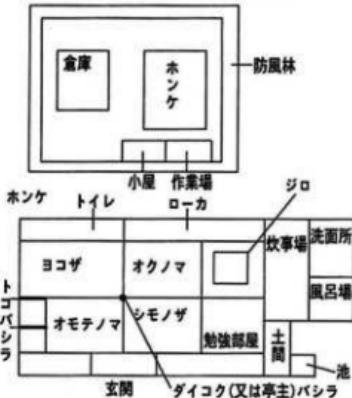
##### ○カマ

お正月など餅を多く作るときに使うものであり、10年くらい前から使い始めたようである。このカマを使う以前は、石でかまどを作り、それを使っていた。下の方に薪をいれて、このカマは使う。

### (3) 燃野

住居は密集しておらずまばらに建っており、新しい住宅が多い。また団地のような集合住宅地が多い。道は板になっているところが多く、その板に沿って家が建っている。

図④ 喜岡義雄さん宅



### ①喜岡義雄さん宅

この敷地内にはホンケ・作業場（農作業の機械類が収蔵されている）・小屋（馬屋を壊して新しく作った）・倉庫（米などを収蔵している）と周囲に防風林として、マテバシイ・イヌマキ・ツバキなどを植えている。



倉庫と仕事場



オモヤ

### ○その他の住居付属民具

#### ○ミズタメ

雨どいからの水を留めるのに使われる。水は洗いものをする時に使ったり、またいらない時は捨てるそうである。



ミズタメ

### (4) 上野

道路わきの家は新しい家が多い。道路は舗装されており、道幅も広い。

#### ○ヨコザ

寝る所であり、出産もここで行なっていたそうである。

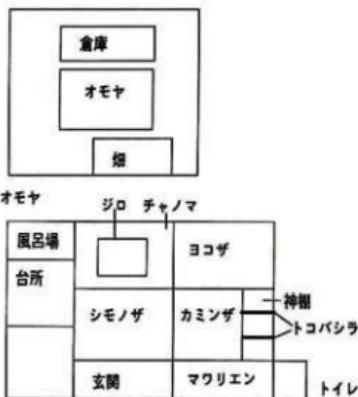
#### ○オモテマ

二部屋あるオモテマは冠婚葬祭のために使われる。この部屋にはお産をした女性はお産してから一週間ぐらいは入ってはいけないそうである。

#### ①小脇カツミさん宅

この家の敷地内には倉庫・オモヤ・煙がある。このオモヤは自分で造林した杉でつくった家だそうである。

図⑥ 小脇カツミ



○オモヤ

オモヤはヨコザ・カミンザ・シモノザ・チャノマとあと一部屋と台所に分かれている。

⑥チャノマ

三年前までジロがあったそうである。このジロの座り方は決まっていない。

⑦ヨコザ

昔は出産をこの部屋で行なっていたそうである。

オモヤ

○その他の住居付属民具

つぼ

昔からあったつぼで熊野焼ではないか。



ツボ



車庫

○その他

○亡くなった人の着物や布団の処理

この地域は班に分かれており、例えば二班の誰かが亡になると、葬式を公民館やその亡くなった方以外の家で行い、その人が生前使っていた着物・布団は二日ぐらいした後、全部捨てるそうである。

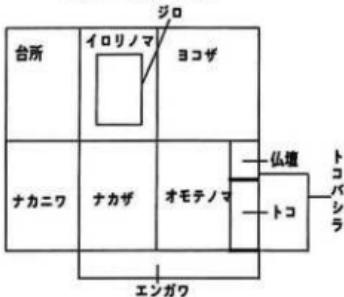
(5) 砂 坂

道路わきには新しい家が多い。道路は舗装されており、道幅も広い。海の方へ行く道の両側には古い家が多く新しい家の方が少ない。

### ○砂坂の住居

昔は田の字型の家でイロリノマ・ヨコザ・オモテ・ナカザ・台所・ナカニワに分かれており、またカンジエ（トイレのこと）や風呂（五右衛門風呂）は家の外にあったそうである。

図⑥ 砂坂の住居



### ④イロリノマ（ジロンマ）

昭和30年頃までジロがあった部屋である。食事の準備ができやすい台所に近い方に母親が、ティッシュバシラの方にその家の亭主が座ったそうである。

### ⑤オモテノマ

オモテにはトコと仮壇があり、仮壇は昔二段につくって位牌をのせ、花をかざっていたそうである。またオモテノマにはあんまり入ることはなく、子供が遊んだりすることは許されなかつたそうである。

### ⑥ヨコザ

出産が行なわれていた部屋である。女の人は出産後3週間はこの部屋にいたそうである。これは出産はめでたいことだが、一方で汚らわしいことでもあるからである。

また、ヨコザの床の畳の下は板間にはなっておらず、竹を後に組んでいたそうである。これは亡くなった人をオモテに運ぶ前に、身を清めるために、畳をはいで湯で死者の体を洗っていたからだそうである。

### ⑦ナカニワ

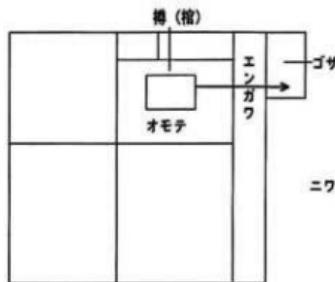
雨が降って外で仕事が出来ない時にここで縄をなったりする仕事をしていた。

### ○その他

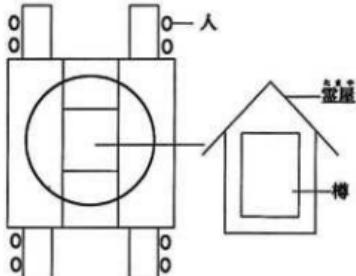
#### ○砂坂の葬送儀礼

砂坂での葬儀は、必ず全てを亡くなった人の親戚でない、その他の集落の人達によって行なわれる。

まず遺体の入っている樽（現在は棺）をオモテにおく。その後エンガワからニワの方へ出す。その時にニワには新しいゴザ（昔はむしろが多かった）をひいて、その上に下ろしたそうである。



次に下図のように板の台を組んで、樽をのせ、その上にタマヤ（靈屋）をのせて、四人～五人の人達が墓場まで運んだそうである。この時使う縄は5cmくらいの太さの縄を新しく村落の人が作り、またかつぐ時使う木は太さ10cmくらいの堅木を切ってきて皮をはいで使うそうである。



その後、墓屋は裕福な家は一年忌で、そうでない家は三年忌で取って捨てて、墓石をたてたそうである。

### (6) 阿多羅経

水田地帯が広がる地域で、家の周りにヤネヤマがあり、ヤマモモ・ニガタケ（琉球竹）・クワズイモ等を植えてある。

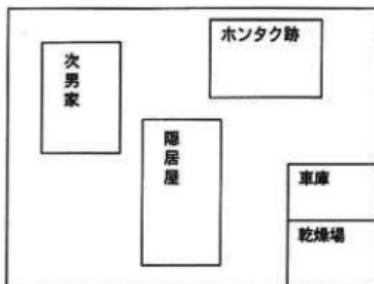


阿多羅経

①向江秋夫さん宅

隠居屋とホンタク跡と次男家・車庫・乾燥場がある。ホンタクはシモノザ・カミノザ・ヨコザ・ジロンマに部屋が分かれている。また車庫には、漁具・農具・運搬具が多く収蔵されている。

図⑩ 向江秋夫さん宅



次男家

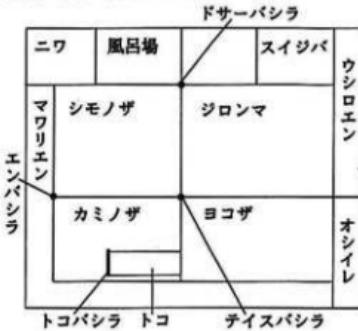


ホンタク跡



隠居屋

図⑪ 向江秋夫さん宅



#### ○車庫内の民具

車庫内には多くの漁具・農具・運搬具が収蔵されている。



乾燥場と車庫

#### ④ヘラ（左官用）

左官がセメント、粘土などをぬる時、あるいは、平らにするときに使う。



ヘラ（左官用）

#### ⑤メゴ

鹿児島ではウナッテゴといい、標準語ではピクと言う。町で購入したものである。



メゴ

#### ⑥ウナギカケ

うなぎをとる時に使う。茎永の宮瀬川でうなぎをとっていたそうである。とり方は、まず地面をこすり、うなぎがひっかかったら、じっと押さえ、ひっかけたまま、もっていったザルにいれたそうである。



ウナギカケ



使用法を説明する向江秋夫氏

#### ⑦ククリ

夏に、腰にくくりつけて使う。海岸に打ち寄せた網を解いて、それで縄をなって作った。麻で作ってある。普通はわら製。上口のひもをひくと締まるようになっている。ナガラメ（あわびの一種）とりに行くときに使う。小魚を入れることもある。



ククリ



使用法を説明する向江秋夫氏

## 5. さいごに

農作業など忙しい時期に訪ねられたにもかかわらず、親切に迎えて下さり、調査にもとても協力して頂き、本当に感謝しています。

また、私達が調査しやすい環境をつくり下さった、南種子町役場、南種子町教育委員会、ならびに私達に協力して下さった全ての方に心から感謝したいと思います。

本当にありがとうございました。

## 4. まとめ

概観でも述べたように、昔のままの家が残っている家はほとんどなく、建て直されたり、壊して失くなってしまったりしていた家が多かった。時代の流れなどいろいろな背景があるとは思うが、昔の生活を知る手がかりがなくなってしまったのは残念だと思う。

しかし、これらの事も見過ごさず、しっかりとその意味を考えることが重要なのではないかと思う。

# 産

# 育

鹿児島民具学会会員 近藤 津代志

## 産 育

産 育 西之 田代 日高 実 雄

スミエ

### 産あがり

子供が産まれて14日の「産あがり」の時には、親戚が野菜を持ち寄ってニシメを作って食べる。ニシメは野菜を煮たもので、ニシメに里芋は欠かせない。

その他にニシメは、家建て、盆、彼岸等の時に作り、普段には作らなかった。煮干しでだしを取って、里芋、大根、人参、蒟蒻、豆腐の厚揚げ、昆布等の野菜を煮て、醤油で味付けする。だしは最近では粉末のだしの素を使っている。かなり昔はだしは取らなくて、自家製の醤油だけで味付けしていた。

産 育 平山 広田 西田 キミ

### 腹 带

腹帶は、締めなかった。

### 禁 忌

タコとイカは妊娠したら、食べない。  
……広田ではそのような事はない。

### 産 小 屋

広田にはなかった。実家に帰ってお産はしていた。

### 鬼 子

生まれてくるときに、歯の生えた子供は鬼子であると聞いていた。昔の人は、鬼子を自分で殺していた。

産 育 平山 広田 徳永 ヒデ

### 禁 忌

妊娠したら、タコとイカは食べないものだ。お産の時に赤ちゃんがくっ付いてしまうからと言う意味である。しかし、私は食べた。

### 腹 带

5ヶ月になったら締める。昼も夜も締めていた。特に祝いはしなかった。戌の日を選ぶようなことはなかった。

### お産の場所

実家に帰らないで、嫁ぎ先でお産はしていた。お産の寸前まで仕事をしていたので、野良で産気づいて、前掛けに赤ちゃんを包んで、帰ったと言う話を聞いたことがある。

### 産 小 屋

庭に産小屋を作っているのを見たことがある。そこで煮炊きは行っていた。風呂、納戸でお産を行うことはなかった。

私は横座でお産はした。横座からトイレに行くときは、北の人目に付かないところを通って行っていた。食事は姑が作ってくれた。

### 後 産

キタントグチと呼ばれる裏の出入口から出入りしていたので、そこの床下に埋めていた。三人目の子供から産婆が墓に持つて行って、埋めてくれた。コボウバアと呼ばれる取り上げ婆さんが広田にいて、産婆さんはいなかった。三人目の子供の時から、広田にも産婆さんがいるようになった。後産が降りないときの儀式は、広田ではなかった。

### 名付け祝い

広田では名付けの祝いは、特別に行って

いなかった。

### お産の神

聞いたことはなかった。

### 鬼子

上から先に歯が生えてきた子供を鬼子と呼んでいる。

### 餅踏ませ

1歳にならない子供が歩き始めたら、2~3升の精米で大きな餅を摺いて、小さな藁履を履かせて踏ませ、踏ませた餅を切って、屋根の上に登りそこから屋根が見える家全部に、餅を配る。

### その他の民俗

### 彼岸 西之 田代 日高 実雄 スミエ

春と秋の彼岸に墓参りに行った。

春の彼岸は彼岸花と呼ばれる幹が3センチ程度の花木で、葉の丸い白い花の咲くのを墓に供える。彼岸団子を作つて供える。この団子は、よくねずみに取られていた。彼岸団子は、特別な団子ではなくて餅、カカラ饅頭、牡丹餅などをさす。坊さんが檀家を巡つてお経を唱える。

秋の彼岸は、球根から出てくる草花の彼岸花を墓に供え、春と同様に彼岸団子を作つ。坊さんが檀家を巡つてお経を唱える。

### 彼岸 平山 広田 西田 キミ

焼酎と洗米を持って寺にお参りに行く。寺で和尚さんがお経を読んで、ありがたい米になるので、サジで1杯ずつ帰りに下さる。その時の米をオセンマアと呼んでいる。

### 漁業 平山 広田 徳永 ヒデ

漁業の人をフナトウと呼んでいる。浜に手伝いに行くと、フナトウの人が、魚を少しづつ分けてくれる。

### 春の彼岸法要 西之 田代 日高 実雄 スミエ

坊さんが各門徒の家を巡つて、お経を唱える。大学に行っている三代目の坊さんが今日は来て下さった。

### 節分 平山 広田 西田 キミ 米と焼酎を持って、善福寺にお参りに行く。

### 盆 平山 広田 徳永 ヒデ 神道であるが、形だけの盆は行っている。

### 鍬祝い 西之 田代 日高 実雄 スミエ

正月の鍬祝いの時に、鍬の前に板を置いて、カシワ苺の葉にご飯をのせて供える。

### 足耕 西之 田代 日高 実雄 スミエ

農地に牛か馬を追いかんで踏ませる。その時にホーイホイホイトウと言っていた。犁、犁耕が入つて来る以前の農耕。

### 焼畑農耕 西之 田代 日高 実雄 スミエ

開墾で山を焼くことはあったが、本格的に焼畑農耕として山を焼くことはなかった。

### 雑魚漁 平山 広田 徳永 ヒデ キビナゴのことを雑魚と呼んでいる。フナトウと呼ばれる漁業の人が、取つていていた。

大々的ではなくて、個人個人で乾物に加工していた。

### 飛び魚漁 西之 田代 日高 実雄 スミエ

明治から大正の初めにかけては、四~五月に種子島にも飛び魚が押し寄せてくる。田代は山間部であるが、西海岸の飛び魚漁の権利を持っていた人がいた。海岸に飛び魚

が押し寄せたら、狼煙を揚げて合図していた。狼煙を揚げてから捕りに行くのが、ルールであった。

鰯 節 平山 広田 徳永 ヒデ  
広田では、鰯節は作らない。屋久島から来たセンジを出しに使っていたが、現在ではないので使っていない。

海 苔 西之 田代 日高 実 雄  
スミエ

海岸の瀬に生えている。水温が上昇するとウジがわくと言って、冬場に採っていた。乾燥させて、商人に売っていた。

鹿鳴川 西之 田代 日高 実 雄  
スミエ

田代の集落には、鹿鳴川が流れている。この川には、カンザ測と白測がある。白測の所は、白い粘土みたいな石があり、川の神様がいるので、行くなと親から言われていた。しかし、川で死んだ子供は一人もいなかった。

田代の地名の由来

西之 田代 日高 実 雄  
スミエ

田圃が多いという意味ではなくて、田圃が開けたということで「田代」という地名が付いた。

宝満神社 基永 松原 日 高 ユキエ  
終戦後に鹿児島から引き揚げてきて、宝満神社の宮司になった。宝満神社には社人爺がいて、社人爺には御田が与えられて、田圃の収益が報酬として与えられていた。現在では、社人爺がないので、宮司が赤米を栽培するところだけを開いている。ご神体は石である。

御田植祭 基永 松原 日高 ユキエ  
石蕗の煮しめを作って、祭りに行く。

ウマヤキ 平山 広田 徳永 ヒデ  
田を作ったあがりの5月に、オチョウニン（集落の人々が）の人が浜に行って遊んでいた。男は魚を捕って、女はそれを料理してみんなで食べていた。その時にツノマキと呼ばれる団子を作って持って行く。終戦後は、男だけが行って、今まで続いている。

石塔祭 平山 広田 徳永 ヒデ  
広田集落では、盆に仏教の家で石塔祭を行っている。私の家は広田集落でただ1軒の神道であり、石塔祭には参加しない。大町塩入りの岡の上に、石塔が10基ある。7月1日からお寺の旗が掲げられて、チャヤ参りが始まっていた。

昔 話 平山 広田 徳永 ヒデ  
現在のロケット基地の所に、大きくなつてから人に食いつく人がいたので、その人は山の中に放した。という昔話を聞いたことがある。

盆踊り 平山 広田 西田 キミ  
父の元気な頃には善福寺で盆踊りがあったが、その後は途絶えた。麻の着物を着て、タオルを被って鼻の所で結んで踊る。

# 葬・墓制具（葬送・石塔祭り・墓地・墓石）

森田江身子

## 1. はじめに

人生の最も大きな節目である誕生と死。この死に関する民俗が今回の私のテーマだった。離島ということで本土と比較しながら見ることができたらと思う。有形調査のため、モノの寸寸などにてまどりあまり話が聞けなかったのであるが、それでも自分なりに調査できることをここにまとめてみる。

## 2. 概観

### ◎葬送

まず人が亡くなったら、その人をヨコザといわれる奥の間に北枕にして寝かせる。そしてその晩を通夜といい、親類や村落の人々は悔やみを言いにいく。24時間たたないと埋葬ができないので、葬式は翌日の午後になったそうだ。

昔は葬式はその村落全体で行った。そこで、死人が出たら、その家の者は親類に知らせるのはもちろんのこと、必ずチョウガシラ（今でいう公民館長さん）に連絡をする。このときの遣いは二人一組で行い、決して一人で行動してはならない。そして知らせを受けた村落の人々は、炊きものに使う薪やどんぶり一杯くらいの味噌、2~3合の米をチョウガシラに持っていく。そして集めた米などを大きな釜で炊いて料理するのである。こうした炊き出しについては喪主が近所の家の人に「（葬式のときに世話ををする家として）家を貸してください」といって頼むのである。式に関してはチョウガシラが全て指揮をとる。旗竿を切りに行く者、草履を作る者、穴掘りをする者、靈屋を作る者といったふうにチョウガシラがチョウニンの役割分担をするのである。棺桶を作るのはタンコさんだったが、靈屋を作るのは特に大工だとは決まっておらず、そうした仕事ができるものが從事したらしい。

また、棺桶を担うときに固定する繩も買ったものではバチが当たるといわれ、自分たちで作った。これは草履と同じように左繩で作っていた。

湯漬は近親者の手で行われる。このときは、まず、部屋を明るくするために松明を燃やす。この松明を持つのは誰でもよかったです。そしてタライ1つぶんのお湯をヨコザに持つて、死者の体を洗い清める。昔の家は葬式のためにヨコザの壇の下は竹を繩で編んだものが敷き詰められていたので、湯漬のときはこの壇をあげ、竹の床の上で死者の体を拭いてあげた。このとき、男の兄弟はみんなフンドシひとつで湯漬をする。そのあと死者に着物を着せたのである。

入棺のことをニッカンといい、人々は泣きながら死者を棺桶に納める。死者を棺桶に納めるときは、正座をさせ、手を合わせさせて、花を抱かせる。このとき、一緒にハンマイ（白米）やお茶の葉を入れる。これらは袋に入れて別々にして棺桶に納める。他にはお金やキビス（急須）、死者の愛用品なども一緒に入れる。

出棺のときは、まずカミンザに新しいゴザを敷いて、そこに遺体を入れた棺桶を置き、棺桶の上には靈屋をかぶせる。靈屋を乗せる台の四方に穴を4つあけて、その穴に靈屋の足がピタッと入るようにしているからそれを棺桶の上にかぶせるのである。このカミンザでお坊さんにお経をあげてもらい、その後縁側から送る。縁側から出すときは、敷いてあったゴザをまた縁側の外に敷いて、その上に棺桶を下ろしてから運び出す。このとき靈屋にモリ木（担い木）をしっかりとくくりつけて担い出すのである。その担い木には2本とも真ん中の方に白い晒が巻かれている。靈屋をかつぐのはチョウニン（町人）で、必ず4人でしなければならぬ

い。そして前方の2人と後方の2人は互いに肩を組み、左側にいる人は左肩に、右側にいる人は右肩に担い木をのせるのである。またこの人たち途中で交替しなければならない〈墓永の雨田〉。雨田では「川を渡れば死体が重くなる」ともいっていたそうだ。

墓までの葬列の順序は決まっていて、先頭はミヂビラキという道案内人である。その後に旗・坊さん・写真・位牌・棺桶、親族一同などが続く。葬式のときの服装はやはり喪服なのだが、親族の人はヤクユーチュエといって、1cmか2cmほどの小さな白いきれを頭にくくったり、襟につけたり、首に巻いたり、ポケットに入れたりする。(ユーチュエとは手拭のことである。)また、草履を履くのも親族だけである。親族は墓まで藁で作った草履を履いて行き、埋葬が終わったら墓に置いてくるのである。そのまま歩いて帰ってくると死者が帰ってくるといわれている。こうして草履はとりあえず捨てるけれども縁起がいいといって、漁師がもらっていくこともある。

そうして、墓に着いたら担ってきた靈屋を降ろして和尚さんにお経をあげてもらう。それからツボ(穴のこと)に入れるのである。ツボに納めるときは葬式に使ったごはんや供え物も一緒に埋め、また遺族の人は掘っている土を少しづつ投げ入れる。そのあときれいにして、靈屋を据えて、板で作った棚の上にロウソクや線香立てや花などを供え、位牌も入れる。靈屋の中には墓標があり、その中心にはイキボウを立てる。

墓の様子は仏教と神道に違いが見られる。例えば仏教は北向きで神道は南向きである。また靈屋に関しても仏教は太平ずまい(ヒラ入り)で神道は小平ずまい(ツマ入り)である。

さて、葬式から帰ってくるとハライギトウをする。これは今まで死人がいたために家が汚れているからである。ハライギトウは墓の入り口か、家の庭で和尚さんが祈祷する。また遺体が寝ていた場所にその人の靈魂がいつまでもいると困るので、「石原烟

になりなさい。」と言って小さな石を拾ってきて撒いたりもする。

死者の着物や靴などは焼却し、腰巻といった不潔なものは川に流しに行く。焼却するときも流しに行くときも必ず二人で行った。モノがいい場合は形見として親族に分けたりした。

年忌は1, 3, 7, 13, 17, (23) 年忌と続き、仏教は49年忌、神道は50年忌で終わりである。最終年忌のときは「たたむ」といって墓石を積み上げて、骨を焼いて納骨室におさめるそうだ。しかし、そうはいうものの広田ではトリアゲのようなことはしないので、墓石が多くなるとおっしゃっていた。

#### ◎盆の行事（特に石塔について）

##### ・墓永（雨田）“石塔まいり”

お盆の14日と15日は神棚から床の間に位牌をなおしてお膳を並べる。お膳は精進料理で、期間中は何回も変える。朝起きたらまずお茶をあげ、朝食の前に黒豆を炊いてあげる。おやつには団子とかスイカなどをあげる。ご飯をあげるのは朝の一回だけである。15日のお昼までそのようにお供え物をして、3時か4時頃までにはお墓にもお供えする。盆のときはマキを作つてお墓にあげたり、お嫁さんが実家にマキを持っていってデー（礼）マイリをしたりする。お供えのマキは墓石の頭にのせるのだが、お参りしたあとは持つて帰るそうだ。お墓ひとつにつきマキひとつを供える。

石塔まいりは盆の16日についていたそうだ。石塔が寺にひとつあり、この日に無縫仏を共同でまいるのである。これは大人も子供も参加するのだが、仏教徒の人達だけでするものであった。人々はお餅や焼酎、水の子などを供えた。水の子とは芭蕉の木をサイの目切りにして、米・エンガ・ソウハギなどと混ぜ、水にひたしたものである。これを重箱に入れて持つて行って、墓石にちょっとずつ供えるのである。

##### ・平山（広田）“石塔まつり”

旧暦の7月1日から祭りが始まる。この日に精霊様が向こうを発つてくると言われているからである。そこで1日になると和尚さんが白布に南無妙法蓮華経と書いてあるショウリョウマネキバタ（精霊招き旗）をお寺のそばのヒツバの高い木のてっぺんに立てる。また住民の中からトーパンになっているお寺の役員の人がチャヤマワリと呼ばれている場所に長さ1m、幅70cmくらいの祭り場を作る。ここにある石は精霊様の腰掛け場だと言われている。そこで竹がらを燃やして精霊様をお迎えするのである。トーパンの人はササゲ豆を煮て、祭りにきている人達全員に匙一杯ずつ配る。このチャヤマワリは1日の晩から11日まで続く。こうしてお盆が始まるのである。

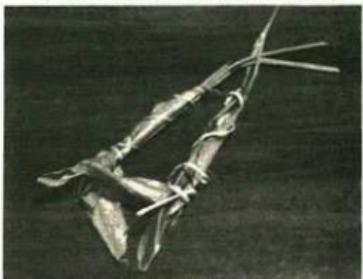
12日の晩はお寺で、南無妙法蓮華経と書いたお札を自分の家の精霊の人数分買ってくる。そして仏壇から床の間に降ろした位牌にそのお札を添えて並べる。お膳は2~3組作り、精進料理でもてなしをする。

13日はその家の主人が縁側の外にマツリダナを作る。これは精霊様の付き合いにくらい人、つまり身寄りのない人を祀るために棚である。棚の材料はチヂク竹かニガ竹で、これは4本の竹を立てて、竹で編んだ棚を作り、家の縁側（家の内側）に面した部分以外の三方をソテツの葉で囲んだものである。お盆に訪ねて来た人はまずこの縁側のマツリダナからまいる。重箱に入っているアラーネをちょっと摺んで、棚にぼんと置き、水も少しあげる。アラーネとは芭蕉の木の幹をサイの目切りにしたものにエンガの花びらやシキビの葉を混ぜたものである。盆の間は縁側に水の入ったバケツを置いておく。

15日の夕方は期間中床の間に飾ったお札と線香とマキを持って墓参りをする。マキとは砂糖を入れずに米の粉と水だけで作った団子である。米の粉を水で練って細長くのばしたものを2枚の葉で挟み、下の葉を後ろに折って、着物の胸を合わせるようにして葉を包み、その真ん中に乾かしたミチシ



長田アツさんが実際にマキを作って下さった



マキ（まだ生である）

バをのせ、一回ぐるっとまわしてからぐるぐるまきにして結ぶ。これを14日の晩に水分が出るように軒下に吊るして、15日の朝お湯で煮る。煮えた頃、パケツの水にひたして冷やし、また軒下に吊るしておく。そうして15日の夕方に墓や石塔に持っていくのである。精霊様はマキを杖にして、お盆のごちそうのそうめんを紐がわりにしてくくって旅立つと言われており、盆にマキは欠かせない。墓におまいりするときは、このマキと線香を一人一人の墓石の頭の上にのせる。お札は竹を割ったのに抉んで上を結んで土に突き刺す人もいれば、墓石の間にはさんでおく人もいる。墓参りをしたら、墓石の上にのせたマキを持って帰ってもいいが、これを石塔まつりに使ってはいけないそうだ。

そして自分の家の墓参りのあと石塔で精霊送りをする。広田の石塔は小高い丘の上にあり、階段を上って行った入り口の左側（南側）に崖の斜面に沿って7つの石塔があ



広田の石塔。崖の斜面に沿って7つの石塔がある。



広田の石塔。写真左がお寺の石塔。  
右の2つは組の石塔。

り、中央より右側のこんもりしたところには2つの石塔とお寺の大きな石塔がある。そして石塔の前にはそれぞれマツリダナがある。石塔は広田中の先祖を祀ってあると言われており、大きな石塔は村落の人達がみんなで祀り、小さな石塔は組の人達だけで祀っている。石塔まつりの時広田の人達はまず大きな石塔を参ってから、自分たちの小さな石塔を参る。和尚さんは大きい棚に供養してから小さい棚にも供養してまわる。石塔の上にはかけ棒があり、大きな石塔のものは木を組んで木の棒をわたしてあり、小さな石塔の上には竹をわたしてある。まつりの時はこの大きな石塔のかけ棒に各家々からマキを2束ずつ（マキは5本で1束である）かけて、それを和尚さんがお経を読んで消める。村落の人達は一人一人順にアラーネを棚にかけてお参りするのである。また自分の組のところにもマキを2束ずつかける。昔は石塔当番の人が15日の精霊送りのために大きい桶に水を汲んで担ってきたそうだ。

オセ（大人）も子供もこの水を使い、昔の家庭で使っているシャク（杓子）で水をすくってつかっていたのだが、今はすぐそばに水道があり、水道水を使っている。また昔は自分の組のマツリダナは自分たちで作っていたのだが、今は老人が作るようになり、去年から中学生が加わるようになったそうだ。

そうして祭りが終わった後、各家々から持つて来てそれぞれの組の石塔にかけた2束のマキのうち1束は自分たちでもらい、残りの1束と大きな石塔のかけ棒のマキは子供達とマツリダナを作った人達にあげている。石塔はお盆以外はお参りはしないそうだ。

翌日16日の早朝はお寺で精霊送りをする。お寺に行くときも刻んだ芭蕉とエンガの花とシキビの葉を混ぜたものを持っていく。お寺では一番先にお米と水をあげた人の先祖が一番先に旅立つと言われており、そのためみんなは和尚さんのお経が終わるのを構えて待っているそうだ。

19日にはチャヤゲをする。これは精霊様が行く道は遠い道なので疲れの中休みのためにするものである。途中でだれないようにと揚げ豆腐やもやしといった精進料理を仏壇にあげるのである。

以上が広田のお盆の行事である。縁側のマツリダナなどは現在では作ってはいないそうだが、石塔まつりは昔のままに継承されており、こうした例は少ないそうだ。この広田の石塔まつりは町指定文化財になっている。（S47. 3. 30）

## ◎墓地の様子

本土とは違いほとんどが個人墓で、自然石もとても多かった。また地理的には村落の奥まった竹林や小高い丘の上に大体まとまっていた。例外として広田に一ヵ所道路沿いにあったのと大宇都の墓があげられる。大宇都是新しい村落で島間や塩永などからの移住者が多いとのことだった。そのため、村落の共同の墓地というものがほとんどなく、ひとつ的新しい納骨墓が各個人の家屋敷や

その周辺にあるといった感じだった。これはお参りしやすいからだそうだ。

墓は仏教徒が多いのか、北向きが多かった。ひとつの敷地の中の墓の向きは大体同じではあるが、北向きの墓と南向きの墓（神道）が一緒にあるというのも少なくはなかった。

墓自体古いものが多く、「享保」や「天保」といった文字も見られたが、解読不可能なものも多々あった。詳しくは分からぬが材質は山川石や鹿児島石などであった。またお供えの花は色花もあるが、本土（鹿児島）のように華美ではなく、墓石だけでなく、自然石の墓にいたるまで、それぞれにお供えしてあった。

墓石の回りに浜砂を撒いたり、ガルイシ（サンゴ礁）を置いたりしている例も割りと多く見られた。これは聖域を表すとともに清めの意味もあるのではないだろうか。

ところで小さい墓石は子供のものであるのが多いそうだ。その大きさは各家庭によって違うし、またその子の年齢によっても違う。茎永の兩田では生まれて籍を入れた赤ちゃんは墓を作るが、籍を入れない赤ちゃんは自分で葬った。また水子の場合はお絆もあげず、ただ箱にいれて埋葬するだけで墓石は立てなかった。

### 3. 民具解説

#### ◎墓

<平山（広田）>



平山（広田）の墓地。道路沿いにある。

・道路沿いの墓地。100基あり、全て北向

きである。

#### ○ハカ

ハス台の上に竿石がのっている形。竿石の高さ32.0cm、幅12.0cm、奥行10.5cm。全体の高さは53.5cm。正面には「妙法 □□信士」、右面には「岩口源吉建立」、裏面には「行年□□歳」、左面には「昭和七年九月□日□ 八月四日 俗名岩田源口」と書いてある。このタイプは三基あった。



ハス台の上にのっている。

#### ○ハカ

竿石の高さ42.0cm、幅17.0cm、奥行15.0cm。全体の高さ49.0cm。墓石の前に花瓶が埋まっている。正面には「妙法 □妙良雲」と書いてある。このタイプは十五基あった。



### ○ハカ

竿石の幅19.0cm、奥行16.0cm。全体の高さ91.0cm。正面には「妙法蓮成清光信土」、右面には「昭和十四年一月二十九日死」、裏面には「行年八十五歳」、左面には「俗名坂口彦之進」と書かれている。



### ○ハカ

竿石の上が丸くなっている。竿石の高さ66.0cm、幅22.8cm、奥行22.5cm。全体の高さ126.0cm。正面には「妙法宗俊龍月信土」、右面には「俗名坂口喜助 父坂口喜八建立」、裏面には「行年二十四歳」、左面には「大正八年四月七日」とある。このタイプは六基あった。



竿石の上が丸いタイプの墓

### ○ハカ

竿石の高さ43.0cm、幅16.8cm、奥行14.0cm。全体の高さ74.0cm。山川石でできており、まわりにガル石を置いてある。



墓石のまわりにガル石がある。

### ○ハカ

竿石の高さ82.0cm、幅31.0cm、奥行き31.0cm。全体の高さ約176.0cm。材質はみかけ石。湯呑み・線香立て・ロウソク立て・花立てがあり、墓石のまわりにはガル石が置いてある。正面には「秋月院蓮寿信士位」、右面には「俗名坂口武彦」、左面には「昭和六十三年十月二十五日亡 行年八十才」とある。



墓石のまわりにガル石がおいてある。

・階段をのぼった小高い丘のようなところにある墓地。ここには小さな自然石のハカもある。

○タマヤ（雲屋）

全体の高さ 136.5cm。妻入り。割りと新しく、ツマの部分にピンクと緑でハスの花が書いてある。中には墓標・塔婆が2つ・位牌・花立て2つ・湯呑み1つ・ロウソク立て・線香立てがある。タマヤのまわりにはサンゴ礁が數き詰められ、湯呑みや一升瓶も置いてあった。



タマヤ

<島間（向方）>

・島間3519(向方)の川東時徹さんの一族の墓  
○ハカ

子供の墓らしく小さめ。北向きである。



○ハカ

子供の墓らしく小さめ。南向きである。



○ハカ

南向きである。



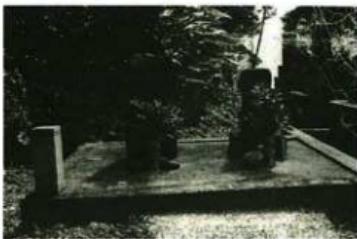
<西海（中之塩屋）>

・小高いところにある中之塩屋の共同の墓地。ここは出来てから丸4年になる。新しい納骨墓が六基並び、およそ北西を向いている。  
○中之塩屋の先祖代々の墓

他の墓が全て北西を向いているのに対し、先祖代々の二基の墓は北東を向いている。またこの墓石の下はコンクリートで二基ともそばにパイプが出ている。向かって左は自然石で正面に南無妙法蓮華經とかかれているように見受けられる。また花立てのそばには丸い石が数個置かれている。高さ 65.0 cm、幅 27.5 cm、奥行 13.0 cm。向かって右は竿石の高さ 41.0 cm、幅 17.5 cm、奥行 15.0 cm。全体の高さ 53.5 cm。

本当はこのハカに先にお参りするのが普通だが、大抵自分の家のハカを先にお参りし、ここを参るのはひまな人だけだそうだ。

花かえなどは村落のカシラが責任をもって行っている。



中之塙屋の先祖代々の墓

○ハカ（納骨墓）

中峯エダさんの家の墓である。北西を向き、正面には「中峯家の墓」とある。カラス除けのために網が張られている。



カラス除けの網が張られている。

<中之上（大宇都）>

・屋敷の周辺に納骨墓が多い大宇都の中で、畠の一角に三基並んでいる。

○ハカ

3基並んでいるうちの真ん中。一番下の段には白い陶器の破片が埋まっている。供えてあるのは菊の花。竿石の高さ46.0cm、幅15.0cm、奥行15.0cm。全体の高さ96.0cm。正面には「法名釋重思」、右面には「和田重八」、裏面には「之建 梶原重一 外子一同」、左面には「昭和三十一年十月一日亡 享年六十六歳」とある。



○ハカ

三基並んでいるうちの左側。鹿児島石でできていて、頭が丸くなっている。下段には白い陶器の破片が埋まっている。竿石の高さ60.0cm、幅21.5cm、奥行21.5cm。全体の高さ140.0cm。正面には「和田家の墓」、右面には「和田茂兄弟建立」、左面には「久木山兄弟建立」とある。



○ハカ

三基並んでいるうちの右側。墓石はみかけ石でできている。竿石の高さ60.0cm、幅20.0cm、奥行20.0cm。墓石の全体の高さ130.0cm。納骨室は黒色と茶色のタイルで

できていて、その高さ78.5cm。墓石の正面には「法名釋尼妙英信女」、右面には「俗名梶原チヨ」、裏面には「梶原重市建立」、左面には「昭和四十九年六月二十二日亡 行年七十四才」とある。



#### <中之上（上ノ平）>

・新しい納骨墓が並ぶ墓地のすぐそばにあり、竹が生えていてなんとなく薄暗い。そこは驚くほど自然石のハカがたくさんある。普通の墓石が九基、自然石のハカが十六基ある。ほとんどが北向きであるが、一基だけ南向きのものがある。

#### ○ハカ

大小様々な自然石が並ぶ。高さは大体5cm～80cmくらいである。ハカにはそれぞれ花をあげており、またハカのまわりを数個の石で囲ったものもある。向きはおよそ北を向いている。



自然石のハカ ①



自然石のハカ ②

②の写真の左端のハカは赤っぽい石で高さが79.0cmで自然石のハカのうちでは一番大きい。ハカには「大正十一年六月十日亡 日高仁二郎之墓 行年七十七歳」とある。

#### ○ハカ

自然石のハカ。およそ北向きで白い陶器の花立てが埋まっている。



#### ○ハカ

左側は自然石で高さ26.0cm、幅23.0cm。右側は普通の墓石で竿石の高さ34.0cm、幅13.5cm、奥行12.0cm。全体の高さ47.0cm。



正面には「妙法善口信士」、右面には「□月十三日」、裏面には「□□日高芳彦 墓」、左

面には「明治二十九年」とある。両方とも北向きである。

○ハカ

たくさんあるハカの中でこの一基だけが南向きである。竿石の高さ40.0cm、幅20.0cm、奥行13.5cm。全体の高さ53.0cm。文字は書かれているのだが風化が激しくほとんど読めない状態である。ただ左面に「七月十六日」と見えるだけである。



○ハカ

竿石の高さ41.0cm、幅13.2cm、奥行13.2cm。全体の高さ74.2cm。北向きである。墓石のまわりに石を並べて囲っている。正面には「妙法蓮□□信士」、右面には「行年□十七才」、裏面には「俗名日高仁助」、左面には「昭和六年十二月二十九日」とある。



○ハカ

北向きで材質はみかけ石。竿石の高さ67.5cm、幅21.0cm、奥行21.0cm。全体の高さ129.5cm。正面には「妙法 葉月院悦楽妙受信女位」、右面には「昭和六十三年八月十八日亡 行年六十六才」、裏面には「夫日高昇 長男 耕二 次男 千年 三男

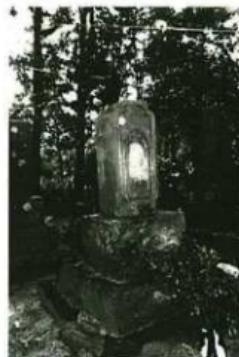
育男 四男 正行 長女 ミチル 之建」、左面には「俗名 日高ハツエ」とある。墓石の回りは浜砂を撒いたらしく貝殻がたくさんあり、またその墓石を数個の石で囲っている。墓石には位牌も置かれている。



<西之（本村）>

昔の墓地は村落に7ヵ所くらいあるそうだ。この墓地の北には畠や田圃があり、南には海がある。墓は北向きのものが二基、南向きのものが五基ある。南向きのハカの中にはみかけ石製のもので、数個の石で回りを囲ったものもある。

○ハカ



北向きのハカ。竿石の高さ 51.5cm、幅 21.5cm、奥行 20.0cm。全体の高さ 102.0cm。竿石と二段目の石は山川石らしい。いろいろと文字は書かれていただろうが、風化が激しく読み取ることができない。ただ右面に「天保」という文字が、また左面には「五月十日」という文字が見える。

・上記の墓地から少し行くと、海へ続く小道の両脇に墓地が広がっている。向かって左側は割りと花が多いが、右側はあまり見られない。ハカの数はおよそ墓石が72基、自然石が38基である。

○ハカ

自然石のハカでまわりを石で囲っている。高さ 64.0cm、幅 20.0cm 奥行 16.0cm。正面には「妙法□□□信女」、左面には「□□十月二日」とある。右面と裏面にも文字は書かれているようだったがよくは読み取れない。



○ハカ



六角形の台座が特徴的

一方が 23.0cm の六角形の台座が特徴的なハカである。北向きで塔身の高さ 77.0cm、幅 33.0cm。全体の高さ 111.5cm。正面に「明治三十三年口 妙法梅月隆精信士 旧正月十八日」とある。

○ハカ（？）

塔のような形をしていて、このような形のものは外には見当たらない。全体の高さが 133.0cm、幅 19.5cm、奥行 7.0cm。正面に「南無妙法蓮□□□□□院妙 二月十八」と見える。



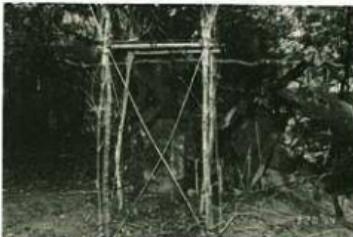
塔のような形が特徴的

◎石塔まつり

<平山（広田）>

○石塔（お寺の石塔）

旧暦 7 月 15 日の石塔まつりのときに広田の人々が集まって供養の盆行事が行われる。



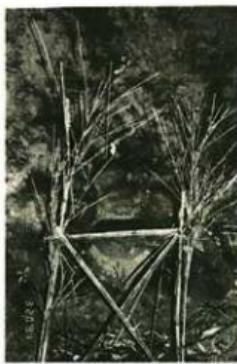
広田の人々みんなでお参りする石塔

石塔は高さ 69.0cm。石塔の前にマツリダナ

が設けられており、大きさは高さ136.0cm、幅66.0cm、奥行64.0cm。4本の木を立て、竹で編んだ棚を作る。そして割った竹を十字にして石塔に面した部分以外の三方を囲っている。マツリダナの上には木をわたしてかけ棒を作っている。まつりの日に広田の人達はこのかけ棒にマキをかけるのである。石塔の前には竹筒やお札なども立てられている。

#### ○石塔（村落の組の石塔）

組の石塔は9つあり、これはその中のひとつである。組の石塔は小さな石塔で、まつるのも組の人たちだけである。崖の斜面に沿って石塔がおかれており、その前にマツリダナがある。マツリダナの大きさは高さ55.5cm、幅36.0cm、奥行38.0cmである。柵はミチシバ（サンカクユ）で編んだ竹の柵である。割った竹を十字にしたものは正面にしかしていない。この石塔の上にも竹をわたして作ったかけ棒があり、お寺の石塔と同様にマキをかける。



組の人だけでまつる石塔

#### ○不明（チャヤトウ？）

この石は精霊様の腰掛け場だといわれており、7月1日の晩にチャヤマワリとよばれる場所で竹がらを燃やして精霊様をお迎えする。現在は長田アツさんのお宅の庭にあり、北向きになっているが、もとは南向きだった。高さは60.0cmで上のほうにくぼみがある。



#### ◎その他

<墓永（菅原）>

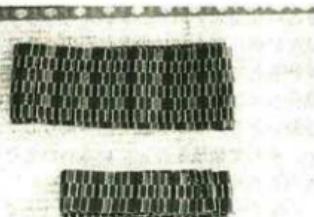
#### ○草履

墓地の入り口にあった草履。幅11.0cm、長さ20.0cm。



<中之上（大字都）>

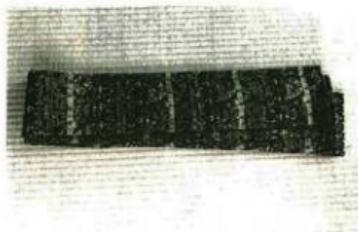
#### ○帶



田上ミヨさん所有。田上さんのお母さんの姉妹であるおばさんの形見である。表裏がなく、しっかりした生地である。写真の上は幅14.7cm、長さ326.0cm。下は幅8.0cm、長さ234.0cm。

#### ○帯

上述と同じ。これは柔らかい生地でできており、裏にも少し布がついている。幅14.5cm、長さ200.0cm。



決定するのだろう。本当に優しい人ばかりだったと思う。今回墓地でひとり写真を撮っていた私は、傍から見たら完全にあやしい人だったろうに、「何やってるの」と言いつつ、にこにこしながらお話をしてくださいったり、突然家にお邪魔したにもかかわらず、すぐに家にあげてくれてお昼までごちそうしてくださいたりと本当によくしていただきました。南種子町のみなさんの温かな人柄に感激した10日間の実習でした。本当にいろいろとありがとうございました。みなさんに心から感謝いたします。

#### 4. おわりに

お墓をずっと見ていくとその土地の人々の祖靈感というのが分かるような気がする。今回南種子町の墓地を見てまわったのだが、本土のそれとの違いも幾つか感じた。まず驚いたのは自然石のハカの多さだった。ありとあらゆるところで、環境的、経済的問題から納骨墓に変わっていくなかで、ここ南種子町では昔ながらのハカがそのままに残されている。火葬が増えつつある現在でもハカはひとりひとりのものを立てているのだそうだ。「だからハカが増えて困るんだよね」と笑いながら話してくださいったおじさんの顔を思い出す。お供えの花も華美ではないが、どんなに小さな石のハカにも必ず飾られていて、調査しながらあったかい気持ちになった。また墓石のまわりに浜砂を撒いたり、サンゴ礁で囲ったりして、清め、そして聖域を作っているハカもたくさんみられた。

南種子町は自然の豊かなところである。こうした風土がこの土地に住む人々の人柄を

# 墓 制

鹿児島大学卒業生 加 塩 明 子

## 1. はじめに

初めて訪れる南種子の地で、初めて墓制というテーマに挑戦することになった。人間の死という問題に直面すると同時に、残された人々の死者への思いを感じ取れるのではと思う。また、時代による祀り方の変化も興味深い問題であると思う。

## 2. 概 観

種子島は法華宗が盛んと聞いていたため、予想以上に神道の家が多いことに驚いた。松原村落の共同墓地には、神道と法華宗の山川石製の個人墓が200基ほどある。両派とも墓石の向きにきちんと統一性がなくなっている。東、南、北といろいろであった。

一方、下立石村落には4年ほど前に作られた共同墓地は、北向きの法華宗のミカゲ石製納骨墓6基と南向きの神道の納骨墓6基が整然と向き合っている。作りは両派とも同じようであるが、唯一違うのは前派の納骨墓の周囲に、改葬する前の個人墓のピンタイシ（最上段の墓石）が並べてある点であった。法華宗は他の村落でも納骨墓を作った際に、土葬していた墓を掘り起こして火葬し、一家の納骨墓に納めている。そして山川石製のピンタイシが必ずといっていいほど並べられてあった。

火葬が始まったのは、早く昭和40年代のようであるが、5~10年前にも土葬をしていた村落がある。人間は土に返るのが自然であり、1人に1基墓があったほうが後孫が親しみを持つからという理由を耳にした。

土葬の際には自分の家の杉を切って、タンコという大工に樽を作ってもらった。箱形よりも直径1メートルほどの丸い樽が多くかった。

共同墓地には自然石や自然石製の何も彫られていない簡素な墓石から山川石製、鹿児島石製、赤・黒ミカゲ石製のものまで様々であったが、明治・大正時代からの山川石製の個人墓が一番多かった。ミカゲ石製は一家の納骨墓が多く、中には土中に火葬した骨や昔のピンタイシを埋める墓もあった。

近年、個人墓から一家の納骨墓に変える家が多いのは、衛生上の問題はもちろん、お参りや管理にかかる時間と手間の問題からであろうと思われる。

個人墓、納骨墓以外に、箱形の納骨堂を1つ見ることができた。これは、俗にハカと言われる形を脱し、火葬した遺骨を安置する場所として機能している。

## 3. 民具解説



ゴリントウ

①ゴリントウ（五輪塔） 前之原  
高さ 135 センチ、幅 35 センチ。上の三段は山川石に模様が刻まれ、下は鹿児島石製。墓地の一番奥の高い位置にあり、盆に仏教徒が参る。以前は同じような塔が3つあり、この地に住み着いた先祖を祭っていたが、大きな風水害で土砂に埋もれたので、1つをセメントで固め直した。



ハカ

②ハカ（墓） 下立石  
高さ 110 センチ、幅、30 センチ。明治 19 年に作られた山川石製の墓。正面は白く変色し文字が読めない。上から 2 段目は蓮の花のようなものが彫られている。



ハカ

③ハカ（墓） 松原  
高さ 150 センチ、幅 40 センチ。上段はジネンセキ、下の 2 段は山川石。明治 10 年代に立てられた戦死者の墓。



ハカ

④ハカ（墓） 松原  
高さ 80 センチ、幅 30 センチ。400 年以上前に作られたという鹿児島石製の先祖代々を祀る墓。ブロックに囲まれた区画の中に昭和 52 年に作られたミカゲ石製の先祖代々の墓と一緒に祀られる。



ハカ

⑥ハカ（墓）

高さ 100 センチ、幅 52 センチ。命日が天保八×酉年と書かれた一家の中で最も古い墓石。山川石製で、前面の文字はほとんど読みえない状態である。



ハカ

松原

⑦ハカ（墓）

高さ 129 センチ、幅 30 センチ。昭和 20 年に建てられたミカゲ石製の墓。



ハカ

下立石

⑥ハカ（墓）

高さ 60 センチ、幅 30 センチ。上部 2 段は山川石、下は鹿児島石製。明治 11 年に立てられたもの。現在は神道だが、以前は法華宗だったので、妙法の文字が刻まれている。



ハカ

松原

⑧ハカ（墓）

高さ 52 センチ、幅 37 センチと小さな子供の墓。昭和 20 年に建てられたミカゲ石製の墓。細長い自然石で区画が囲われている

⑨塚

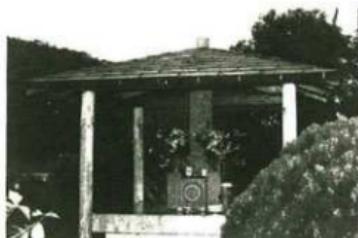
下立石

前之原



ツカ

高さ 188 センチ、幅 50 センチ。大正 10 年に作られ、「鮫島氏祖先之塚」と刻まれている。下の 4 段は四角の鹿児島石をいくつか並べているが、一番上は自然石。周囲には山川石製のピンタイシが 9 基建てられている。



納骨壇

⑩納骨墓

西之町

赤ミカゲ製の一家の納骨墓に屋根が付けられている。昭和58年に作られ、火葬された遺骨が納められている。周囲に墓のピンタキシだけが並べられている。



納骨堂

⑪納骨堂

小田

高さ130センチ、幅140センチ。昭和51年に作られた黒タイルの納骨堂。明治14年から昭和40年までの先祖が6人合祀されている。裏に通風口と扉がある。



納骨堂

⑫納骨墓

西之町

高さ82センチ、幅46センチ。昭和54年建立の黒ミカゲの墓。火葬した遺骨を壺に入れ土に埋めている。きれいな浜の砂が敷いてあり、自然石で区画がしてある。側面に「親が子を思ふは千里が山の落ちる木の葉の数よりも この思いで五名を育ててくれたお母さんありがとう 永久に安らかに」と刻まれている。



ハカ

⑬ハカ（墓）

松原

高さ20センチ、幅15センチのガル石（サンゴ石）に支えられており、周囲には葬式に撒く貝殻が散らばっている。嫁いだ姉を追ってきた女性の墓だが、ケナー（家内）でないので、きちんとした墓石は建てられなかった。



石塔

⑭セキトウ（石塔）

田代

高さ37センチ、幅17センチの茶色い自然石。墓地の上手に20センチ間隔で6つ並んでいる。最初にこの地に住み着いた先祖を祀るもの。現在は新暦の8月13日に村落

で石塔祭りを行ない、米の粉を練った団子を二又に立てた竹に下げて先祖へ供える。



タマヤ

⑩タマヤ（霊屋）

田代  
高さ 120センチ、幅 97センチ。ベニヤの板と竹で作られている。ヒラ入り。法華宗の個人墓の横にあり、下には遺体が土葬された。49日までは霊屋の中にお茶やご飯、花、生米などを供える。中には墓標が立てられている。霊屋は3周忌や1周忌など墓石を建てる際に取り除く。



供養塔

⑪供養塔

牛野  
高さ 106センチ、幅 7センチの板に南無妙法蓮華經の文字や俗名、命日などが書か

れている。ミカゲ石製の納骨墓付近に5枚立てられている。



ボヒョウ

⑫ボヒョウ（墓標）

田代  
高さ 40センチ、幅 4センチの木製の墓標が以前霊屋の置かれていた土台の中心に立てられている。その前に位牌や、蠟燭立て、湯飲み、線香などがある。命日は平成5年8月30日だがまだ墓石は建てられていない。2つの霊屋を一家で同じ年に立てるのはよくないといわれるが、死人が2人以上出た場合は同じ霊屋を使う。



イハイ

⑩イハイ（位牌） 田代  
高さ30センチ、幅11センチの木製の位牌。法華宗では表に戒名、裏に本名を記す。

#### 4. さいごに

南種子の3月は強風が吹き荒れ、とても寒かった。そんな中、寂しい墓地に1人過ごすのはとても忍びなかったが、たまに会える伝承者の方々の心の温かさを強く感じるものであった。十分な調査とまとめが出来たとは思わないが、自分のテーマに限らず、南種子の歴史と民俗全般の豊かさを学べた実習であった。

最後になりましたが、忙しい中ご協力下さった伝承者の方々、南種子町教育委員会の先生方、役場の方々に心から御礼を申し上げます。